

大阪府茨木市学園町所在

溝 咋 遺 跡

(その1・2)

— 茨木・学園町地区埋蔵文化財発掘調査1次・2次報告書 —

本文編

2000年3月

(財)大阪府文化財調査研究センター

南無三曼多没駄南□



佛成道觀見法界

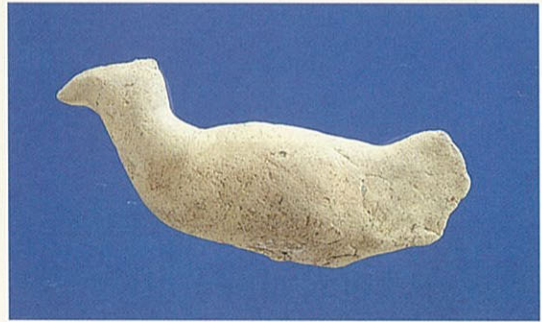
一佛成道觀見法界
草木國王悉皆成佛

為道春禪定□

卒塔婆 (→P.38・P.152)



石柱・石臼 (→P.170)



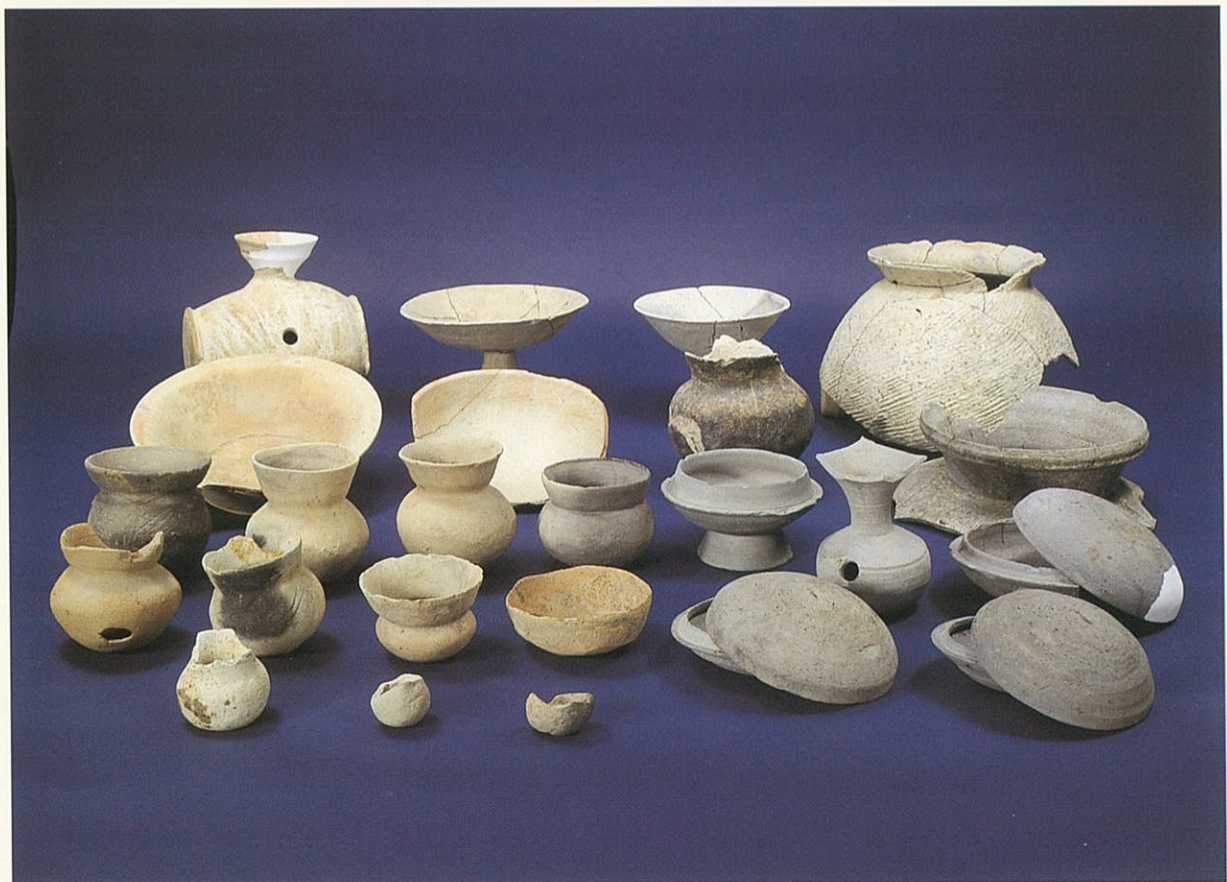
鳥形土製品 (→P.168)



銅鈴 (→P.174)



A区土器集合 (古墳時代前期の土器が主体→P.64～P.110)



C区土器集合 (古墳時代後期の土器が主体→P.119～P.151)



南壁断面



6面全景 (東から→P.193)



溝120部分 (→P.201)



溝120 (白塗は護岸の杭列→P.199)



溝120断面 (→P.201)

巻頭カラー図版 4 2A区遺構(2)



竖穴 2～4 検出状況

竖穴 2 → 竖穴 3 → 竖穴 4 の切り合い
関係が明瞭 (→P.195)



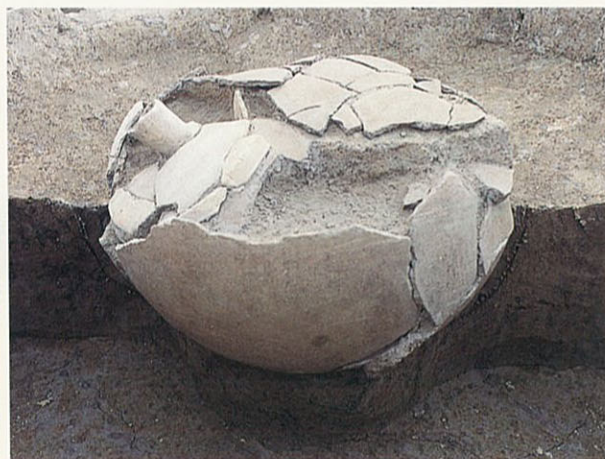
土坑108

腐食物層からは、糞、昆虫遺体、種実など
多くの自然遺物が出土 (→P.205)



土器棺 1

本体の壺は瀬戸内からの外来系土器 (→P.192)



土器棺 3 (→P.193)



土器棺 1 断面 (→P.192)



土器棺 3 断面 (→P.193)

土器棺 1・土器棺 3 の内部土壌を脂肪酸分析した結果、ヒト遺体埋納の
可能性が高いという結果を得た。



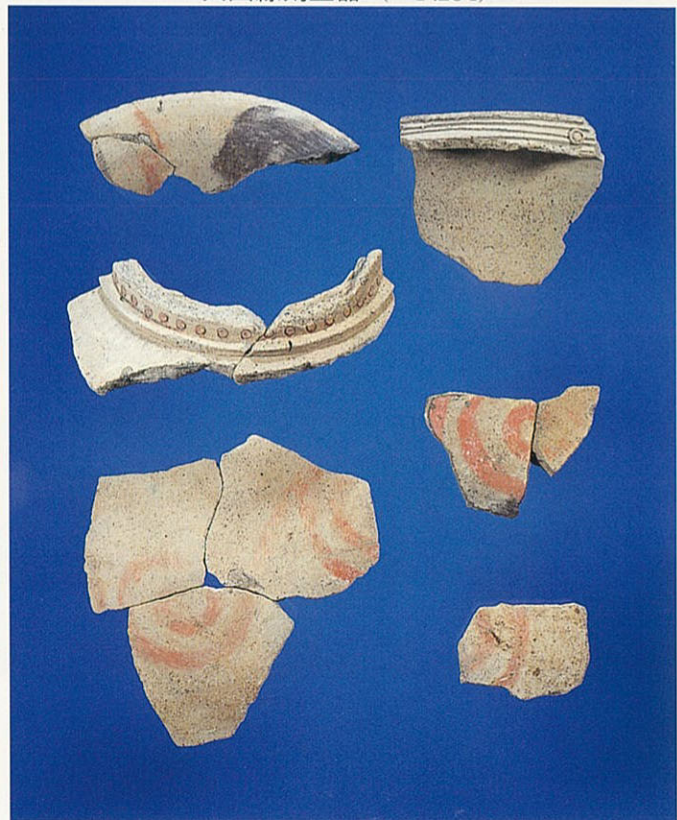
銅釧 (→P.322)



人面線刻土器 (→P.254)



小形仿製鏡 (→P.322)



赤色顔料で渦文を描く土器 (→P.266)



出土土器一括 (→P.237~P.283)



外来系土器 (→P.428)



滑石製品等 (→P.320)



線刻土器一括 (→P.254)



赤色顔料付着土器 1 (→P.273など)



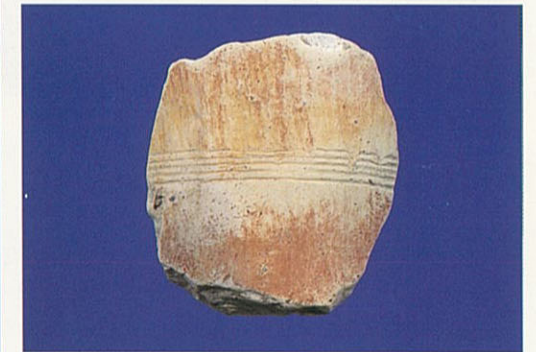
赤色顔料付着土器 2 (→P.266)



赤色顔料付着土器 3 (→P.266)



黒色顔料付着土器 (→P.254など)



赤色顔料付着土器 4 (→P.243)



土器棺 1 (→P.247)



土器棺 3 (→P.249)



上宮跡0面 (→P.220)



上宮跡1面 (→P.220)



上宮跡2面 (→P.224)



上宮跡3面 (→P.227)



上宮跡2層 (土師器片を多く含む→P.181)



3-3層土器群出土状況1 (→P.229)



3-3層土器群出土状況2 (→P.229)



鬼瓦 (→P.287)



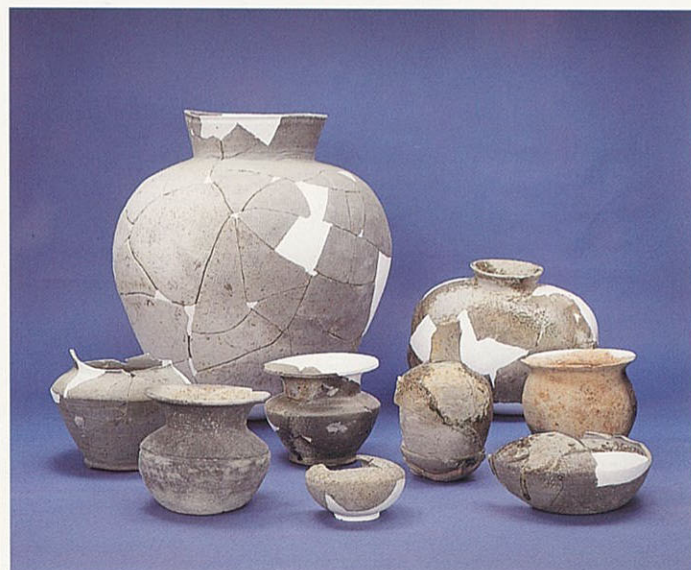
平安時代末の瓦 (→P.285)



溝咋神社



溝咋神社上宮額



3-3層土器群 (→P.290~P.294)



6面古墳時代水田全景（西から→P.232）



7面古墳時代水田全景（西から→P.233）



棒状木製品貫通土器（→P.234）



土器棺 4（→P.234）

序 文

溝咋の地は、大阪北部の淀川右岸にひろがる三嶋平野の南部、安威川中流域に位置します。三嶋平野は、淀川にそそぐ芥川、松尾川をはじめ安威川などの河川によって形成された肥沃な土地であり、これら河川を利用した水運のほか北摂の山裾には西国街道がはしるなど、畿内と他地域を結ぶ交通の要衝の地として古くから人々の活動が活発な地域です。

溝咋の名は古事記、日本書紀よりみられ、神武天皇の妃である媛蹈鞰五十鈴媛の伝承をもつ地として古来より知られてきました。安威川中流域の右岸に位置する溝咋神社には、媛蹈鞰五十鈴媛命をはじめその母である玉櫛媛命、祖父である三嶋溝咋耳命などが祭神としてまつられています。

今回、この溝咋神社の対岸にあたる、浪商学園跡地である茨木市学園町において住宅・都市整備公団による集合住宅建築の計画がなされ、4次にわたる大規模な発掘調査を実施いたしました。本書はその1次、2次の成果報告書となります。調査では溝咋神社上宮跡をはじめ、古墳時代前期から後期にいたる集落の居住域と水田が関連性をもって検出され、多数出土した外来系土器からは交易拠点として機能した集落であることが判明しました。また、人面線刻土器、銅釧、小形仿製鏡、赤色顔料で文様を描く土器など貴重な資料が多数出土し、報道においても大きくとりあげられ、現地説明会には多数の方々のご来場を得ることができました。

こうした成果も、住宅・都市整備公団、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会をはじめとする関係機関各位、地元の方々のご理解、ご協力の賜であり、厚くお礼申し上げます。

今後とも、当センター事業につきまして一層のご理解、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成12年3月

(財)大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、住宅・都市整備公団による（仮称）リバーサイド安威集合住宅建築に伴う溝咋遺跡（みぞくい いせき）発掘調査の整理事業に対する本報告書である。なお、溝咋遺跡は大阪府茨木市学園町、学園南町、五十鈴町にかけて所在し、今回調査を実施した地区は学園町である。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、大阪府教育委員会および財団法人大阪府文化財調査研究センターが住宅・都市整備公団の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査、整理事業および本書作成は、大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
4. 発掘調査は、平成7年3月1日から平成11年1月25日にわたって（その1）～（その3）の3次にわたって実施し、その後追加調査を（その4）として平成11年6月21日～平成11年7月13日に実施した。発掘調査担当者は、以下の通りである。各年度の調査区等の詳細は第1章の表1を参照されたい。

北部事務所長 玉井 功（平成7～9年度）、藤田憲司（平成10～11年度）

調査第1係長 小野久隆（平成7～9年度）、西口陽一（平成10年度）、金光正裕（平成11年度）

技師 合田幸美（平成7～9年度）、伊藤 武（平成7～8・10～11年度）、橋本亜希子（平成9～10年度）

5. 総括的な整理事業は、平成10年4月1日から平成12年3月31日にわたって実施し、印刷に関しては平成11年度におこなった。整理事業は平成10年度に（その1）と（その2）、平成11年度に（その3）と（その4）について実施し、本書は（その1）と（その2）に関する報告書である。整理事業担当者は、以下の通りである。

北部事務所長 藤田憲司

調査第1係長 西口陽一（平成10年度）、金光正裕（平成11年度）

主査 平井貞子（写真）、山口誠治（保存処理・自然科学的分析）

技師 合田幸美、伊藤 武、橋本亜希子

6. 自然科学的調査の成果および出土遺物に関する考察については、以下に記した方々に原稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

花粉・珪藻・プラント・オパール・植物遺体・赤色顔料分析

株式会社パレオ・ラボ 新山 正博・鈴木 茂・藤根 久・菱田 量

珪藻・植物遺体・昆虫遺体分析

（財）愛知県埋蔵文化財センター 鬼頭 剛・尾崎和美・蔭山誠一

珪藻分析 河内長野市立滝畑民俗資料館 撫養健二

近畿大学医学部生物学研究室 後藤敏一

中部調査事務所 山口誠治

自然遺物分析・樹種鑑定 山口誠治

人骨・動物遺体分析 大阪市立大学医学部第二解剖室 安部みき子

脂肪酸分析 帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男

株式会社ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子・長田正宏

足跡痕分析 大妻女子大学教養等 真家和生

赤色顔料分析 近畿大学 南 武志

近畿大学共同利用センター 山際 英樹

土器胎土砂礫観察 奥田 尚

石材鑑定 京都教育大学 井本伸廣

琴状木製品に関する考察 放送大学 笠原 潔

土器棺および被籠状突帯壺に関する考察 (財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎

7. 発掘調査および遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏ならびに諸機関にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、団体および団体内五十音順、団体は調査当時）。

樋上 昇（(財)愛知県埋蔵文化財センター）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、奥井哲秀・濱野俊一・宮脇 薫（茨木市教育委員会）、島野 穂、西村彦次、免山 篤（茨木市文化財愛護会）、富田 好久（大阪青山短期大学）、大庭重信・田中清美・辻 美紀・寺井 誠（(財)大阪市文化財協会）、橋本高明・福田英人・堀江門也・山田隆一（大阪府教育委員会）、江見正己（岡山県古代吉備文化財センター）、大脇 潔（近畿大学）、前田軍治（熊本県立装飾古墳館）、外山秀一（皇學館大学）、佐々木憲一（国際日本文化研究センター）、中井秀樹（三田市教育委員会）、西本安秀・藤原 学（吹田市教育委員会）、森田克行（高槻市教育委員会）、鋤柄俊夫（同志社大学）、岡山真知子（(財)徳島県埋蔵文化財センター）、比田井克仁（中野区立歴史民俗資料館）、浅川滋男・佐川正敏（奈良国立文化財研究所）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、大平 茂（兵庫県教育委員会）、川崎志乃（三重県埋蔵文化財センター）、米田敏幸（八尾市教育委員会）、隈 昭志（山鹿市立博物館）、高橋 学（立命館大学）、木下密雲、小林秀信、辻尾榮市、外山政子、目加田久嗣

8. 発掘調査および整理作業の過程では、以下の方々の参加、協力を得た。記して感謝の意を表する次第である（五十音順）。

市川奈緒・井手上佳代子・今田明子・上田健太郎・大橋恵美・奥田直美・鹿島真由美・川崎朝子・川島直之・喜田真澄・小泉陽子・鷺香代子・佐塚國子・佐藤美和・四方登志子・正司真理子・高芝 稔・高田泰子・竹森友子・田中千賀・田中正子・田中由美・谷崎伊津子・津田春子・中川寿美・中田麻矢・波岸初美・西本亜希子・二宮栄子・野口佳子・樋口玲子・平田麻希・船山房子・邊田悦子・前田千津子・松岡聖美・宮崎 勤・八十千里・山下茅津子・山田久美・山本宏子・吉岡恵美子・吉武弘子

9. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

10. 本調査の概要は、調査跡地である茨木市学園町住宅都市基盤整備公団住宅集会所において、剥ぎ取り断面、パネル展示により紹介されている。本書の第2章における図3～6は、その際製作されたパネルの図版を用いている。掲載を許可された住宅都市基盤整備公団関西支社に、記して感謝の意を表する次第である。

11. 報告書の題字は、白橋鐘道氏に揮毫を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

凡 例

1. 遺構および断面中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。
2. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第VI座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。座標の記載は、すべてm単位である。
3. 本報告書では、A～C区、2A～2C区の調査成果を個別に報告している。各調査区の調査成果については上面より年代順に記述している。
4. 挿図、表、写真図版番号は全体を通しての通し番号とした。
5. 遺物は、土器、木器、その他遺物に分けて記述し、木器はW、その他遺物はOを数字の頭に冠してそれぞれの通し番号を付した。これは写真図版の遺物番号と一致する。
6. 遺構名称および遺構番号は、調査時のものを踏襲しているため、本報告書においては通し番号となっていない。
7. 遺物実測図の縮尺は、土器1/3、木器1/4、その他遺物1/2を基本としたが、適宜遺物に即して異なる縮尺としており、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに縮尺率を明示しているため、そちらを参照されたい。

また、遺物では須恵器の断面を黒塗り、土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器類の断面を白抜き、瓦の断面をアミ入れ、木器の断面をスクリーントーンで表現している。なお、特殊な瓦質土器については断面をスクリーントーンで表現した。
8. 引用文献、参考文献は各章の末尾に記した。
9. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
10. 本書の編集は伊藤、橋本の協力のもと合田がおこなった。

目 次

巻頭カラー図版

1. A～C区遺物（1）
 - 卒塔婆
 - 石杵・石臼
 - 鳥形土製品
 - 銅鈴
2. A～C区遺物（2）
 - A区土器集合
 - C区土器集合
3. 2 A区遺構（1）
 - 6面全景
 - 断面
 - 溝120
 - 溝120断面
 - 溝120部分
4. 2 A区遺構（2）
 - 竪穴2～4 検出状況
 - 土坑108
 - 土器棺1
 - 土器棺1 断面
 - 土器棺3
 - 土器棺3 断面
5. 2 A区遺物（1）
 - 銅釧
 - 人面線刻土器
 - 小形仿製鏡
 - 赤色顔料で渦文を描く土器
6. 2 A区遺物（2）
 - 出土土器一括
 - 外来系土器
 - 滑石製品等
 - 線刻土器一括
7. 2 A区遺物（3）
 - 赤色顔料付着土器1
 - 赤色顔料付着土器2
 - 赤色顔料付着土器3
 - 赤色顔料付着土器4
 - 黒色顔料付着土器
 - 土器棺1
 - 土器棺3
8. 2 B区遺構
 - 上宮跡0面
 - 上宮跡1面
 - 上宮跡2面
 - 上宮跡3面
 - 上宮跡2層（土師器片を多く含む）
 - 3－3層土器群出土状況1
 - 3－3層土器群出土状況2
9. 2 B区遺物等
 - 溝咋神社
 - 溝咋神社上宮額
 - 鬼瓦
 - 平安時代末～鎌倉時代初頭の瓦
 - 3－3層土器群
10. 2 C区遺構
 - 6面古墳時代水田全景
 - 7面古墳時代水田全景
 - 棒状木製品貫通土器
 - 土器棺4

第1章 調査の経緯・経過と方法	(合田幸美)	1
第1節 調査の経緯・経過		
第2節 調査の方法		
第2章 位置と環境	(合田)	3
第1節 地理的環境		
第2節 考古学的環境		
第3節 文献史的環境		
第4節 条里関連		
第3章 (その1)の調査の成果		
第1節 基本層序	(合田)	11
第2節 遺構	(伊藤 武)	17
第1項 A区		
第2項 B区		
第3項 C区		
第3節 遺物		
第1項 土器	(合田)	51
1. 土器の観察		
2. 土器の分類		
3. A区		
4. B区		
5. C区		
第2項 木器	(橋本亜希子)	152
第3項 その他の遺物	(合田)	168
第4章 (その2)の調査の成果		
第1節 基本層序	(合田)	178
第2節 遺構	(合田)	185
第1項 2A-1区		
第2項 2A-2区		
第3項 2B区		
第4項 2C区		
第3節 遺物		
第1項 土器	(合田)	238
1. 2A-1区		
2. 2A-2区		
3. 2B区		
4. 2C区		
第2項 木器	(橋本)	305
第3項 その他の遺物	(合田)	321

第5章	自然科学的調査の成果	
第1節	自然科学的調査の概要	(合田) …… 327
第2節	溝咋遺跡遺構堆積物中の花粉化石群集	
		(株式会社パレオ・ラボ 新山雅広・鈴木 茂) …… 328
第3節	溝咋遺跡遺構堆積物中の珪藻化石群集	
		(株式会社パレオ・ラボ 藤根 久) …… 343
第4節	溝咋遺跡プラント・オパール分析	
		(株式会社パレオ・ラボ 鈴木 茂) …… 352
第5節	溝咋遺跡植物珪酸体分析	
		(株式会社パレオ・ラボ 鈴木 茂) …… 357
第6節	溝咋遺跡(その2)における 珪藻および植物・昆虫遺体分析による土坑埋積過程の古環境変遷	
		((財)愛知県埋蔵文化財センター 鬼頭 剛・尾崎和美・蔭山誠一) …… 361
第7節	溝咋遺跡(その2)珪藻分析	(河内長野市立滝畑民俗資料館 撫養健至 …… 369 近畿大学医学部生物学的研究室 後藤敏一 中部調査事務所 山口誠治)
第8節	溝咋遺跡出土の自然遺物について	(山口誠治) …… 380
第9節	溝咋遺跡出土の人骨と動物遺体	(大阪市立大学医学部第二解剖室 安部みき子) …… 386
第10節	溝咋遺跡(その2)脂肪酸分析	
		(帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男、 株式会社ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子・長田正宏) …… 387
第11節	溝咋遺跡古墳時代後期水田面より出土したヒト足跡痕に基づく体格推定および歩容復元	
		(大妻女子大学教養等 真家生) …… 394
第12節	溝咋遺跡(その2)出土土器に付着した赤色顔料分析	
		(株式会社パレオ・ラボ 菱田 量) …… 404
第13節	溝咋遺跡出土赤彩土器の赤色顔料物質の分析	
		(近畿大学・豊岡短期大学 南 武志 …… 407 近畿大学共同利用センター 山際英樹)
第14節	溝咋遺跡出土土器の表面に見られる砂礫	(奥田 尚) …… 413
第6章	考 察	
第1節	溝咋遺跡出土の「筑状弦楽器」について	(放送大学 笠原 潔) …… 417
第2節	溝咋遺跡出土の外來系土器について	(合田幸美) …… 426
第3節	土器棺葬の変容 — 摂河泉の弥生時代中期後葉～古墳時代前期の様相 —	
		((財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎) …… 450
第4節	被籠状突帯壺について — 茨木市溝咋遺跡出土の資料に接して —	
		((財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎) …… 464
第7章	総 括	(合田) …… 475
	土器観察表	

插图目次

- | | | | |
|-----|-------------------------|-----|------------------------------|
| 図1 | 地区割図・調査区位置図 | 図34 | B区7面木器集中部1平面 |
| 図2 | 調査地の位置 | 図35 | C区1面平面 |
| 図3 | 河内湖から淀川流域における弥生～古墳時代の遺跡 | 図36 | C区東1面河川1堰平面・立面 |
| 図4 | 溝咋遺跡の微地形上の位置と安威川周辺の遺跡 | 図37 | C区東1面井戸4平面・断面 |
| 図5 | 溝咋神社神系図 | 図38 | C区東1面溝35断面 |
| 図6 | 航空写真（昭和20年代）にみる復元条里 | 図39 | C区東4面平面 |
| 図7 | A～C区柱状断面 | 図40 | C区東6面平面 |
| 図8 | A区西壁断面 | 図41 | C区東7面平面 |
| 図9 | C区南壁断面 | 図42 | C区東9面平面 |
| 図10 | A区1面平面 | 図43 | C区西1面河川3断面 |
| 図11 | A区1面河川1断面 | 図44 | C区西3面平面 |
| 図12 | A区1面井戸5平面・断面 | 図45 | C区西4面平面 |
| 図13 | A区4面平面 | 図46 | C区西3・4・7面建物平面模式図・柱穴断面 |
| 図14 | A区5面平面 | 図47 | C区西7面平面 |
| 図15 | A区6面平面 | 図48 | A～C区遺構の変遷 |
| 図16 | A区6面建物平面模式図・柱穴断面 | 図49 | 壺の分類 |
| 図17 | A区7面平面 | 図50 | 高杯・小形器台・手焙の分類 |
| 図18 | A区7面建物平面模式図・柱穴断面 | 図51 | 甕の分類 |
| 図19 | A区7面竪穴平面 | 図52 | 鉢の分類 |
| 図20 | A区7面溝120断面 | 図53 | A区1層・2層・2面・4層・5層・6層～7層上半出土土器 |
| 図21 | A区6・7面土坑平面・断面 | 図54 | A区7層出土土器 |
| 図22 | A区8面平面 | 図55 | A区7層出土土器 |
| 図23 | A区8面建物平面模式図・柱穴断面 | 図56 | A区7層出土土器 |
| 図24 | A区8面溝123断面 | 図57 | A区7層出土土器 |
| 図25 | B区1面平面 | 図58 | A区7層出土土器 |
| 図26 | B区1面河川1・溝1断面（右上が溝1） | 図59 | A区7層出土土器 |
| 図27 | B区1面溝3断面 | 図60 | A区7層・7面出土土器 |
| 図28 | B区4面平面 | 図61 | A区8層出土土器 |
| 図29 | B区4面柱1・2断面 | 図62 | A区8層出土土器 |
| 図30 | B区6面平面 | 図63 | A区8層出土土器 |
| 図31 | B区6面河川2堰平面・立面 | 図64 | A区9層・9面・10層・11層出土土器 |
| 図32 | B区7面木器集中部2立面 | 図65 | A区1面河川1出土土器 |
| 図33 | B区7面平面 | 図66 | A区1面鋤溝・溝 6面建物1・建物2・ |

- 穴・溝出土土器
- 図67 A区7面建物4・建物8・穴出土土器
- 図68 A区7面溝120出土土器
- 図69 A区7面溝120出土土器
- 図70 A区7面溝120出土土器
- 図71 A区7面溝120砂層出土土器
- 図72 A区7面溝120砂層出土土器
- 図73 A区7面溝120砂層出土土器
- 図74 A区7面溝120砂層出土土器
- 図75 A区7面溝・土坑98出土土器
- 図76 A区7面土坑98出土土器
- 図77 A区7面土坑98・土坑100・土坑102出土土器
- 図78 A区7面土坑109・土坑118・土坑121・土坑122出土土器
- 図79 A区7面土坑123・土坑125・土坑126・土坑122・土坑123・129・土坑133出土土器
- 図80 A区7面土坑133出土土器
- 図81 A区7面土坑134・土坑140 8面穴・土坑11層出土土器
- 図82 A区8面溝123出土土器
- 図83 A区8面溝123出土土器
- 図84 A区8面溝123出土土器
- 図85 A区8面溝123出土土器
- 図86 A区8面溝123出土土器
- 図87 A区8面溝123出土土器
- 図88 A区8面溝123出土土器
- 図89 A区8面溝123出土土器
- 図90 B区1層・1面・2層・3層出土土器
- 図91 B区4層・4面溝・5層出土土器
- 図92 B区6層・6面・7層出土土器
- 図93 B区7層・7面出土土器
- 図94 B区1面溝1出土土器
- 図95 B区1面溝・土坑出土土器
- 図96 B区1面河川1出土土器
- 図97 B区1面河川1出土土器
- 図98 B区6面河川2出土土器
- 図99 B区6面河川2出土土器
- 図100 C区西3層・西3面出土土器
- 図101 C区西3面・西4層出土土器
- 図102 C区西4層出土土器
- 図103 C区西4層出土土器
- 図104 C区西4層出土土器
- 図105 C区西4層・西4面・西5層出土土器
- 図106 C区西5層・西6層出土土器
- 図107 C区西6層・西6面出土土器
- 図108 C区西7層出土土器
- 図109 C区西7層出土土器
- 図110 C区西7層・西9層・西10層出土土器
- 図111 C区西1面溝・土坑・河川3出土土器
- 図112 C区西3面建物12・穴 西4面溝出土土器
- 図113 C区西3面溝・西4面溝出土土器
- 図114 C区西3面溝・土坑 西4面溝出土土器
- 図115 C区西4面穴・土坑出土土器
- 図116 C区西5面穴出土土器
- 図117 C区西7面河川4出土土器
- 図118 C区西7面河川4出土土器
- 図119 C区西7面河川4出土土器
- 図120 C区西7面河川4出土土器
- 図121 C区西7面河川4出土土器
- 図122 C区東1層・1面・2層・3層・4層・5層出土土器
- 図123 C区東6層・7層・9層出土土器
- 図124 C区東1面井戸4・河川1 東4面穴51東9面溝61出土土器
- 図125 卒塔婆
- 図126 琴状弦楽器の類例
- 図127 琴状弦楽器と復元案
- 図128 紡錘車の軸・木錘・杷形部材・工具の柄・人形代・剣形
- 図129 曲物・容器
- 図130 琴の共鳴槽模式図
- 図131 大脚・田下駄模式図
- 図132 ナスビ形又鍬・鋤・えぶり?・田下駄・大脚部材

- 図133 大脚の足板
- 図134 有頭棒・握柄?・杭・棒
- 図135 小型部材・容器の側板?・各種部材
- 図136 端の類例
- 図137 各種部材
- 図138 柱根・有頭棒・礎盤
- 図139 A区出土その他の遺物
- 図140 A区出土その他の遺物
- 図141 A区出土その他の遺物
- 図142 B区出土その他の遺物
- 図143 C区出土その他の遺物
- 図144 C区出土その他の遺物
- 図145 2A-1区西壁断面・2A-2区南壁断面
- 図146 2B区南壁断面・2C区南壁断面
- 図147 2A-1区平面 遺構平面・断面
- 図148 2A-2区1面・2面・3面平面
- 図149 2A-2区4面・5面平面
- 図150 2A-2区5面建物11・建物13平面・柱穴断面
- 図151 2A-2区5~6面土器群1・2平面
- 図152 2A-2区5~6面土器群4・10・11・12平面
- 図153 2A-2区5~6面土器群13平面
- 図154 2A-2区6面平面
- 図155 2A-2区6面土器棺1~3平面・断面
- 図156 2A-2区6面竪穴1~4平面・断面
- 図157 2A-2区6面竪穴5~7平面・断面
- 図158 2A-2区6面小溝(竪穴)・建物主軸の方向
- 図159 2A-2区6面建物12・建物14・建物15・建物17平面・柱穴断面
- 図160 2A-2区6面塀2平面・断面
- 図161 2A-2区6面穴平面・断面
- 図162 2A-2区6面溝120平面・立面・断面
- 図163 2A-2区6面溝120泥除未製品?出土状況
- 図164 2A-2区6面土坑平面・断面
- 図165 2A-2区6面土坑平面・断面
- 図166 2A-2区6面土坑平面・断面
- 図167 2A-2区7面平面
- 図168 2A-2区7面板状木器平面
- 図169 2A-2区7面建物18・建物19・建物20平面・柱穴断面
- 図170 2A-2区7面土坑・溝・穴平面・断面
- 図171 2A-2区8面平面
- 図172 2A-2区8面穴平面・断面
- 図173 2A-2区8面土坑・溝平面・断面
- 図174 2A-2区9(1)面・9(2)面平面
- 図175 2A-2区9(1)面土坑・溝・穴平面・断面
- 図176 2A-2区10面・11面・12面平面 12面溝断面
- 図177 2B区0・1面平面
- 図178 2B区西半部0・1面上宮跡平面・断面
- 図179 2B区西半部1面穴28平面 東半部1面井戸2平面・断面
- 図180 2B区2面平面
- 図181 2B区西半部2面上宮跡平面
- 図182 2B区西半部2面上宮跡柱列1平面・断面
- 図183 2B区西半部2面上宮跡建物3・建物4平面・柱穴断面
- 図184 2B区3面平面
- 図185 2B区西半部3面井戸1・穴平面・断面
- 図186 2B区西半部3~4面土器群平面
- 図187 2B区4面・5面平面
- 図188 2B区7面・8面平面
- 図189 2B区8面畦畔1基底部木枝等出土状況
- 図190 2C区1面平面
- 図191 2C区6面平面
- 図192 2C区10面平面
- 図193 2C区10面遺構平面・断面
- 図194 2C区10面畦畔1基底部樹皮等出土状況
- 図195 2A-1区3層・6層・3面溝120・溝123出土土器

- 図196 2 A - 1 区 3 面溝123出土土器
 図197 2 A - 2 区 2 層・ 5 層・ 6 層・ 6 面出土土器
 図198 2 A - 2 区 7 層・ 8 層・ 9 層・ 9 面出土土器
 図199 2 A - 2 区10層出土土器
 図200 2 A - 2 区11層・ 11面・ 12層・ 12面出土土器
 図201 2 A - 2 区 5 ~ 6 面土器群出土土器
 図202 2 A - 2 区 6 面土器棺 1 出土土器
 図203 2 A - 2 区 6 面土器棺 2 出土土器
 図204 2 A - 2 区 6 面土器棺 3 出土土器
 図205 2 A - 2 区 6 面竪穴 1 ・ 竪穴 4 ・ 穴出土土器
 図206 2 A - 2 区 6 面穴・ 溝101・ 溝114出土土器
 図207 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図208 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図209 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図210 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図211 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図212 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図213 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図214 2 A - 2 区 6 面溝120出土土器
 図215 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図216 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図217 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図218 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図219 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図220 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図221 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図222 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図223 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図224 2 A - 2 区 6 面溝120砂層出土土器
 図225 2 A - 2 区 8 ~ 10 面溝出土土器
 図226 2 A - 2 区 1 面土坑・ 6 面土坑80~84出土土器
 図227 2 A - 2 区 6 面土坑85・ 土坑87出土土器
 図228 2 A - 2 区 6 面土坑88出土土器
 図229 2 A - 2 区 6 面土坑93・ 土坑98出土土器
 図230 2 A - 2 区 6 面土坑101~土坑108出土土器
 図231 2 A - 2 区 6 面土坑108~土坑129出土土器
 図232 2 A - 2 区 6 面土坑129~土坑132出土土器
 図233 2 A - 2 区 6 面土坑133・ 7 ~ 9 (1)面土坑出土土器
 図234 2 B 区上宮跡出土軒丸瓦・ 軒平瓦
 図235 2 B 区上宮跡出土丸瓦・ 平瓦・ 棧瓦・ 道具瓦
 図236 2 B 区上宮跡出土道具瓦・ 西半部 0 面溝 1 出土土器
 図237 2 B 区西半部 1 層 (最上層) 出土土器
 図238 2 B 区西半部 2 層 (溝 1 内側) ・ 1 面溝 2 ・ 2 ~ 7 面土坑出土土器
 図239 2 B 区西半部 1 層・ 0 面・ 2 層・ 2 面・ 3 層・ 3 面出土土器
 図240 2 B 区西半部 3 - 3 層出土土器
 図241 2 B 区西半部 3 - 3 層・ 2 面穴・ 3 面井戸 1 出土土器
 図242 2 B 区西半部 3 - 3 層・ 3 層出土土器
 図243 2 B 区西半部 4 層・ 4 面・ 5 層出土土器
 図244 2 B 区西半部 6 層・ 7 層・ 7 面・ 8 層出土土器
 図245 2 B 区 7 面溝14出土土器
 図246 2 B 区 7 面溝15・ 溝16出土土器
 図247 2 C 区 1 層~ 8 層・ 8 面出土土器
 図248 2 C 区 9 層・ 10 層・ 10 面出土土器
 図249 2 C 区 1 ~ 10 面遺構出土土器
 図250 形代物 (鳥形・ 人形・ 劍形)
 図251 柄
 図252 マメブチボウ・ モミブチボウ模式図
 図253 下駄・ 槌・ 杓子・ まな板
 図254 腰掛・ 総掛
 図255 作業台

- 図256 弥生時代刳物桶の類例
- 図257 刳物桶・鞘?・組合容器・箱の側板
- 図258 オヒキハンゾ・オオブネ模式図
- 図259 槽・舟形容器
- 図260 鋏・鋤・ナスビ形木製品
- 図261 大脚部材
- 図262 有頭棒・部材(織機?)・有溝棒
- 図263 用途不明
- 図264 建築材・用途不明・杭・有頭棒
- 図265 2A-1・2A-2区出土その他の遺物
- 図266 2A-2・2B・2C区出土その他の遺物
- 図267 A区試料採取地点付近土層断面
- 図268 C区試料採取地点付近土層断面
- 図269 2B区試料採取地点付近土層断面
- 図270 A区主要花粉化石分布図
- 図271 C区主要花粉化石分布図
- 図272 2B区主要花粉化石分布図
- 図273 花粉化石分布図
- 図274 C区(南壁)水田堆積物中の珪藻化石群集
- 図275 A区北溝120内堆積物およびA区南7層～堆積物の珪藻化石群集
- 図276 A区深掘部および3E区のプラント・オパール分布図
- 図277 2A-2区土坑130のプラント・オパール分布図
- 図278 土坑108の珪藻群集組成変化
- 図279 試料採取地点
- 図280 主要種出現傾向ダイヤグラム
- 図281 珪藻遺骸群集組成の変化
- 図282 頭骨模式図
- 図283 試料中に残存する脂肪の脂肪酸・ステロール組成
- 図284 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図
- 図285 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関
- 図286 足跡列1・足跡列2平面
- 図287 踏込痕の計測項目
- 図288 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図
- 図289 赤色顔料試料採取土器
- 図290 蛍光X線分析(1)
- 図291 蛍光X線分析(2)
- 図292 蛍光X線分析(3)
- 図293 頭部先端孔の断面模式図
- 図294 江蘇省連雲港の前漢墓の漆喰画
- 図295 外来系土器(1)
- 図296 外来系土器(2)
- 図297 外来系土器(3)
- 図298 外来系土器(4)
- 図299 出土土器に占める外来系土器の比率
- 図300 外来系土器の地域別比率
- 図301 外来系土器の器形別比率
- 図302 各地域・時期の外来系土器
- 図303 土器棺資料の検討
- 図304 各時期の土器棺
- 図305 古墳時代前期における土器棺の二者
- 図306 木棺を切って埋葬された土器棺
- 図307 土器棺類型の消長概念モデル
- 図308 被籠状突帯壺集成(1)
- 図309 被籠状突帯壺集成(2)
- 図310 被籠状突帯壺集成(3)
- 図311 朝日遺跡の被籠というデザイン
- 図312 親ヶ谷古墳出土石製壺
- 図313 三連S字甕集成
- 図314 曾根八千町遺跡SX02と供献S字甕
- 図315 古墳時代前期～中期、後期の遺構
- 図316 弥生時代後期～古墳時代後期の特異な遺物
- 図317 中世～近世の遺構

表 目 次

表1 (その1)～(その4)調査の詳細	テロールの割合
表2 A区～C区出土木器一覧	表20 足型・足跡痕・足蹠痕からの体格推定(1)
表3 2A区～2C区出土木器一覧	表21 足型・足跡痕・足蹠痕からの体格推定(2)
表4 花粉化石一覧	表22 赤色顔料分析試料
表5 中世試料花粉化石一覧	表23 赤色顔料分析試料一覧
表6 珪藻化石一覧	表24 蛍光X線分析法の測定条件
表7 各遺構堆積物の推定される堆積環境	表25 鉄と水銀の強度比
表8 試料1g当たりのプラント・オパール個数	表26 土器の表面にみられる砂礫
表9 試料1g当たりのプラント・オパール個数 (土坑130)	表27 棒状木製品一覧
表10 土坑108出土植物・昆虫遺体一覧	表28 外来系土器一覧(1)
表11 土坑108の珪藻分析結果	表29 外来系土器一覧(2)
表12 分析試料	表30 弥生時代中期後葉の土器棺一覧
表13 珪藻遺骸群集組成	表31 弥生時代後期の土器棺一覧
表14 植物遺体同定結果(1)	表32 古墳時代前期の土器棺一覧
表15 植物遺体同定結果(2)	表33 各時期の立地
表16 植物遺体同定結果(3)	表34 各時期の器種構成
表17 植物遺体同定結果(4)	表35 各時期の埋葬状態
表18 土壌試料の残存脂肪抽出量	表36 被籠状突帯壺出土資料一覧
表19 試料中に分布するコレステロールとシトス	表37 調査成果一覧

写 真 目 次

写真1 調査地周辺水田区画(昭和23年撮影)	写真13 試料4でみられる棒状植物珪酸体
写真2 土器の観察(1)	写真14 珪藻1
写真3 土器の観察(2)	写真15 珪藻2
写真4 土器の観察(3)	写真16 足跡石膏型資料
写真5 花粉化石(1)	写真17 筑関連資料
写真6 花粉化石(2)	
写真7 花粉化石(3)	
写真8 珪藻化石	
写真9 プラント・オパール	
写真10 植物珪酸体	
写真11 土坑108出土珪藻化石の顕微鏡写真	
写真12 試料5でみられる <i>Fragilaria</i> 属の群集	

写真図版目次

図版 1～9	A区遺構	図版113～137	2 A - 2区土器
図版10～14	B区遺構	図版138	2 B区瓦
図版15～23	C区遺構	図版139	2 B区瓦・土器
図版24	2 A - 1区遺構	図版140～145	2 B区土器
図版25～43	2 A - 2区遺構	図版146	2 C区土器
図版44～54	2 B区遺構	図版147～164	木器
図版55～59	2 C区遺構	図版165～169	A区その他の遺物
図版60～93	A区土器	図版170・172	B区その他の遺物
図版94～95	B区土器	図版171～172	C区その他の遺物
図版96～110	C区土器	図版173	2 A - 1・2 A - 2・2 B・2 C 区その他の遺物
図版111～112	2 A - 1区土器		

第1章 調査の経緯・経過と方法

第1節 調査の経緯・経過

溝咋遺跡は、大阪府茨木市学園町、学園南町、五十鈴町にわたって所在し、埋蔵文化財包蔵地として周知されていた。このうち、遺跡の北半分にあたる学園町は、大阪体育大学（浪商学園）跡地であり、当該地において茨木リバーサイド倶楽部による開発が計画され、平成5年5月、茨木市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、良好な遺物包含層と遺構が確認され、開発に際しては事前の協議が必要と判断された。

その後、住宅・都市整備公団により当該地における集合住宅建設が計画され、大阪府教育委員会および茨木市教育委員会との協議の結果、埋蔵文化財調査の実施が計画された。

埋蔵文化財調査は、大阪府教育委員会の指導により、財団法人 大阪府埋蔵文化財協会が実施することとなり、住宅・都市整備公団と同協会との間で委託契約が締結された。現地における発掘調査は平成7年3月から実施し、組織統合のため平成7年4月から財団法人 大阪府文化財調査研究センターが引き続き実施した。

調査対象地は、道路、集合住宅など施設の建設が予定される部分であり、発掘調査はこれら対象地を分割して実施した。このうち、大阪体育大学（浪商学園）建物により遺構が残存しない可能性がある部分は、大阪府教育委員会立ち会いのもと試掘調査によって確認し、対象地より除外した。（その1）は敷地中央を縦貫する道路およびこれに付随する施設用地等の部分であり、（その2）、（その3）は集合住宅用地である。その後、集合住宅建設の進捗にともない、新たに貯水槽用地の発掘調査が必要となり、（その4）として急遽調査を実施した。以上、（その1）～（その4）調査の詳細は表1のとおりである。

また、興味深い遺構、遺物の出土により、（その1）では平成7年12月9日、（その2）では平成9年4月12日に現地説明会を実施し、多くの参加者を得ることができた。

遺物整理、報告書作成は、平成10年4月から平成12年3月まで実施し、その成果は（その1）と（その2）、（その3）と（その4）の2分冊とした。本書は（その1）と（その2）の成果報告書である。

表1 （その1）～（その4）調査の詳細

調査区分	調査面積	調査区	調査期間	出土遺物 コンテナ概数
溝咋遺跡（その1）	4330㎡	A区・B区・C区	平成7年3月1日～ 平成8年2月29日	200コンテナ
溝咋遺跡（その2）	7029㎡	2A-1区・2A-2区 2B区・2C区	平成8年4月1日～ 平成9年7月25日	300コンテナ
溝咋遺跡（その3）	6472㎡	3A区・3B区・3C区・3D区 3E区・3F区・3G区	平成9年9月1日～ 平成11年1月25日	200コンテナ
溝咋遺跡（その4）	92㎡		平成11年6月21日～ 平成11年7月13日	15コンテナ

第2節 調査の方法

(その1)の調査対象地は、敷地中央を縦貫する道路およびこれに付随する施設用地等の部分である。調査はこれをほぼ三等分して実施し、北からA区、B区、C区とした。

(その2)の調査対象地は、3カ所の集合住宅建設部分であり、北から2A区、2B区、2C区とした。なお、2A区の西半部は近代の溜池を埋め立てた部分であり、大阪府教育委員会の立ち会いのもと調査不要と判断された部分をのぞき、2A-1区、2A-2区の2カ所に分割し調査を実施した(図1)。

地区割りは『遺跡調査基本マニュアル』(財)大阪文化財センター1988年をもととし、国土座標軸にのった基準線を遺物の取り上げ、遺構図作成の基準線として用いた(図1)。国土座標軸(第VI座標系)を基準とし、第I区画が1万分の1地形図、第II区画が2500分の1地形図の地区割りにあたる。第III区画は第II区画を東西20分割、南北15分割した、一辺100mの範囲となる。第IV区画は第III区画を東西、南北ともに10分割した一辺10mの範囲となる。第V区画は第IV区画を5m単位で区画した範囲となる。遺物の取り上げは基本的に第IV区画である一辺10mの範囲でおこなった。

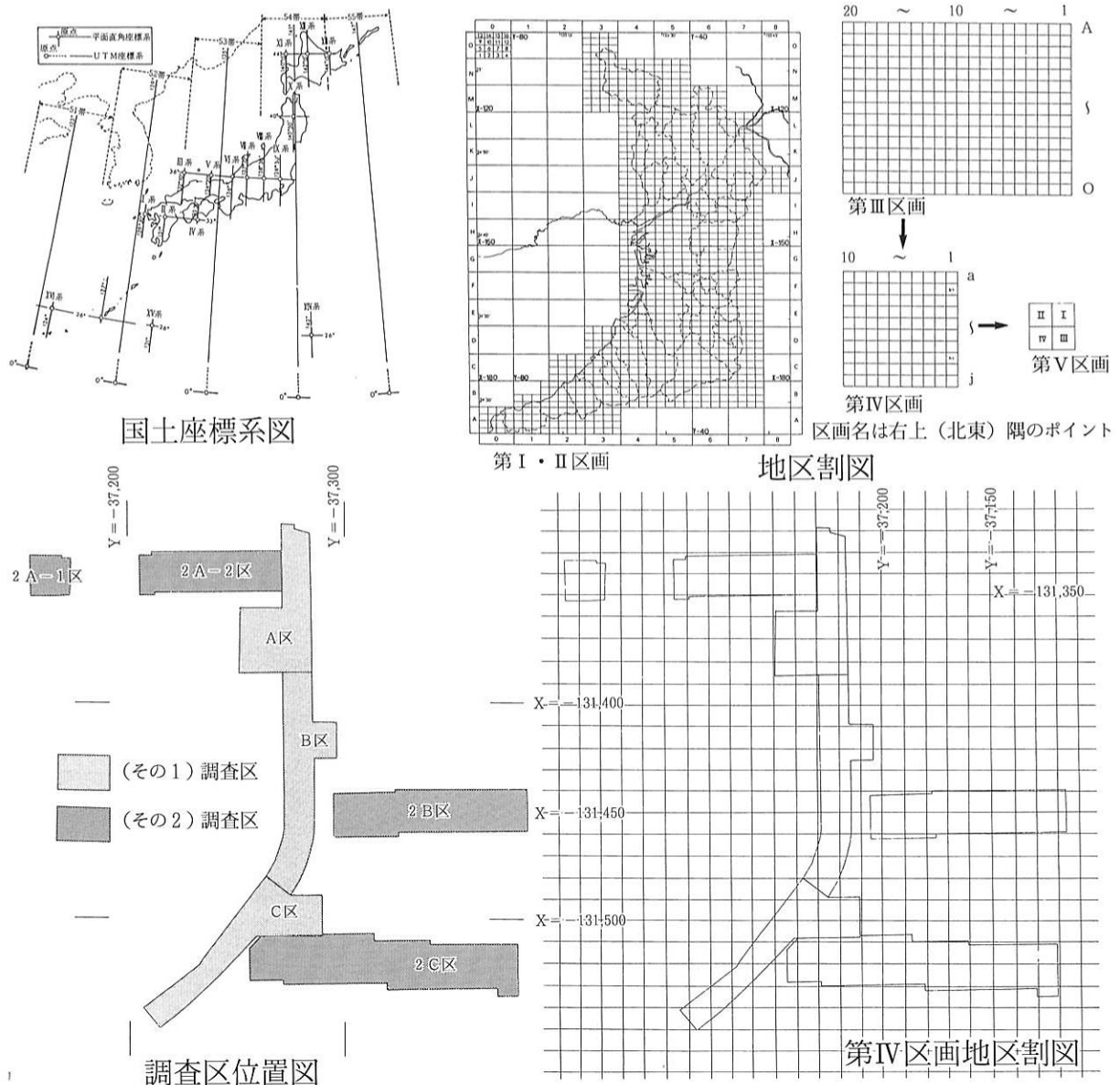


図1 地区割図・調査区位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

溝咋遺跡は、大阪府北東部にひろがる三島地方の南西部に位置する。三島地方は、現在の高槻市、茨木市、吹田市と箕面市の一部を含む範囲であり、北には北摂山地の一部をなす老ノ坂山地が連なり、西には千里丘陵が広がり、南は北東から南西に流れる淀川によって区切られる。三島地方は東部の島上郡、西部の島下郡からなり、『続日本紀』に島上郡、島下郡とあることから、奈良時代には両郡が存在していたようである。溝咋遺跡は両郡のほぼ境界にあたる地点に位置する。

三島地方の地勢は、北摂山地からその南東部の平野部にいたり、地質的には、北摂山地を構成する古生代の丹波層群、その南東側にとりつく丘陵地を構成する大阪層群からなる。これら丘陵地から富田台地をはじめとする低位段丘が派生し、その下位に檜尾川、芥川、安威川、茨木川などの河川によって形成された沖積地がひろがる。溝咋遺跡は、安威川下流域左岸の沖積地に立地し、調査地は、現在の安威川堤防脇にひろがる後背湿地である。

溝咋遺跡は、大阪府茨木市学園町、学園南町、五十鈴町にわたって所在し、東西250m、南北500mの範囲が埋蔵文化財包蔵地として周知されている。今回、その北部に位置する学園町地内が調査の対象となった(図2)。調査地は大阪体育大学(浪商学園)の跡地で、地名である学園町は昭和47年に大阪体育大学(浪商学園)の所在地として付された町名であり、旧の大字名は馬場であった。遺跡名である溝咋は、安威川を挟んで調査地の下流約200mの地点に所在する、延喜式内社溝咋神社がもととなっており、現在溝咋神社が所在する五十鈴町の通称名が溝咋であった。文献にみえる「溝咋」については後述

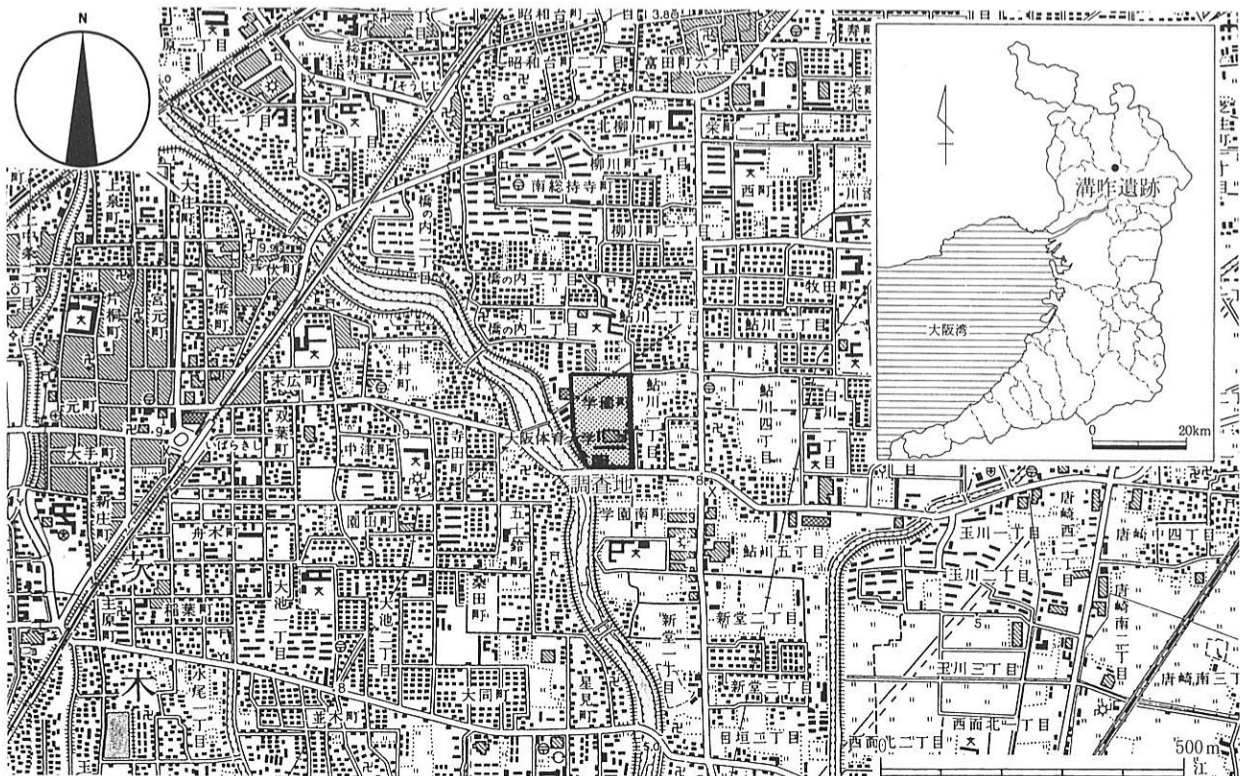


図2 調査地の位置

するが、地名の変遷をおえば、鎌倉時代初期には溝咋荘、室町時代には溝杭村がみえ、元禄年間には溝杭村は消失し馬場村を含む5カ村に分離し、明治22年に5カ村は合併し溝咋村となり昭和10年まで継続した。

第2節 考古学的環境

今回の調査で検出された遺構・遺物は、弥生時代～古墳時代のものが主要であるため、本節では弥生時代～古墳時代の考古学的環境について、三島地方のなかでも安威川流域を中心にみてみたい。

図3は、河内湖から淀川流域にかけての地域を対象とし、梶山彦太郎・市原 実の両氏によって示される弥生～古墳時代の地形に、同時代の主要な遺跡の位置をおとしたものである。西国街道は参考として入れ、遺跡は茨木市域と淀川対岸の寝屋川市域のものを主としている。これから明らかなように、遺跡・古墳はおもに低位段丘の縁辺部を中心に分布し、その他河川沿いの沖積地に立地する遺跡がみられ、溝咋遺跡は後者に含まれる。

図4は、安威川流域を中心にとりあげ、明治18年作製陸軍仮製地図を重ねている。これより、溝咋遺跡は沖積地のなかでも、低位段丘から安威川に沿って砂州状にのびる微高地上に立地し、その先端に目垣遺跡が立地していることがわかる。また、東奈良遺跡、牟礼遺跡も低位段丘上にはないが、沖積地における微高地の縁辺に立地することがわかる。また、前期古墳は段丘縁辺部に立地し、後期群集墳は安威川、芥川が平野部に流れ出る山裾に立地する。

以上の地形、遺跡の立地をもとに弥生時代～古墳時代の遺跡の動向をみてみたい。

牟礼遺跡では、縄文晩期にさかのぼる可能性をもつ堰および水田遺構が検出され、日本で最古段階の水田遺跡として注目された。農耕文化の伝播ルートのひとつとして、朝鮮半島から北部九州へとわたり、瀬戸内海をとおり大阪湾岸に達したルートが考えられるが、先にみたように、牟礼遺跡は安威川流域の沖積地のなかでも、微高地により湾状に囲まれた地点に立地しており、初期農耕に際して恵まれた土地条件をもつ地点が選地されたと考えられる。その他、目垣遺跡では船橋式の深鉢片が出土している。

弥生時代前期、茨木川沿いの沖積地の微高地縁辺に立地する東奈良遺跡と茨木川をさかのぼり西国街道との接点に位置する耳原遺跡で、人々の活動の萌芽がみられる。両遺跡とも顕著な遺構は検出されていないため、具体的な様相は不明である。

弥生時代中期、溝咋遺跡が立地する微高地の先端に位置する目垣遺跡で、第II様式と第IV様式を中心とするまとまった遺構、遺物が出土している。大形掘立柱建物のほか土器棺墓、溝、井戸が検出され、多量の土器とともに太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、大形石庖丁、環状石斧などの豊富な石器類が出土し、とくに注目すべき遺物として人面付土器がある。

東奈良遺跡は、弥生時代中期から後期にかけて引き続き営まれる。竪穴住居跡、井戸、柱穴などの遺構とともに大量の土器、石器類、豊富な木器類が出土し、これら資料は農耕をもととする具体的な生活の様相を示す。とくに重要な遺物は、銅鐸および銅鐸鋳型、大阪湾型銅戈やガラス製勾玉鋳型に代表される、青銅器およびガラス製造関連遺物である。青銅器やガラスの製造には専門的な技術が必要であり、東奈良遺跡がこうした特殊遺物製造に関わる技術者集団の拠点であったことは明らかである。出土した銅鐸は、弥生時代前期末の可能性をもつ朝鮮式、日本式の特徴をあわせもつ小銅鐸であり、銅鐸の祖形となる可能性が考えられている。銅鐸鋳型は外縁付紐式袈裟禪文銅鐸、外縁付紐式流水文銅鐸など6個

体以上のものがあり、流水文銅鐸の鋳型は豊中市桜塚原田神社境内出土銅鐸、香川県善通寺市我拝師山出土銅鐸を鋳造したことが判明している。また、銅鐸鋳型の石材供給地としては、摂津西端～播磨東端の地域とする指摘がある。これより、東奈良遺跡では、千里丘陵を越え、瀬戸内とも通じる交流があったことがわかり、遺跡前面に流れる茨木川から安威川を通じ、河内湖、瀬戸内海と結ばれる交通の要衝の地といえる立地を十分にいかしていることが理解される。金属器製造に関わる技術者集団の居住地という点で、類似する集落には、河内湖岸に立地する鬼虎川遺跡があり、同遺跡もまた水上交通の要衝の

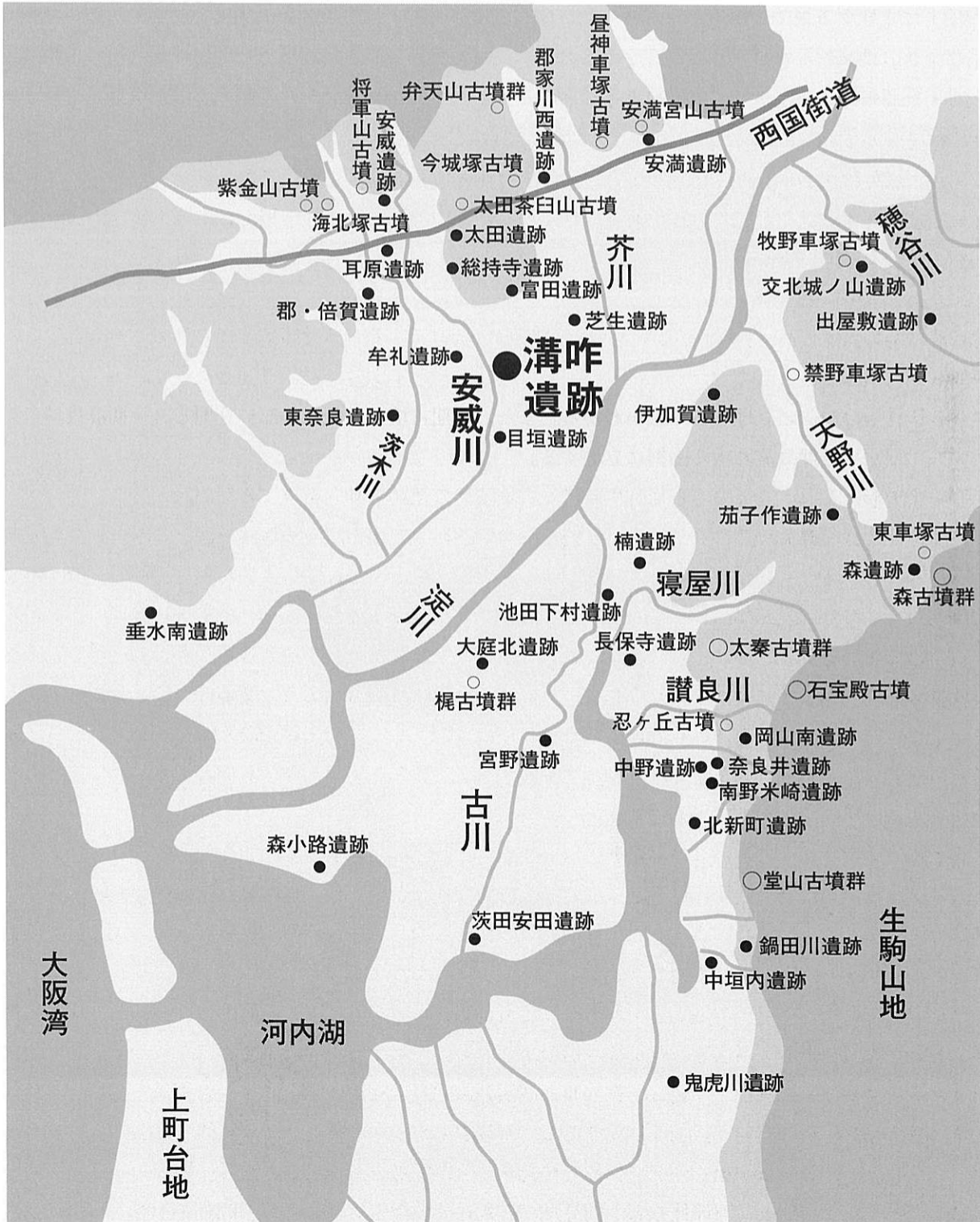


図3 河内湖から淀川流域における弥生～古墳時代の遺跡

地に立地する点で共通する。

弥生時代後期、他地域との頻繁な交流を示す遺跡に芝生遺跡がある。芝生遺跡は溝咋遺跡同様沖積地に立地し、芥川寄りの地点に所在する。芝生遺跡は、弥生時代後期初頭を除き後期をとおして存続し、河内、吉備からの外来系土器のほか銅釧が出土する。溝咋遺跡では弥生時代後期初頭以降古墳時代前期までの遺物は希薄であり、両遺跡は補完関係にある可能性が考えられる。

弥生時代後期には、このほか太田遺跡、総持寺遺跡、郡・倍賀遺跡、新庄遺跡など、沖積地から低位段丘上に立地する遺跡のひろがりが見られ、東奈良遺跡や郡・倍賀遺跡の大集落を中心に周辺の集落が結びつき、地域的なまとまりの萌芽が見られる。高地性集落では、第Ⅳ様式に北摂の最高所に位置する石堂ヶ丘遺跡が、第Ⅴ様式には地藏池南遺跡があり、その立地からは三島を越えた淀川流域における地

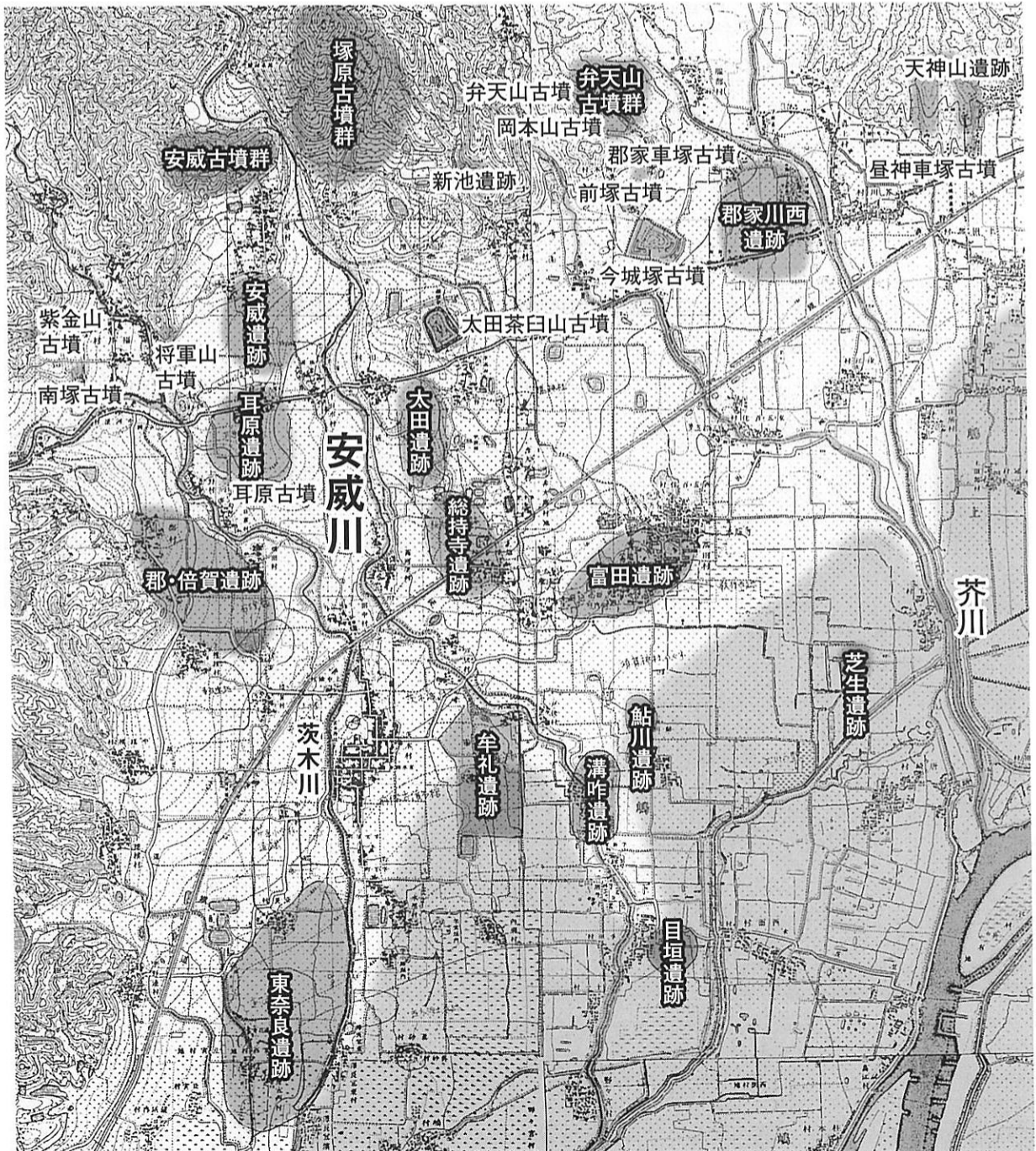


図4 溝咋遺跡の微地形上の位置と安威川周辺の遺跡

域間の結びつきが示唆されている。

古墳時代にはいと、三島地方では前期から後期にいたる数多くの古墳が築かれ、大和、河内南部とならぶ有数の古墳造営地域となる。

古墳時代前期には、水系ごとに主たる古墳が築造され、三島地方は水系ごとにこれら古墳の被葬者が並立していた様相を呈する。茨木川流域では、西国街道と交差する地点に、紫金山古墳、将軍山古墳が築かれる。ともに中央構造線に沿う和歌山県紀ノ川、徳島県吉野川流域にみられる結晶片岩を用いて竪穴式石室を構築しており、これら地域との交流を示す。紫金山古墳からは三角縁神獣鏡をはじめとする多くの鏡や石釧、車輪石などの碧玉製腕飾類、玉類、鉄剣など豊富な副葬品が出土しており、これら副葬品からは埋葬者をもつ司祭者の性格がうかがえる。安威川流域では安威1号墳が築かれ、石釧、車輪石などが出土する。また粘土槨内面には水銀朱の遺存がみとめられる。芥川流域では弁天山B1、A1、C1号墳が築かれ、A1号墳からは朱彩土器が出土し、C1号墳は結晶片岩を石室に用い、側壁にはベンガラが塗布される。檜尾川流域には安満宮山古墳があり、青龍三年銘鏡、三角縁神獣鏡をはじめとする5面の鏡が出土している。なお、その他鏡に関して述べるならば、溝咋神社には「暁の鏡」として、神人龍虎画像鏡一面が保管される。

また、古墳時代前期には外来系の土器が多く出土する、盛んな交流の様相を示す集落が水系ごとにみられる。吹田市垂水南遺跡では東海地方の土器を主とする各地の土器が出土しており、河内湖から大阪湾への出入口という立地をいかした交流の様相を示す。安威川流域では溝咋遺跡が、芥川流域では郡家川西遺跡がこれにあたる。

古墳時代中期に入ると、安威川流域には現継体天皇陵である太田茶臼山古墳が、芥川流域には今城塚古墳が築造される。C14年代測定法により太田茶臼山古墳に供給された埴輪はA.D.450±10年、今城塚古墳に供給された埴輪はA.D.520±40年という年代が与えられ、これまでの考古学的成果と整合性をもつことから、今城塚古墳を継体陵とする意見が大勢をしめる。三島地方における中期古墳は大前方後円墳である両古墳とその周辺に限定されるため、三島地方の勢力は前期に比べ、かなり統一されたと思われる。

古墳時代後期には、群集墳として、安威川流域には塚原古墳群、安威古墳群が、芥川流域には塚脇古墳群が築かれる。その他、茨木川流域では西国街道と交差する地点の周辺に南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原鼻摺古墳、耳原古墳が点在する。南塚古墳は横穴式石室をもつ前方後円墳であり、紫金山古墳に系譜をおえる可能性がある。海北塚古墳は結晶片岩製の石棺をもち、前期古墳の紫金山古墳、将軍山古墳同様、この地域における紀ノ川、吉野川流域との交流がうかがえる。耳原古墳は三島地方最大の巨石墳であり、耳原鼻摺古墳は7世紀代の周濠をもつ方墳という点で重要である。

7世紀に入り、仏教の影響の顕在化とともに古墳の築造は終焉をむかえる。この時期の主な遺物には、高槻市真上の石川年足の墓誌、茨木市安威大織冠山出土の三彩釉陶蔵骨器があり、両点とも優品として知られる。

第3節 文献史学的環境

「溝咋」は『古事記』および『日本書紀』の神武天皇に関する記事のなかでみることができる。すなわち、三嶋溝咋耳神の娘、玉櫛媛と美和（三輪）の事代主神の間に生まれた娘、媛蹈躰五十鈴媛命を神

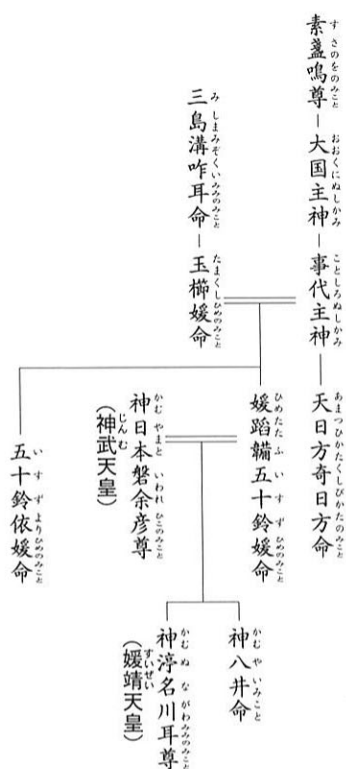


図5 溝咋神社神系図

のあり方が示され、そのなかで溝咋神社上宮、下宮の記載があることから、15世紀半ばには溝咋神社が二社に分離していたことがわかる。

すなわち、天坊幸彦氏が『溝杭神社由緒書』で指摘されるように、溝咋神社は、当初一社が建てられ、その後1441年までのいずれかの時期に二社に分離したようである。それがいつであるのかを考えると、溝杭大夫がこの地を領有しはじめる11世紀中葉がひとつの可能性として浮上してくる。このことは河音能平氏による、「溝杭大夫資兼の母の実家は溝咋神社の神主職あるいはその神宮寺不動院長蓮寺の俗別当職を把握して…玉川の堤防治水工事を自らの職務とすることによって、この地に巨大な経済的支配力をもっていた地方名望家＝富豪であったと推量される。」という溝杭大夫と溝杭神社神主職の関連性の指摘からも十分考えられるであろう。

その他、荘園関係の資料では、建久三（1192）年に後白河法皇が丹後局高階榮子に、摂津国溝杭庄他の所領を与えていることが『鎌倉遺文』にみられる。その後溝杭庄は、応永十四（1407）年『長講堂領目六』に「庁分摂津国溝杭庄」の記載があることから、15世紀初めには長講堂領となっていたようである。

玉川の治水を含め安威川流域の支配権をもった溝杭氏は、芥川、檜尾川流域を所領とした真上氏とは対照的に、中世末まで目立った政治的な動きを示すことなく存続する。

その後の溝杭（馬場）の地の領有の変遷を追うと、文明九（1477）年～寛文四（1664）年には溝咋兵庫介質信とその後裔が、文禄年間（1592～1596年）以降には長谷川式部少輔が、寛保二（1742）年より永井日向守と小堀仁左衛門が半ばこれを領し、宝暦十三（1763）年には土井大炊頭が領した後、明治四（1871）年大阪府管轄となっている。

溝咋神社再建の記録を諸資料からおうと、文明年間（1469～1486年）に溝咋兵庫介質信が、また文禄年間（1592～1596年）に長谷川式部少輔（織田信長の家臣）が社殿を再建し、下宮である現在の社殿は、

武天皇の正妃として迎えたという記載である（図5）。両書の信憑性には疑問がもたれるところであるが、前期古墳の多いこの地域と大和朝廷の結びつきが示唆される。また、『古事記』には、神武天皇の使者として五十鈴媛に会った大久米命が、目の周辺に入れ墨をしており、それを見た媛踏躰五十鈴媛命が不思議に思ったという記事がある。溝咋遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる人面線刻土器が出土しており、これは同時期の類例と異なり、入れ墨のない顔を表現したものであった。先の記事はこの入れ墨のない人面線刻土器を考えるにあたり興味深い内容をもつ。

平安時代には、『延喜式』神名帳（927年）、摂津国嶋下郡十七座のなかに溝咋神社が記載され、これには溝咋神社の祭神は一座とある。

中世には、溝杭氏が開発領主としてこの地に足跡を残す。『尊卑分脈』によると、溝杭氏の祖である源資兼（源満仲の曾孫）は、「摂津国溝杭に住し、溝杭大夫」と称したとあり、それはほぼ11世紀中葉のこととされる。時代が下り、室町時代中期には、資兼の後裔である溝杭信幸による、所領の嫡子への譲り状が石清水文書に残る（『石清水文書（溝杭信幸譲状）』（1441年・嘉吉元年））。これには溝杭氏の所領

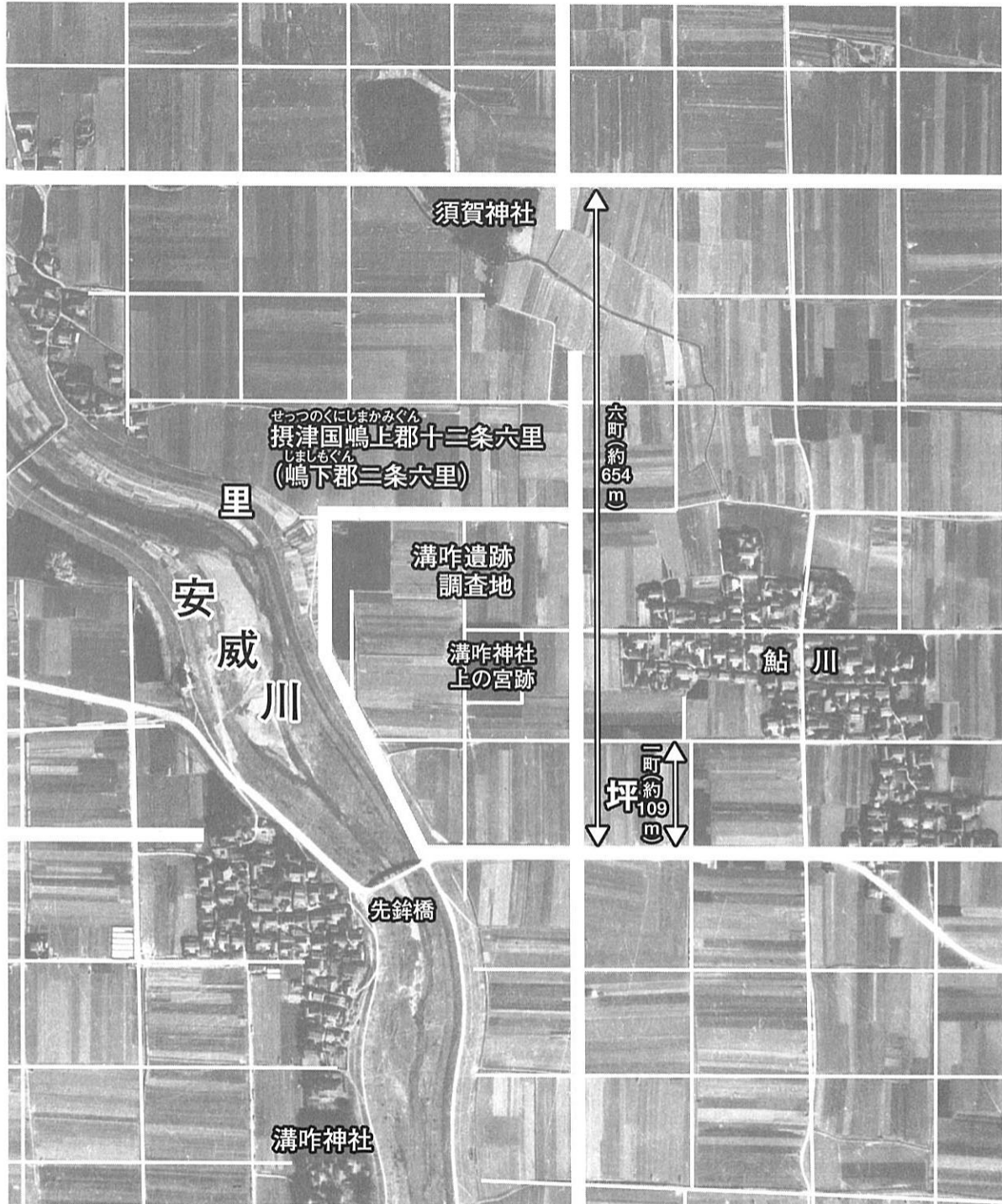


図6 航空写真（昭和20年代）にみる復元条里

寛保二（1742）年に大阪の豪商殿村平右衛門と石崎喜兵衛の寄進による、とあり、溝咋神社の再建は、溝杭の地の領有の変遷と呼応することがわかる。

上宮については、以下の記載がみられる。明治七年（1874）年に溝咋神社から大阪府に上申した書類には、「一、本殿 桁行 四尺五寸 梁行 四尺 一、雨覆 桁行 式間 梁行 式間一尺五寸 一、境内地 式百七拾七坪」とあり、明治十二（1879）年の馬場村誌には、「東西七間九分二厘、南北三十五間、面積九畝七分壹厘」と各々社地の規模が記される。その後、上宮は明治四十二（1909）年に下宮に合祀され現在に至る。

第4節 条里関連

三島地方は、現在の航空写真からも東西南北方向に整然と区画された水田のひろがりが見られ、条里制地割りが良好に遺存する地域である。三島地方の条里復元は、天坊幸彦氏による、主に総持寺田畠目録を基準資料とした研究がある。それによると、先にあげた『石清水文書（溝杭信幸讓状）』中に「撰津国島下郡…溝杭村…十一条 十二条之間字下宮…」とあり、十一条、十二条は島上郡の条を用いて記している。島上郡と島下郡の旧境界は島上郡十一条と十二条の間にわたっており、まさしく調査地はこの境界に含まれることになる。図6は天坊氏の復元条里を昭和20年代の航空写真に重ねたものである。これによると調査地は、撰津国島上郡十二条六里または島下郡二条六里の南東隅部にあたり、天坊氏の示される千鳥式坪並でみると、23～26、35・36坪に相当する。A区からC区を南北に貫流する河川1をはじめとする南北および東西方向の大溝は、まさしくこの坪境と重複し、条里遺構といえることができる。

参考文献

- 市原 実編 1991 「大阪とその周辺地域の第四紀地質図」『アーバンクボタ・MARCH』
茨木市・茨木市教育委員会 1968 『茨木市史』
茨木市・茨木市教育委員会 1988 『わがまち茨木 一地名編一』
梶山彦太郎・市原 実 1986 『大阪平野のおいたち』
倉野憲司・武田祐吉校注 1984 『日本古典文学大系1 古事記 祝詞』
河音能平 1984 「中世前期北摂武士団の動向」『中世封建社会の首都と農村』
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋校注 1990 『日本古典文学大系67 日本書紀 上』
都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20-4
天坊幸彦 1929 「撰津三島郡の条里」『歴史地理』54-3
野上丈助 1969 『撰津の古墳』
濱野俊一 1995 「東奈良遺跡における銅鐸生産の終焉」『古代文化』47-10
濱野俊一 1999 「茨木市目垣遺跡の発掘調査 一人面付土器を中心に一」『第2回近畿弥生の会 資料』
埋蔵文化財研究会 1994 『第35回埋蔵文化財研究集会 倭人と鏡』
森田克行 1996 「新池遺跡」『第40回埋蔵文化財研究集会 考古学と実年代』

第3章 (その1)の調査の成果

第1節 基本層序

調査は、B区、C区、A区の順に実施した。したがって、B区で設定した基本層序をもとに他の地区の基本層序を組み立てることになった。B区では近代～古墳時代の水田が検出され、一方A区、C区では上層はB区同様水田が検出されたが、古墳時代面ではB区の水田に対応する集落が検出され、この点でB区と異なる。

明治18年の陸軍測量部作製の仮製地図、昭和20年代に米軍により撮影された航空写真をみると、調査範囲は中央に溝咋神社上宮跡の竹藪がある以外は近代以降水田であることがうかがえる。昭和30年代末から40年代はじめにかけて浪商学園がこの地に移転した段階で水田は盛土され、グラウンド、校舎が整備された。校舎は調査地の南側と西側の一部に位置し、調査地の大半はグラウンドとして使用されたため、遺構の残存状況は良好であった。

機械により、浪商学園移転後の盛土、浪商学園造成時の盛土、浪商学園造成直前の昭和30年代後半の黒色耕土、その下層の近世～近代耕土を掘削し、比較的安定した床土とみられる黄褐色粘土面を検出した。機械により除去しきれなかった耕土を1層とし、1層除去後の黄褐色粘土面を1面とした。以降、2層除去後面を2面というように呼称した。以上の手順は、B、C区も同じである。

調査に入る段階の地表面の高さは約7mであり、調査地の北西で高く、南東で低い。機械で地表下約1.3mまで除去後、人力により地表下約2.5mまで調査した。

第1項 A区

<1層>10YR 6/1 灰白色シルトに管状酸化鉄が多く入る。近世～近代耕土。

<2層>10YR 7/6 明黄褐色シルト。層厚20cm。土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器が少量出土。近世耕土。

<3層>10YR 7/4 にぶい黄橙色シルト～中砂、粗砂。層厚10cm。土師器、須恵器、瓦器が少量出土。中世～近世耕土。

<4層>漸移的に砂粒の含有度が変化し、上位、中位、下位に分かれる。層厚20cm。土師器、須恵器、瓦器、青磁が少量出土。中世耕土。

上位 3層に類似する。10YR 7/4～7/3 にぶい黄橙色微砂混じりシルト。巾3～5mmの管状酸化鉄が多く入る。

中位 10YR 7/4～7/3 にぶい黄橙色細砂～粗砂。

下位 2.5Y 6/1 黄灰色シルト。巾3～5mmの管状酸化鉄が多く入る。

<5層>10YR 7/6 明黄褐色しまった微砂(上位)～細砂(下位)。層厚10cm。土師器、須恵器、瓦器が少量出土。

<6層>7.5Y 7/1 灰白色微砂混じり粘土(上位)～7.5Y 6/1 灰色粘土。上位に巾3～5mm管状酸化鉄が多く入る。層厚20cm。本層は耕作による攪乱により下層の7層上半を巻き上げるため、古墳時代の土師器、須恵器を多く含むが、これに奈良時代の土師器、須恵器がわずかに混じる。

<7層>10YR 4/1 褐灰色粘土。直径3mmの炭化物、土器を非常に多く含む。有機物に富み、人為的

攪乱が顕著である。上層には管状酸化鉄が入る。層厚20～30cm。古墳時代前期～後期土器を含み、古墳時代前期土師器が圧倒的多数を占める包含層である。

<8層>2.5GY 7/1 明オリーブ灰色シルトに10YR 4/1 褐灰色シルトが管状またはブロックで多く入る。下位には微砂が混じる。幅5mmの管状酸化鉄が入る。弥生時代中期～後期土器を少量含み、古墳時代前期土師器が主体である。須恵器は含まない。古墳時代前期包含層である。

<9層>2.5GY 7/1 明オリーブ灰色粘土。やや10YR 4/1 褐灰色を呈する。直径1～2cmの炭化物を含む。調査区北部、溝123の南肩部にあたる箇所弥生時代中期～古墳時代前期土器が少量出土。

調査区北部以外では遺物は出土せず、掘削限界に達したため本層を地山とし、遺物が出土した調査区北部では深掘部を設けて下層を確認した。以下はその成果である。

<10層>10YR 5/8 黄褐色シルトが10YR 6/1～5/1 褐灰色シルトに管状に入る。9層より粘性があり、しまる。層厚20cm。古墳時代前期土師器をわずかに含むが弥生時代中期土器が主体である。

<11層>N 5/0 灰色粘土。炭化物を多く含む。層厚20cm。弥生時代中期甕底部が1点出土した。これより下層では遺物は出土しなかった。

<12層>7.5GY 5/1 緑灰色しまったシルト混じり微砂。炭化物を少し含む。層厚20cm。

<13層>10YR 5/1 褐灰色シルトにN 4/0 灰色粘土が混じる。直径1mmの炭化物を多く含む。

<14層>7.5GY 6/1 緑灰色シルト混じり粘土に5GY 5/1 オリーブ灰色細砂～粗砂入る。

<15層>7.5GY 6/1～5/1 緑灰色しまった粘土。下位は2.5GY 7/1 明オリーブ灰色粘土。

<16層> N 5/0 灰色粘土。直径1～2mmの炭化物、直径2mmの青色粒を含む。

<17層>7.5GY 5/1 緑灰色粘土。直径1～2mmの炭化物を含む。

<18層> N 3/0 暗灰色粘土。炭化物が上位にラミナ状に入る。

第2項 B区

<1層>10YR 6/3 におい黄橙色シルト。土師器、瓦器、陶器、磁器が少量出土。近世耕土。

<2層>10YR 5/3 におい黄橙色シルトに細砂混じる。直径2～3mmのマンガン粒が入る。層厚20cm。土師器、瓦器、陶器、磁器が少量出土。近世耕土。

<3層>10YR 5/2 灰黄褐色細砂～粗砂。層厚20cm。土師器、瓦器、陶器が少量出土。中世の洪水砂か。

<4層>N 5/0 灰色細砂混じり粘土。巾3～5mmの管状酸化鉄が入る。層厚10cm。土師器、瓦器、陶器が少量出土。中世耕土。

<5層>層厚40cmの厚い層であり、上位、下位に分けて掘削した。両層は、砂の含有量が漸位的に変化する程度で明確な差異はない。土師器、須恵器、瓦器が少量出土し、「奈粘」の墨書がある須恵器杯が含まれる。中世～奈良時代の遺物を含む耕土である。

上位 N 6/0 灰色微砂混じり粘土。

下位 N 6/0 灰色～2.5Y 4/1 黄灰色粘性あるシルトに粗砂を含む。粗砂は下層の6層が攪拌により混入したものとみられる。

<6層>10YR 6/1～5/1 褐灰色粗砂。層厚20cm。土師器、須恵器が少量出土。古墳時代後期後葉の洪水砂。

<7層>2.5Y 4/1～3/1 黄灰色～黒褐色粘性あるシルト。層厚20～30cm。土師器、須恵器が少量出土。古墳時代前期～後期耕土。

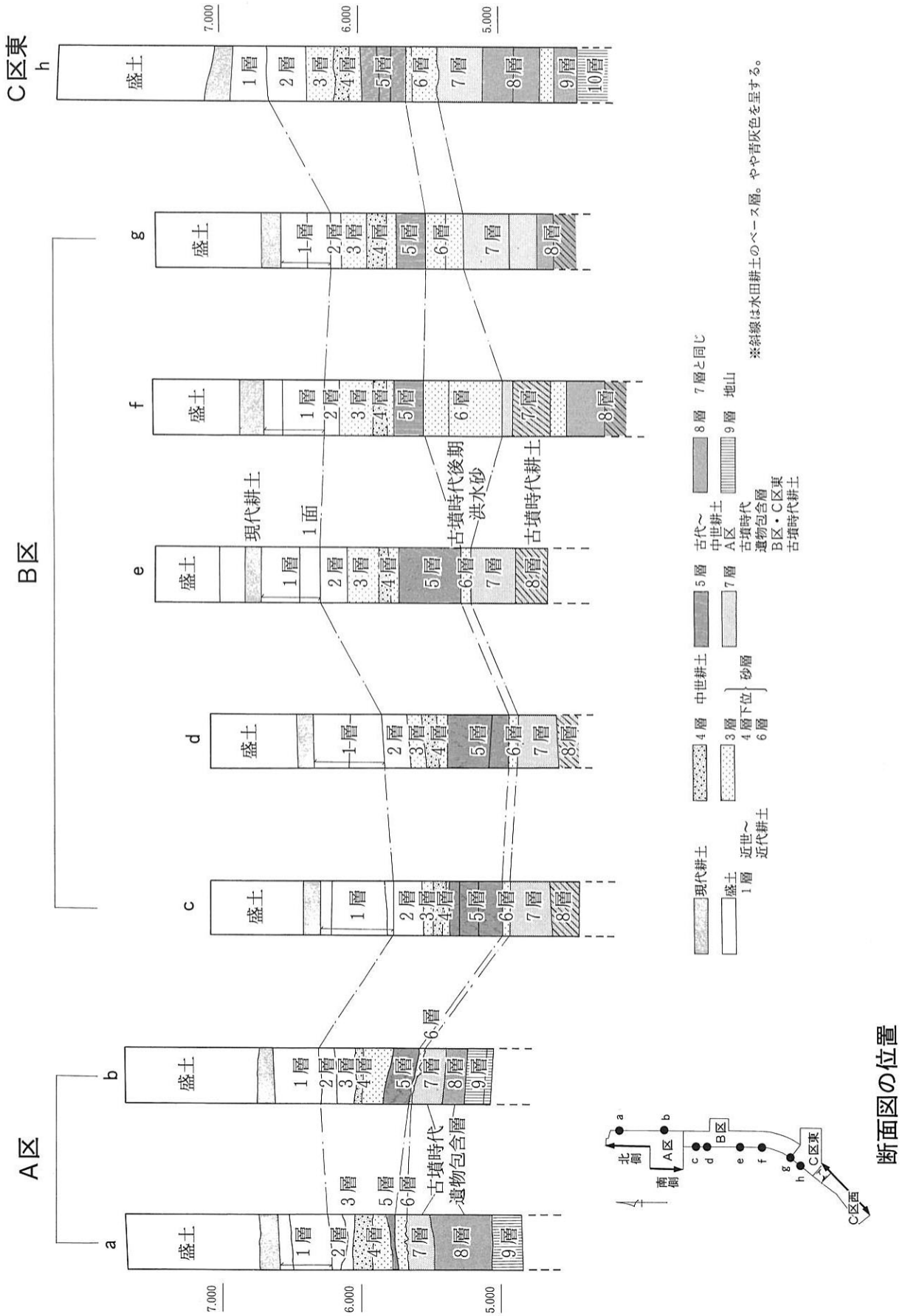


図7 A～C区柱状断面

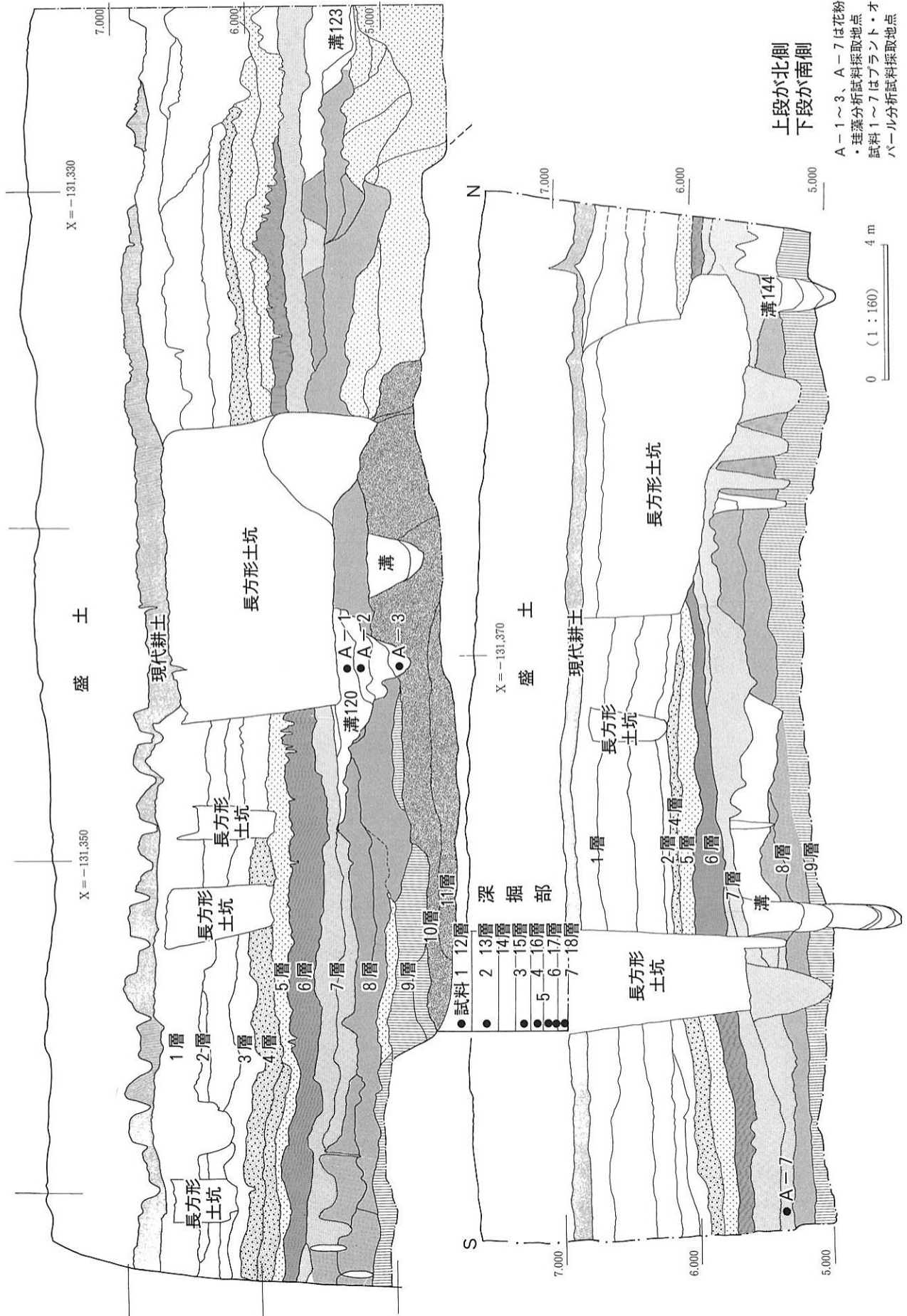


図8 A区西壁断面

<8層>2.5GY 6/1 オリーブ灰色細砂混じり粘土。7層古墳時代後期耕土のベース土である。掘削限界に達したため、本層を地山とした。

第3項 C区

調査区西寄りに、調査区を横断する攪乱があり、ちょうどこれを境に東と西で立地、層序が異なるため、東と西に分けて報告する。すなわち、東は低地部で古墳時代～近代まで水田がひろがり、西はこの水田から徐々に高くなる微高地で古墳時代には集落が営まれる。古墳時代、西ではY=-37,270付近を境に、これより東はやや乾田化した水田、これより西は集落であり、これに相当する層序は西のなかで細分して報告する。

東

<1層>5Y 6/2 灰オリーブ色シルト。瓦器、陶器、磁器が少量出土。近代～近世耕土。

<2層>10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト。近世耕土。

<3層>10YR 6/2 灰黄褐色微砂～細砂。幅5mmの管状酸化鉄が密に入る。層厚10cm。洪水砂か。

<4層>N 7/0 灰白色粘土。幅5mmの管状酸化鉄が入る。層厚10cm。土師器、瓦器、磁器が少量出土。中世～近世耕土。安定した堆積であり耕土のベースになると考えられる。

<5層>10YR 6/4 にぶい黄橙色シルト。幅3mmの管状酸化鉄が密に入る。層厚20～30cm。須恵器、瓦器、磁器が少量出土。中世耕土。

<6層>2.5Y 6/2 灰黄色粗砂(上位)～7.5Y 6/1 灰色細砂～微砂(下位)。層厚20cm。土師器、須恵器が出土。古墳時代後期洪水砂。

<7層>2.5Y 5/1 黄灰色粘土。下位は微かに微砂が混じる。幅3mmの管状酸化鉄が入る。須恵器が出土。古墳時代後期耕土。

<8層>上位、中位、下位に分かれる。層厚は上位、中位が10～20cm、下位が5～10cm。土師器が少量出土。古墳時代後期以前の耕土。

上位 2.5Y 4/1 黄灰色粘土に炭化物が混じる。

中位 攪拌のため、上位に下位が混じる。

下位 5Y 4/1 灰色粗砂。

<9層>2.5Y 4/1 黄灰色粘土に5Y 7/1 灰白色微砂がラミナ状に入る。層厚20cm。土師器が少量出土。古墳時代後期以前の耕土。

<10層>10BG 5/1 青灰色しまった粘土。上位は9層と混じる。9層古墳時代後期以前の耕土のベースである。掘削限界に達したため、本層を地山とした。

西

<1層>5Y 6/2 灰オリーブ色シルト。瓦器、陶器、磁器が少量出土。近代～近世耕土。

<2層>10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト。近世耕土。

<3層>10YR 6/4 にぶい黄橙色シルト。マンガン斑多く入る。層厚10cm。古墳時代土師器、須恵器に瓦器が混じる。中世耕土。3面では、特筆すべき遺物として土師器樽形甗出土した。これは、半ば4層に埋積しており、4層出土とみることにも可能である。

<4層>10YR 3/3～3/2 暗褐色～黒褐色シルトに10YR 6/1 褐灰色シルトが管状に入る。上位に酸化鉄多く含む。層厚10～40cmで東に向かって薄くなる。古墳時代土師器、須恵器(TK47～TK209)を多く含み、飛鳥時代土師器杯が1点出土した。古墳時代後期～終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下

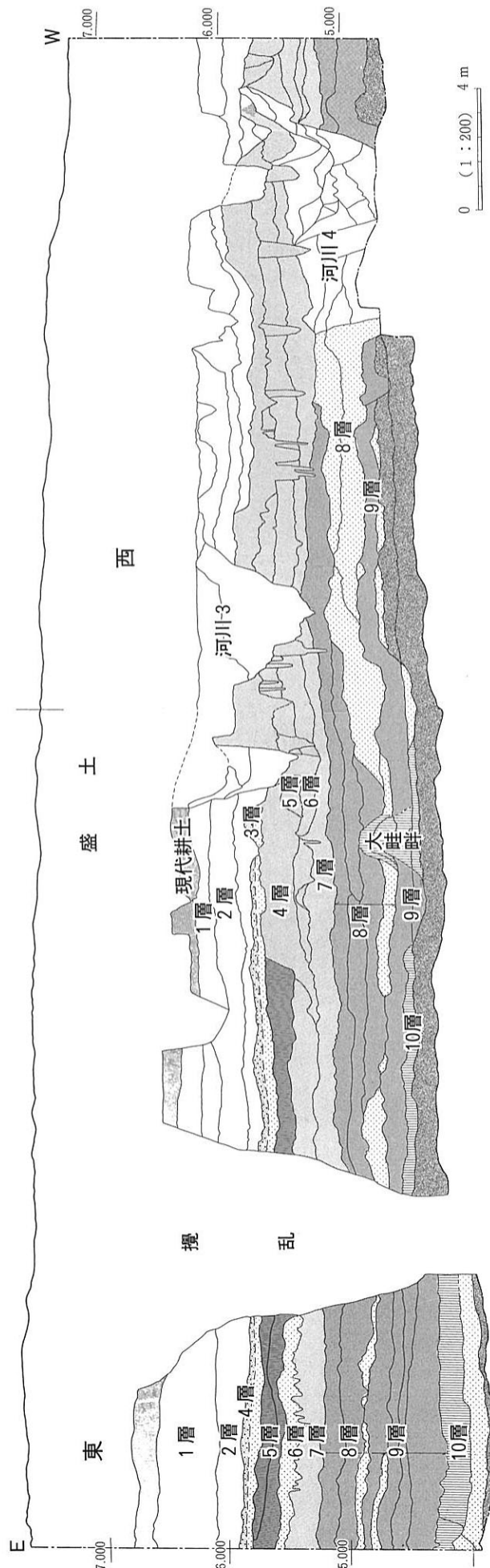


図9 C区南壁断面

限とする包含層である。

<5層>Y=-37,270付近以西の集落域中心部にのみ堆積する。

2.5Y 4 / 1 黄灰色シルトに 5 Y 3 / 2 オリーブ黒色シルト、10YR 4 / 1 褐灰色シルトが混じる。酸化鉄が入る。炭化物を含む。層厚10~15cmで古墳時代土師器、須恵器を含む。古墳時代後期包含層。

<6層>Y=-37,270付近を境に東と西で異なる。東 10YR 5 / 1 褐灰色シルトに管状酸化鉄が入る。層厚10~20cm。古墳時代後期耕土。

西 2.5Y 4 / 1 ~ 5 / 1 黄灰色シルトに酸化鉄多く入る。炭化物を含む。層厚10~20cm。土師器、須恵器を含む古墳時代後期包含層である。

<7層>2.5Y 6 / 1 黄灰色細砂混じりシルトに幅5mmの管状酸化鉄が密に入る。土師器、須恵器が出土。古墳時代後期耕土のベース。

<8層>Y=-37,270付近を境に東と西で異なる。東 上位は 5 Y 6 / 2 灰オリーブ色ややしまった粘土にラミナ状に炭化物入る。層厚20cm。中位は 2.5Y 5 / 1 ~ 4 / 1 黄灰色粘土に炭化物が少し混じる。層厚20cm。下位は 5 Y 4 / 1 灰色粗砂。層厚10cm。上位、中位は古墳時代後期以前の耕土、下位は古墳時代後期以前の洪水砂。

西 2.5Y 5 / 1 ~ 4 / 1 黄灰色粘土に 5 Y 4 / 1 灰色粗砂が混じる。西端では灰白色微砂がラミナ状に入り、河川4の溢流堆積とみられる。土師器が出土。下層の耕土を覆った古墳時代後期以前の洪水砂をもとにした集落の基盤層と考えられる。

<9層>2.5Y 4 / 1 ~ 5 / 1 黄灰色粘土。下位には10BG 6 / 1 青灰色粘土が管状に入る。炭化物微かに含む。層厚40cm。土師器が少量出土。古墳時代前期耕土。

<10層>10B 6 / 1 青灰色シルト。弥生時代後期土器、古墳時代前期土師器が少量出土。9層古墳時代前期耕土のベースとみられる。掘削限界に達したため、本層を地山とした。

第2節 遺構

南北に長い調査区であるため、調査区を3分の1ずつ3区に分けて調査した。調査区名は北からA区、B区、C区とする。調査はB区→C区→A区の順に行っており、遺構番号もその順にしたがって通し番号を付した。

第1項 A区

<1面>河川1条(河川1)、溝1条(溝1)、井戸1基(井戸5)の他、鋤溝と多数の長方形土坑を検出した(図10)。

河川1は調査区を南北に縦断する坪境の大溝である。幅7~9m、深さ1~1.5mで、国土座標のY=-37,220上を北から南へと流れる。横断面の観察によって、1度大きな掘り直しが行われたことが判明する(図11)。この河川の規模は徐々に減じ、最終段階では幅1~1.5m、深さ20cm程度の浅い溝(溝1)へと縮小する。この最終段階の溝になった時点で、溝の肩に護岸のための木あるいは竹の杭を打つ(図版1-3)。溝1内には農業用のビニールが入っており、浪商学園が建てられる寸前まで、これらの溝が継続して機能していたことが判明する。

当学園町の周辺は、茨木市の中でもっとも条里制の痕跡を残す地域として知られており、昭和23年に写された航空写真でも、当地周辺には規則正しく区画された水田が1

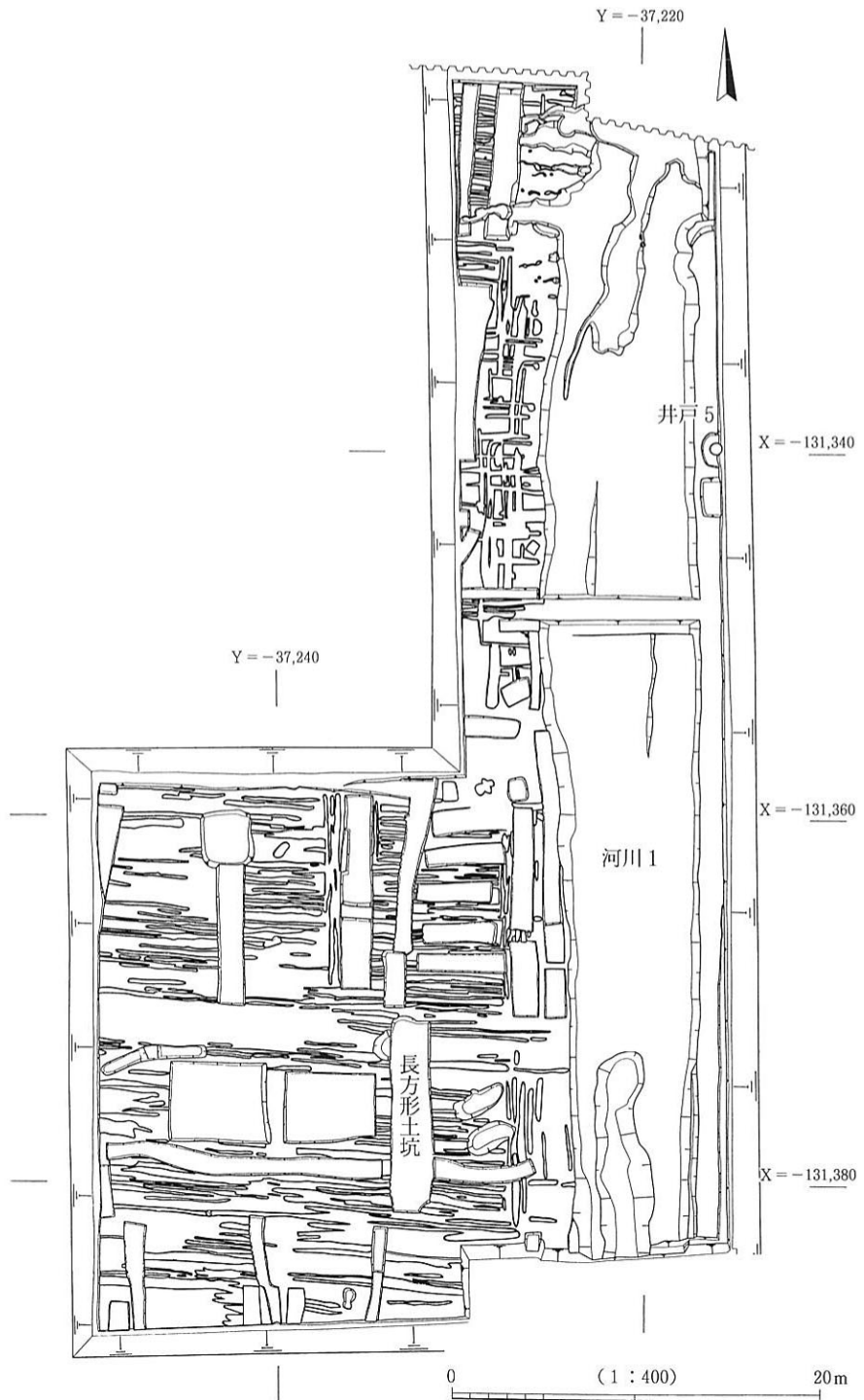


図10 A区1面平面



写真1 調査地周辺水田区画（昭和23年撮影）

坪1坪碁盤の目のように広がっている様子を見ることが出来る（写真1）。そして河川1を検出した南北のラインがちょうどこの坪と坪の境に当たっていることが確認できる。

井戸5は調査区の東壁際で検出した。桶杵の狭端部を上にして数段重ねた井戸である。掘方は直径1.45mの円形である。桶杵は6段までを確認したが、安全確保のため井戸底までは確認できなかった。最上段の桶杵上端から5段目の桶杵下端までは4.05mを測る（図12）。

鋤溝は河川1より西側の全面にわたって検出した。幅10~20cmの浅い溝である。南半では国土座標のY=-37,227を境に東側が南北方向の溝、西側が東西方向

の溝となる。

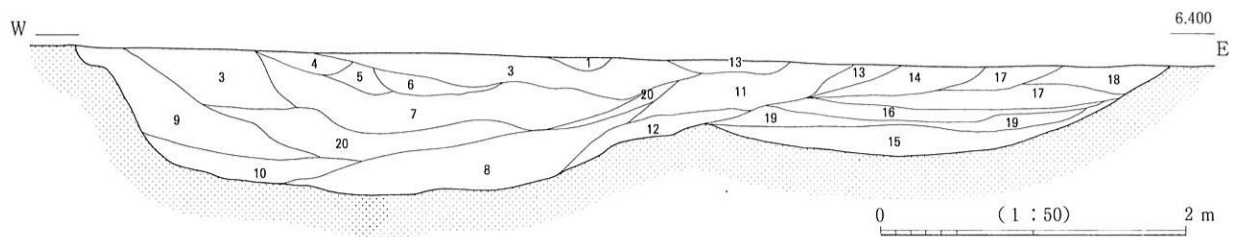
長方形土坑は浪商学園造成寸前の水田耕土直下から掘られている土坑である。河川1より西側の全面で検出した。これらの土坑は一般に「粘土採掘坑」、あるいは近年「洪水復旧坑¹⁾」といわれている幅1~2m、長さ約10~11m、あるいは方形の土坑である。深さは浅いものから1.5m前後にまで及ぶものがある。土坑内はすべて粗砂や小礫で埋められている。土坑1つ1つは不規則に掘られているわけではなく、南北約11m前後の単位の中に、しかも方向を同じくして掘られている。当調査区内の土坑の方向は南北方向が主である。

この約11mという長さは、1坪（1町）のちょうど10分の1に当たる。このことは河川1より西側の坪内が南北に10等分された東西に長い長地型の区割りであったことを示している。またそれは昭和23年に写された航空写真からも確認できる（写真1）。

この長方形土坑の性格を解明するには至っていないが、調査の結果、土坑の掘削は1段ずつに区画された各水田ごとに行われたものであり、この土坑上面の水田と長方形土坑とは密接に関係するものであることが判明した。

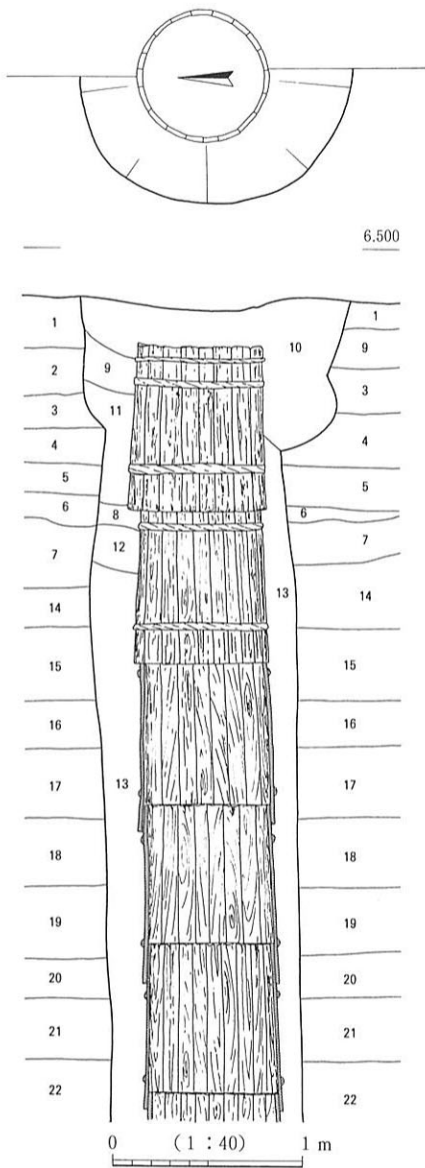
<2面>鋤溝を検出した（図版2-1）。

鋤溝は河川1より西側で検出した。幅10~20cmの浅い溝である。数条の南北方向の溝がある以外はほとんどが東西方向の溝である。



- | | | |
|--|----------------------------------|--|
| 1. 10YR 5/1 褐灰色粗砂・礫 | 8. 5Y 5/1 灰色礫φ 2~3 cm | 15. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色シルト（礫混） |
| 2. 10YR 7/4 にふい黄橙色粗砂 | 9. 5Y 5/1 灰色シルト（粗砂・礫混） | 16. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色シルト（オリーブ黄色粗砂ブロック状に混） |
| 3. 7.5Y 6/1 灰色シルト（灰白色微砂ラミナ状に入） | 10. 5Y 6/2 灰オリーブ色シルト（礫・細砂混） | 17. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色シルト |
| 4. 7.5Y 6/1 灰色シルト（粗砂混） | 11. 5Y 5/3 灰オリーブ色シルト（灰白微砂ラミナ状に入） | 18. N 6/0 灰色シルト（細砂・粗砂混、管状酸化鉄含） |
| 5. 7.5Y 6/1 灰色粗砂 | 12. 5Y 5/3 灰オリーブ色シルト（礫混） | 19. 2.5Y 6/1 黄灰色シルト |
| 6. 5Y 5/1 灰色粗砂・礫 | 13. 5Y 5/3 灰オリーブ色シルト（細砂ラミナ状に入） | 20. 7.5GY 6/1 灰色粗砂 |
| 7. 5Y 5/1 灰色礫φ 2~3 cmに10YR 5/6 黄褐色礫層介在 | 14. 5GY 6/1 灰色シルト（管状酸化鉄混） | |

図11 A区1面河川1断面



1. 10YR 7/8 黄橙色シルト (黄灰色シルト混)
2. 7.5Y 6/2 灰オリーブ色 (上位)
3. 10BG 6/1 青灰色シルト年度 (下位)
4. 10YR 5/1 褐灰色粘土 (微砂混)
5. 10YR 4/1 褐灰色粘土 (土師片・炭化物含)
6. 10YR 3/1 黒褐色シルト (微砂・炭化物・土師片多量含)
7. 10BG 6/1 青灰色細砂～細砂混シルト
8. 10BG 5/1 青灰色シルト
9. N 4/0 灰色粘土 (炭化物多量含)
10. 1. + 2.
11. 2. + 3. + 4. + 5.
12. 5. + 6.
13. 4. + 5. + 6. + 7. + 8.
14. 青灰色粘質土
15. 青灰色砂質土
16. 青灰～黒色粘質土
17. 黒色粘土
18. 褐灰色粘質土
19. 青灰色シルト
20. 黒色粘質土
21. 青色粘質土
22. 褐灰色粘質土

図12 A区1面井戸5平面・断面

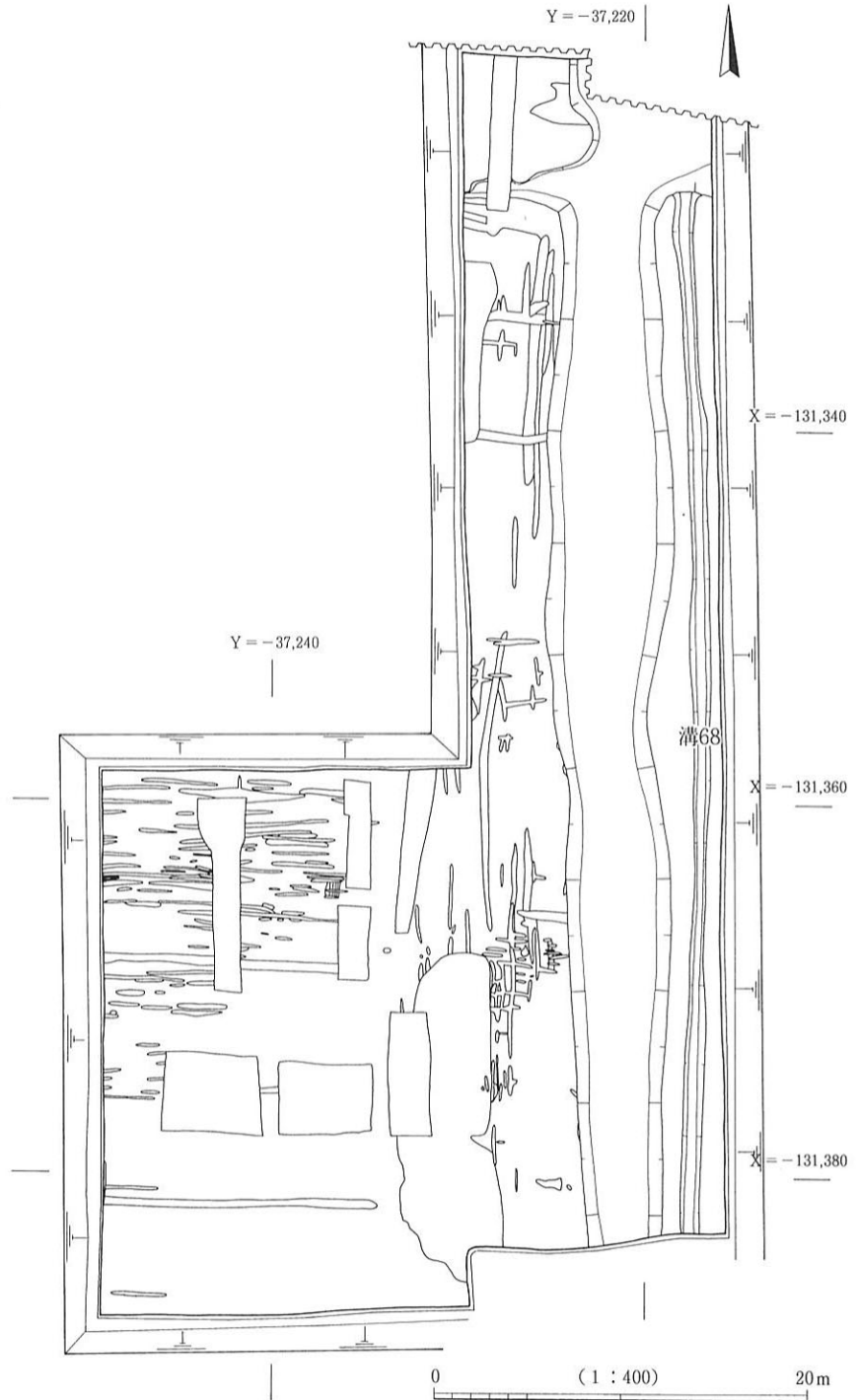


図13 A区4面平面

その他顕著な遺構はない。

<3面>鋤溝と人・偶蹄類の足跡を検出した(図版2-2・3)。

両者は河川1の西側に沿って集中する。鋤溝は南北方向のみ。足跡は筋状に集中するものがある。

その他顕著な遺構はない。

<4面>溝1条(溝68)と鋤溝を検出した(図13)。

溝68は河川1の東側に沿って検出した南北溝である。北端部は河川

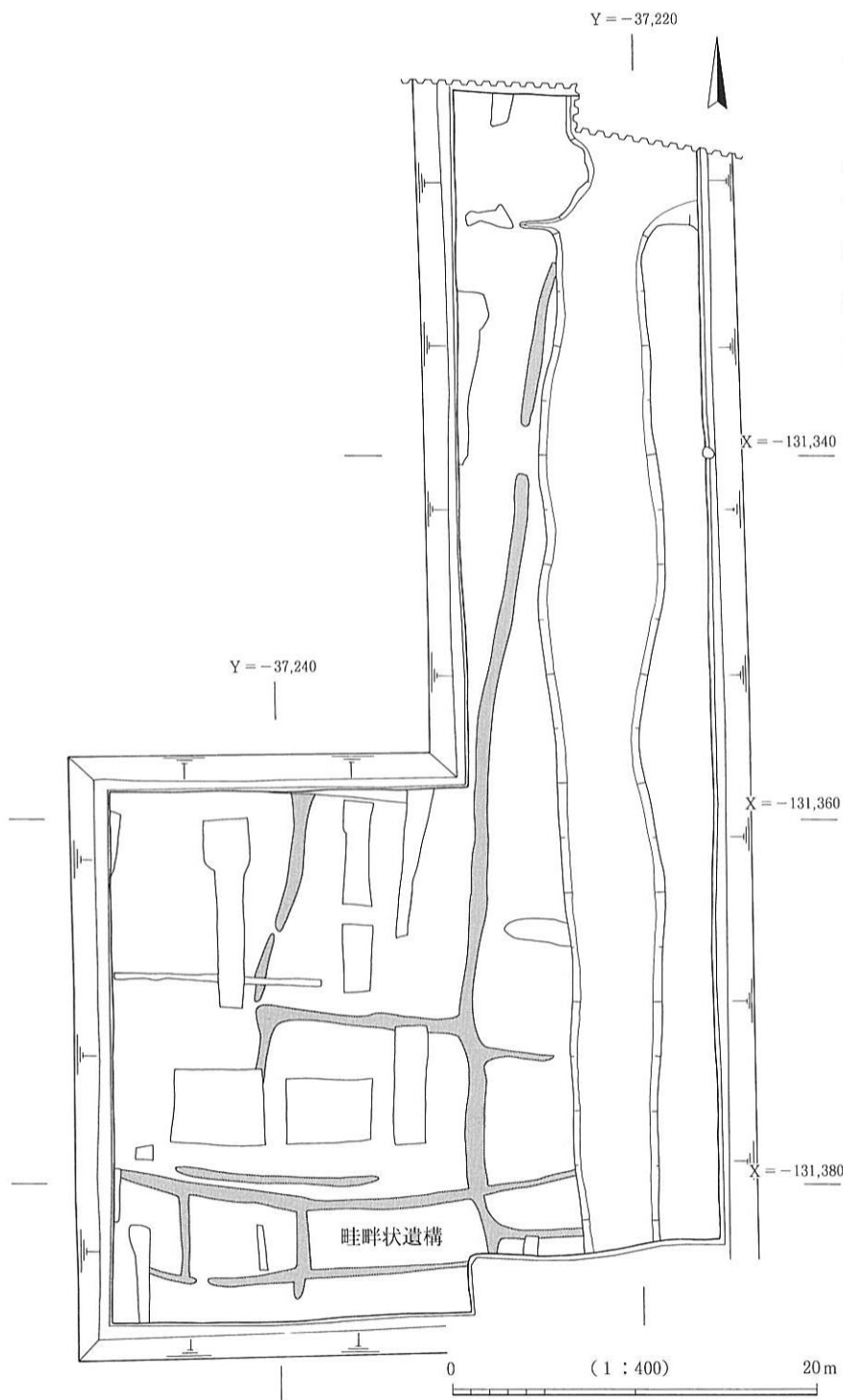


図14 A区5面平面

建物1は西張り出し部で検出した掘立柱建物跡である。2間×4間の東西棟で、北で西に45度振れる。柱間寸法は梁間が1.7m、桁行が1.4m等間である。柱掘方の平面形は隅丸の方形である。

建物2は調査区のほぼ中央で検出した掘立柱建物跡である。梁間3間の南北棟である。桁行は5間分を検出したが、さらに北に伸びる可能性がある。柱間寸法は梁間、桁行とも1.8m等間である。北で西に45度振れる。柱掘方の平面形は隅丸長方形である。

門1は建物1の東で検出した柱掘方2つの遺構である。柱間は2.4mである。柱掘方は平面形が隅丸の方形で、深さがそれぞれ80cm、83cmとやや深い。建物1・2と同じく北で西に45度振れる。南の柱穴

1に切られる。幅約1m、深さ45cmを測る。

鋤溝は河川1より西側で検出した。幅10~20cmの浅い溝である。1面検出の鋤溝ほど密ではない。国土座標 Y = -37,235のラインを境に、東は東西・南北方向の溝、西は東西方向の溝のみとなる。

その他顕著な遺構はない。<5面>畦畔状の遺構を検出した(図14)。

畦畔状の遺構は河川1の西側に広がる遺構である。断面および平面で明確な盛り上がりを検出したわけではないが、5面に帯状の変色部がみられたため、遺構として認識した。詳細は不明。若干の振れはあるものの、基本的には国土座標を意識している。

<6面>古墳時代の遺物を多量に包含する「茶黒土(遺物取り上げ時の層名)」=7層の上面から掘り込まれた遺構である。

西張り出し部の西北部で、掘立柱建物跡2棟(建物1・2)、門跡1棟(門1)、土坑1基(土坑98)のほか鋤溝を検出した(図15・16)。

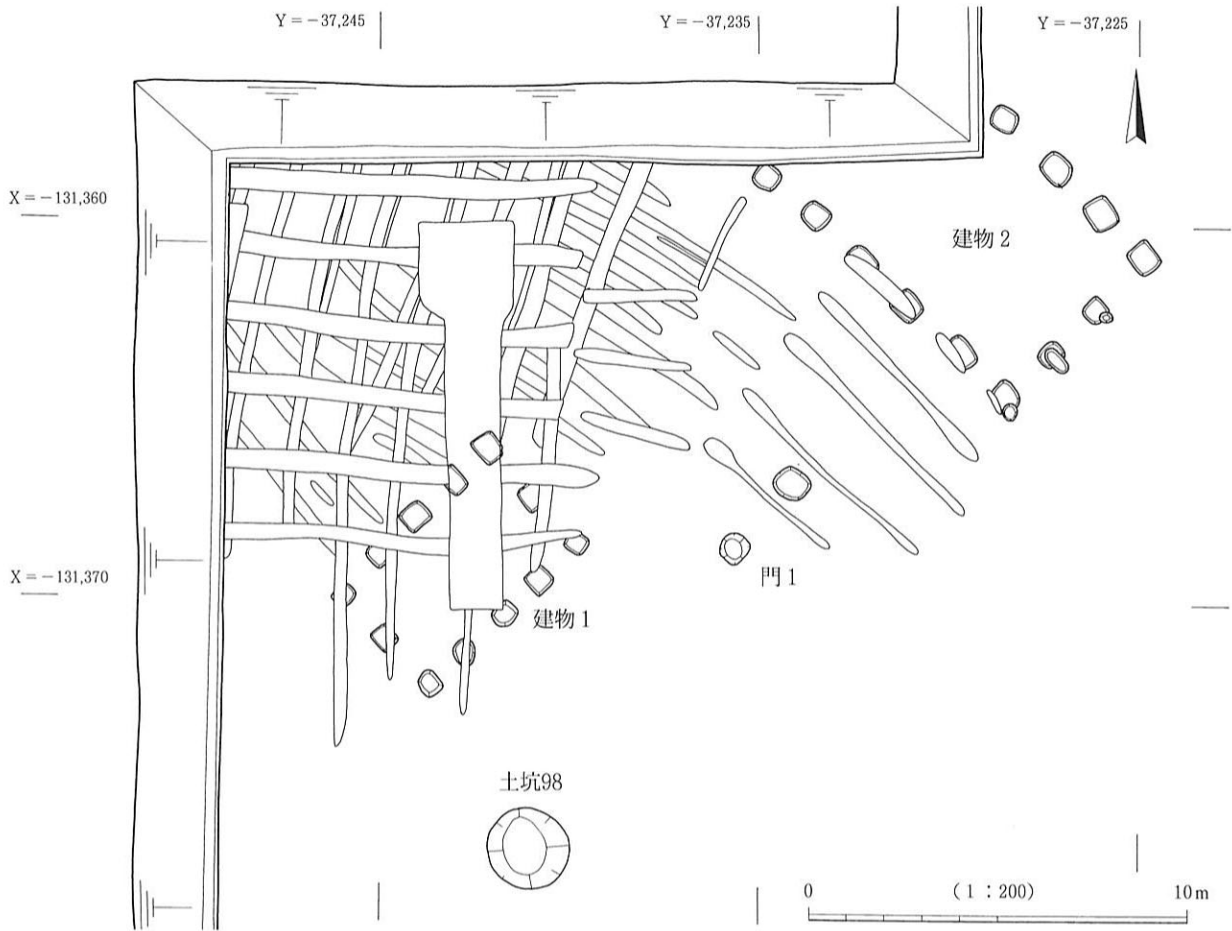


図15 A区6面平面

- 建物1 (穴396・553)
 建物2 (穴414・417・420)
1. 10YR 5/1 褐灰色土 (灰粘土多量混)
 2. N 5/0 淡灰色粘質土
 3. 10YR 6/8 明黄褐色土
 4. 10YR 2/1 黒色粘質土 (緑灰色粘土ブロック混、炭含)
 5. 10YR 6/8 明黄褐色土 (褐灰色ブロック混)
 6. 10YR 6/8 明黄褐色土 (青灰色粘質土混)
 7. 10YR 6/8 明黄褐色土 (青灰色粘質土混)
 8. 7.5YR 2/1 黒色粘質土
 9. 5Y 5/1 灰色粘土
 10. 7.5YR 3/2 黒褐色粘質シルト
 11. 10YR 4/1 褐灰色粘質土
- 門1 (穴315・316)
1. 7.5YR 6/8 茶黒色土 (黄褐色土ブロック混)
 2. 7.5YR 2/1 黒色粘土
 3. 10YR 2/1 黒色粘質土 (緑灰色粘土部ブロック混)
 4. 7.5GY 6/1 緑灰色粘土

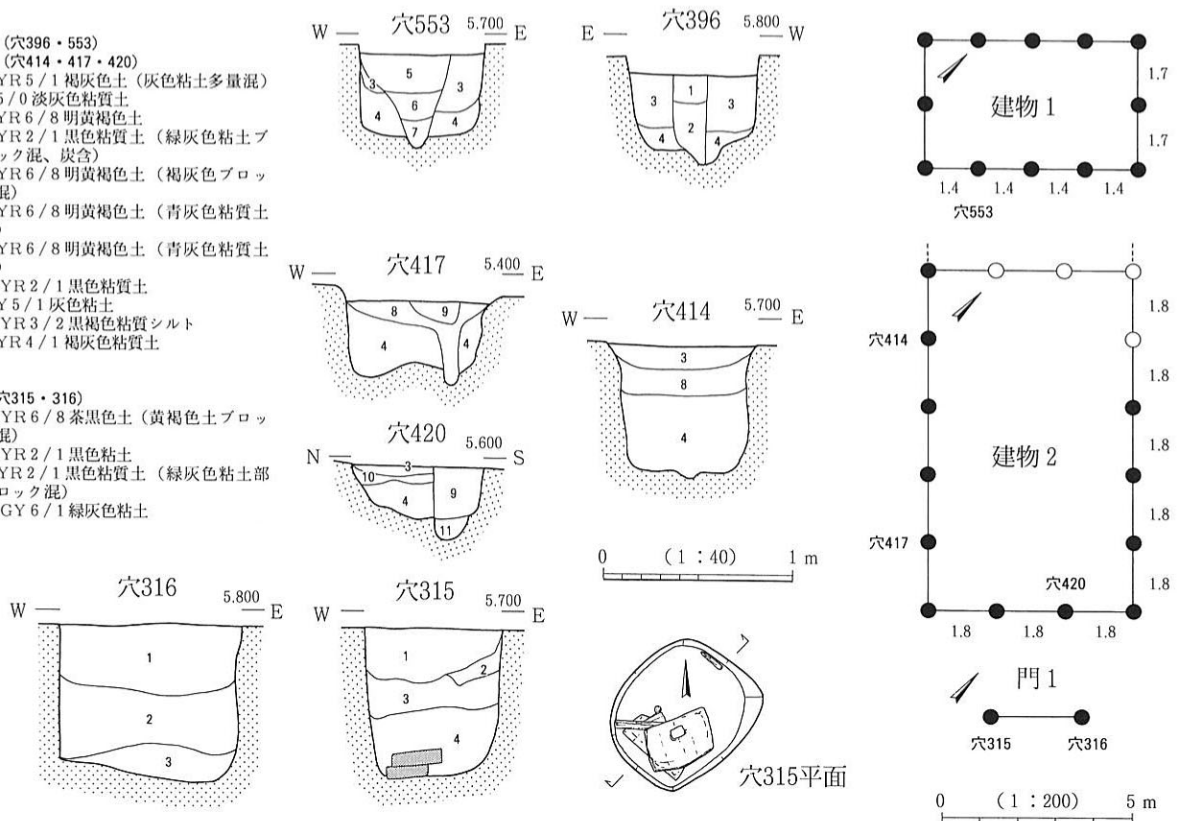


図16 A区6面建物平面模式図・柱穴断面

(穴315) 底から板の中心にほぞ穴を穿った木製品が出土した(図16)。建築材を転用して礎板にしたものであろう。

この遺構は集落域の東南の端に位置する。これより東南からは遺構を検出していないことから、集落の境に設けられた門に相当する簡単な施設であったと考えられる。

6面で検出した建物跡2棟・門跡1棟は、ともに北で西に45度振れるという特徴をもつ。3者は綿密な設計のもとに建てられた、同一時期の遺構であるといえる。

土坑98は建物1の南で検出した。平面形は直径2mの円形で、深さ1.3mを測る。土坑内には炭や木屑、あるいは漆喰状の白色砂が交互に堆積する。琴や用途不明の木製品などが出土した(図21)。井戸の可能性はある。

鋤溝は西張り出し部の西北隅で検出した。東西・南北および斜行する溝である。幅は1～4面で検出した鋤溝に比べてやや広く、20～60cmを測る。1カ所に集中しているため、3者は複雑に切り合っている。鋤溝の切り合い関係は古い順に、斜行鋤溝→南北鋤溝→東西鋤溝となる。

鋤溝は建物跡等の遺構と同一面で検出しているが、明らかに建物跡を鋤溝が切った状態で検出している。鋤溝は建物跡よりも新しい段階の遺構であることが判明する。

以上が6面で検出した遺構であるが、上記の「茶黒土」はちょうどこれらの遺構が集中している西張り出し部の西北部にのみ広がっている。「茶黒土」の及ばない部分、つまり門1が向いている調査区の東南部ではまったく遺構を検出しておらず、「茶黒土」が集落域のベース層となっていたことが判明する。この集落域は東南部に比べて標高も50～70cmほど高い。

では遺構が皆無の東南部はどのような土地利用が行われていたのか。

A区より先に行われた南のB区の調査では、同一面で水田跡を検出している。A区でも水田畦畔が検出されることが予想されたが、畦畔はもちろん、足跡すら検出できなかった。おそらくA区東南部は集落域と水田域とのちょうど境の空白地に当たっていたと推測される。

<7面>集落跡と水田跡を検出した。

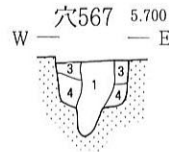
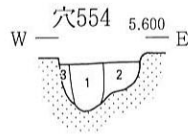
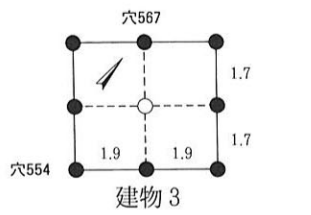
集落域は調査区の北約3分の2を占める。遺構は主に西張り出し部の西北部と調査区の北端に集中する。掘立柱建物跡7棟(建物3～9)、竪穴住居跡5棟(竪穴1～5)のほか、溝数条(溝120ほか)、土坑25基(土坑102・109・124・125・134ほか)、小穴多数を検出した(図17・18)。

建物3は西張り出し部の西方で検出した掘立柱建物跡である。2間×2間の東西にやや長い建物跡で、北で西に40度振れる。柱間寸法は東西が1.9m、南北が1.7m等間である。当建物跡の中央には、6面検出の建物1の柱穴が位置しているため、当建物跡が総柱建ちの建物であったのかは確認できない。

建物4は西張り出し部の北端で検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。3間×2間の東西に長い建物跡で、北で西に35度振れる。柱間寸法は東西が2.2m、南北が2.5m等間である。7面で検出した掘立柱建物跡の中ではもっとも大きな建物跡である。

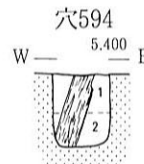
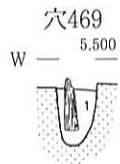
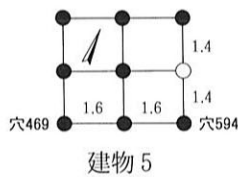
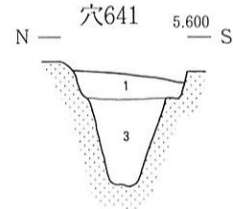
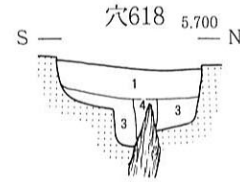
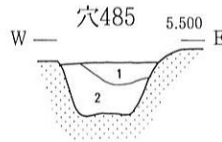
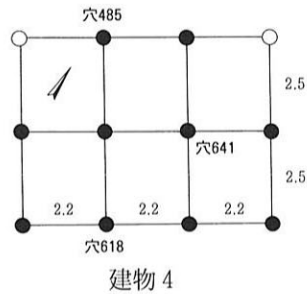
建物5は建物4の東南で検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。2間×2間の小さな建物跡で、東西にやや長い。北で西に25度振れる。柱間寸法は東西が1.6m、南北が1.4m等間である。柱穴内には腐って細くなった杭状の柱根が残っているものがあつた。

建物6は建物4の東で、建物跡7と切り合つて検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。建物7とは直接柱穴どうしが切り合っていないため、先後関係は確認できない。2間×2間の東西に長い建物跡で、北で西に38度振れる。柱間寸法は東西が2.2m、南北が1.6m等間である。



建物3 (穴554・567)

- 10YR 4/1 褐灰色粘質土
- 10YR 6/1～5/1 褐灰色シルト (炭化物・焼土粒含)
1. より明黄褐色シルト多量含
3. より明黄褐色シルト少ない

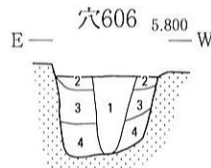
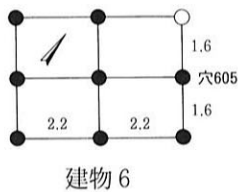


建物5 (穴469・594)

- N 3/0 暗灰色シルト (暗オリーブ灰色シルト混、炭化物多量含)
- 2.5GY 6/1 暗オリーブ灰色シルト (微砂混、暗灰色シルトが管状に入る)

建物4 (穴485・618・641)

- 10YR 4/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルトブロック混、炭化物含)
- 10YR 4/1～3/1 褐灰色やや粘性をもつシルト
- 10YR 4/1 褐灰色粘性のあるシルト (明オリーブ灰色シルト混)
- 10YR 4/1～3/1 褐灰色粘土 (微砂混)

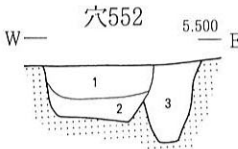
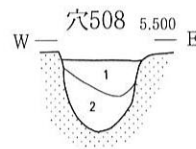
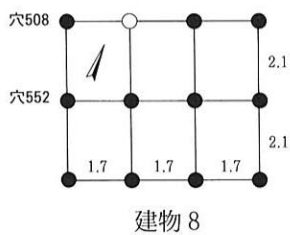
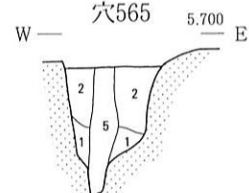
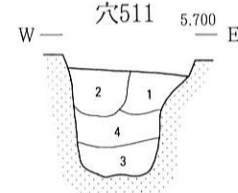
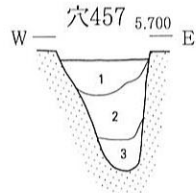
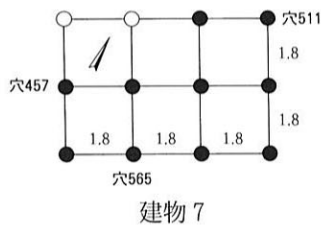


建物6 (穴606)

- 10YR 4/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルト混、炭化物多量含)
1. より炭化物多量含
- 10YR 6/6 明黄褐色シルト (褐灰色シルトブロック混)
- 2.5GY 7/1～6/1 暗オリーブ灰色シルト (褐灰色シルト混)

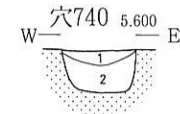
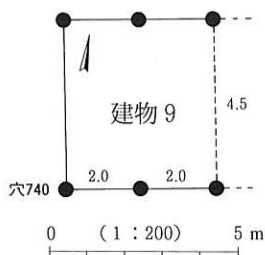
建物7 (穴457・511・565)

- 10YR 4/1 褐灰色シルト (にぶい黄色シルト混、炭化物含)
- 10YR 4/1 褐灰色シルト (にぶい黄褐色シルト多量混、炭化物多量含)
- 10YR 4/1 褐灰色粘土 (炭化物含)
2. よりにぶい黄色シルト多量含
- 10YR 4/1 褐灰色シルト



建物8 (穴508・552)

- 10YR 4/1 褐灰色粘土 (明オリーブ灰色粘土混、炭化物含)
- 10YR 4/1 褐灰色粘土 (明オリーブ灰色粘土混、炭化物含)
- 10YR 4/1 褐灰色粘土 (やや砂混)



建物9 (穴740)

- 10YR 2/1 黒色粘質土 (緑灰色粘土ブロック混、炭含)
- φ 2～3 cm小礫

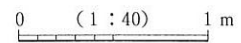
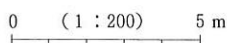


図18 A区7面建物平面模式図・柱穴断面

建物7は建物6のすぐ東で、建物6および竪穴住居跡(竪穴4・5)と切り合って検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。竪穴住居跡の周溝を切って建物7の柱穴を検出した。したがって竪穴住居から掘立柱建物へと変遷したことが判明する。3間×2間の東西に長い建物跡で、北で西に29度振れる。柱間寸法は東西・南北とも1.8m等間である。

建物8は建物7の東南で、これも竪穴4と切り合って検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。柱穴が直接竪穴住居跡の周溝と切り合っていないため、先後関係は確認できない。3間×2間の東西に長い建物跡で、北で西に25度振れる。柱間寸法は東西が1.7m、南北が2.1m等間である。

建物9は調査区の北方で検出した掘立柱建物跡である。竪穴住居跡(竪穴3)と切り合っており、竪穴住居跡の周溝を切って建物9の柱穴を検出した。ここでも竪穴住居から掘立柱建物へと変遷したことが確認できる。南北1間の東西棟である。東西は2間分を検出したが、さらに東に延びる可能性がある。柱間寸法は東西が2.0m等間で、南北が4.5mである。北で西に12度振れる。柱穴底面に小礫が入ることを特徴とする。

6面検出の建物跡・門跡の柱穴平面形が隅丸の方形、あるいは長方形であったのに対して、7面検出の建物跡7棟の柱穴平面形は円形や楕円形である。

掘立柱建物跡と同一面で竪穴住居跡を5棟検出した(図19)。

竪穴1は西張り出し部の西端で検出した竪穴住居跡である。わずかに残る幅10~20cm程度の周溝のみを検出した。東側の周溝は検出していないが、周溝東南隅

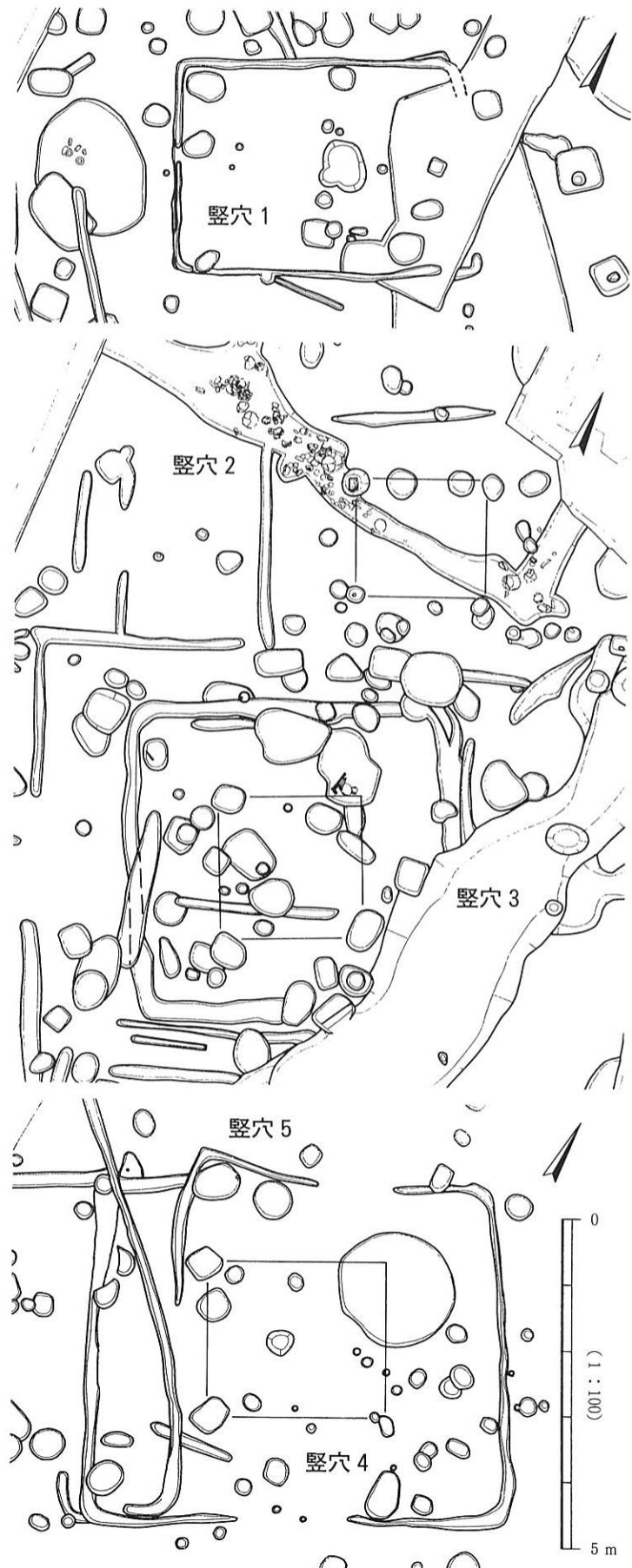


図19 A区7面竪穴平面

の屈曲部を検出しているため、東西が4.8m、南北が3.5mとやや東西に長い長方形の竪穴住居であったことが判明する。北で西に25度振れる。柱穴は検出していない。

竪穴2は北端部で検出した主柱4本の竪穴住居跡である。周溝と主柱穴4つを検出した。周溝は幅約20cmで非常に浅い。住居跡の南北幅は4.3mを測るが、東側の周溝を検出していないため東西幅は不明。主柱の柱間は東西が2.0m、南北が1.8mであることから、おそらく住居跡の平面形は東西に若干長い長方形であったと思われる。北で西に25度振れる。西側の柱穴2つには礎板が残っていた。

竪穴3は竪穴2のすぐ南で検出した主柱4本の竪穴住居跡である。周溝と主柱穴3つを検出した。平面形は東西が5.3m、南北が5.1mのほぼ正方形で、北で西に26度振れる。周溝は幅30~40cmで浅い。主柱の柱間寸法は東西・南北とも2.2m等間である。東北隅の主柱は土坑109に切られる。建物9と切り合っており、建物9の柱穴が竪穴住居跡の周溝を切る。

竪穴4は調査区のほぼ中央で検出した主柱4本の竪穴住居跡である。周溝と主柱穴3つを検出した。平面形は東西が6.5m、南北が5.5mの長方形で、北で西に28度振れる。周溝の幅は10~20cmで、深さはもっとも深いところで22cm残っていた。主柱の柱間は東西が2.7m、南北が2.4mである。東北隅の柱穴は土坑124に切られる。建物7と切り合っており、建物7の柱穴が竪穴住居跡の周溝を切る。

竪穴5は竪穴4と切り合う竪穴住居跡である。周溝のみを検出した。周溝は幅約20cmで浅い。周溝は西北隅の屈曲部と南辺の一部を検出しており、南北が4.5mの竪穴住居であったことが判明する。平面形は長方形、あるいは正方形と思われ、北で西に15度振れる。竪穴4を竪穴5が切った状態で検出したが、床面が残っていたわけではなく、周溝の一部での切り合いである。周溝埋土も酷似しており、実際には切り合い関係の判断は非常に困難であった。建物7と切り合い、建物7の柱穴が竪穴5の周溝を切る。

このほか7面では、竪穴住居跡の周溝に酷似した溝を多数検出している。溝の幅や残り方、埋土等まったく同一である。たとえば竪穴4の西北隅から西に延びる溝など、竪穴住居跡の周溝である可能性が高いものもある。また竪穴3の北・西・南の3方に周溝と平行に延びる溝も、竪穴住居に関連した溝として考えた方がよいかもしれない。

溝120は調査区の北方で検出した東西溝である。土器や木製品など多量の遺物を包含する。幅は約3.5mで、深さは50~60cmを測る。東で北にわずかに振れる。下層には砂が堆積していること、また溝内に護岸のための木杭を打っていることなどから、水量が豊富であったことが窺える(図20)。

溝120の南約10mの範囲は、浅い溝状の窪地がある程度で、柱穴・土坑等の遺構が希薄となる。

集落域から土坑を25基検出した。主なもののみ以下に報告する(図21)。

土坑102は竪穴3と溝120との間で検出した。平面形は長辺1.2m、短辺1mのやや楕円形で、深さは27cmを測る。内側はさらに方形に1段落ち、その中から布留式期のほぼ完形の甕と下半を欠く壺、用途不明の木製品が出土した。

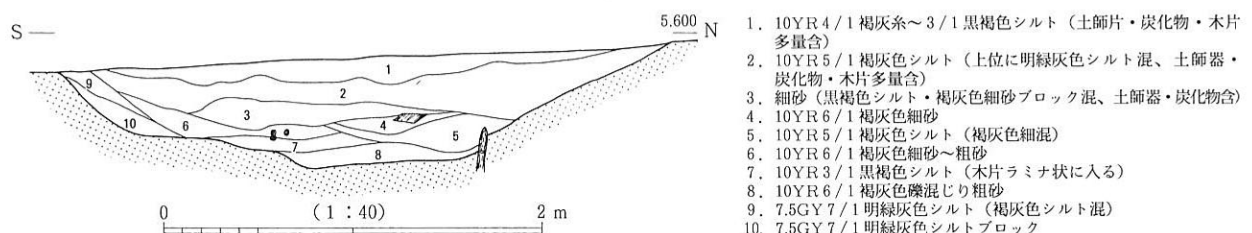


図20 A区7面溝120断面

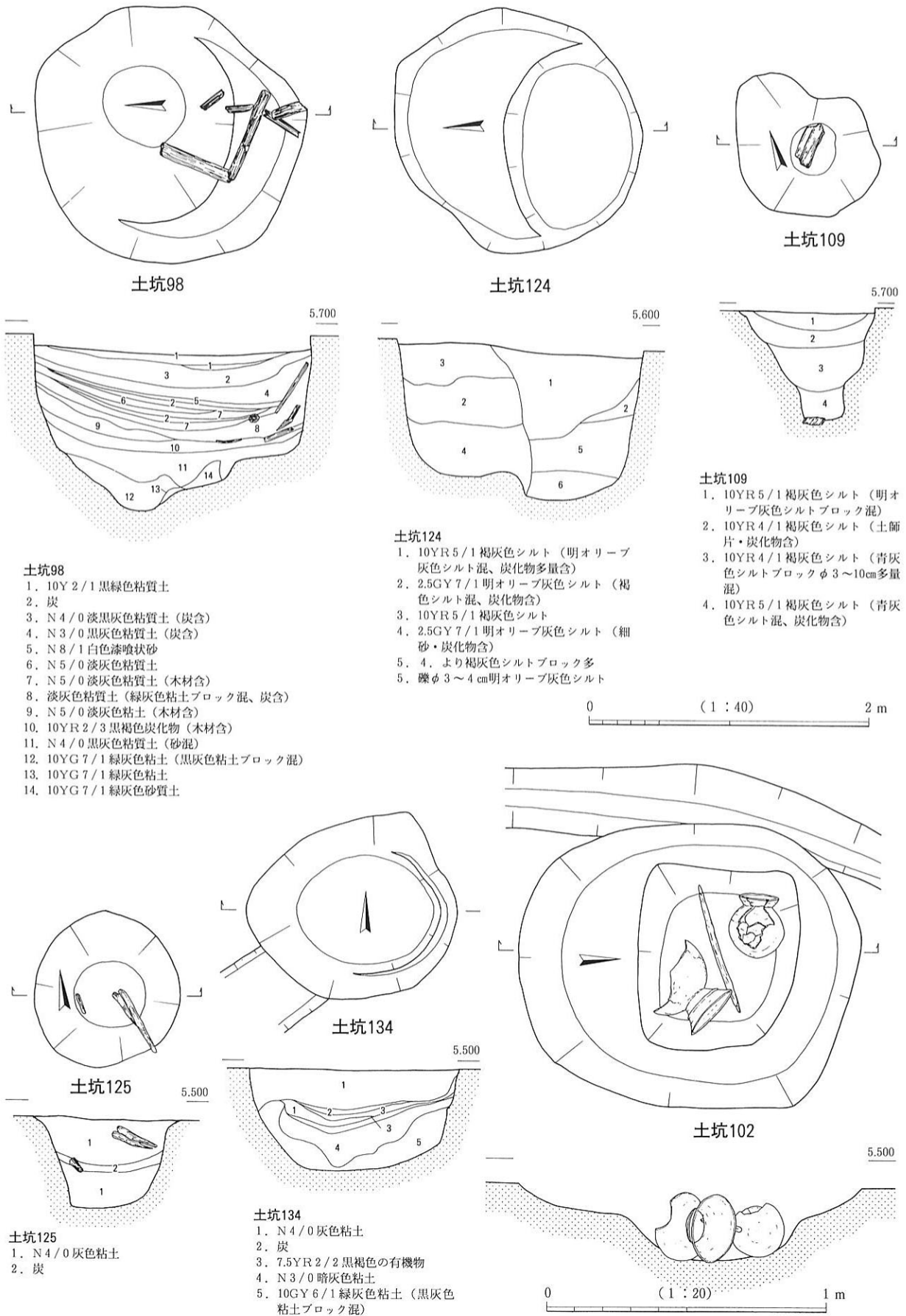


図21 A区6・7面土坑平面・断面

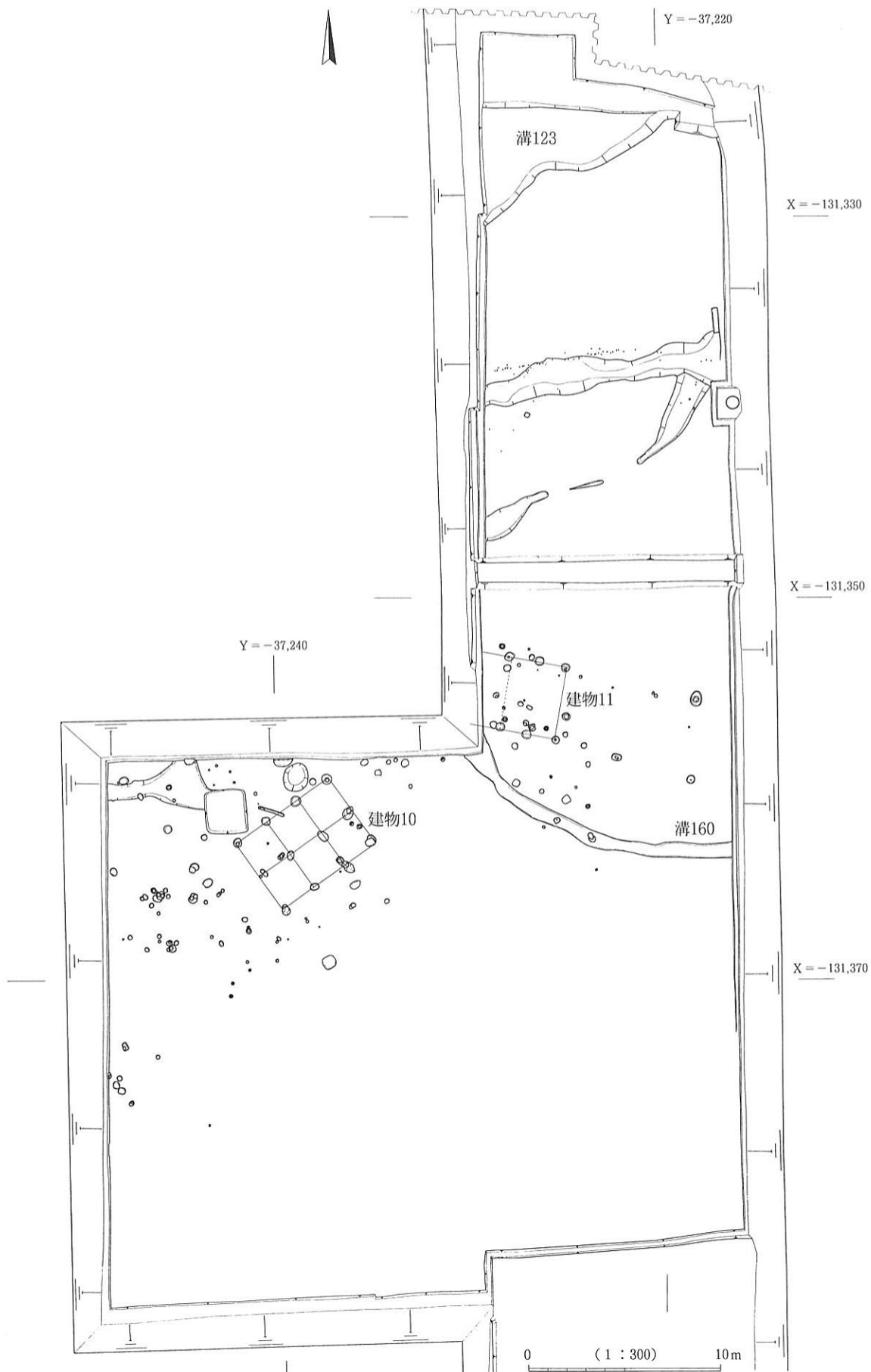


图22 A区8面平面

土坑109は調査区の北方で堅穴3と切り合って検出した。ちょうど堅穴3の東北隅の支柱穴上に掘られた土坑である。平面形は不整形で、深さ78cmを測る。完形を含む多くの土器のほか、底面から木片が出土した。

土坑124は堅穴4と切り合って検出した。堅穴4の東北隅の支柱穴上に掘られた土坑である。平面形は直径1.8mの円形で、深さ1mを測る。土坑の東半には抜き取り穴のような堆積がみられる。井戸の可能性はある。

土坑125は西張り出し部の南方で検出した。平面形は直径約1.1mの円形で、深さ65cmを測る。灰色粘土の間に炭が5cmの厚さで堆積する。木片が出土した。

土坑134は西張り出し部のほぼ中央で検出した。集落域のなかでもっとも水田寄りの遺構である。平面形は1.3~1.5mのほぼ円形で、深さ70cmを測る。

このほか建物跡としてはまとまらない多数の穴を検出した。現地でも建物跡としてまとめるように努めたが、柱筋が通らずまとめることができなかった。

水田跡は調査区の東南部で検出した。東南から西北方向に延びる畦畔と、それとほぼ直角に交わる畦畔とによって区切られた水田跡である。畦畔の幅は0.6~1mで、高さはほとんど残っていない。土色の变化で認識できた。水田1区画は約20㎡である。6面ではまったく遺構を検出できなかった地域であり、水田域が若干北に広がっていたことが判明する。集落域より約70cmほど低位置に築かれている。

集落域と水田域との境には土坑状の浅い溝がある程度で、それ以外顕著な遺構は検出できなかった。6面では集落域と水田域との境に門に相当する施設が設けられていたが、7面では特別な施設はつくられなかったようである。

<8面>7面で検出した集落域の下層で、掘立柱建物跡2棟(建物10・11)、溝2条(溝123・160)を検出した(図22・23)。

建物10は西張り出し部で検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。3間×2間の東西に長い建物跡で、北で西に35度振れる。柱間寸法は東西が2.0m、南北が2.1m等間である。

建物11は調査区の中央部で検出した掘立柱建物跡である。南北1間の東西棟である。東西は2間分を検出したが、さらに西に延びる可能性がある。柱間寸法は東西が1.5m等間で、南北が3.8mである。北

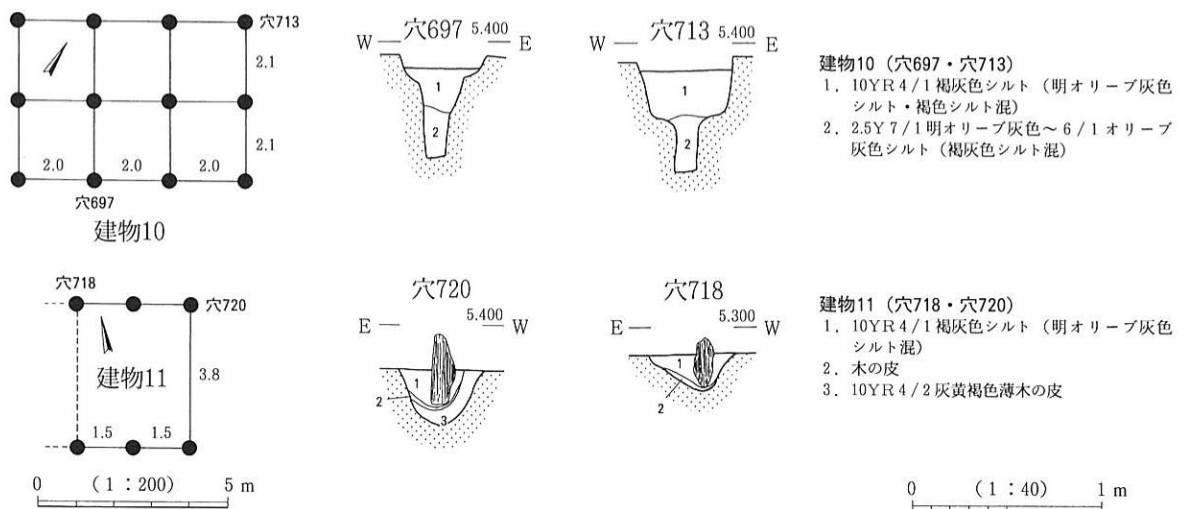


図23 A区8面建物平面模式図・柱穴断面

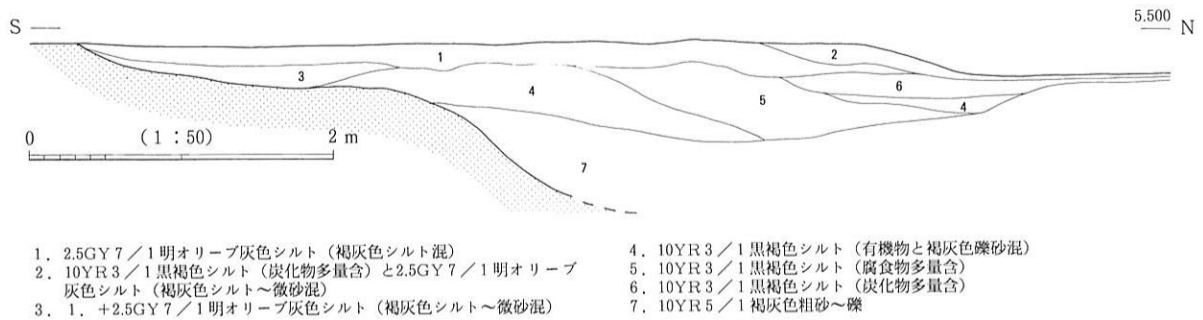


図24 A区8面溝123断面

で東に10度振れる。

ただし、以上2棟の建物跡は、実際に8面で検出しているものの、埋土の上層が7面の土と酷似しているために7面での検出が困難であり、7面検出時に見落としていた可能性がある。

溝123は調査区の北端部で検出した大溝である。南肩のみを検出した。幅は8 m以上、深さは1 m以上あり、西南から東北に斜行する。溝底までは確認できなかった。溝は上層がシルト～微砂で、下層が粗砂～角がとれて丸くなった小礫で埋まっており、水量が豊富であったことが窺える (図24)。調査時も常に湧水があった。

この溝は確実に8面から切り込んでおり、溝の上面を8層が覆っているが、8層が覆う段階で多量の土器と一緒に埋まったため、それらの土器のいくつかは7面 (8層上面) で検出されている (図版7-5)。調査当初、これらの土器は7面の遺構に伴うものとして検出したが、下層の調査によって溝123に伴うものと判明した。

溝160は建物11の南で検出したごく浅い溝である。幅は約1 mで、西北から東南に斜行する。

調査区の東南部は6面と同じく遺構が皆無である。水田跡であったのかは不明。

第2項 B区

<1面>河川1条（河川1）、溝5条（溝1・2・3・5・6）、井戸2基（井戸3・6）、桶埋設遺構1基のほか、鋤溝と多数の長方形土坑を検出した（図25）。

河川1はA区から続く坪境の大溝である。調査区のやや東寄りを南北に縦断する。河川1の中心は北端部では国土座標 $Y = -37,220$ 上にあったが、南端部では西に6mほどずれる。幅5～6m、深さ約1.5mを測る（図26）。溝底から頭蓋骨の一部が出土した（第5章第9節参照）。

溝1はA区から続く河川1の最終段階の溝である。北方では河川1の上面で検出したが、南半では河川1がやや西にずれたため、河川1の東肩で検出した。幅は1～1.5mで、深さは深いところで60cmを測る。部分的に護岸のための杭を設ける。

溝2は東張り出し部の南壁に沿って検出した東西溝である。北肩のみを検出した。全体の規模は不明。さらに東へと続く。溝咋神社上宮の北限の溝と思われる。

溝咋神社上宮は当調査区の東側にあったことがわかっている（2次調査で中心部を確認）。昭和23年撮影の航空写真には、調査地の中央を南北に通る坪境（河川1）に接して東側に溝咋神社上宮の杜が写っている。その規模は1坪（1町）ごとに区切られた水田の大きさと比較して、東西約60m、南北約70mと推定できる。その杜の北限がちょうど溝2の位置にあたっている（写真1）。また航空写真によると、上宮の杜は1つの坪の中の西北隅部に位置していることから、溝2は上宮の北限の溝であるとともに坪境の溝の役目も果たしていたことがわかる。

溝3は溝2の西端から南へ折れ曲がる南北溝である。西肩のみを検出した。河川1

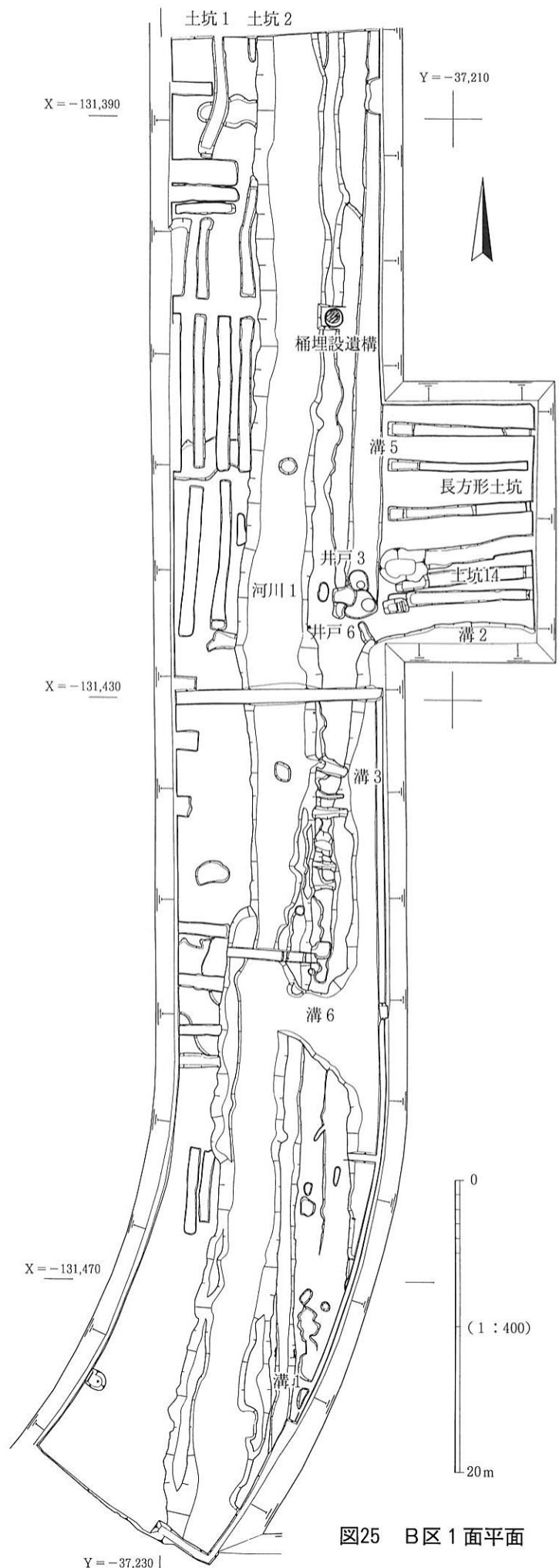


図25 B区1面平面

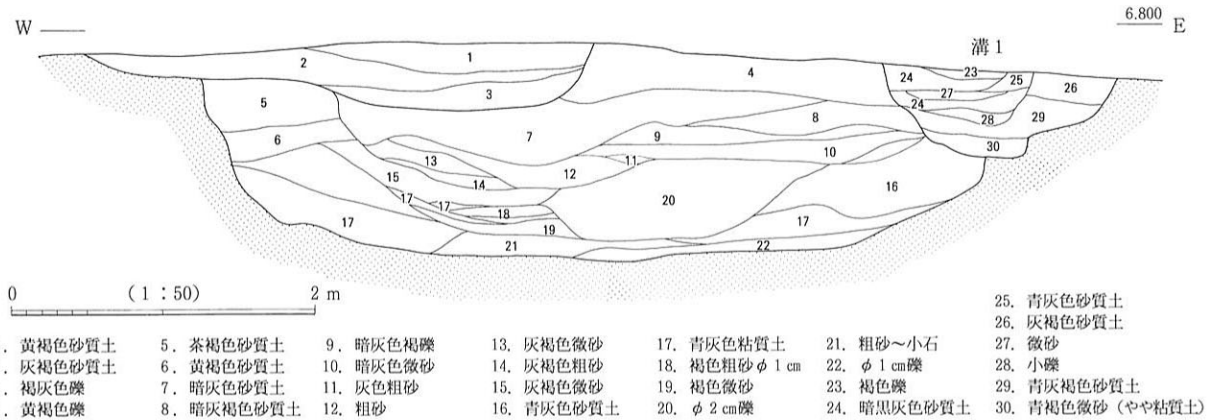


図26 B区1面河川1・溝1断面 (右上が溝1)

のすぐ東側を河川1と平行する。全体の規模は不明。この溝も同様に溝咋神社上宮の西限の溝と思われる。航空写真からも、上宮の杜の西限は河川1に接していたことが判明する (写真1)。

溝5は調査区北半の河川1の東で検出した南北溝である。幅2.3m、深さ約20cmの浅い溝である。図面上は南端が井戸6までとなっているが、機械掘削完了直後には幅の狭い溝がさらに南へと続き、井戸6の南4mの地点で西に折れ、河川1に合流している状況が確認できた。その屈曲部は溝3と切り合っており、溝3を切っていた。溝の埋土は鉄分を多く含んだ褐色の細砂である。

溝6は調査区南半中央部で検出した河川1と溝3をつなぐ溝である。溝底の高さは河川1とほぼ同じで、溝3に向かってハの字状に広がる。溝3の取水口であったのか、あるいは河川1が溝3に向かって氾濫した痕跡なのかは不明。

桶埋設遺構は調査区北方の河川1の東肩部で検出した。検出当初は井戸と思われた遺構であるが、桶内部を若干掘り下げた段階で桶底を確認したため、井戸ではないと判明した。桝板は下端部が残っただけである。棺桶・肥溜め・水溜め等の可能性が考えられるが詳細は不明。

井戸3と井戸6は調査区やや北よりの河川1の東で検出した南北に並ぶ井戸である。両者とも深さ1.3m以上ある井戸で、最上層には桶桝の一部が残っていた。A区で検出した井戸5と同じく桶桝を重ねた井戸であったことが判明する。両者とも完全に抜き取られており、それ以外の桶桝は残っていない。この抜き取り穴は井戸6が井戸3を切った状態で検出した。井戸3はA区の井戸5から真南に82m隔てた場所に位置する。

鋤溝はほぼ全面で検出した。幅10～20cmの浅い溝である。南北方向の溝が主で、わずかに東西方向の溝がある。A区1面ほど密ではない。

長方形土坑はA区で検出した土坑と同様に、浪商学園造成寸前の水田耕土直下から掘られている土坑である。南端部を除く調査区のほぼ全面で検出した。埋土はすべてが粗砂や小礫である。規模も同様に幅約1m、長さ約10～11mの土坑である。河川1より西側では、A区同様に南北約11mの単位ごとに、東西・南北の向きをそろえて掘られており、河川1の西側が東西に長い長地型の区割りであったことが判明する。これに対して河川1の東側の東張り出し部では、長方形土坑はすべて東西方向に長く掘られており、坪内が東西に10等分された南北に長い長地型の区割りであったことが判明する。これらもまた航空写真で確認できる

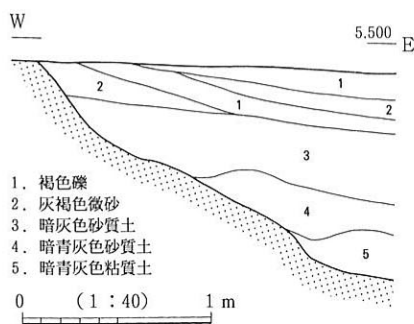


図27 B区1面溝3断面

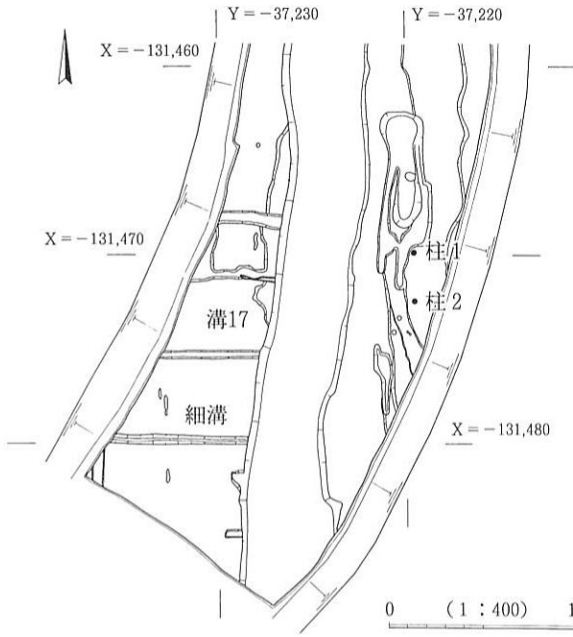


図28 B区4面平面

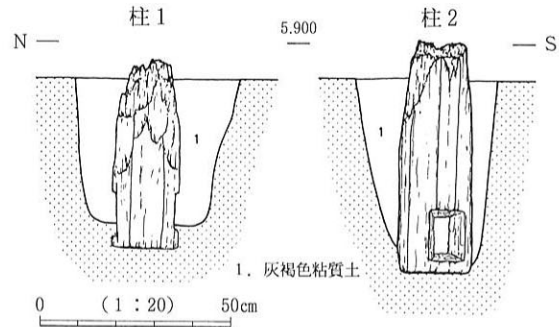


図29 B区4面柱1・2断面

(写真1)。

<2面>特に顕著な遺構は検出できなかった。

<3面>鋤溝と人や偶蹄類の足跡を検出した。

鋤溝は調査区南半の河川1の西側で検出した。幅10~20cmの浅い溝である。東西方向の溝で、なかには足跡が带状に集中しているものもある(図版9-4)。

足跡は調査区北方の河川1の西で検出した。人や偶蹄類の足跡が明瞭に残る(図版9-5・6・7)。その他顕著な遺構はない。

<4面>細溝5条、柱穴2つ(柱1・2)、鋤溝を検出した(図28)。

細溝は調査区南端の河川1の西で5条を検出した。幅は約50cm、深さが10~20cmの東西方向の溝で、国土座標にのる。国土座標にのる遺構としては最も古い段階の遺構である。溝は北から3m、4.2m、4.5m、5mの間隔で並ぶ。

柱穴2つは調査区南端の河川1の東で検出した(図29)。両者は2.6m隔てて南北に並ぶ。2つともしっかりとした柱根が残る。北側の柱1は長さ51.3cm、直径19.2cm、南側の柱2は長さ63.7cm、直径19cmで、ともに下端部に筏穴が刳られている。鳥居など溝咋神社上宮に伴う遺構であろうか。詳細は不明。

鋤溝はほぼ全面で数条を検出した。幅10~20cmの浅い溝である。1面よりもさらに疎らである。東西・南北方向の溝がある。

<5面>特に顕著な遺構は検出できなかった。

<6面>河川1条(河川2)と水田跡を検出した(図30)。

河川2は調査区南半部で検出した大溝である。幅が約10m、深さが35~50cmの東西溝で、調査区を横断する。埋土はすべてが粗砂で、水量が豊富であったことが窺える。この粗砂が若干盛り上がり堆積していたため、一部はすでに5面でも検出できた。河川の北肩部には直径5~10cm程度の自然木を使って堰を設ける(図31)。先を尖らせた杭を流れに向かって斜めに打ち込み、そこに横木を井桁状に組んだだけの簡単な施設で、流れを堰止めるほどの強固なものではない。

多くの土器のほか、北肩部から曲物や先端に細工を施した用途不明の木製品が出土した(図版12-2・4)。

水田跡は調査区の全面で検出した。大畦畔と小畦畔とによって区画された水田跡である。大畦畔は幅0.9~1.5m、小畦畔は幅50~60cmで、高さはほとんど残っていない。河川2の北側では大畦畔が東南から西北へと2本延びる。両者の間は約23mである。大畦畔と大畦畔の間に5~6mの間隔で小畦畔が平

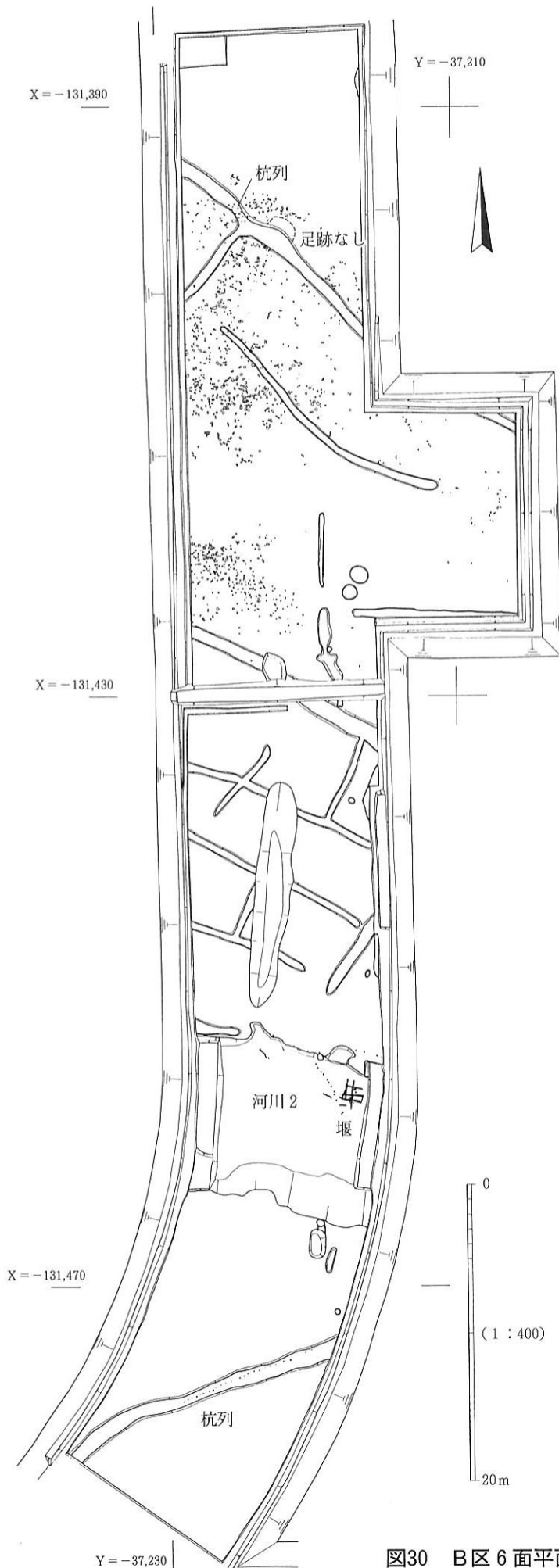


図30 B区6面平面

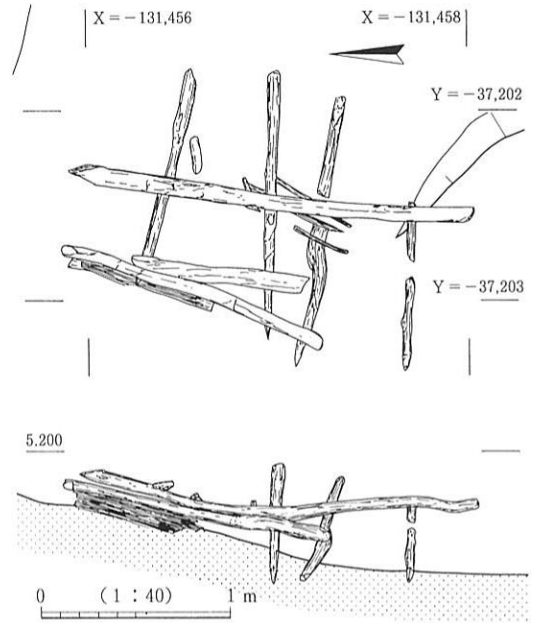
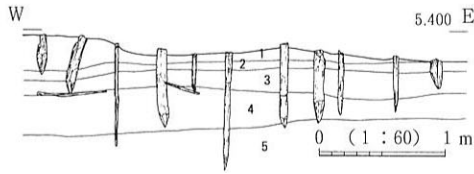


図31 B区6面河川2堰平面・立面

行して伸び、それらとほぼ直角に交わる小畦畔によって四角く水田が区画されている。1つの水田区画は28~33㎡である。調査区の中央付近は比較的畦畔の検出が容易であったが、北方は検出が困難であった。もっとも北側の大畦畔と小畦畔とが交わっている部分には補強のための細杭が2列に打たれていた。河川2より南側では大畦畔1本を検出しただけで、小畦畔は検出できなかった。この大畦畔は河川2の北側と違って、東北から西南へと向かって伸びる。畦畔の中心には1列に補強のために細杭を打つ。杭は直径5~10cmで、長いものは95cmもある。先端を鋭く削っている(図32)。

実測図には一部表現されていないが、水田跡のほぼ全面から砂がつまった大人と子供の足跡や偶蹄類の足跡を検出した。ただしもっとも北の大畦畔の北際に沿って足跡が残っているのを最後に、それより北側では足跡を検出できなかった。また畦畔も検出できなかった。A区の南東部でも水田畦畔、および足跡を検出していないことから、この面の水田はB区の北端で終わっていたと推測される。このほかもっとも北の大畦



1. 灰色粘土
2. 灰色粘土 (暗黒褐色腐食土器)
3. 灰色粘土 (腐食土少々含)
4. 灰褐色粘土 (茶褐色腐食土混)
5. 青灰色粘土

図32 B区7面木器集中部2立面

畔の北に付随して半円形状にまったく足跡を残さない箇所を検出した。性格は不明。

この面の水田跡は砂層によって覆われており、大規模な洪水に遭ったことが判明する。

<7面> 調査区の全面から水田跡を検出した(図33)。大畦畔と小畦畔とによって区画された水田跡である。大畦畔、小畦畔とも6面で検出の水田畦畔と同規模である。畦畔の延びる方向も6面と同様に、基本的には東南から西北に向いている。大畦畔はその位置も6面で検出した3箇所とほぼ同じところで検出したが、さらにこの面では河川2が流れていたすぐ北側で1条と、南端部の大畦畔と交わる1条を加えた合計5条の大畦畔を検出した。南端部の大畦畔を除く4条の大畦畔はともに東南から西北に延びており、それぞれは北から23m、22m、23mの間隔をあける。その大畦畔と大畦畔の間に3.5~5mの間隔で小畦畔が平行して延び、それらとほぼ直角に交わる小畦畔とによって四角く水田が区画されている。1つの水田区画は6面検出の水田区画よりやや縮小して約11㎡となる。6面同様に北方は畦畔の検出が困難であったが、この面では調査区の北端部でも小畦畔を検出した。A区7面で検出した畦畔につづく畦畔である。南方でも6面では大畦畔以外は検出できなかったが、7面では

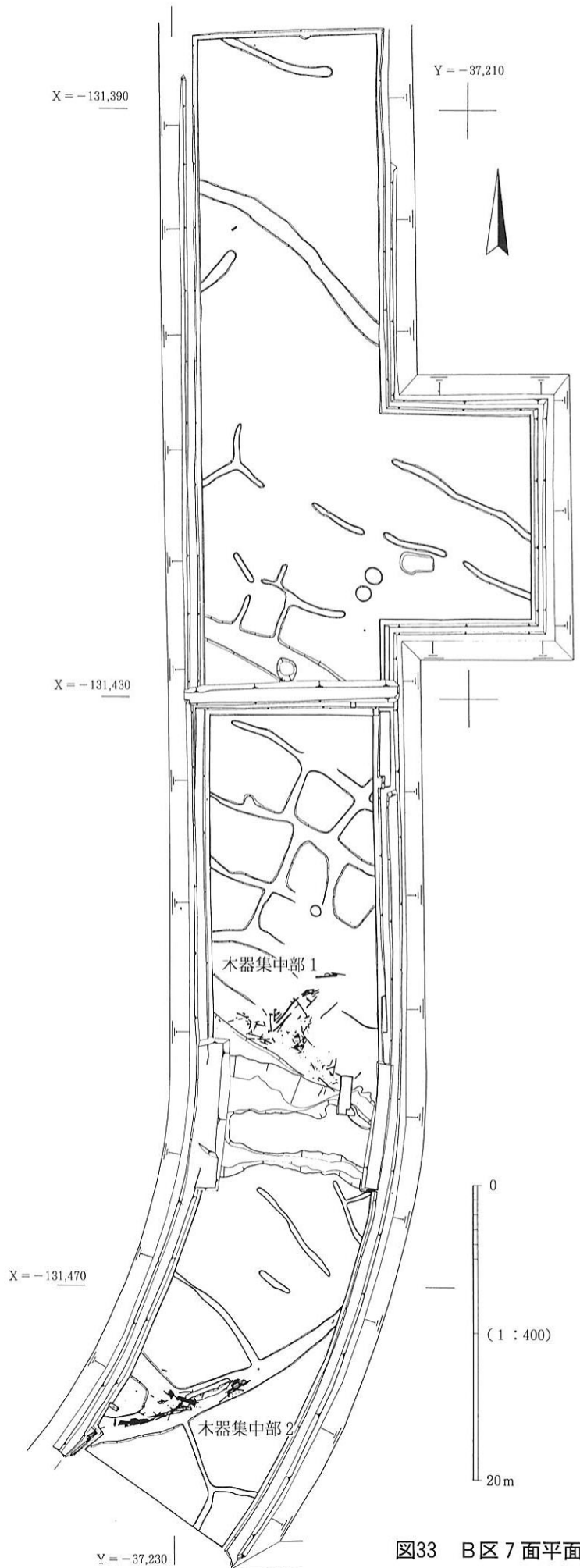


図33 B区7面平面

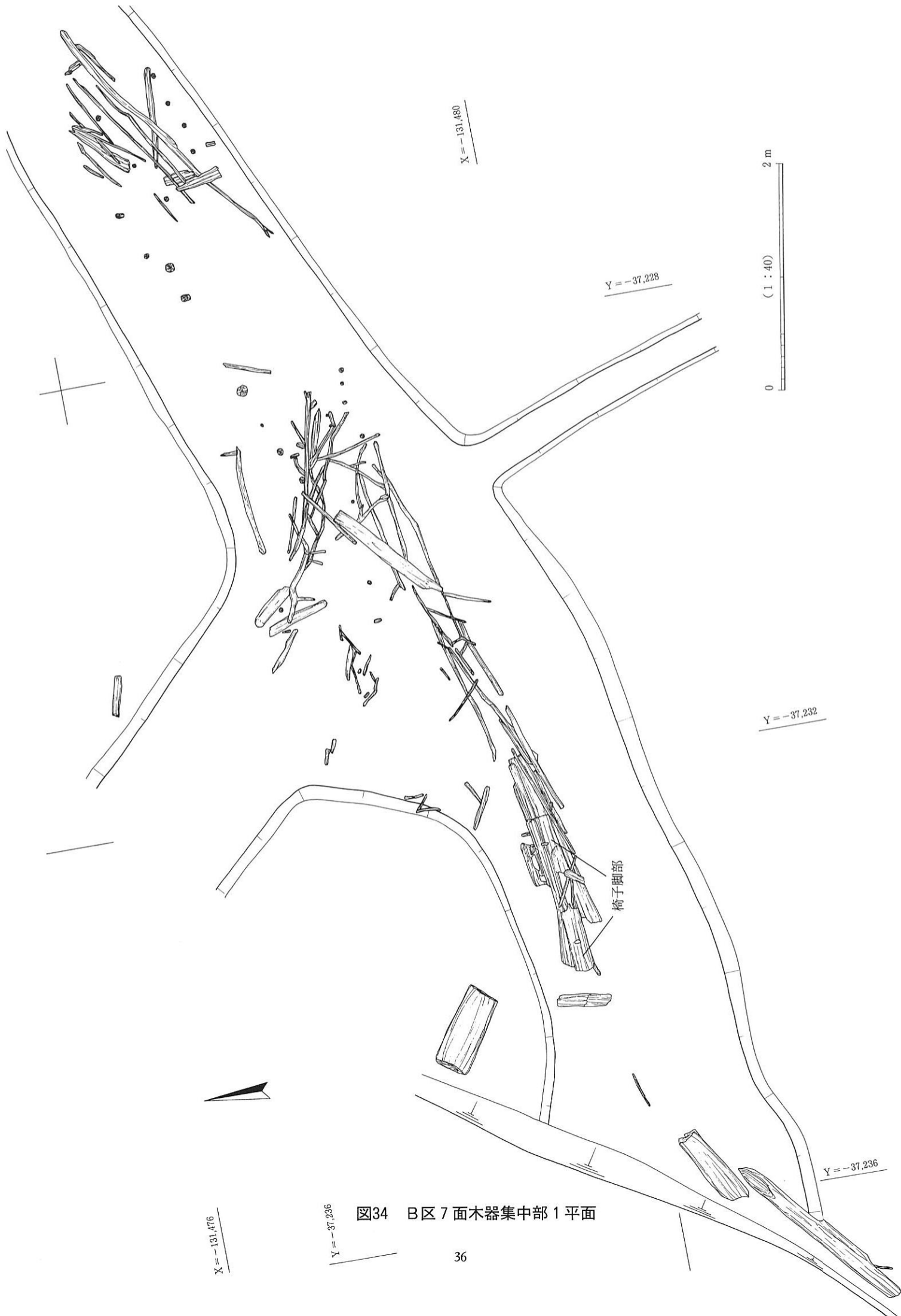


图34 B区7面木器集中部1平面

X = -131,452

X = -131,456

Y = -37,218

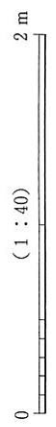
Y = -37,222

Y = -37,226



梯子

田下畝



小畦畔も検出した。東北から西南に延びる大畦畔にほぼ直角に交わる小畦畔である。したがって小畦畔は北方と同じく東南から西北に向かって延びている。

南端部の東北から西南に延びる大畦畔と、河川2のすぐ北側で新たに検出した大畦畔の基底部から多くの木製品や木材が出土した(図34)。前者には椅子の脚部などが含まれており、それらを畦畔に沿って折り重ねるように並べている。後者には田下駄、梯子などが含まれているが、こちらは畦畔の下以外の広い範囲にも散らばっている。おそらく両者とも地盤が軟弱であったために、不要となった木製品や木材を畦畔の下に敷き、基礎を固めたものであろう。

人や偶蹄類の足跡は検出できなかったが、水田跡の表面には枯れた生姜のような形をした黄褐色の小さな塊が広がっていた。

第3項 C区

調査区西寄りには、調査区を横断する攪乱があるため、調査区内が東と西に2分されている。攪乱の東と西では層序も異なっているため、以下ではC区内を東と西に分けて報告する。

〈東1面〉河川1条(河川1)、溝4条(溝1・35・60・202)、井戸1基(井戸4)のほか、鋤溝、長方形土坑を検出した(図35)。

河川1はA・B区からつづく坪境の大溝である。当調査区のさらに南にまでつづく。河川の中心はA区北端では国土座標 $Y=-37,220$ 上にあつたが、当調査区では国土座標 $Y=-37,226$ 上となる。国土座標 $X=-131,537$ の地点には河川の中心に堰を設ける(図36)。堰は直径10cm程度の太杭を数十本打ち込んだものである。河川内の水は北から南へと流れるのに対して、堰はその流れと直角に当たるようには設けず、若干東南下がりに設けられている。水の流れを東方に向ける意図があつたことが窺える。これは次に報告する溝35や溝202に水を流すための施設と思われる。堰の南側はえぐれたようにさらに約70cm程深くなる。河川の幅は調査区の北端で6mであつたものが、堰付近では10m以上になる。これは堰によって堰止められた水が左右に分かれたためであり、水量が豊富であつたことが窺える。調査区の南壁際では河川は再び幅6mに戻る。堰に引がかつた状態で小型の木製卒塔婆が出土した。

溝1はA・B区からつづく河川1の最終段階の溝である。B区南端部と同様に河川1のすぐ東側で検出した。幅1.3m、深さ約20cmを測る。河川1同様にさらに南へとつづく。

溝35は東張り出し部の東北隅で検出した。国土座標 $X=-131,494$ 上の東西溝である。幅2~3m、深さ0.7~1mを測る(図35)。溝の西端は南に折れ、ちょうど河川1内に設けられた堰の東側に合流する。堰によって堰止められた河川1の水がやや北上しながら溝35に流れ込んでいたことがわかる。

B区の溝2との距離は約67mであり、これは航空写真から推定される溝咋神社上宮の杜の南北長とほぼ符合する値である。おそらく溝35は溝咋神社上宮の南限の溝と思われる。

溝60は東張り出し部の北端で検出した南北溝である。溝1の東に平行する溝で、幅1.2~1.5m、深さ約20cmを測る。

溝202は東張り出し部の南端で検出した南北溝である。河川1の東側に平行し、さらに南へとつづく。幅約3m、深さ約20cmを測る。

井戸4は東張り出し部で検出した(図37)。A区の井戸5と同様に桶杵を用いた井戸である。掘方は直径1.5mの円形である。桶杵は挟端側を上にして3段を重ねる。上端から下端までは2.6mを測る。井戸底には小礫が敷かれている。水中ポンプを使用して湧水量を測定した結果、今でも毎分約80リットル

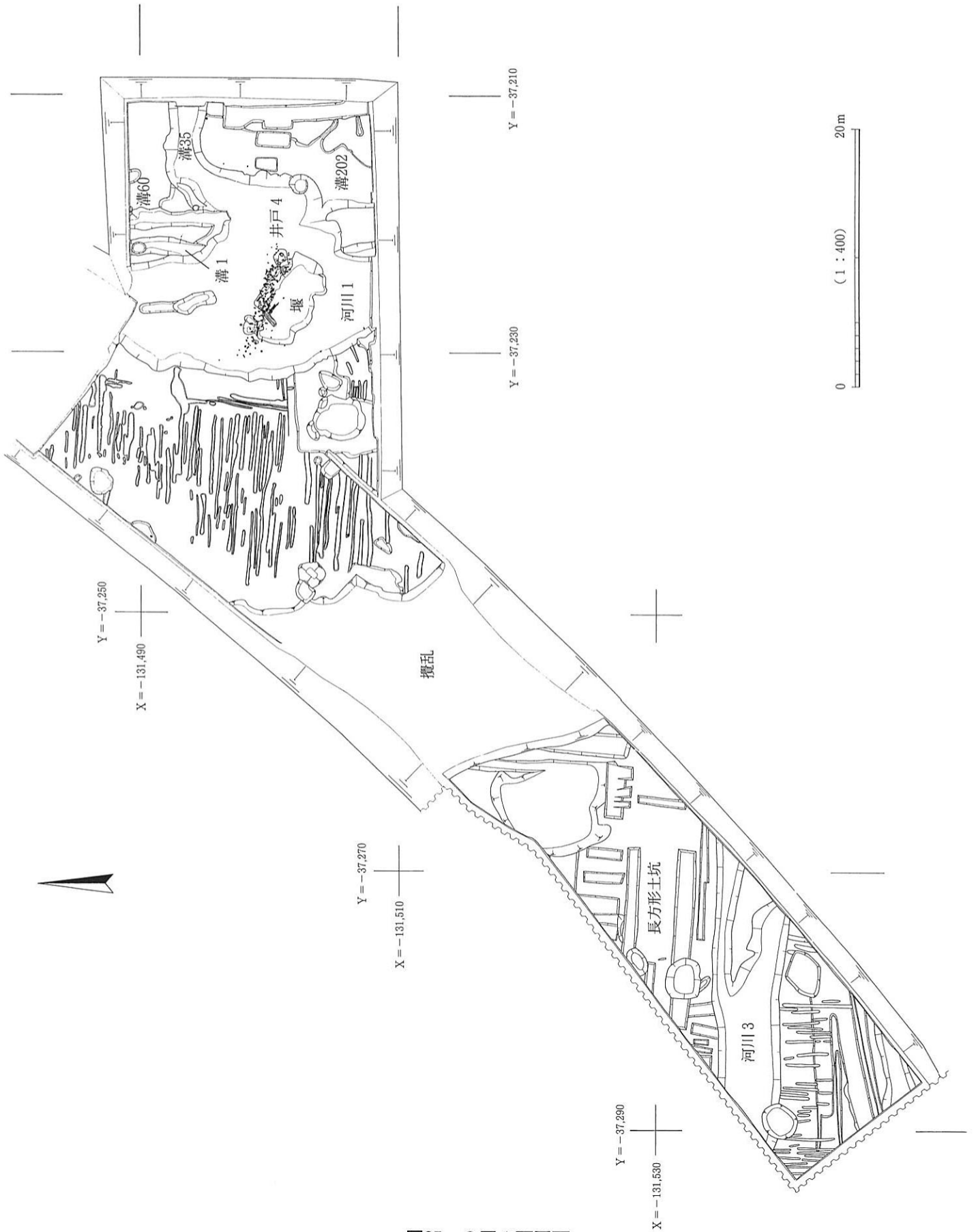


図35 C区1面平面

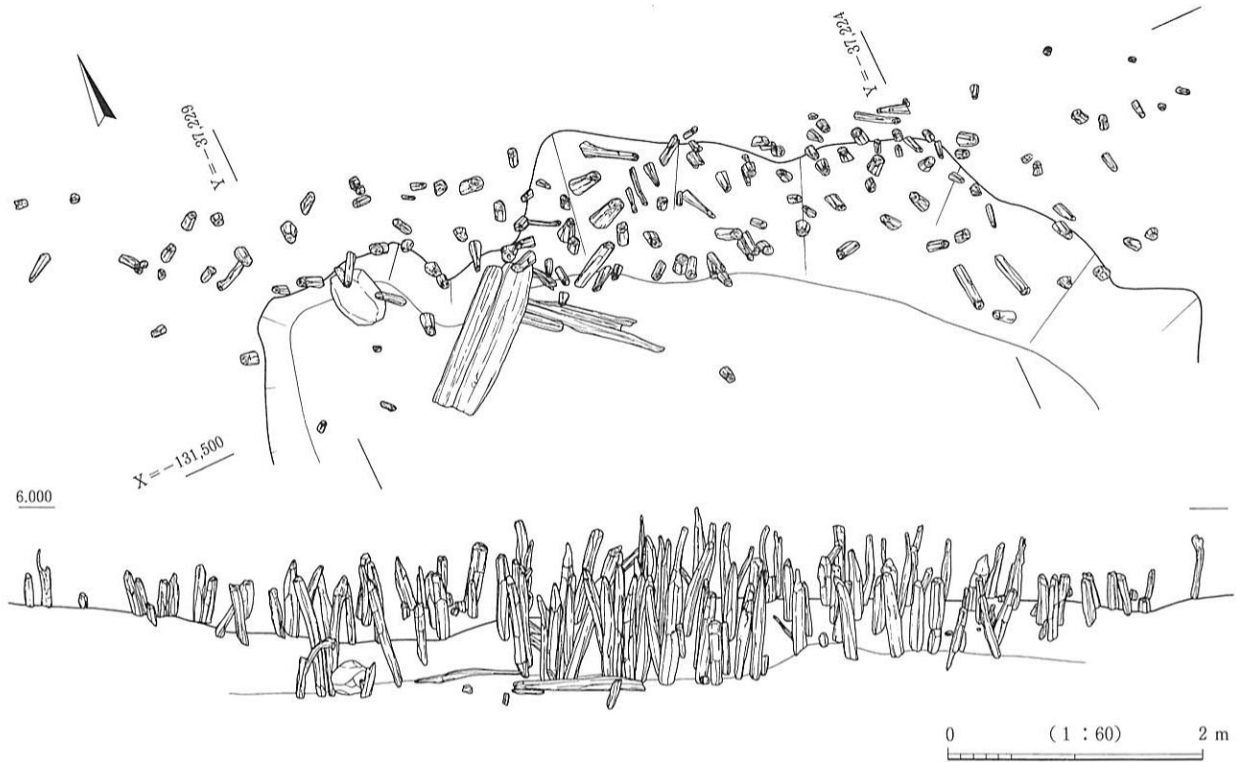


図36 C区東1面河川1堰平面・立面

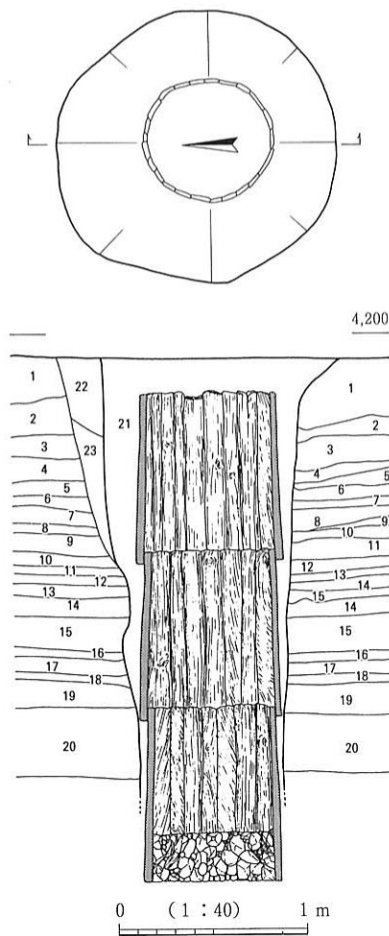


図37 C区東1面井戸4平面・断面

1. 7.5Y 4/1 灰色細砂シルト
2. 10GY 5/1 緑灰色粘土
3. 5 BG 5/1 青灰色粘土 (灰色シルト混)
4. 3. + 5.
5. 5 BG 4/1 暗青灰色粘土 (微砂混)
6. 5 BG 4/1 暗青灰色粗砂
7. 5 BG 6/1 ~ 5/1 青灰色粘土 (灰色粘土混)
8. N 4/0 灰色シルト (微砂混)
9. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 (上位) N 4/0 灰色中砂~微砂 (下位)
10. 5 GY 2/1 オリーブ黒色粘土 (炭酸物混)
11. 5 G1.7/1 緑黒色粘土 (炭化物含)
12. 5 G1.7/1 緑黒色粘土 (灰色粘土混)
13. 5 G1.7/1 緑黒色粘土 (灰色粘土少量混)
14. 5 G1.7/1 緑黒色粘土 (炭化物含)
15. 5 BG 6/1 ~ 5/1 青灰色粘土 (暗青灰色粘土ブロック φ 1 ~ 3 cm 混)
16. 10BG 4/1 暗青灰色粘土 (炭化物含)
17. 10BG 4/1 暗青灰色粘土
18. 10BG 4/1 暗青灰色粘土 (青灰色粘土混)
19. 10BG 4/1 ~ 3/1 暗青灰色粘土
20. 10BG 5/1 青灰色粘土 (灰色粘土ブロック φ 2 cm)
21. 7.5GY 4/1 暗緑灰色シルト (細砂混 5 BG 5/1 青灰色粘土、2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色粗砂ブロック φ 10cm前後混)
22. 7.5Y 4/1 灰色シルト (細砂混)
23. 10GY 5/1 緑灰色粘土

の湧水があることが判明した。

この井戸4はB区の井戸3から南に81mの場所に位置する。つまりA区の井戸5とB区の井戸3、C区の井戸4の3基は南北に一直線に並び、しかも井戸と井戸とは81~82mというほぼ一定の間隔をあけていることが判明する。これらの井戸は、河川1より東側に設定されていた区割りごとに1基ずつ設置された、その地区専用の井戸であったと考えられる。

鋤溝は河川1の西側で検出した。幅10~20cmの浅い溝である。Y=-37,234付近に南北溝が数条ある以外はすべて東西方向の溝である。

長方形土坑は調査区東南隅で3基を検出した。A・B区の1面で検出した長方形土坑と同じ性格の土坑である。河川1より西側では検出していない。3基のうち1基は長さが11m以上であるが、残りの2基は1.7m・2.7mと短

い。3基とも南北方向の土坑である。

<東2面>足跡を多数検出した。

足跡は国土座標 Y = -37,246 から河川1 までの間で検出した (図版16-3)。人や偶蹄類の足跡である。足跡は東西の方向に筋状に集中するものがある。

<東3面>足跡を検出した。

足跡は2面と同じく国土座標 Y = -37,246 から河川1 までの間で検出した。人や偶蹄類の足跡である。2面で検出した足跡よりもやや疎らになる。

<東4面>溝1条 (溝59)、細溝5条、集中する小穴群、鋤溝を検出した (図39)。

溝59は東張り出し部の北端で検出した。幅1.1m、深さ約20cmの南北溝である。南に向かって二股に分かれ、溝35に合流する。

細溝5条は河川1の西側で検出した東西方向の溝である。B区4面で検出した東西細溝の南へのつづきである。幅約50cm、深さ10~20cmで、北から4.2m、4.0m、7.3m、4.1mの間隔で並ぶ。北から3条目と4条目の溝の間に、さらに1条の溝があったと思われるが、検出できなかった。

集中する小穴群は国土座標 Y = -37,247 から河川1 までの間で検出した。特に国土座標 Y = -37,247 の東2.5~3mの範囲内に集中する。人や偶蹄類の足跡ではなく、植物の根などが腐ったような痕跡である。

鋤溝は河川1の西側で検出した。幅10~20cmの浅い溝である。東西・南北の方向の溝があるが、1面検出の鋤溝ほど密集しない。

<東5面>特に顕著な遺構は検出できなかった。

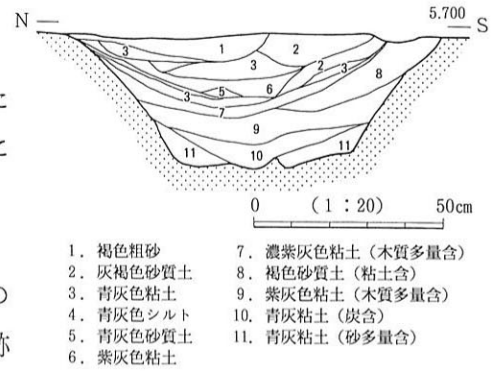


図38 C区東1面溝35断面

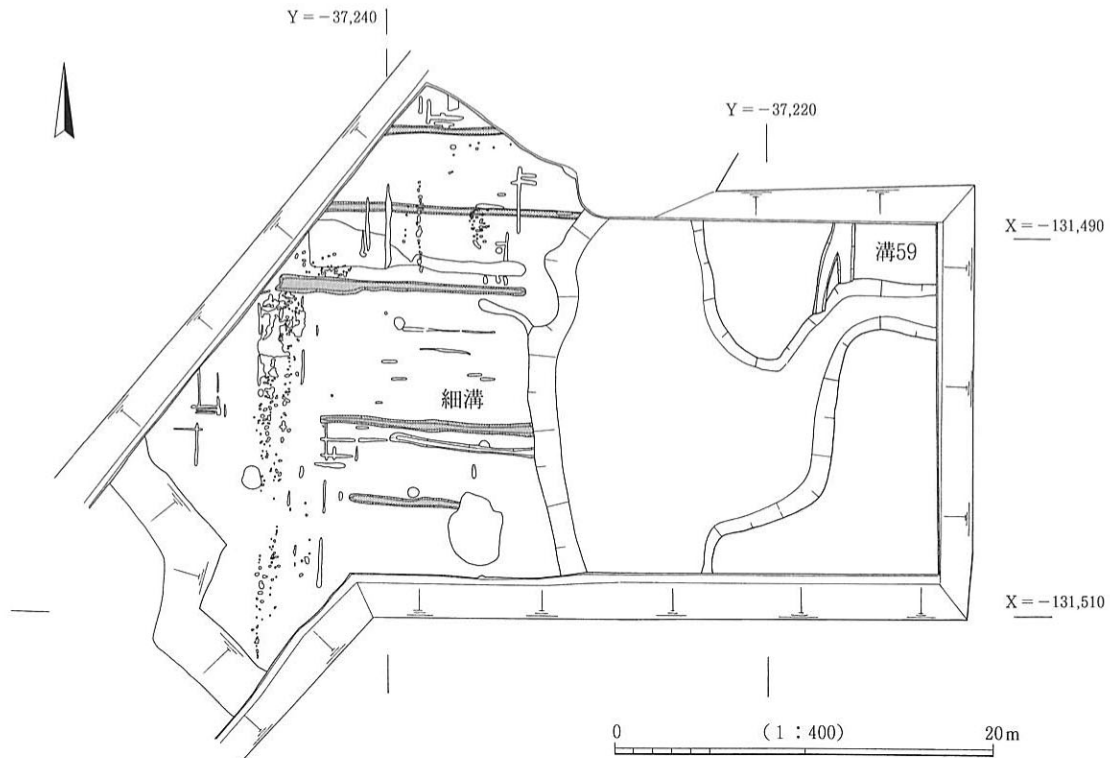


図39 C区東4面平面

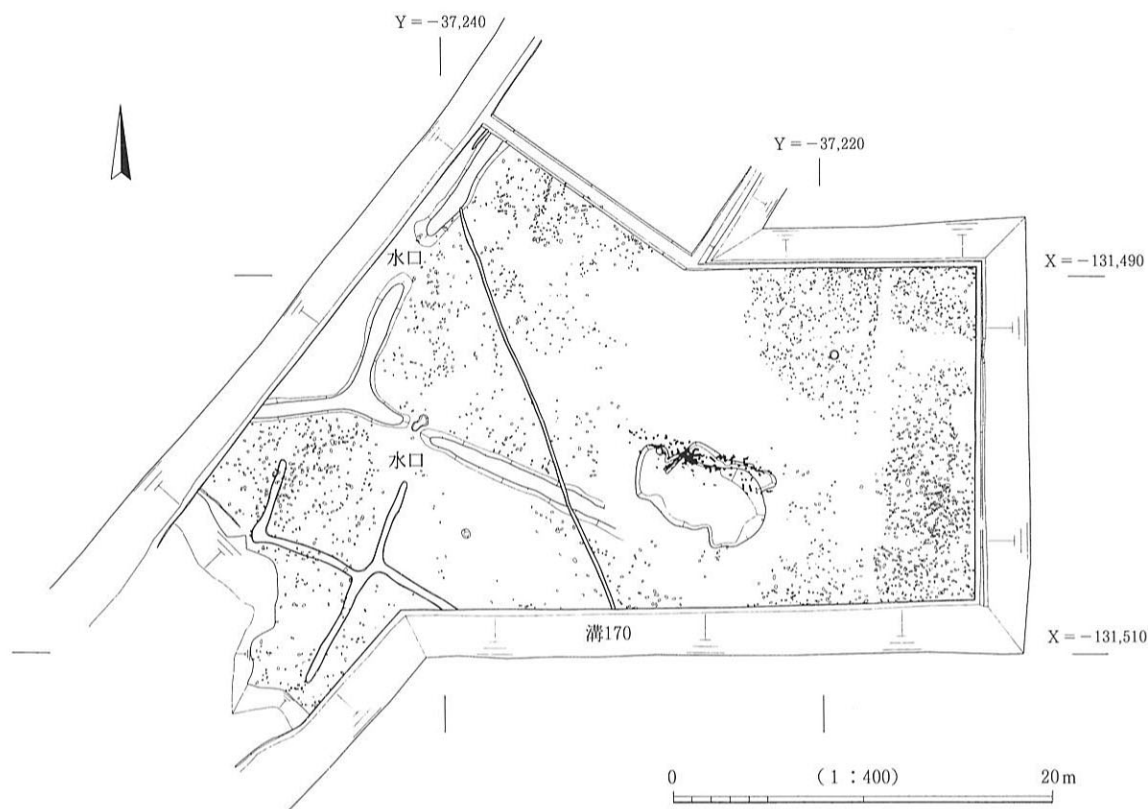


図40 C区東6面平面

〈東6面〉全面から水田跡を検出した(図40)。大畦畔と小畦畔とによって区画された水田跡である。大畦畔は調査区の西壁に沿って東北から西南へと延びる1条と、それとほぼ直角に交わる1条を検出した。前者はB区6面で検出した南端の大畦畔のつづきである。畦畔の幅は1～1.3mで、高さは高いところで15cmが残っていた。畦畔の途中には途切れた箇所がある。水口であったと考えられる。畦畔の上面は褐色に酸化している。小畦畔は大畦畔の南で一部を検出した。幅40～50cmで、高さはほとんどない。土色の変化によって認識できた。検出が難しく東方・北方では検出できなかった。東南から西北に延びる大畦畔に平行する畦畔と、それらとほぼ直角に交わる畦畔とによって四角く水田が区画される。1つの水田区画は約42㎡である。B区6面で検出した水田跡と同様に水田面の全面から砂がたった大人と子供の足跡や偶蹄類の足跡を検出した。また鋤の痕跡が明瞭に残っていた(図版16-5)。

この水田跡の上を調査区の南壁から西北隅に向かって細い溝(溝170)が延びる。幅20cm、深さ約5cmで、北で西に約20度振れる。溝内には水田面で検出した足跡と同様にすべて粗砂が入る。溝の北端は水田畦畔までで止まっているが、南方では明らかに畦畔を切っている。

この面の水田跡は砂層によって覆われており、大規模な洪水に遭ったことが判明する。

〈東7面〉全面から水田跡を検出した(図41)。大畦畔と小畦畔とによって区画された水田跡である。大畦畔は1本が調査区の南壁から西壁まで延びる。幅は1～1.8mである。小畦畔は主に大畦畔の北側で検出した。ちょうど6面で小畦畔を検出できなかった場所である。幅は約50cmで、大畦畔と平行に3.5～4m間隔に延びる。それぞれの畦畔は高さは残っておらず、土色の変化のみによって認識した。大畦畔は6面で検出の大畦畔の位置とちょうど重なることから、6面検出の畦畔の影響で7面の土色に変化した可能性がある。したがって、大畦畔の北側で検出した小畦畔は、6面で検出できなかった小畦畔の名残りであるかもしれない。

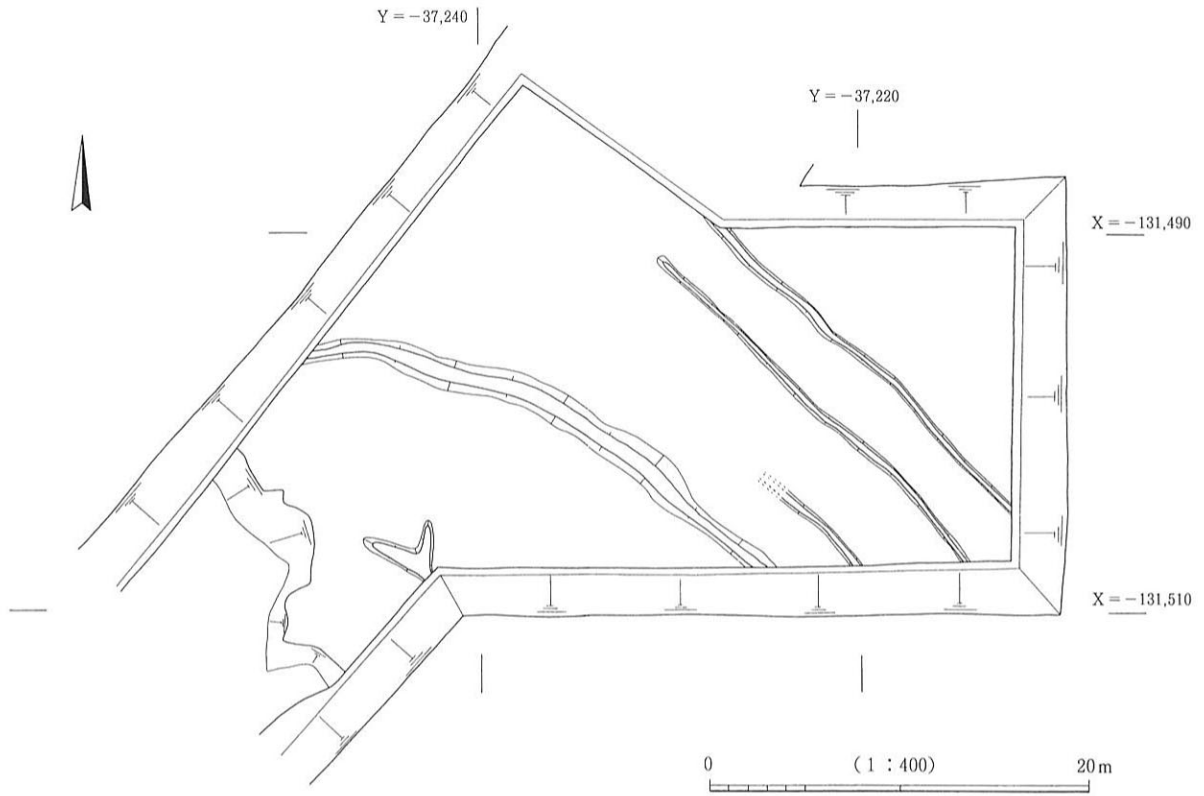


図41 C区東7面平面

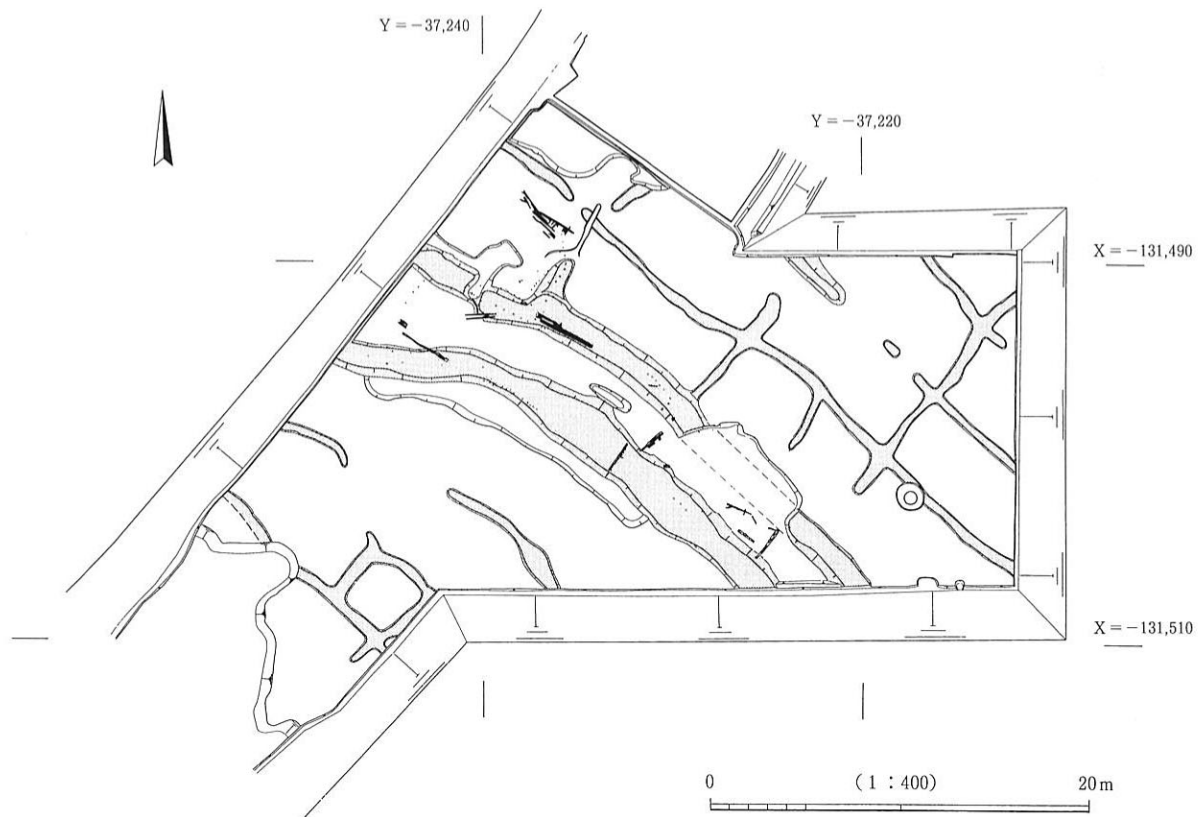


図42 C区東9面平面

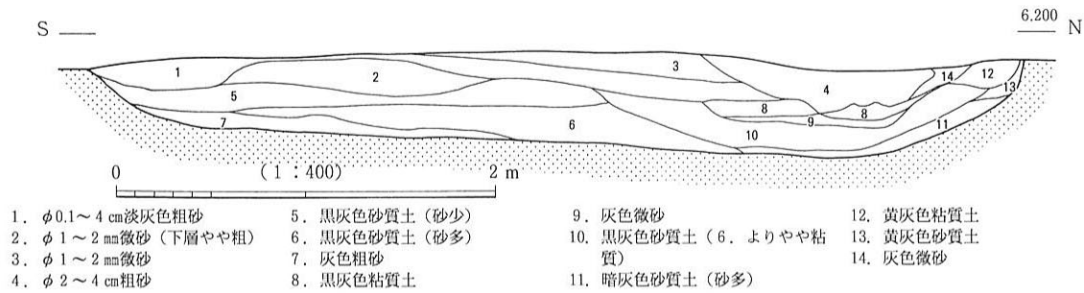


図43 C区西1面河川3断面

〈東8面〉特に顕著な遺構は検出できなかった。

〈東9面〉全面から水田跡を検出した(図42)。大畦畔と小畦畔によって区画された水田跡である。これまでに検出した水田跡と同じく畦畔は東南から西北に向く。大畦畔は2本があり、調査区の南壁から西壁まで延びる。畦畔の幅は1.8~3mで、高さは10~15cmである。部分的に畦畔上に細杭を打って補強している。2本の大畦畔は約2.5mの間隔をあけて平行して延びる。その間は周りの水田面よりも若干低く、粗砂が堆積している。流木も数点出土した。水路として機能していたことがわかる。また南の畦畔の南側に沿ってと、北の畦畔の北側の一部も若干周りの水田面よりも低くなっており、粗砂が堆積している。北の大畦畔の1箇所が途切れており、水口と考えられる。小畦畔は大畦畔の北と南で検出した。幅50~70cmで、高さは高いところで12cmが残っていた。4~5mの間隔で大畦畔と平行して延びる畦畔と、それらとほぼ直角に交わる畦畔によって四角く水田が区画されている。1つの水田区画は15~20㎡である。

人や偶蹄類の足跡は検出できなかったが、水田跡の表面には枯れた生姜のような形をした黄褐色の小さな塊が広がっていた。

〈西1面〉河川1条(河川3)、長方形土坑、鋤溝を検出した。

河川3は調査区を斜めに横断する坪境の大溝である。幅約5m、深さ50~85cmで、国土座標X=-131,537上を東西に流れる。東半は二股に分かれる。坪境の溝を兼ねたB区検出の溝2との南北距離は、ちょうど1坪の1辺の長さ(1町)にあたる110mである。埋土のほとんどが微砂~粗砂である(図43)。

昭和23年に写された航空写真でも、河川3を検出した東西のライン上がちょうど坪と坪の境に当たっていることが確認できる(写真1)。

鋤溝は河川3の南で検出した。幅10~20cmの浅い溝である。東1面が主に東西方向の鋤溝であったのに対して、西1面の鋤溝は南北方向のみとなる。

長方形土坑は主に河川3より北側で検出した。土坑の大きさは幅1m、長さ14mのものから、幅50cm、長さ1mのものまでまちまちで、土坑の向きもA・B区のように向きをそろえて規則正しく並んでおらず、東西・南北の方向に不規則に並ぶ。深さは20~60cmとA・B区に比べ浅いものが多い。

河川3より南側には、河川3と平行する東西方向の土坑状の浅い溝がある。これまで報告してきた長方形土坑に比べてきわめて浅い。同じ性格の遺構かは不明。

〈西2面〉鋤溝を検出した。

鋤溝は河川3の南で検出した。1面と同様に幅10~20cmの浅い南北溝である。

その他顕著な遺構はない。

〈西3面〉堀跡1条(堀1)、掘立柱建物跡1棟(建物12)、細溝6条を検出した(図44)。

堀1は河川3の南で検出した掘立柱の堀跡である。東で北にわずかに振れる東西堀で、6間分を検出

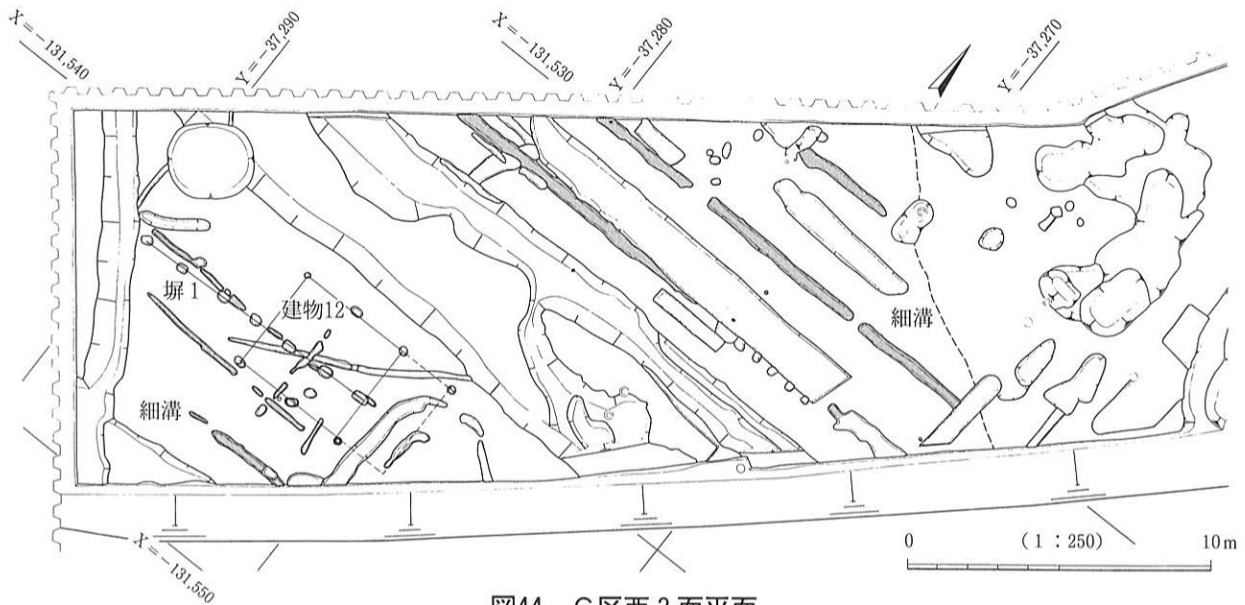


図44 C区西3面平面

した。柱間寸法は1.5m等間である。柱掘方は東西に長い楕円形である。

建物12は塀1と切り合って検出した掘立柱建物跡である。柱穴どうしが直接切り合っていないため、先後関係は不明。1間×2間の東西棟で、国土座標にぴったりと重なる。柱間寸法は南北が3.6m、東西が2.0m等間である。北側柱筋をさらに東に2.0m延長した箇所と同規模の柱穴を検出しており、建物跡は東西3間であった可能性がある。

両者とも柱抜取穴の埋土が灰色シルトであることを特徴とする。建物12の柱穴(穴15)から瓦器碗がまとまって出土した。

細溝は河川3の北と南で検出した東西方向の溝である。それぞれ3条ずつを検出した。河川3より北側の溝は幅が約40cm、深さが5~10cmで、北から3.5m、2.8mの間隔で並ぶ。河川3より南側の溝は北側の溝よりやや細く、溝間の距離も2.0m間隔である。塀1と切り合い、塀1に切られる。B区4面とC区東4面で検出した東西細溝と同じ性格の溝と思われる。

調査区の西端で西壁に沿って溝(溝22)を検出した。しかしこの溝は西3面から切り込んでいる遺構ではなく、下層にある溝(河川4・溝22・56)の影響でこの面が若干落ち込み、窪地ができただけのものであったことが判明した。

<西4面>掘立柱建物跡3棟(建物13・14・15)、溝2条(溝22・56)のほか、多数の穴を検出した(図45・47)。

建物13はもっとも東側で検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。3間×3間の東西に若干長い建物跡で、北で西に45度振れる。倉庫跡と思われる。柱間寸法は東西が1.3m、南北が1.2m等間である。この建物跡のみ柱掘方の底に礎板が敷かれていた。

建物14は建物13のすぐ西で検出した掘立柱建物跡である。2間×3間の南北棟で、建物13と同じく北で西に45度振れる。西と南の柱筋は河川3によって削平されている。東と北の柱筋のみを検出した。柱間寸法は梁間・桁行とも1.8m等間である。埋土にオリーブ黒色~黒褐色シルトが多いことを特徴とする。

建物15は調査区西端の総柱建ちの掘立柱建物跡である。3間×2間の東西にわずかに長い建物跡で、北で西に37度振れる。柱間寸法は東西が1.3m、南北が1.9m等間である。

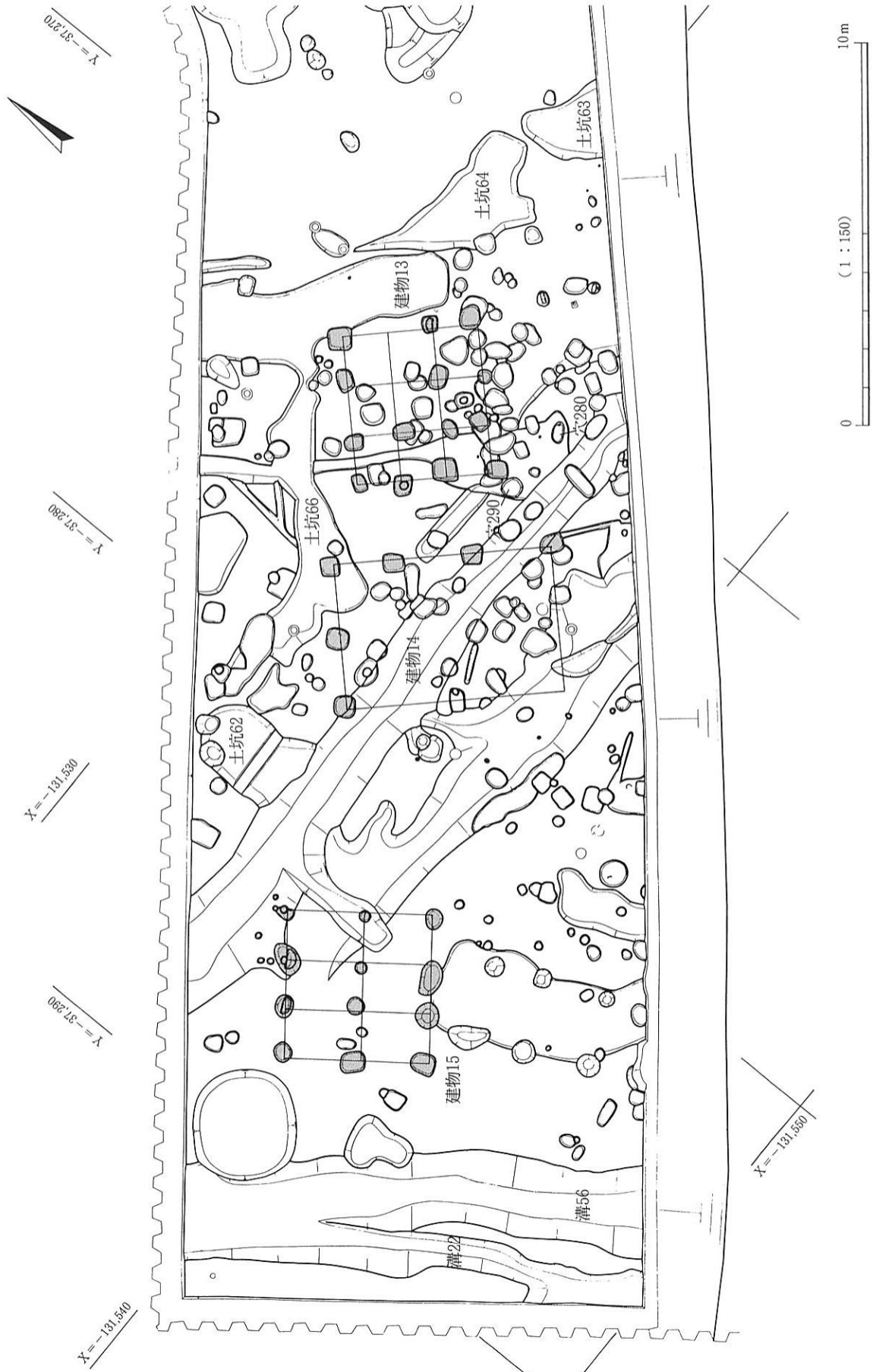


图45 C区西4面平面

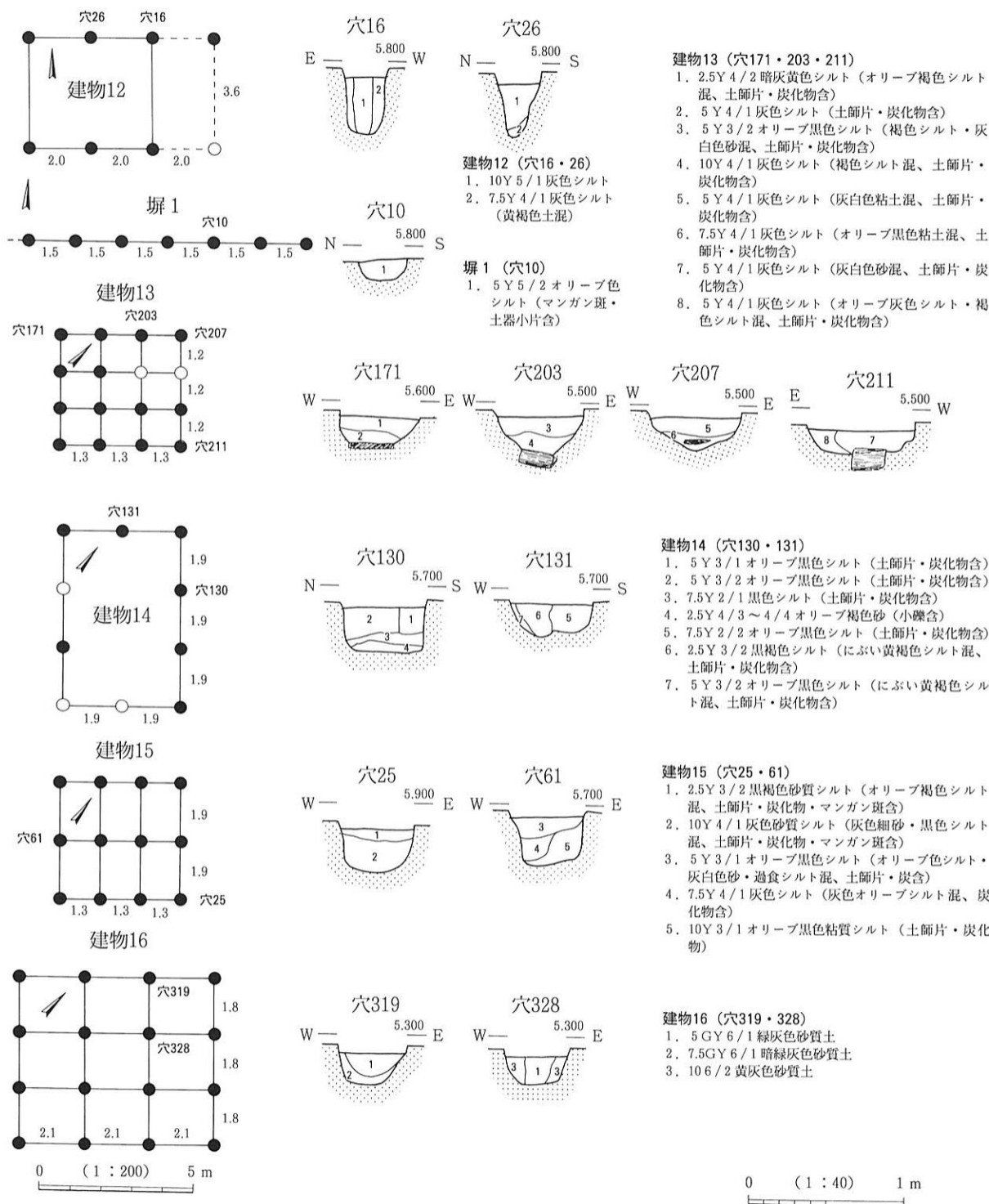


図46 C区西3・4・7面建物平面模式図・柱穴断面

溝22・56は調査区の西壁に沿って検出した。幅2.6~3.2m、深さ30~50mで、西北から東南に流れる。南半は二股に分かれ、東側が溝56、西側が溝22となる。ただしこれは遺物取り上げ時の都合上、遺構番号を分けただけで、本来は1本の溝である。埋土は粗砂~微砂混じりのシルトである。

このほか建物跡としてはまとまらない多数の穴を検出した。現地でも建物跡としてまとめるように努めたが、柱筋が通らずまとめることができなかった。

建物13の東側には土坑状の浅い溝を設ける。溝以東には顕著な遺構は広がらない。A区7面と同様に、この浅い溝から東側が水田域となっていたことが窺われる。

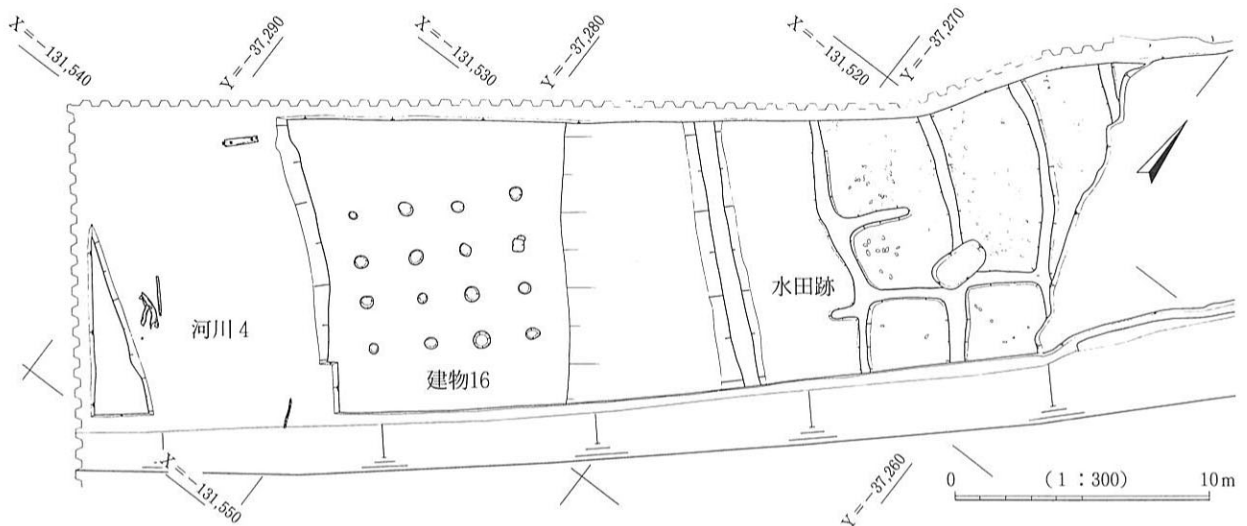


図47 C区西7面平面

<西5・6面>特に顕著な遺構は検出できなかった。

<西7面>河川1条（河川4）、掘立柱建物跡1棟（建物16）、水田跡を検出した（図47）。

河川4は調査区西端で検出した大溝である。幅約9m、深さが2.2mで、西北から東南に流れる。安全確保のため完掘はできなかったが、溝底は一部で確認できた。埋土はすべて粗砂で、中層には流木や木端が薄く堆積する。上流から流れてきたものであろう。水量が豊富であったことが窺える。

出土する土器は土師器がほとんどで、数点初期須恵器が含まれる。ナスビ形の鍬などの農具のほか、用途不明の木製品が出土した。

建物16は河川4の東で検出した総柱建ちの掘立柱建物跡である。3間×3間の東西にわずかに長い建物跡で、北で西に45度振れる。倉庫跡と思われる。柱間寸法は南北が1.8m、東西が2.1m等間である。

水田跡は建物16のすぐ東側で検出した。建物16と東の水田跡とは約55cmの高低差があり、水田跡の上にはさらに2層が堆積する。したがって水田跡は実際には9面での検出ということになり、建物16よりは古い段階の遺構であることが判明する。大畦畔と小畦畔とによって区画された水田跡である。大畦畔は幅1.5～1.7m、高さ約15cmで、もっとも建物跡寄りに1本を設ける。建物16の振れと同じく北で西にほぼ45度振れる。小畦畔は幅60～70cm、高さ5cm程度で、大畦畔の東側に設ける。約4m間隔に大畦畔に平行する畦畔と、それらとほぼ直角に交わる畦畔とによって四角く水田が区画される。1つの水田区画は10㎡前後である。水田面から人や偶蹄類の足跡を検出した。

註

- 1) 江浦 洋・長原 亘 1995 「近世水田面にみる災害復旧」『大阪文化財研究』第8号（財）大阪文化センター、長原 亘 1995 「水田における水災害の対応痕跡について」『大阪文化財研究』第9号（財）大阪府文化財調査研究センター

小 結

茨木市学園町（浪商学園跡地）に位置する溝咋遺跡は、周辺から弥生時代から中世にかけての遺物が採取されており、以前から周知の遺跡とされてきたが、これまで本格的な発掘調査は行われておらず、遺跡の実態は不明な点が多かった。今回の調査でようやくその一端を明らかにすることができた。以下簡単にまとめる。

- 古墳時代から近世に至る遺構を、浪商学園跡地の北から南までのほぼ全面で検出することができた。
- ただし古墳時代以後、中世に至るまでの所謂古代の時期の遺構を検出することができなかった。
- 古墳時代の水田跡と集落跡を同時に検出することができた。当地に水田耕作を営む一大集落が存在していたことが判明した。
- 古墳時代の水田は、基本的に北で西に大きく振れる畦畔によって区画されていることが判明した。その水田1区画は古墳時代前期には10～20㎡であったが、古墳時代後期には若干広くなり20㎡以上となることが判明した。
- 古墳時代の集落域は調査区の北端部と西南端部の2箇所に分かれて検出した。遺構の重なりから少なくとも4時期以上の変遷があったことが判明した（図48）。
- 古墳時代の最終段階の遺構を砂層が覆っていることから、当地の集落は大規模な洪水によって廃絶したことが判明した。
- 調査区のほぼ全面が、中世から近世に至る耕作地であったことが判明した。耕作地は約110m（1町）間隔に掘られた溝によって1坪1坪が区画され、さらにその中が長地型に1段ずつ区割りされていたことが判明した。
- 中世の集落域は調査区の西南端部のごく狭い範囲で確認した。
- 溝咋神社上宮の南限・北限・西限の溝を検出することができた。これによって上宮の境内地は南北約67mと判明した。
- 今回の調査では、若干の弥生土器が出土しているが、明確な弥生時代の遺構は検出できなかった。

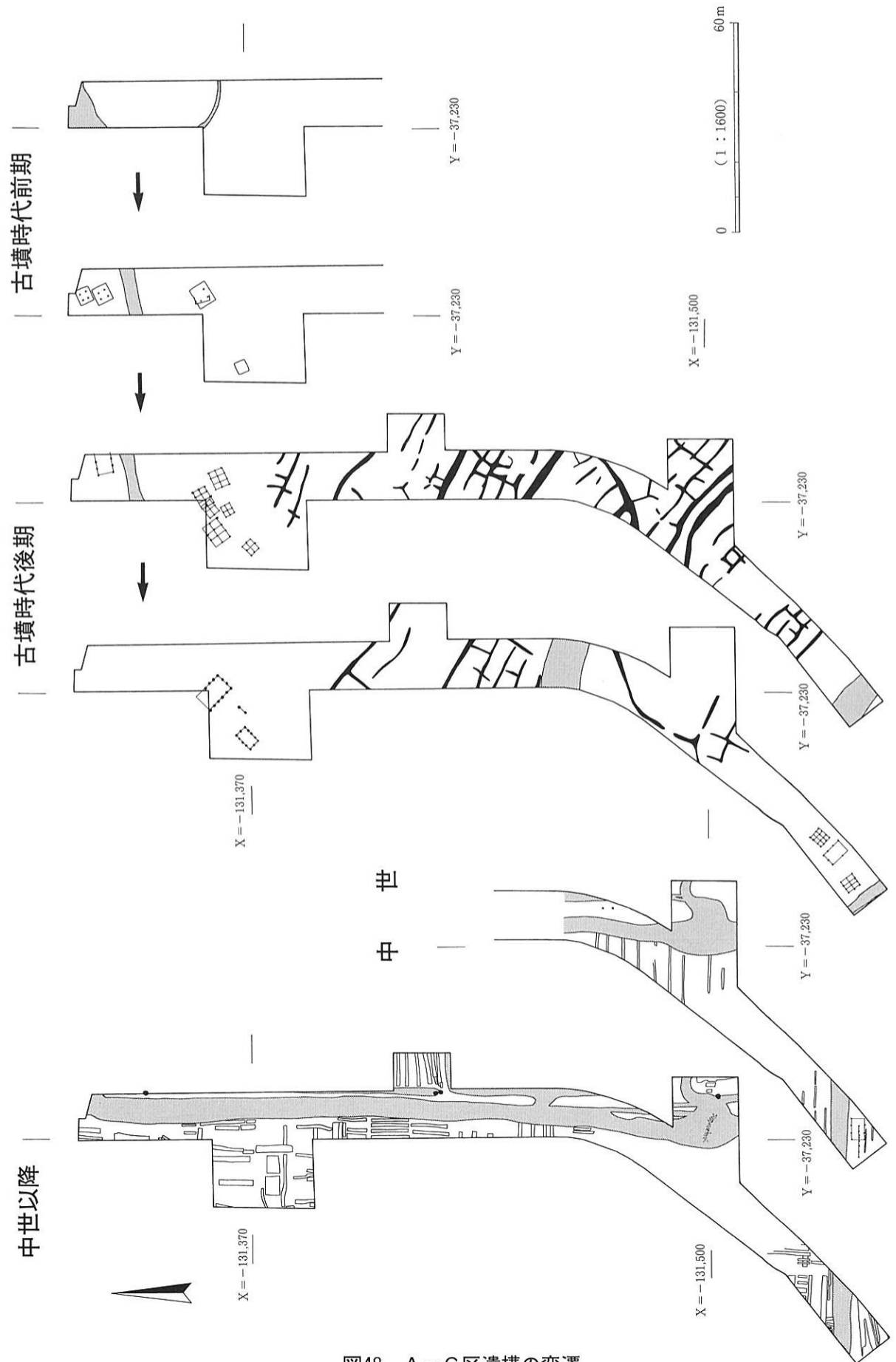


図48 A～C区遺構の変遷

第3節 遺物

第1項 土器

(その1)の調査では、コンテナ約200箱分の土器が出土した。その約9割はA、C区古墳時代包含層、遺構に伴う古式土師器、須恵器である。

(その1)の遺物整理では、調査地全体の層序を組み立てる際の基本とするため、各層、面出土土器を比較的丁寧に抽出した。土器の抽出にあたっては、各層、面、遺構出土土器のうち、完形に近いもの、また細片でも年代決定に際し重要と考えられる土器を抽出し、器種組成を示せるよう考慮した。また、外来系土器、赤色または黒色顔料がみられる土器、線刻土器、圧痕土器など特殊な土器は全て抽出した。抽出、実測した土器の点数は1198点である。A、C区古墳時代包含層、遺構出土土器は多数の完形に近い土器があったが、全てを実測することはできず、器種組成を示すにとどまった。

各区の土器は、上層から層、面出土土器、上面から各面の遺構出土土器の順に掲載し、その中で、磁器、陶器、瓦器、須恵器、土師器、古式土師器、弥生土器と基本的に年代の新しいものから順に掲載した。木器は第2項で、土製品、石器、瓦、鉄器、滑石製品は第3項でその他遺物としてまとめた。

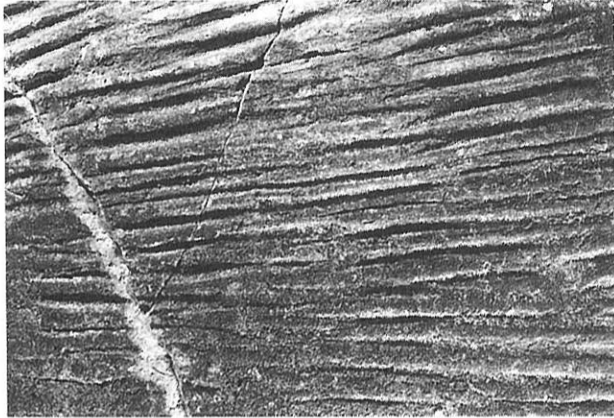
遺物の編年および年代的な位置づけについては適宜各論考を参照し、弥生土器については『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ—』(寺沢・森岡編1990)、須恵器については『須恵器大成』(田辺1981)、古代の遺物については『古代の土器1～3 都城の土器集成』(古代の土器研究会1992・1993・1994)、中世の遺物については『中世土器研究序論』(橋本1992)を主に参照した。特に注記のない場合、時期区分、年代は上記文献に準拠している。また、須恵器については、例えば「TK73型式」は「TK73」と表記し「型式」を省略した。遺物の大半を占める古式土師器については、『矢部遺跡』(奈良県教育委員会1986)における形式分類を参考とし、後述の土器分類をおこない、これを記述に用いた。なお、本遺跡では外来系土器が多く、その中には外来した土器、その影響を受けて在地で製作された土器がみられ、いずれか峻別し難い土器も多い。こうした外来系土器は上記分類には含めず、外来系土器として、各層、面、遺構出土古式土師器の各器種の最後に掲載した。詳細は本文中では割愛し、第6章第2節でまとめて報告しており、これを参照されたい。

個々の遺物の詳細については観察表にまとめた。観察表で用いた用語の概念は下記のとおりである。観察表の調整は、基本的に残存部の上位の調整から順番に記しており、例えば口頸部でヨコナデ・ナデと記す場合、口縁端部周辺がヨコナデでその下半がナデという意味である。また、調整の順序を示す際はハケメ+ヨコナデのように+記号を用いている。

1. 土器の観察(写真2～4)

本遺跡は沖積地に立地するためか、古式土師器は調整痕を明瞭に残すものが多い。本遺跡出土古式土師器の調整痕は、従来用いられてきた用語の範疇では表現できないものがあるため、本報告では、調整痕の明示と一貫性、客観性の保持のため、以下の調整方法、呼称を使用した。設定に際しては、『下田遺跡』((財)大阪府文化財調査研究センター1996)を参照した。

タタキ 土器成形技法である。羽子板状の板に平行線を刻んだタタキ板によるタタキ痕で、連続する平行線の圧痕、すなわちタタキメがみられる。タタキメには粗密があり、実測図に表現した。タタキがヘラ状工具によるミガキにより消される個体がみられる。



タタキ (粗)



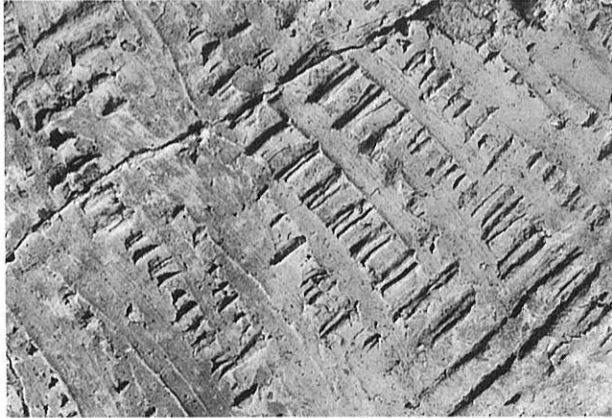
ケズリ+ナデ



タタキ (密)



ヘラナデ



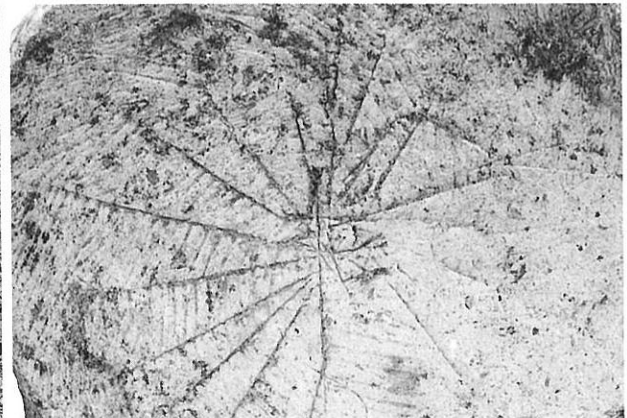
タタキ+ミガキ



ハケメ



ケズリ



ハケメ (底部)

写真2 土器の観察(1)

ケズリ 土器成形技法である。ヘラ状工具により半乾燥状態の器壁を削り、器壁を減ずる。胎土に含まれる混和材である砂粒の移動を表現した。ケズリ後ナデが施される個体がみられる。

ヘラナデ 土器成形、器面調整技法である。ヘラ状工具でナデる技法であり、幅は5～7mmである。板ナデなど他のナデに比べ幅が狭く、幅が広いミガキともいえる。高杯の脚部を面取り状に仕上げる場合に多用される。

ハケメ 器面調整技法である。板片を用いた調整と考えられており、板片の木目の状態によりハケメ、板ナデ、ハケナデに分けられる。平行線が明瞭に残る、すなわち板片の木目が明瞭に残るものをハケメとする。底部内面に連続した回転痕を残す、いわゆる蜘蛛の巣状ハケ、簾状ハケもこれに含む。

板ナデ 土器成形、器面調整技法である。板片の単位を残すのみで平行線はみられず、すなわち板片の木目がほとんど残らないものを板ナデとする。底部内面に連続した回転痕を残す場合もこれに含む。

ハケナデ 土器成形、器面調整技法である。ハケメと板ナデの間である。不明瞭な平行線が残る、すなわち板片の浅い木目が残るものをハケナデとする。底部内面に連続した回転痕を残す場合もこれに含む。

ミガキ 最終器面調整技法である。ヘラ状工具により器面をナデ付けることで砂粒が沈み、器面が緻密で平滑となり、光沢をもつ。以下の3種類を総称してミガキとした。

- ・幅が2～4mmで、縦、斜め、横方向のものがある。弥生土器以来の系譜をひき、多くの器種でみとめられる。

- ・幅が1～2mmで、横方向が多い。緻密に面的に施すものと、粗なものがある。庄内式期以降みとめられ、布留式期の壺、高杯に多用される。

- ・幅が3～5mmで、暗文状に施す。放射状のものが多い。布留式期の高杯で多用される。

ナデ 最終器面調整技法である。一部成形に関わる場合もある。指、布、皮などで器面をナデることで砂粒が沈み、器面が平滑となり、擦痕を残すものもある。

ヨコナデ 最終器面調整技法である。口縁部に多くみられる、回転を利用した横方向のナデである。

ユビオサエ 土器成形、器面調整技法である。指頭により、接合部の接着、底部の押さえなどをおこなう技法で、細かい部位で適宜用いられる。

このほか、土器にみられる特異な要素については観察表の備考に記した。その詳細は下記のとおりである。

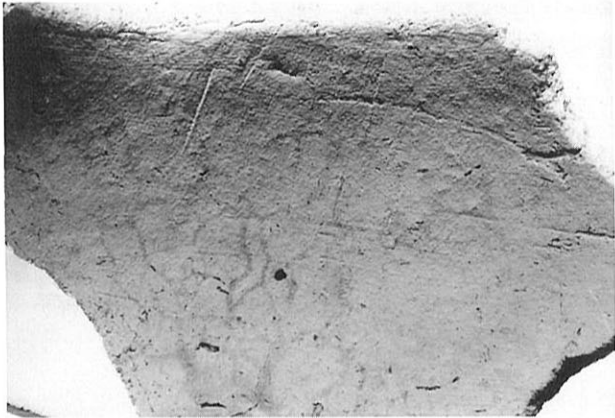
穿孔 高杯脚部に施されるような、形態にかかわる焼成前の穿孔については特記していない。焼成後に人為的に内外面から穿孔されたとみられる痕跡について特記した。小形丸底壺、甕にみられる場合が多い。

打ち欠き 焼成後人為的に打ち欠かれたとみられる痕跡について特記した。人為的か否か不明瞭なものは省いた。高杯、小形丸底壺の口縁部を三角形に打ち欠く場合が多い。

棒状工具による刺突 高杯脚の奥、杯部底部外面にみられる、直径4mm前後、深さ4mm前後の穴である。棒状工具の先端による刺突とみられ、支えか接合に用いたかは判然としないが、高杯成形時の痕跡である。

円盤充填 高杯の杯部と脚部の接合に際し、粘土円盤を接合部に充填したもの。弥生時代後期高杯に顕著である。古墳時代前期以降の土師器高杯では円盤のほか栓状の粘土を充填するものが増える。

ラセン状粘土巻き上げ 高杯脚部の成形技法のひとつで、脚部内面にラセン状の粘土紐接合痕が残る。



板ナデ



ミガキ (幅1~2mm)



板ナデ (底部)



ミガキ (暗文状)



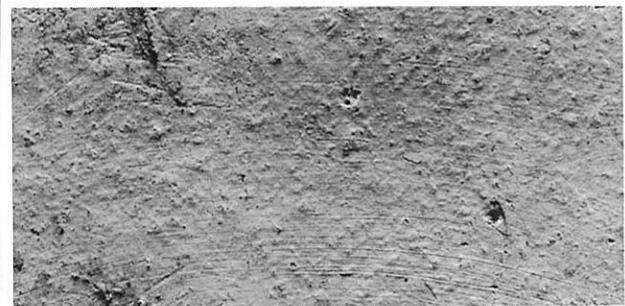
ハケナデ



ナデ



ミガキ (幅2~4mm)

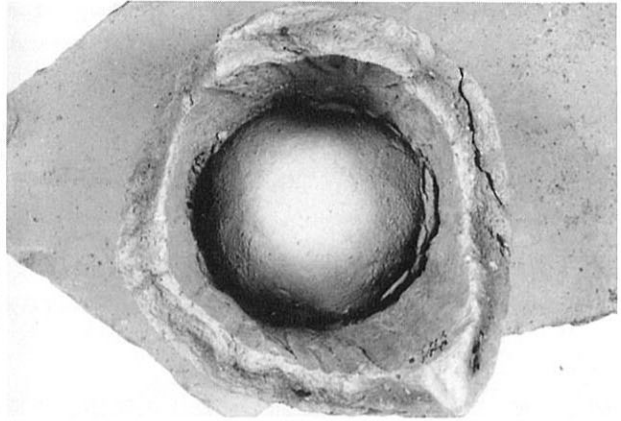


ヨコナデ

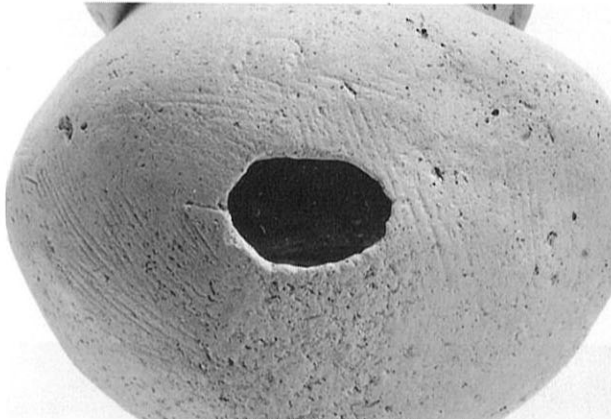
写真3 土器の観察(2)



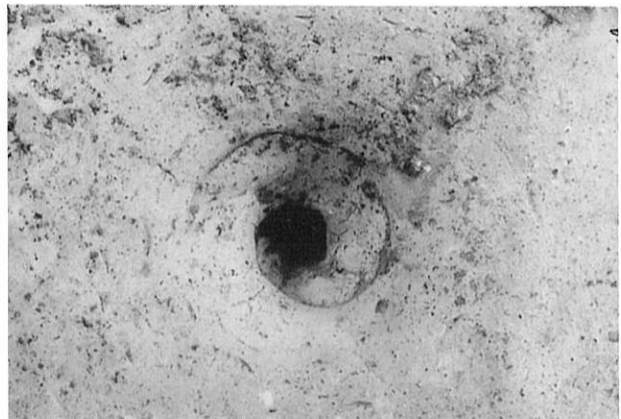
穿孔



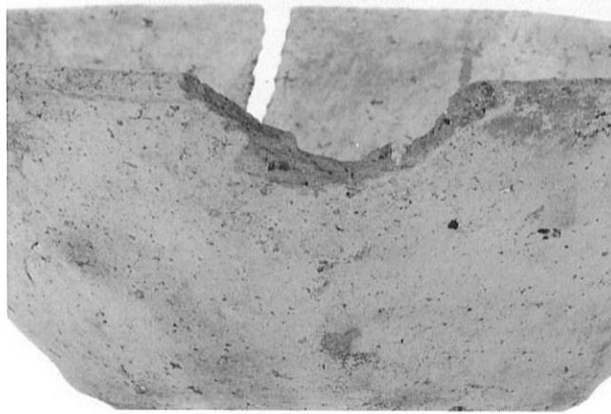
円盤充填



穿孔



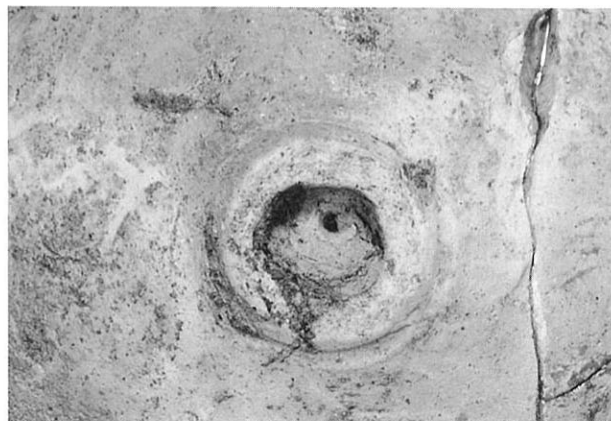
ラセン状粘土巻き上げ



打ち欠き



線刻



棒状工具による刺突



木の葉痕

写真4 土器の観察(3)

線刻 ヘラ状工具による線刻である。木葉痕とみられるものもある。その他壺口縁部外面に「||」の記号を線刻する土器、人面線刻土器がある。

圧痕 甕底部外面に残る木葉痕のほか、種子、葉、繊維束の圧痕がある。

顔料 赤色顔料、黒色顔料がみられ、自然科学的分析をおこなった個体はその成果も掲載した。実測図には赤色顔料は朱色、黒色顔料は煤より濃いスクリーントーンで示した。

煤 二次的焼成により煤が付着した資料は多いが、そのうち顕著なものについて特記した。また、完形に近い個体で煤の付着の様相が明瞭なものについては実測図に黒色顔料より薄いスクリーントーンで示した。

スリップ 水嵌されたきめ細かな粘土の溶液に土器を浸し、乾燥させることで、表面を平滑に仕上げる手法。小形丸底壺、小形丸底鉢、小形器台といった小形精製土器のほか、稀に小形甕にもこの手法が用いられる。

2. 土器の分類

壺 (図49)

広口壺 球形の体部に一定の広がりをもつ口頸部径をもち、口頸部が短い壺である。口頸部の形態から以下のように分類する。

- A 口頸部が直線的に外傾し、肩部と頸部の間に明瞭なくびれをもつ。
- B 口頸部が強く外反し、肩部と頸部の間に明瞭なくびれをもつ。
- C やや外傾気味に直立する頸部に短く外反する口縁部をもつ。
- D ゆるやかに外反する口頸部をもち、肩部と頸部の間のくびれは不明瞭である。
- E 短く直立する頸部に大きく外傾する口縁部をもち、肩部と頸部、頸部と口縁部のくびれは明瞭である。

短頸壺 やや長胴または球形の体部に、広口壺よりはやや口縁部径が小さく高い口頸部をもつ壺である。

- A 口頸部が直線的に外傾するもの。
- B 口頸部が外反するもの。

短頸直口壺 球形の体部に直線的に外傾する口頸部をもち、肩部と頸部の間に明瞭なくびれをもつ。器高30cmを超える大形品である。

二重口縁壺 広口壺B、C、D、Eにさらに口縁部を付加し、二重に外反する口縁部をもつ壺である。装飾性のあるものが多い。広口壺口縁と二重口縁との接合部の形態から以下のように分類する。

また、広口壺B、C、Dを祖形とする口頸部が外反するものを1形式、広口壺Eを祖形とする頸部が直立するものを2形式とする。

- A 広口壺口縁と二重口縁との接合部線（段）が内外面とも明瞭で、口縁が外傾または外反するもの。
- B 広口壺口縁と二重口縁との段が内面では明瞭でなく、外面は肥厚させることで段を強調するもので、口縁は外傾または外反する。
- C 広口壺口縁と二重口縁との段が内面では明瞭でなく、外面は垂下させることで段を強調するもので、これを文様帯とし装飾のある例が多い。口縁は外傾または外反する。
- D 広口壺口縁と二重口縁との段が内外面ともに明瞭であり、二重口縁は短く直立するかやや外傾し、これを文様帯とし装飾のある例が多い。ここには広口壺Eの属性をもつが、口縁部文様帯が幅広く、短

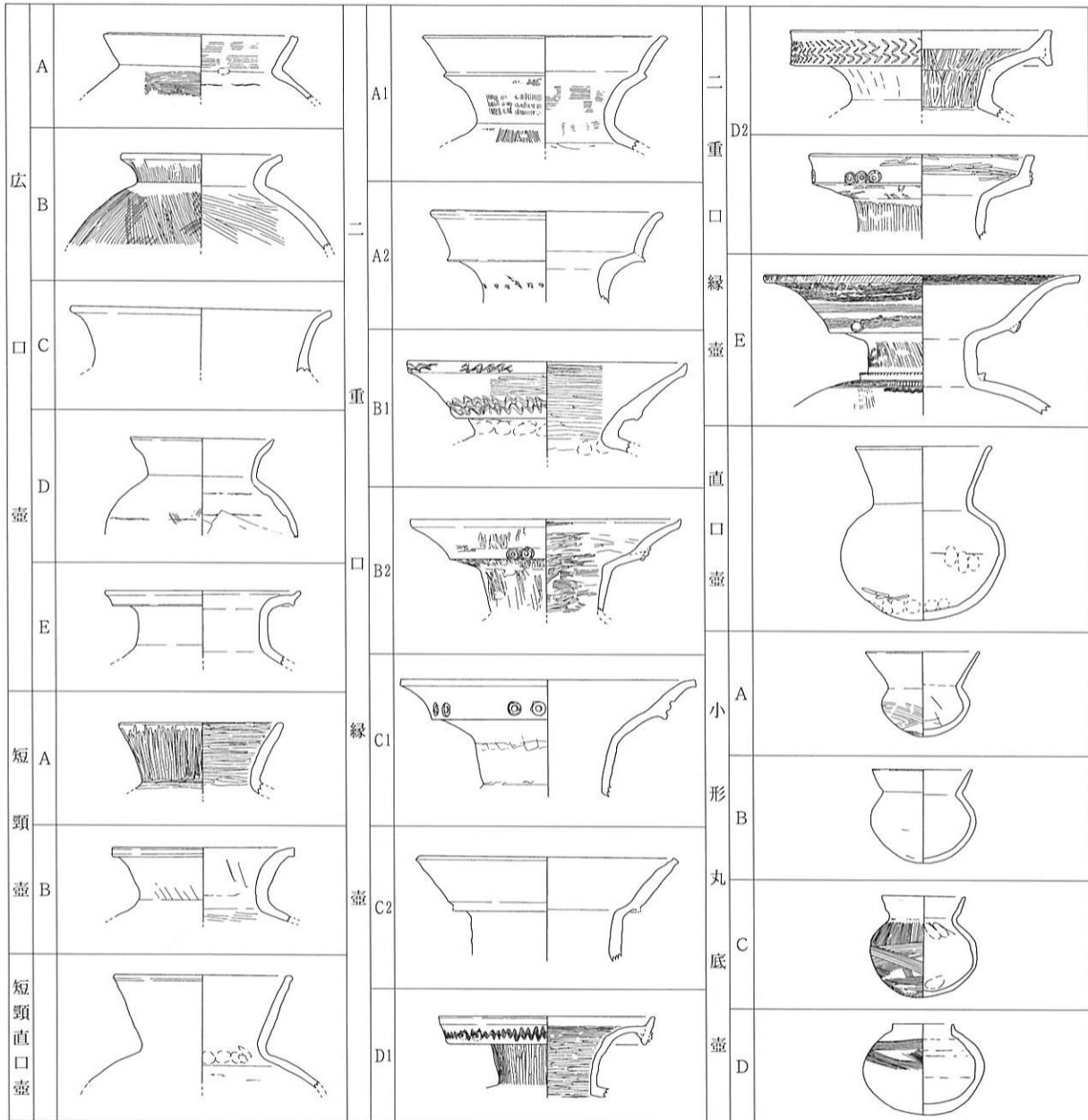


図49 壺の分類

く直立する二重口縁の形態を示すものも含めた。

E 細く直立した頸部をもつ広口壺Eの口縁に二重口縁を付加した壺で、最も装飾性に富む。

直口壺 球形または扁球形の体部に直線的に外傾する口頸部をもち、肩部と頸部の間に明瞭なくびれをもつ。器高13~20cmである。

小形丸底壺 直口壺の小形品。球形または扁球形の体部に外傾する口縁部をもつ。口縁部径が器高と等しいかそれ以下のものを壺とし、後述の小形丸底鉢と分けた。口縁部と体部の形態から以下のように分類する。

- A 口縁部高と体部高がほぼ等しく、口縁部径が胴部最大径より大きいものが多い。
- B 口縁部高が器高の約1/3であり、口縁部径と胴部最大径はほぼ等しいものが多い。
- C 口縁部高が器高の約1/3~1/4であり、口縁部径が胴部最大径より小さいものが多い。
- D ごく短い直立する口頸部をもつもの。

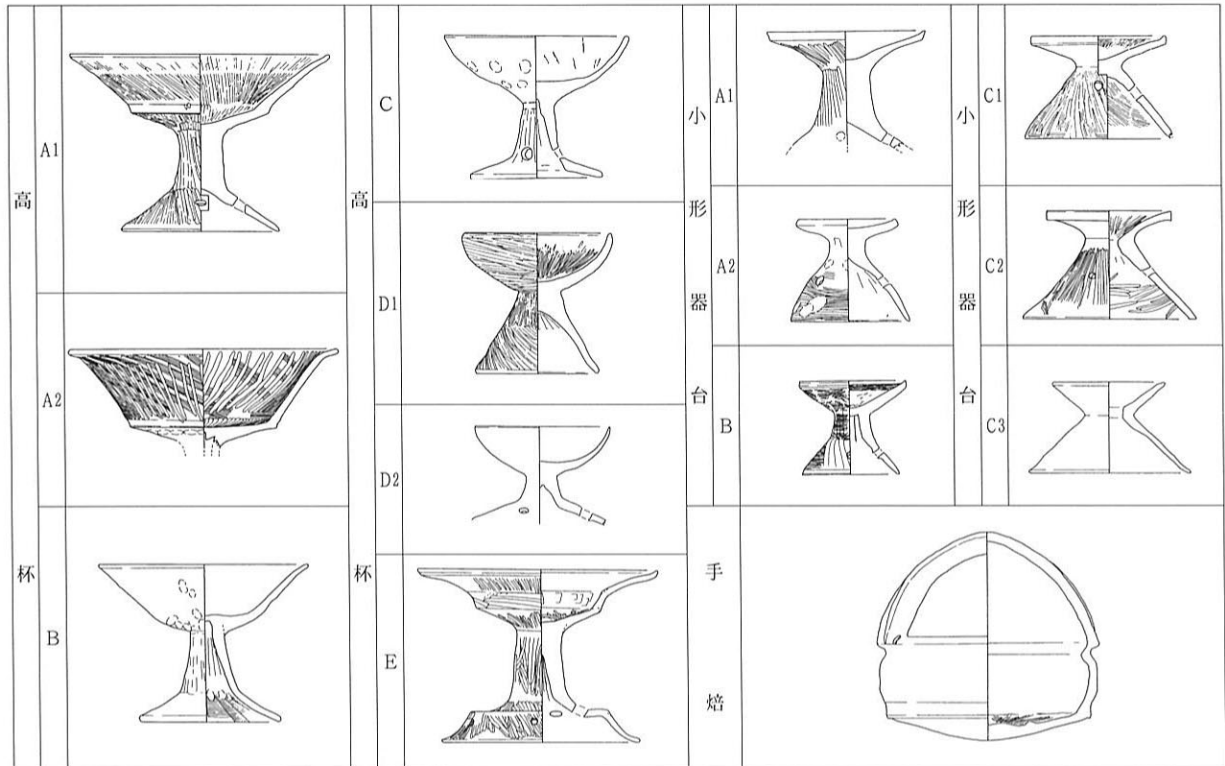


図50 高杯・小形器台・手焙の分類

高杯 (図50) 杯部の形態から以下のように分類する。

A 1 杯部が明瞭な稜線によって口縁部と体部に分けられ、口縁が直線的に外傾する。口縁部径が20cmを超える大形のもの、20cm以下のものがある。脚部は、円筒状の脚柱部に大きく開く脚裾部をもつもの、直線的に開く脚柱部に屈折して開く脚裾部をもつものがある。

A 2 A 1のうち、口縁部径が20cmを超える大形のもので、体部が平坦で口縁が直線的に外傾し、口縁端部がわずかに外反するもの。暗文を施すものが多い。

B A 1の杯部の稜が不明瞭なもの。口縁部径は20cm以下である。脚部は、直線的に開く脚柱部に屈折して開く脚裾部をもち、脚柱部と脚裾部の境の稜線は明瞭なものとは不明瞭なものがある。

C 椀形の杯部をもつ。脚部は、直線的に開く脚柱部に屈折して開く脚裾部をもつ。

D 1 深い椀形の杯部に、円錐状の脚部をもつ。

D 2 深い椀形の杯部に、大きく裾の開く脚部をもつ。

E 杯部の口縁部が稜線をもち外上方へのびる。脚裾部も稜線をもつ。

小形器台 (図50) 浅い口縁部に体部と裾部からなる脚部が備わる。体部に円孔が貫通するものとしなものがある。口縁部は皿形のものやや内湾して立ち上がるものがあり、口縁端部は丸くおさめるものと短く立ち上がるものがある。

体部と裾部の形態から以下のように分類する。

A 1 体部、裾部が分化し、中実の体部から裾部が開き、体部の割合が大きいもの。

A 2 体部、裾部が分化し、中実の体部から裾部が開き、裾部の割合が大きいもの。

B 体部、裾部の分化が不明瞭で、中空の体部から不明瞭な稜線を境に裾部が開くもの。

C 1 体部、裾部の分化が無く、比較的浅い口縁部に円錐状の脚部をもつ。

C 2 体部、裾部の分化が無く、C 1とC 3の中間形態を示す口縁部に円錐状の脚部をもつ。

C3 体部、裾部の分化が無く、比較的深い口縁部に円錐状の脚部をもつ。円孔が貫通しX字形を呈する。

甕 (図51)

弥生形甕 畿内第V様式系の甕。外面はタタキ技法で分割成形され、平底が基本であるが丸底に近い個体もある。最大腹径の位置でA Bに分類する。

A 最大腹径が器高の上半にあるもの。器高から以下に分類する。

A1 器高20cm以上の大形の弥生形甕A。

A2 器高15~20cmの中形の弥生形甕A。

A3 器高10~15cmの小形の弥生形甕A。

A4 器高10cm以下の極めて小形の弥生形甕A。

B 最大腹径が器高半ばにあり球形化したもの。庄内形甕、布留形甕の影響がみられ、「布留式影響の弥生形甕」と呼称されるものである。器高から以下に分類する。

B1 器高20cm以上の大形の弥生形甕B。外面体部上半のタタキを幅の広いミガキで消すものが多い。

B2 器高15~20cmの中形の弥生形甕B。

庄内形甕 外面は右上がりの細く鋭いタタキによって成形され、球形、倒卵形の体部をもつ。底部は丸底またはややとがり気味の丸底である。口縁部は頸部から明瞭な稜線をもって屈曲、外傾し、口縁端部は上方に短くつまみ上げられる。外面上半はハケメ、ミガキ、ナデでタタキを消すものが多い。内面はケズリで、頸部直下にまでおよぶ。胎土から以下に分類する。本遺跡では、大和形庄内式甕はみとめられなかった。

A 生駒西麓の胎土をもつ河内形庄内式甕。倒卵形の体部にややとがり気味の底部をもつ。体部上半は右上がりの極細の鋭いタタキで成形され、体部下半はハケメで仕上げられる。器壁は極めて薄く、4~5mmである。

B 生駒西麓以外の胎土をもつ庄内形甕。形態、技法はAとほぼ同じであるが、球形の体部をもち、体部外面上半のタタキがAに比べやや太く、タタキをハケメ、ミガキ、ナデで消すものが多い。器壁がやや厚く、5~6mmである。

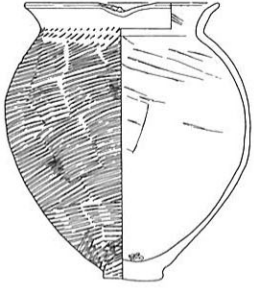
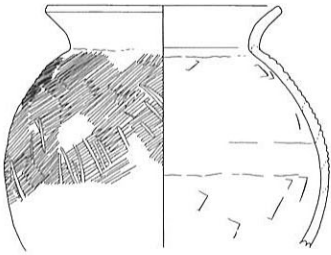
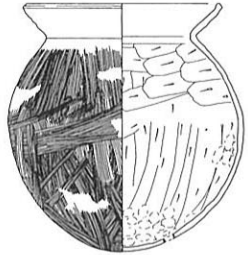
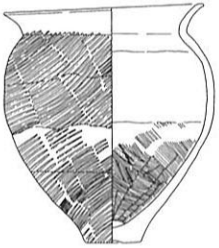
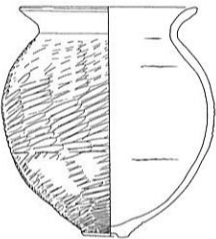
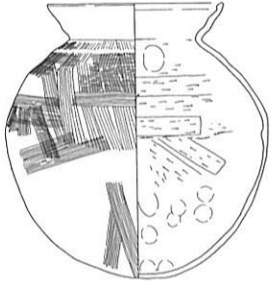
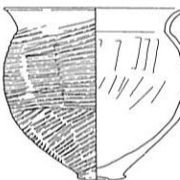

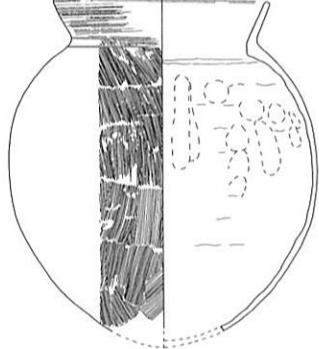

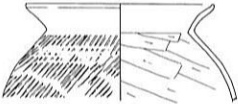
布留形甕 球形またはやや長胴形の体部をもつ。口縁部は直線からやや内湾気味にのび、口縁端部は多様であり肥厚するものが多い。口縁部はヨコナデ、体部外面は斜方向または縦方向のハケメの後、体部上半には横方向ハケメを施す。内面はケズリまたは板ナデ、ハケナデが頸部から一段下がったところより下半に施され、体部下半および底部にはユビオサエが残る。頸部内面はやや厚く、稜は不明瞭である。口縁端部の形態から以下に分類する。

典型的な布留形甕はBに、「纏向遺跡分類甕C」「布留式傾向甕」「布留系甕」「布留式影響の庄内形甕」「布留式祖形甕」と呼称されるものはA、Cに含まれる。

A 上方に短くつまみ上げられた口縁端部をもつ。内面はケズリが多い。典型的な庄内形甕の口縁端部に類似する。

B 内側に肥厚する口縁端部をもつ。端部に面をもつものともたないものがある。内面はケズリが多い。典型的な布留形甕の口縁端部に類似する。

C 端部を丸くおさめるもの、面をもつものなど、A B以外の口縁端部をもつ。胴部はやや長胴形のものが多い。内面は板ナデ、ハケナデがみられる。広義の布留形甕で、須恵器出現以降多くみられる。

弥 生 形 甕	A1		弥 生 形 甕	B1		布 留 形 甕	A	
	A2			B2			B	
	A3		庄 内 形 甕	A		甕 C	C	
	A4			B				

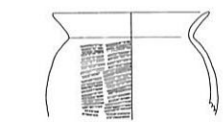
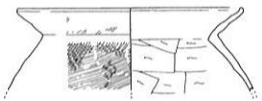
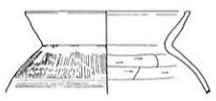
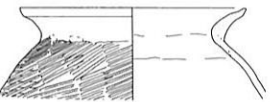


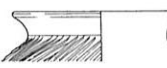
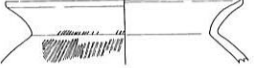

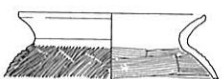
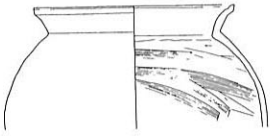



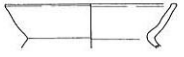

		甕 口 縁 端 部 の 分 類						
弥 生 形 甕 A	a		庄 内 形 甕 A	a		布 留 形 甕 B	b	
	b			a			c	
弥 生 形 甕 B	a		庄 内 形 甕 B	b		布 留 形 甕 C	a	
	b			a			b	
			布 留 形 甕 A	b		甕 C	c	
				a			d	

図51 甕の分類

甕口縁端部の分類 弥生形甕、庄内形甕、布留形甕の各分類について、口縁端部を分類する。

- 弥生形甕A** 口縁端部 a 口縁端部を丸くおさめるもの。
口縁端部 b 口縁端部を短く上方につまみあげるもの。
- 弥生形甕B** 口縁端部 a 口縁端部を丸くおさめるもの。
口縁端部 b 口縁端部を短く上方につまみあげるもの。
- 庄内形甕A** 口縁端部 a 口縁端部を短く上方につまみあげるもの。
- 庄内形甕B** 口縁端部 a 口縁端部を丸くおさめるもの。
口縁端部 b 口縁端部を短く上方につまみあげるもの。
- 布留形甕A** 口縁端部 a 口縁端部を短く上方につまみあげるもの。
口縁端部 b 口縁端部を短く上方につまみあげ、やや内傾するもの。
- 布留形甕B** 口縁端部 a 口縁端部が内側に肥厚し、端面をもつもの。
口縁端部 b 口縁端部が内側に肥厚し、端部が口縁端部 a、c の中間形態であるもの。
口縁端部 c 口縁端部が内側に肥厚し、端部を丸くおさめるもの。
- 布留形甕C** 口縁端部 a 口縁端部を丸くおさめるもの。
口縁端部 b 口縁端部に面をもつもの。
口縁端部 c 口縁端部に面をもち、内側に肥厚するもの。
口縁端部 d 口縁端部に面をもち、外側に肥厚するもの。

鉢 (図52) 口縁部径をもとに以下に分類する。

大形鉢 口縁部径が30cm以上の大形品。器高および口縁部の形態と頸部の屈曲から以下に分類する。

- A 1 器高20cm以上で、明瞭な稜をもつ頸部から口縁部が内湾気味にたちあがる。
A 2 器高20cm以上で、稜をもつ頸部から口縁部が直線的に外傾する。
A 3 器高20cm以上で、不明瞭な稜をもつ頸部から口縁部がやや内湾気味にたちあがる。
A 4 器高20cm以上で、稜をもつ頸部から口縁部が外反してたちあがる。
B 1 器高20cm以下で、不明瞭な稜をもつ頸部から口縁部が直線的に外傾する。

中形鉢 口縁部径が15~25cmの中形品。体部と底部の形態から以下に分類する。

- A 体部が内湾しながらたちあがり、底部が丸底のもの。
B 体部が直線的に外傾し、底部が平底のもの。
C 1 椀形の体部に、短く外傾する口縁部をもち、底部が平底のもの。
C 2 椀形の体部に、短く内湾する口縁部をもち、底部が丸底のもの。

小形鉢 口縁部径が10~15cmの小形品。体部と底部の形態から以下に分類する。

- A 1 体部が内湾しながらたちあがり、器高は口縁部径より小さく、底部が平底のもの。
A 2 体部が内湾しながらたちあがり、器高は口縁部径より小さく、底部が丸底のもの。
B 1 体部が内湾しながらたちあがり、器高が口縁部径とほぼ同じで、底部が平底のもの。
B 2 体部が内湾しながらたちあがり、器高が口縁部径とほぼ同じで、底部が丸底のもの。
B 3 体部が内湾しながら筒状にたちあがり、器高が口縁部径を凌駕し、底部が丸底のもの。
C 体部が直線的に外傾し、底部が平底のもの。
D 椀形の体部に、短く外傾する口縁部をもち、底部が平底のもの。
E 1 小形鉢Aで、突出したあげ底をもつもの。

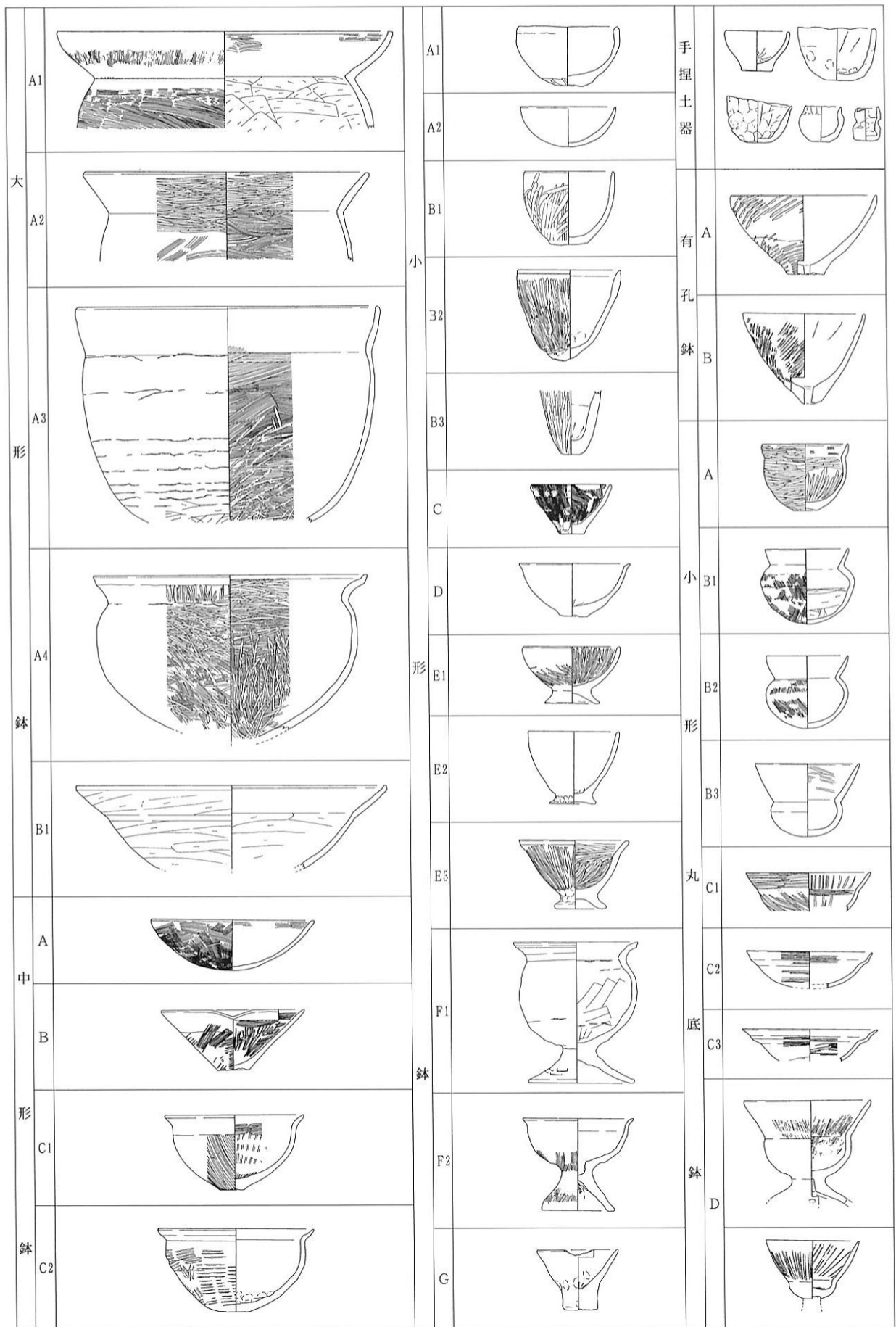


図52 鉢の分類

- E 2 小形鉢Bで、突出したあげ底をもつもの。
- E 3 小形鉢Dで、突出したあげ底をもつもの。
- F 1 球形の体部に大きく開く脚台をもつもの。
- F 2 椀形の体部に大きく開く脚台をもつもの。
- G 中実の脚台をもつもの。

手捏土器 口縁部径が10cm以下で、実用品とはみられない手捏土器。鉢形が多いが壺形もある。

有孔鉢 鉢の底部に円孔を穿ったもの。底部の形態から以下に分類する。

- A 平底の鉢に円孔を穿ったもの。
- B 尖底の鉢に円孔を穿ったもの。

小形丸底鉢 小形丸底土器、小形丸底壺と呼称されるもののうち、口縁部径が器高を凌駕するものを分けた。底部および口縁部と体部の形態から以下のように分類する。

- A 小さな平底または丸底で、内湾しながら頸部でやや締まる球形の体部に、短く内湾する口縁部をもつもの。口縁部径と胴部最大径はほぼ等しい。
 - B 1 丸底で、内湾しながら頸部で締まる扁球形の体部に、外傾する口縁部をもち、口縁部高が器高の約4/1のもの。口縁部径が胴部最大径より小さいものが多い。
 - B 2 丸底で、内湾しながら頸部で締まる扁球形の体部に、外傾する口縁部をもち、口縁部高が器高の約3/1のもの。口縁部径と胴部最大径はほぼ等しいものが多い。
 - B 3 丸底で、内湾しながら頸部で締まる扁球形の体部に、外傾する口縁部をもち、口縁部高が器高の約2/1のもの。口縁部径が胴部最大径より大きいものが多い。
 - C 1 丸底で、器高が口縁部径の1/2以下のもの。浅い椀形の体部に外傾する口縁部をもつ。
 - C 2 丸底で、器高が口縁部径の1/2以下のもの。浅い椀形の体部に有段口縁をもち、段から口縁部が外傾するもの。
 - C 3 丸底で、器高が口縁部径の1/2以下のもの。浅い椀形の体部に有段口縁をもち、段から口縁部が外反するもの。
 - D 台付小形丸底鉢。
- 手焙 (図50)** 鉢形の体部に覆部をもつ土器。

3. A区

1層(1~5) 耕土であり、土器の出土量は多くない。1は磁器碗高台で、内面以外に透明釉を施釉する。2は陶器碗高台で、内面に鉄釉を施釉し、外面には残存部上端に白色釉がみられる。3は厚手の須恵器插鉢で、胎土は白色砂粒を多く含み粗い。4は東播系捏鉢で、橋本氏編年(橋本1992)IV-2期、14世紀後半とみられる。5は土師器皿。小片のため図化していないが磁器染付が出土しており、1層は近世~近代に位置づけられる。

2層(6~11) 耕土であり、土器の出土量は多くない。6は玉縁口縁をもつ白磁碗で、IV類(横田・森田1978)、3期、12世紀のものとみられる。7は瀬戸窯の卸皿で、口縁部内外面に緑釉がかかる。8は陶器插鉢口縁である。9・10は東播系の須恵器捏鉢である。9は口縁部外面に釉がかかり、IV-2期、15世紀前半、10はIII-1期、13世紀前半とみられる。11は土師器皿である。口縁部径16.2cmを測る大皿である。

2面(12) 12は口縁部が外反する磁器猪口である。本遺物の出土により、2層および2面は、近世に位置づけられる。

4層(13~19) 13・14は玉縁口縁をもつ白磁碗で、13はII類、14はIV類(横田・森田1978)、両者とも3期、12世紀のものとみられる。15は磁器皿で、外面下半露胎。内面にはカキトリによる沈線が1条めぐり、16は和泉型瓦器碗で、III-2~3、13世紀後半に位置づけられる。17も瓦器碗であるが、焼成があまく内面が燻されていない。18は瓦器皿、19は土師器皿である。

5層(20) 瓦器三足釜脚部である。4層および5層は、12~14世紀を中心とする中世前半に位置づけられる。

6層~7層上半(21~23) 21は須恵器杯蓋、平城宮V。22は土師器皿。23は布留式期後半の土師器壺で、7層からの混入とみられる。

7層(24~32) 古墳時代前期~古墳時代後期の土器が非常に多く出土し、古墳時代前期土師器が中心をしめる。古墳時代前期土師器は庄内式期~布留式期全般にわたる。

24~41は須恵器である。杯蓋(24~26)、杯身(27~30)、無蓋高杯(31)、有蓋高杯(32)、無蓋高杯もしくは鉢(33)、高杯脚部(34)、鉄鉢形土器(35)、壺(36)、長頸壺(37)、甕(38・39)、提瓶(40)、甌(41)の各器形がみられる。うち、古相を示すものには、31・34・38・39があり、初期須恵器でもTK73に近い時期と考えられる。ただし、31は沈線が1条めぐりものの突帯が不明瞭である点がやや新相を示す。33は焼成が堅緻であり、TK208に位置づけられる。一方、新相を示すものには24・25・27~29があり、MT85に位置づけられる。

42~73は土師器壺である。広口壺A(42)、広口壺B(43)、広口壺C(45)、広口壺D(44)、短頸壺A(46・47)、短頸直口壺(48)、二重口縁壺A1(49~51)、二重口縁壺A2(54)、二重口縁壺A(52)、二重口縁壺B1(55)、二重口縁壺B2(56)、二重口縁壺B(57)、二重口縁壺D2(60)、直口壺(64)、小形丸底壺A(68・69)、小形丸底壺B(70~72)、小形丸底壺C(73)、壺底部(66・67)、外来系土器の壺(58・59・61~63・65)がある。42は口縁端部に面をもち、調整に粗いハケメを多用し、布留式期に位置づけられる。広口壺でも頸部径が大きく、あまりみられない器形である。45は頸部が短い壺であり、口縁端部を巻き込む。47は口縁部が直立気味であることから壺に含めたが、口縁端部が内側に肥厚し体部の器壁が薄いことから布留式甕となる可能性を残す。48は口縁部内面に黒色顔料が塗布される。

74~102は土師器高杯である。高杯A1(74~76)、高杯B(78~83)、高杯C(84~86)、高杯D2

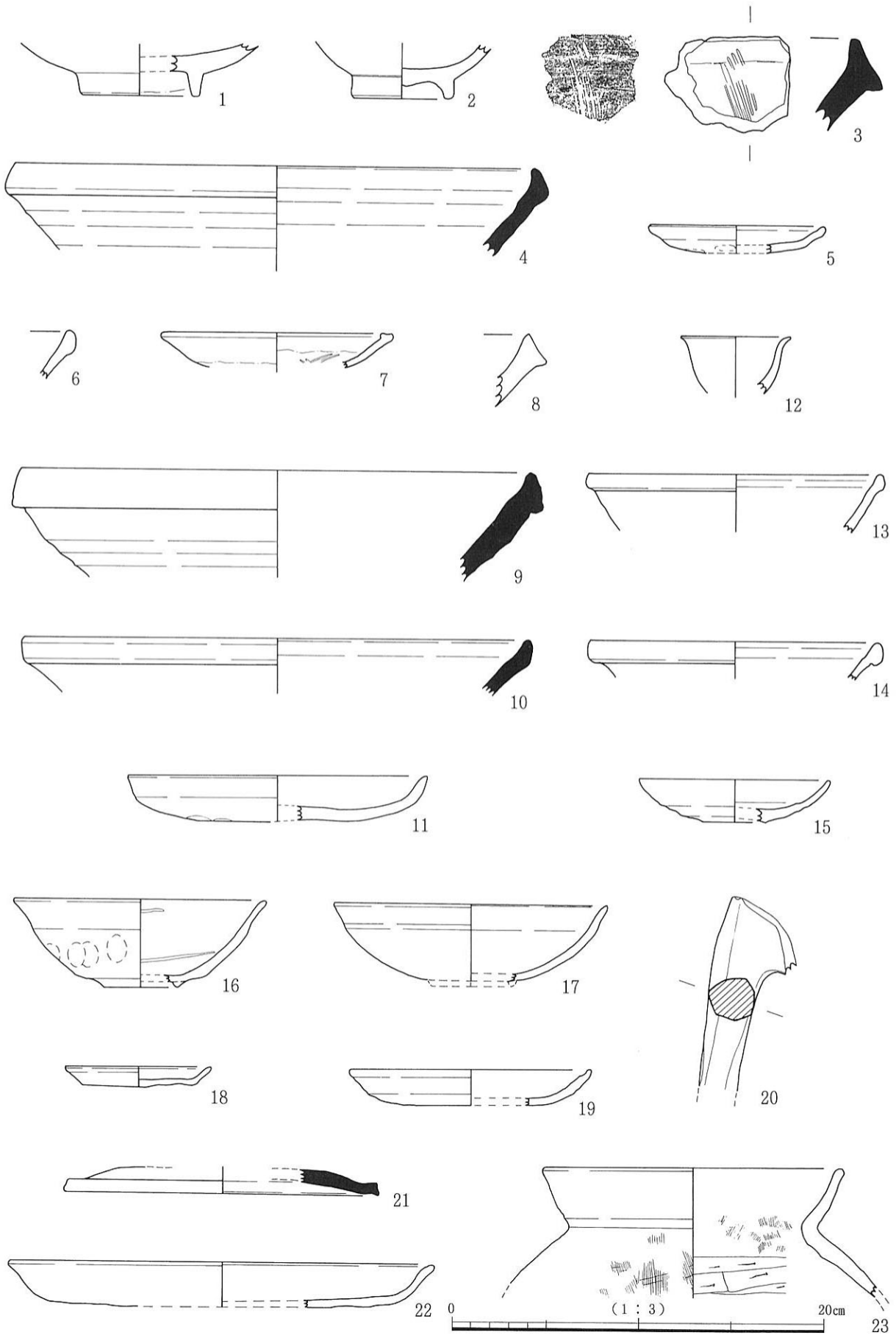


図53 A区1層・2層・2面・4層・5層・6層～7層上半出土土器

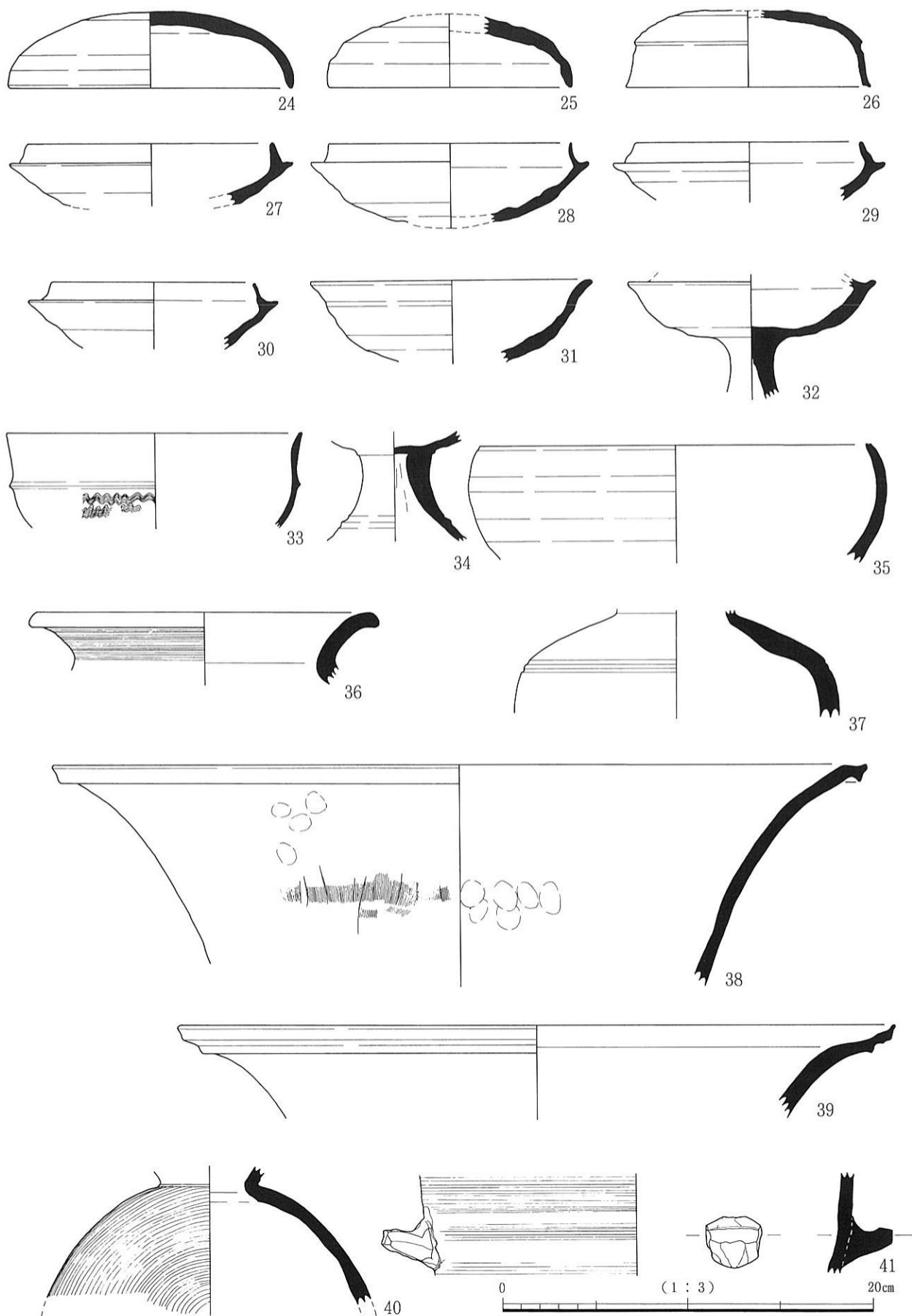


图54 A区7层出土土器

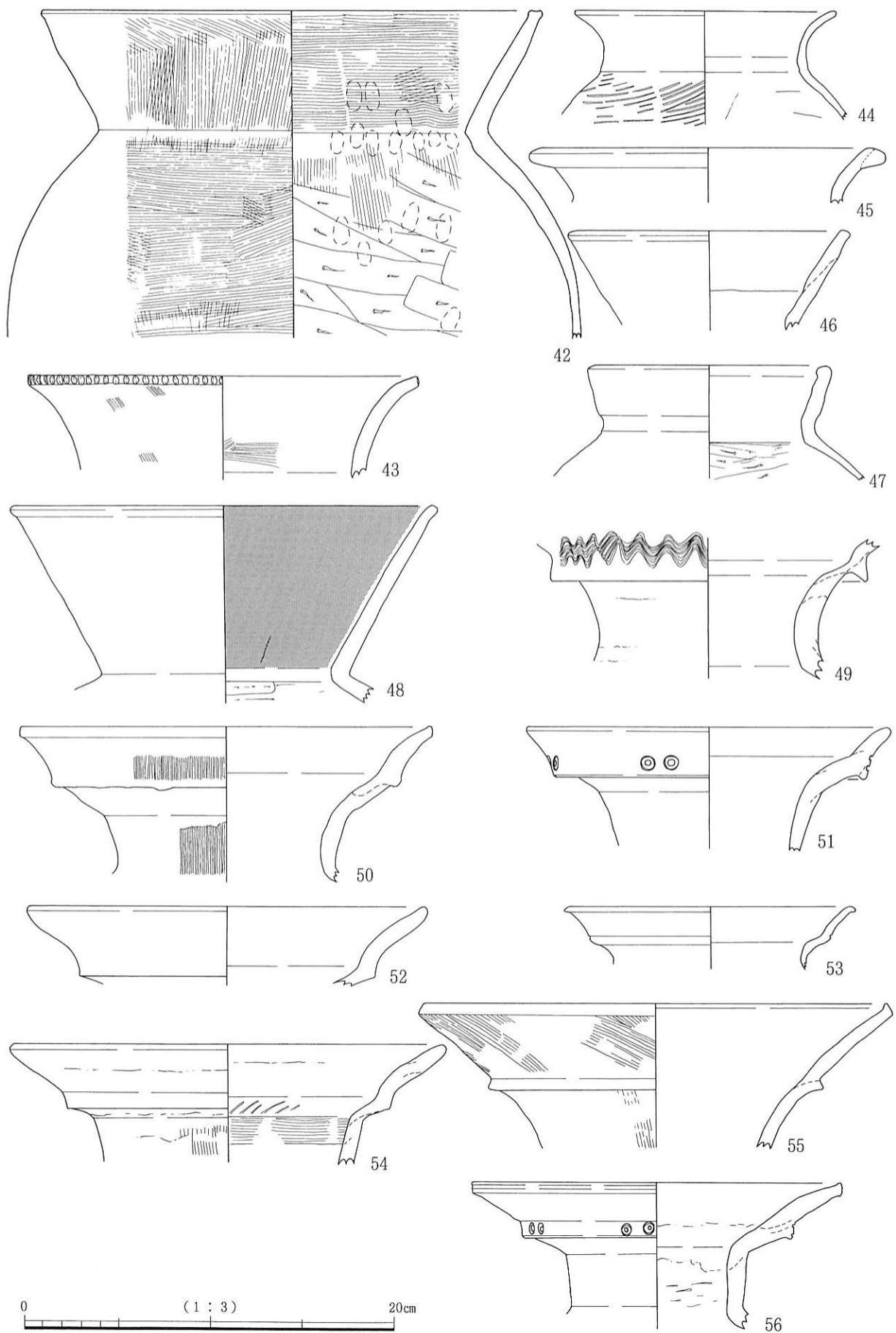


図55 A区7層出土土器

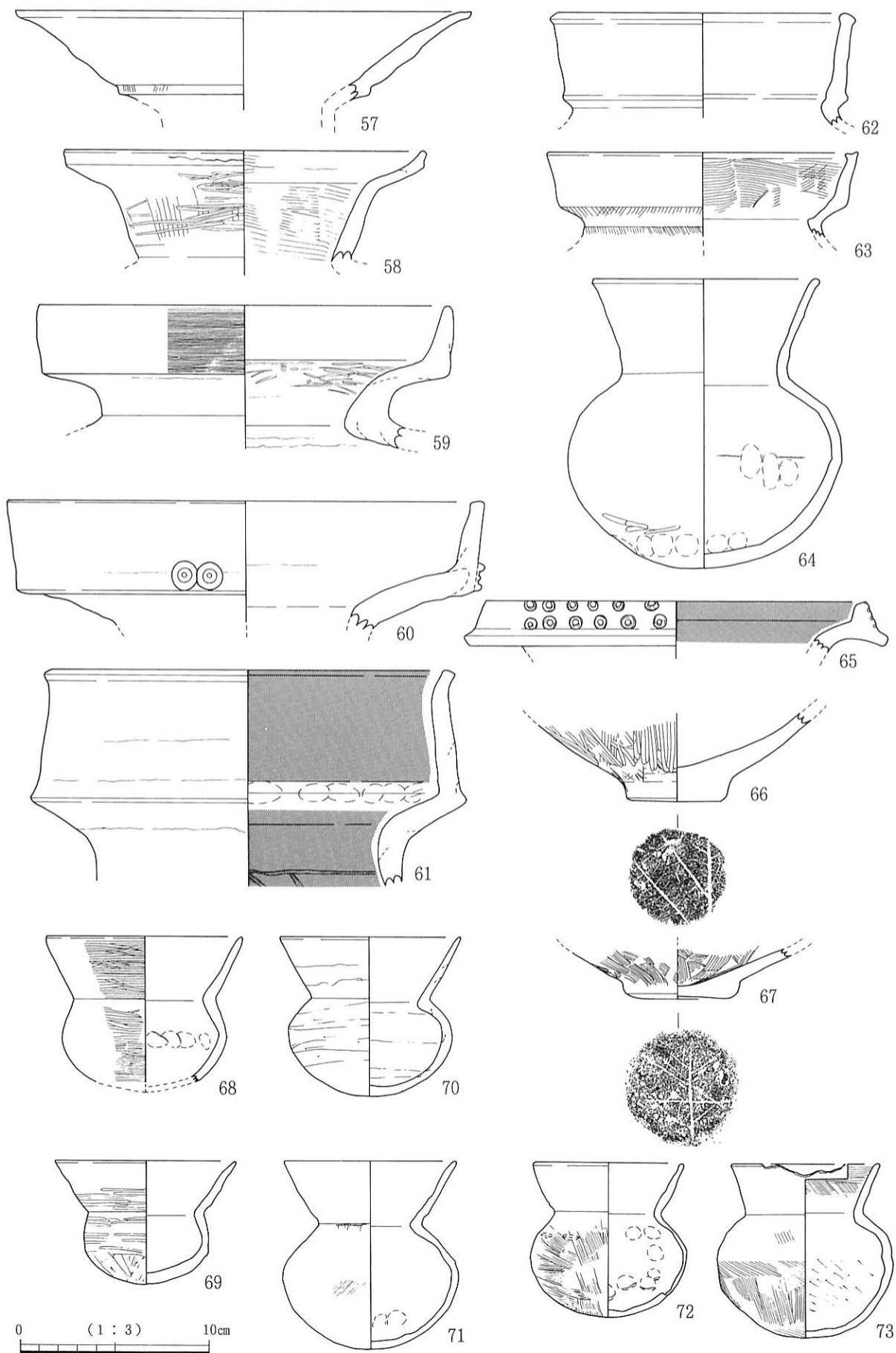


图56 A区7层出土土器

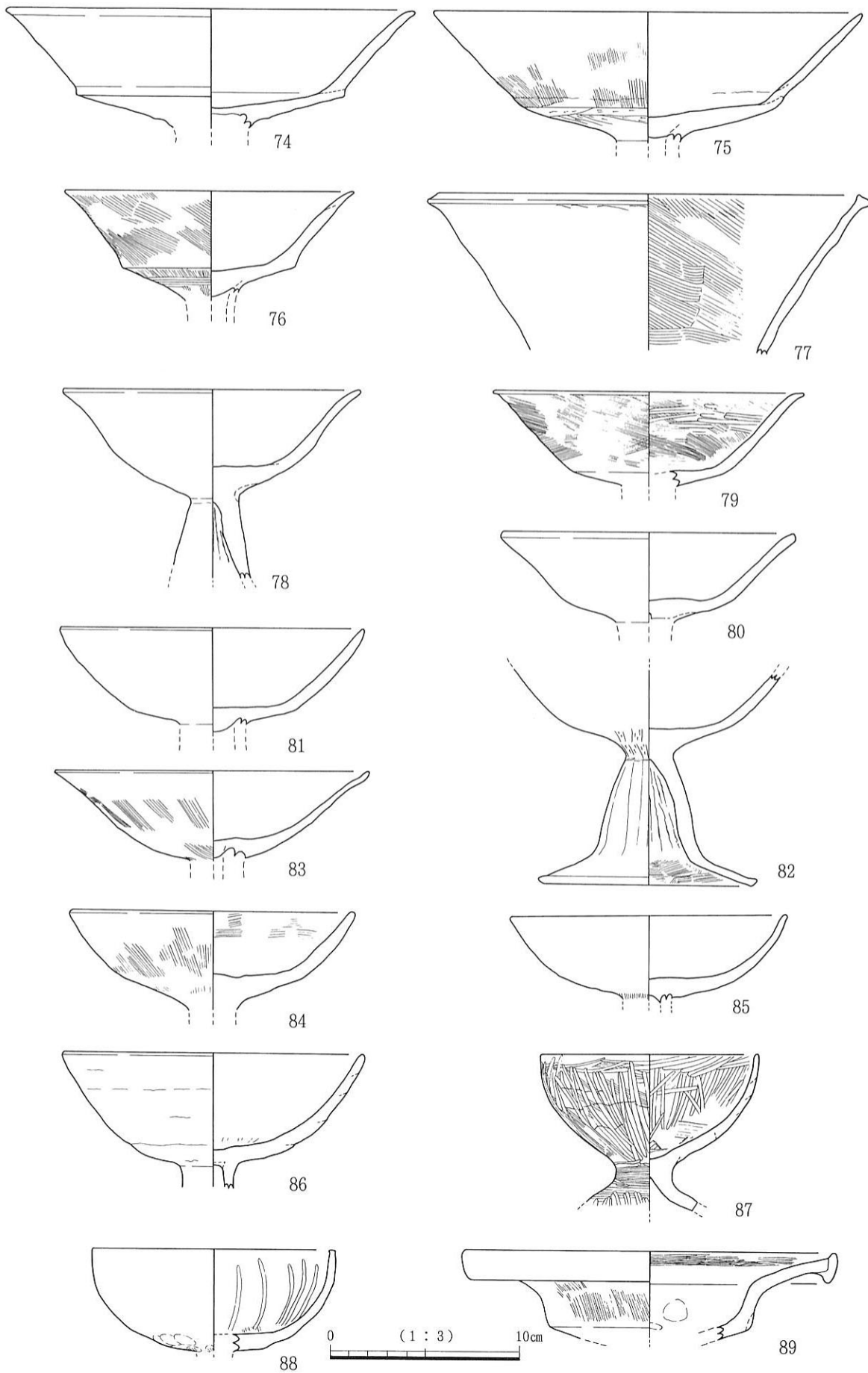


図57 A区7層出土土器

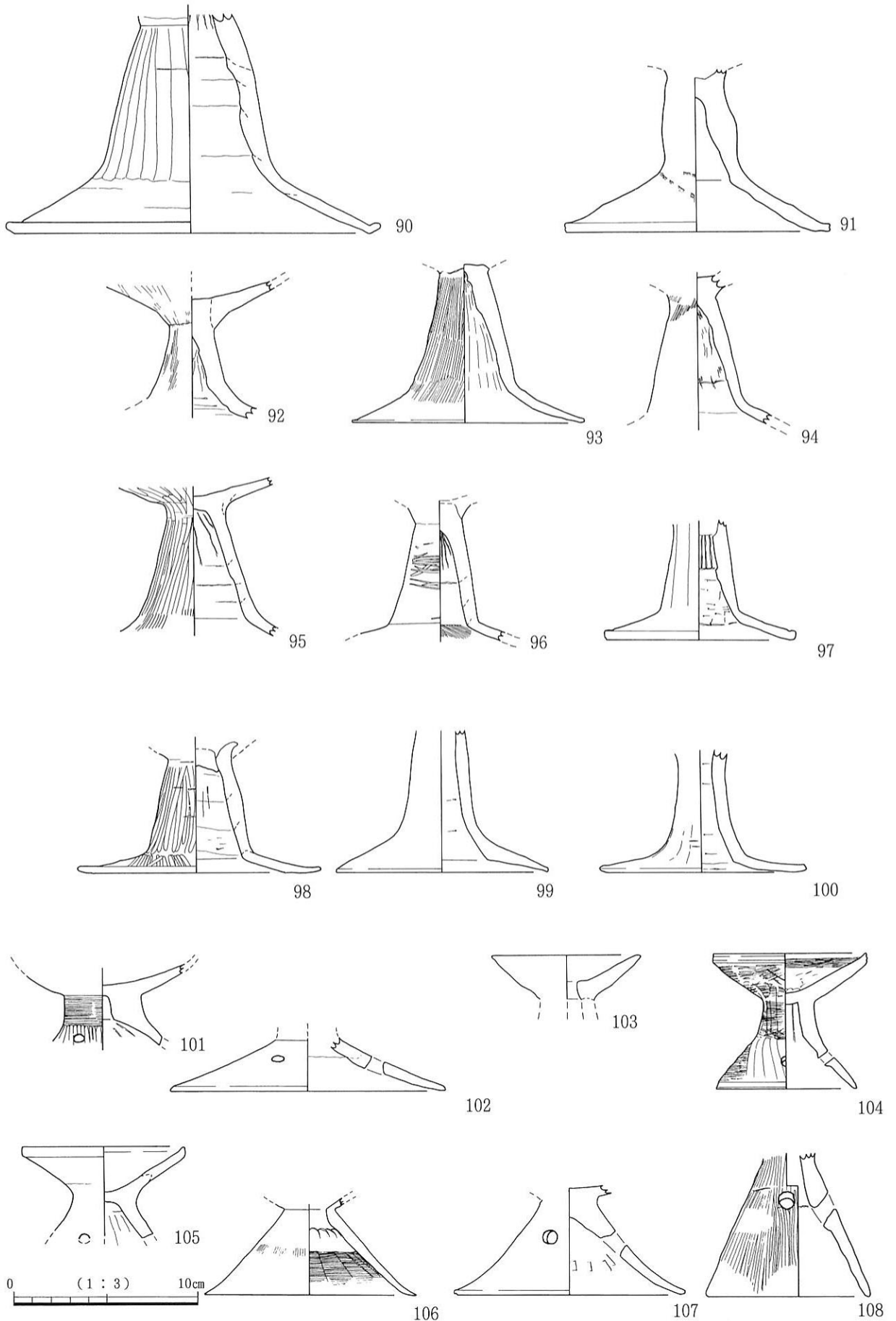


图58 A区7层出土土器

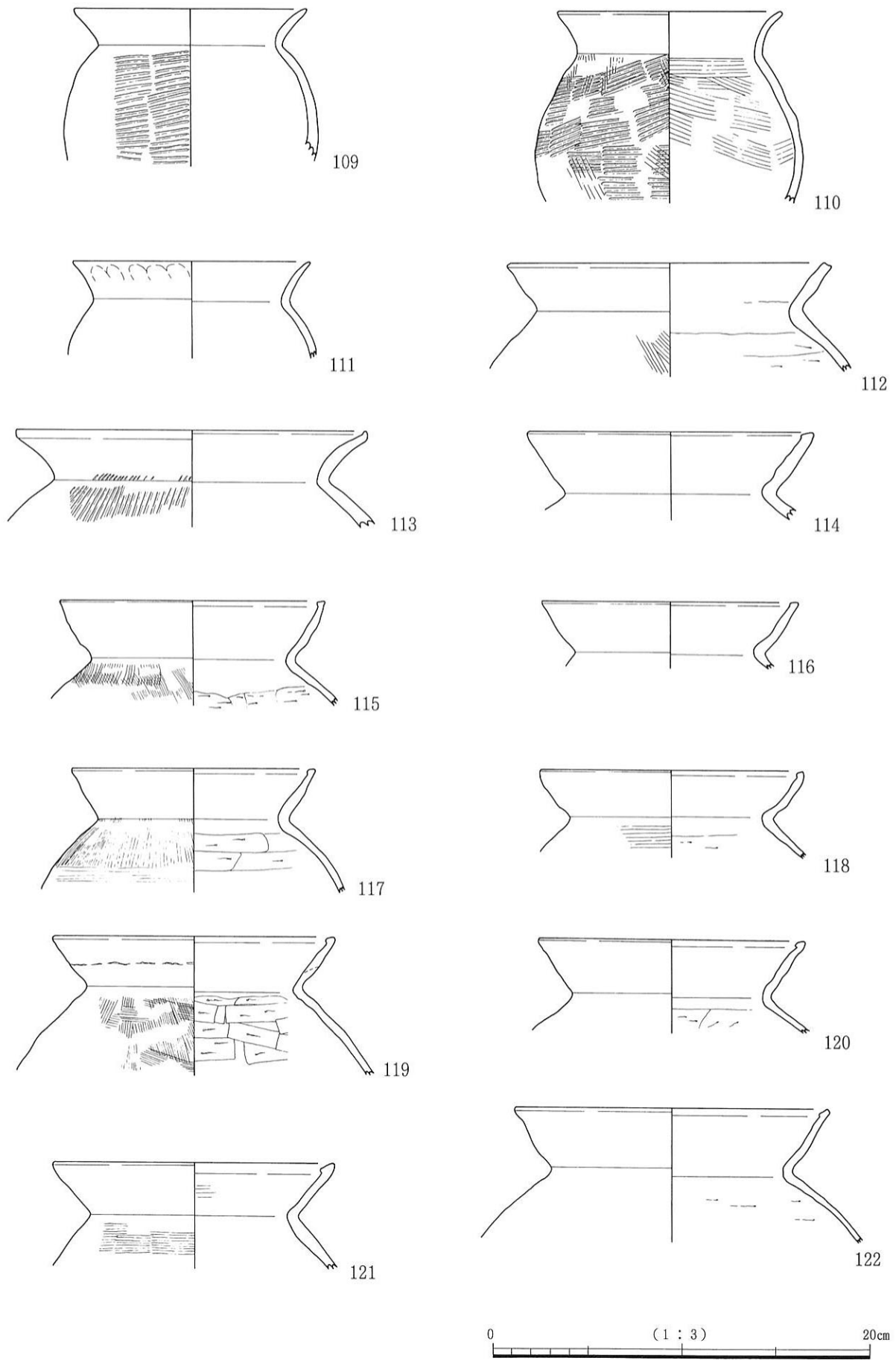


図59 A区7層出土土器

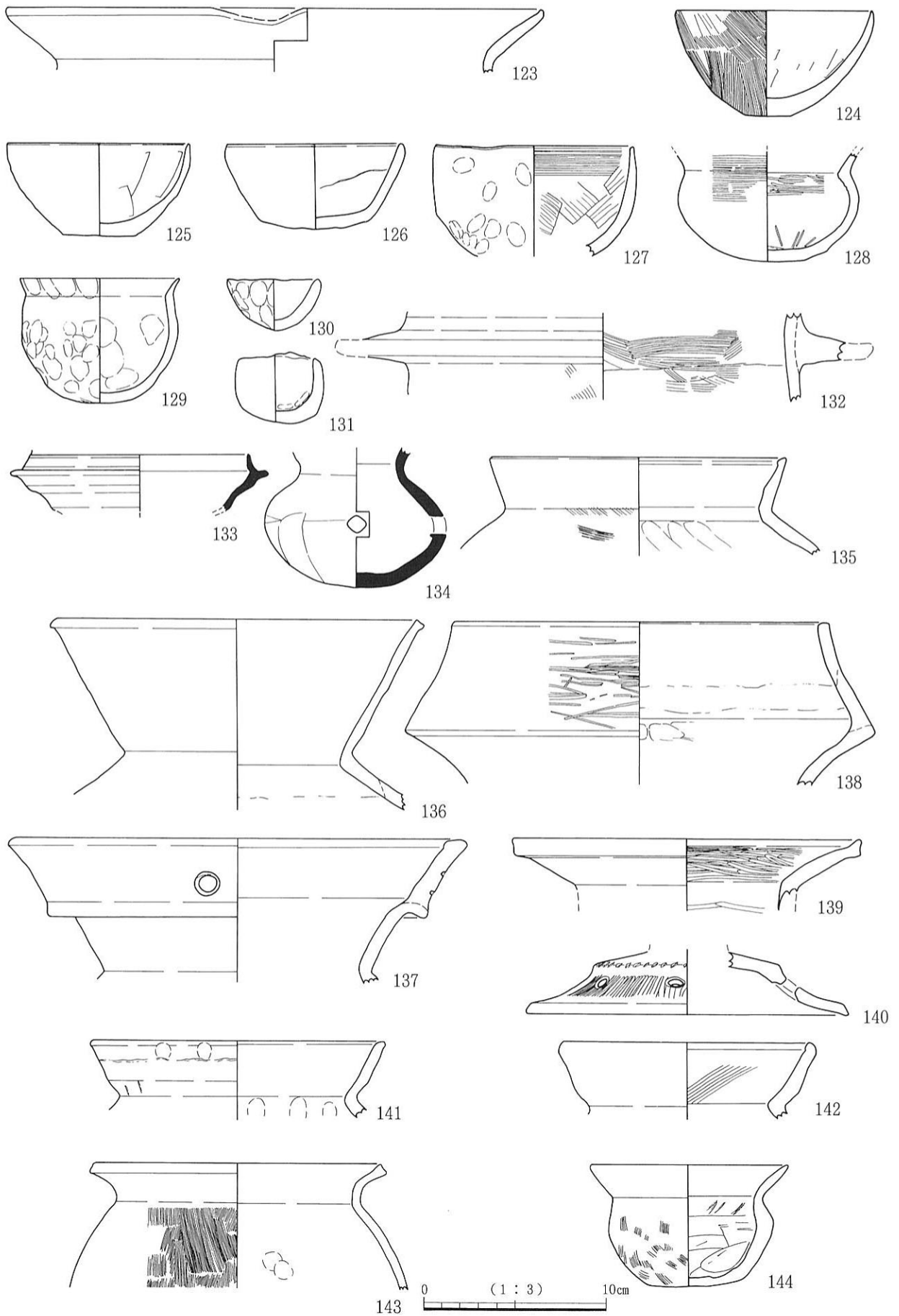


图60 A区7层·7面出土土器

(87・88・101・102)、高杯E (89) のほか、脚部 (90~100) がある。77はその傾きから高杯A 2になるかと考えたが、口縁端部の形状からは短頸直口壺となる可能性がある。80は杯部底面に直径4mm、深さ4mmの棒状工具の刺突痕がある。88は杯部内面に、不明瞭な放射状のミガキが暗文状に施文される。89は装飾性の高い器形であるが刺突文や浮文はみられない。口縁端部は粘土を継ぎ足し、上下に肥厚して面をなす。脚部は裾部の屈曲がゆるやかなもの (90~95)、明瞭なもの (97~100) があり、98~100の裾部は大きく開きほぼ水平に近い。90は非常に大きな脚部で裾部径が20cmを測る。粘土紐巻き上げ成形で、内面にはラセン状の接合痕が明瞭にみられる。

103~108は小形器台である。小形器台B (104)、小形器台C 2 (105)、小形器台C (106~108)、口縁部 (103) がある。104・105は口縁端部をつまみ上げる。

109~122は土師器甕である。弥生形甕A (109~111)、庄内形甕B (113)、布留形甕B (114~122)、布留形甕C (112)がある。弥生形甕Aは口縁端部a (109・110)、口縁端部b (111)、庄内形甕Bは口縁端部b (113)、布留形甕Bは口縁端部a (114~116)、口縁端部b (117~120)、口縁端部c (121・122)がある。112は体部外面にハケナデを施す。122の体部外面調整はハケメの可能性はあるが、磨滅が著しく不明である。

123~131は土師器鉢である。大形鉢A 2 (123)、小形鉢A 1 (124・125)、小形鉢A 2 (126・127)、小形丸底鉢A (129)、小形丸底鉢B (128)、手捏土器 (130・131) がある。123は片口になるとみられる。

132は羽釜の鏝部である。

7面 (133~144) 外来系土器の甕 (143) のみ弥生時代後期終末の可能性はある。他は7層同様、古墳時代前期~古墳時代後期の土器が出土し、古墳時代前期土師器は庄内式期~布留式期全般にわたる。

133・134は須恵器である。133は杯身でTK209に位置づけられる。134は甕で体部下半は不定方向にナデる。

135~142・144は古墳時代前期土師器である。広口壺A (135)、短頸直口壺 (136)、二重口縁壺C 1 (137)、外来系土器の壺 (138・139)、甕 (143) のほか、高杯E (140)、布留形甕Cの口縁端部a (141)、布留形甕Bの口縁端部b (142)、小形丸底鉢B 2 (144) がある。142の胎土は精良で橙色を呈する。

8層 (145~185) 弥生時代後期~古墳時代前期の土器が多く出土し、古墳時代前期土師器が中心をしめる。古墳時代前期土師器は庄内式期~布留式期初頭にわたり、庄内式期のものが主体である。

145~151・156は土師器壺である。二重口縁壺A 1 (145)、二重口縁壺A 2 (146・148)、二重口縁壺A (149)、二重口縁壺B (147)、二重口縁壺D 1 (150)、二重口縁壺D 2 (151)、小さな平底をもつ丸底の底部 (156) がある。151はヘラで口縁部内外面に波状文を描く。156は底部近くの体部に外面から円形の打ち欠きが施されている可能性がある。

152~155は弥生土器壺である。152は長頸壺で、肩部にヘラ記号をもつ。これらの弥生土器は、弥生時代後期でも後半に位置づけられると考える。

157~161は土師器高杯である。高杯B (158)、外来系土器の高杯 (157・159)、脚部 (160~161) がある。

163~167は小形器台である。小形器台A 1 (163)、小形器台A 2 (165)、小形器台C 1 (164)、小形器台C (166)、裾部 (167) がある。163は口縁部径12.5cm、復元高約10cmと大形で、口縁端部に口縁部を付加したならばそのまま高杯になる形状である。164は口縁部と脚部の接合痕が明瞭で、脚部から口

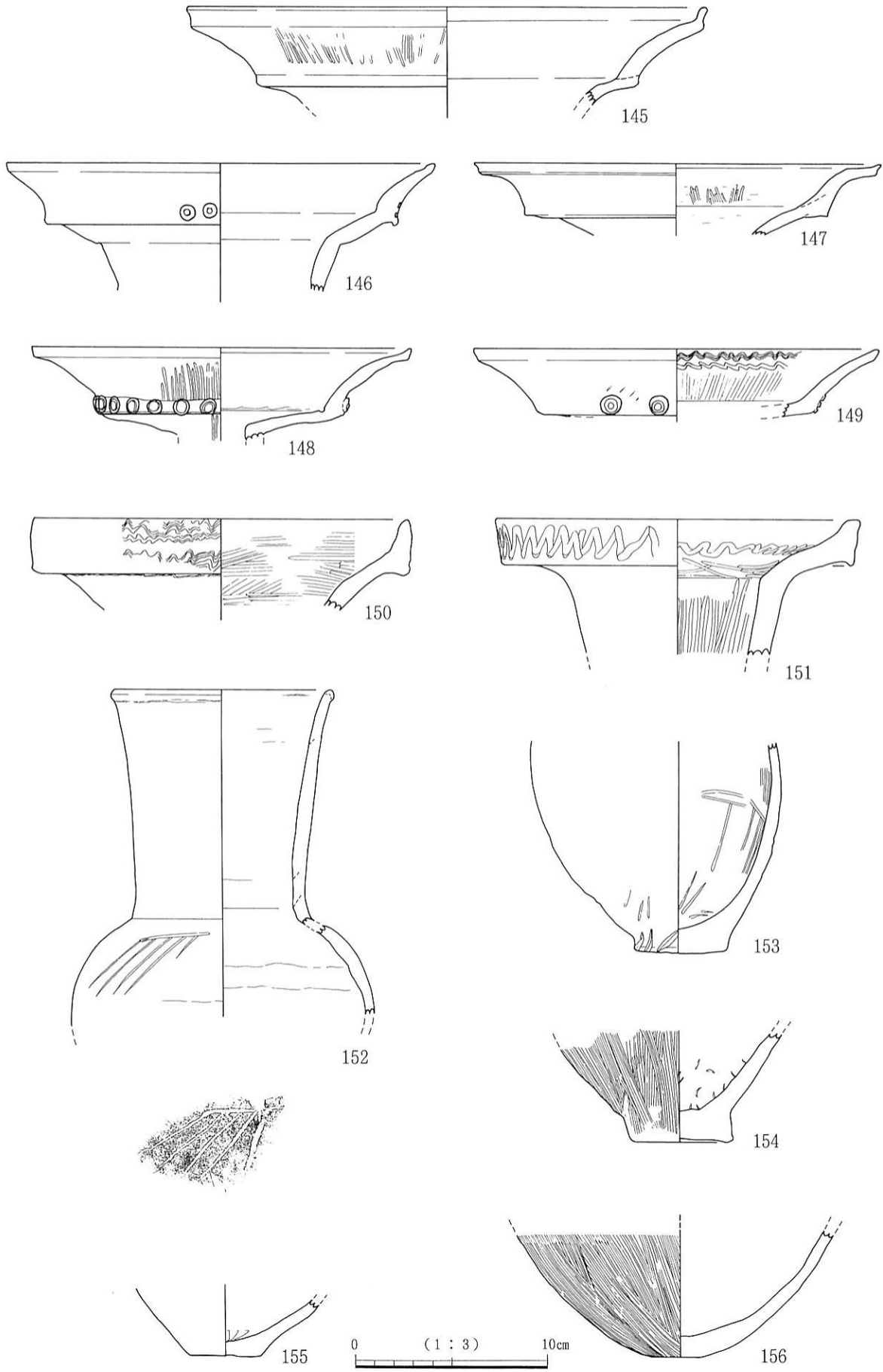


图61 A区8层出土土器

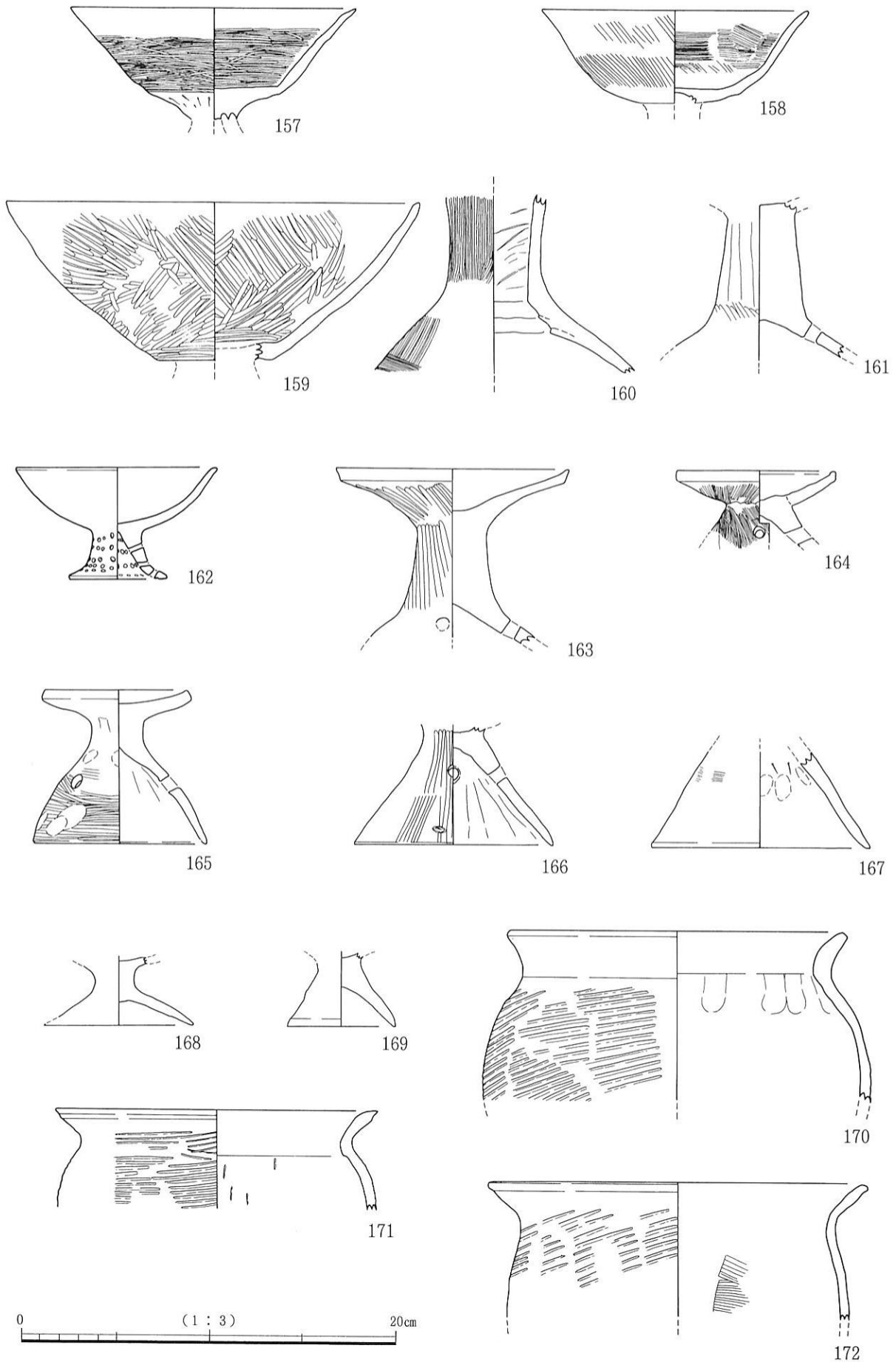


图62 A区8層出土土器

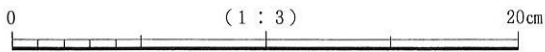
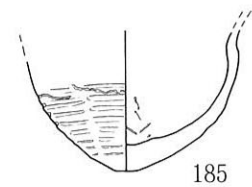
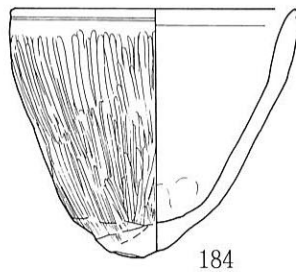
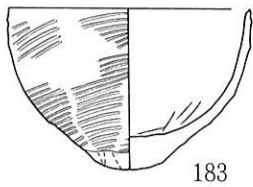
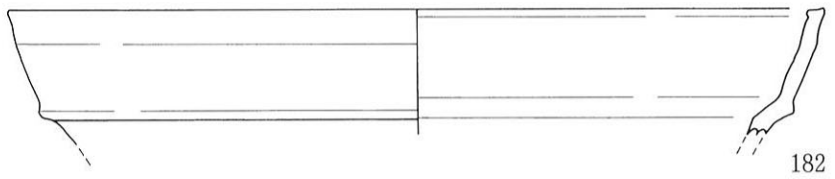
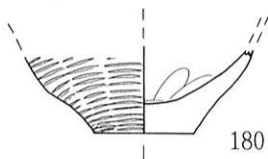
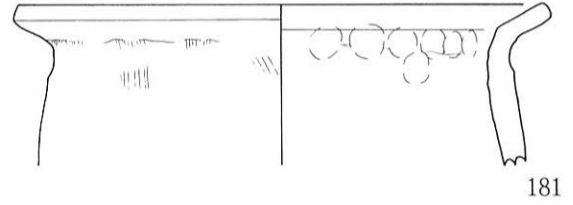
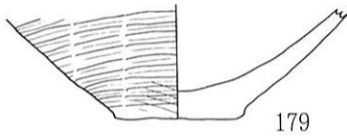
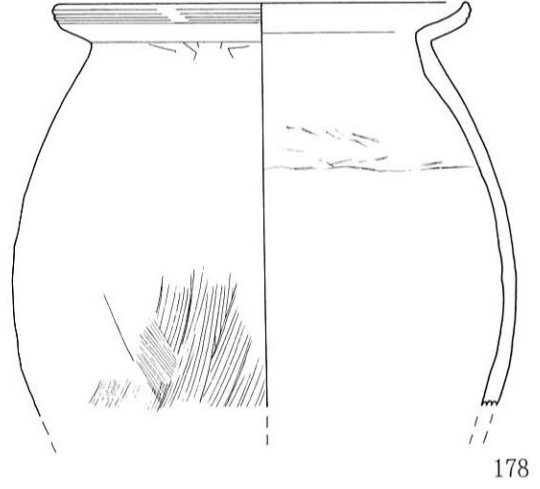
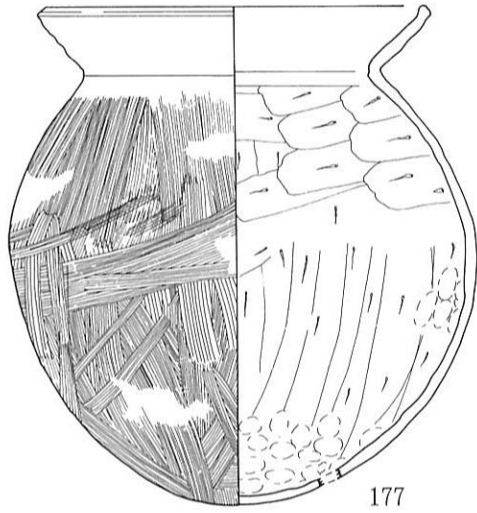
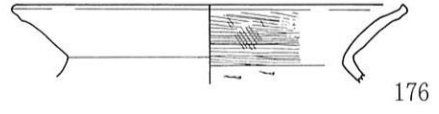
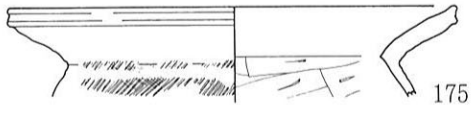
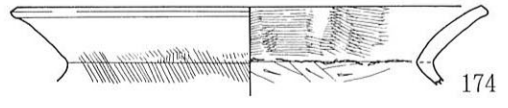
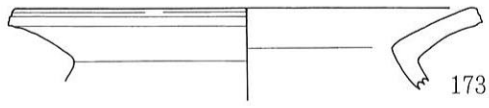


图63 A区8层出土土器

縁部を作り出していることがよくわかる。163・164とも口縁部内面の器壁が他の部分に比べ荒れており、人為的な敲打痕の可能性が考えられる。

170～172、174～177、179・180は土師器甕である。弥生形甕A 1 (170)、弥生形甕A 2 (171・172)、外来系土器の庄内形甕A (174～176)、布留形甕A (177)、底部 (179・180) がある。弥生形甕A 1は口縁端部a (170)、弥生形甕A 2は口縁端部a (172)と横方向へつまむもの (171)、庄内形甕Aは口縁端部a (175・176)と面をもつもの (174)、布留形甕Aは口縁端部b (177)がある。177は完形で倒卵形を呈する。胎土は白っぽく在地のものともみられる。布留式期初頭に位置づけられる。180は底部外面に×のヘラ記号がある。

173・178・181は弥生土器甕である。173は後期、178は中期 (IV様式)、181は中期 (III様式) に属すると考えられる。

162・168・169・182～185は土師器鉢である。小形鉢A 1 (183)、小形鉢B 2 (184)、小形鉢E 1 (162)、小形鉢Fの脚台 (168・169)、小形丸底鉢A (185)、外来系土器の鉢 (182) がある。162は、脚部に直径2mmの円孔を多数穿ち、その位置は横方向を意識しているようであるが整ってはいない。庄内式期のものか。

9層 (186～188) 弥生時代中期～古墳時代前期の土器が少量出土し、弥生土器が多い。

186は弥生土器器台である。口縁端部を拡張し凹線文を施文する。胎土に角閃石を含み、河内からの外来系土器の可能性もある。後期初頭に位置づけられる。187は布留形甕Aである。188は弥生土器甕である。破片が小さく図のような傾きとなったが、もう少し体部が膨らむ可能性がある。弥生時代中期後半に位置づけられる。

9面 (189) 189は弥生土器甕で、底部を除きほぼ完形である。二次焼成により体部上半には煤が付着し、体部下半は剥落が著しい。弥生時代中期後半に位置づけられる。

10層 (190～197) 弥生時代中期～古墳時代前期の土器が少量出土し、弥生土器が多い。

190は小形器台C 1である。口縁部は浅い皿状で、内面には放射状のミガキが施文される。191は弥生土器長頸壺の口頸部で、後期中頃に位置づけられる。192・193は弥生土器甕である。192の外面は幅5～7mmのヘラナデが粗く施され、砂粒の動きが表面で観察される。両者とも中期後半に位置づけられる。194は弥生土器甕底部で、中期と考えられる。195・196は弥生土器壺底部で、195底部外面には木の葉痕がみられる。197は弥生土器把手付台付鉢で、中期 (IV様式) 後半に位置づけられる。

11層 (198・525) 出土遺物は少ない。

198は弥生土器甕で、ほぼ完形に近い。二次焼成のため外面には煤が付着し、下半は剥落する箇所がある。前期新段階に位置づけられる。525は弥生土器甕底部で、中期に位置づけられる。

1面河川1 (199～213) 中世～近世の遺物が主体であり、古墳時代前期遺物を少量含む。古墳時代前期遺物は、下層の7層をはじめとする古墳時代遺物包含層を河川が切り込むため混入したと考えられる。遺物量はそう多くはなく、A区でコンテナ1～2箱程度である。

199は磁器染付碗で高台置付は無釉である。200・201は青磁碗高台で、200の釉はやや褐色を呈し、201の高台置付には砂が溶着する。202は須恵器播鉢である。203は和泉型瓦器碗で、III-2～3、13世紀後半に位置づけられる。204は瓦器皿、205は土師器鍋である。206は東播系須恵器捏鉢で、II-3期、12世紀末とみられる。207は須恵器双耳壺である。肩部と体部に突部がめぐり、それを連結するように幅1.3～2cmの幅広の把手が貼付される。平安時代のものか。208は須恵器甕である。焼成があまり灰白色

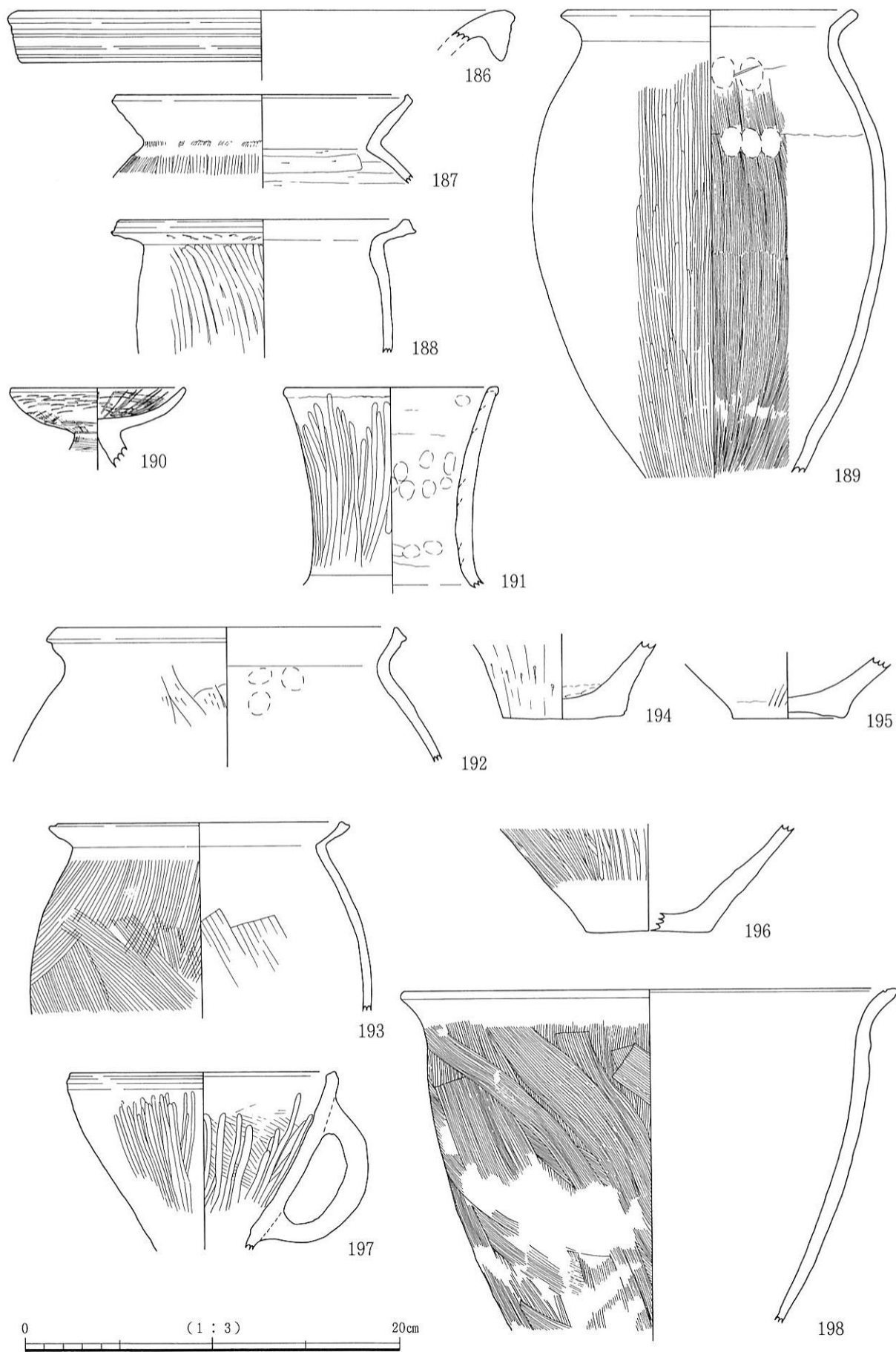


图64 A区9层·9面·10层·11层出土土器

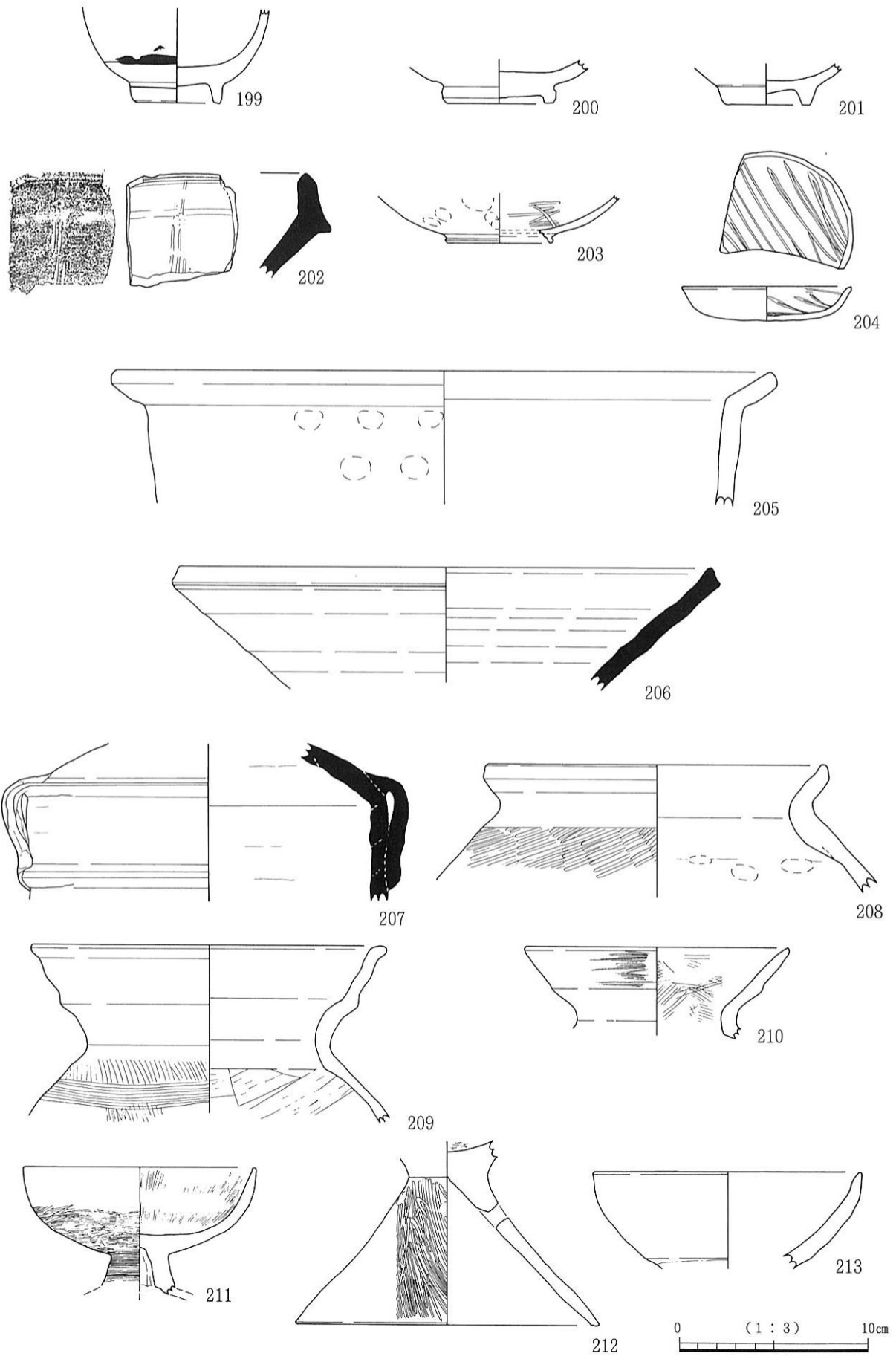


図65 A区1面河川1出土土器

を呈する。209～212は古墳時代前期土師器。209は二重口縁壺A 1、210は二重口縁壺B1である。211は高杯D 2、212は高杯脚部で東海系の外来系土器となる可能性がある。213は内外面鉄釉が施釉される天目碗である。

1面鋤溝(214) 1面鋤溝、溝出土遺物は僅かな中近世陶磁器の小片に限られる。214は瓦器皿でⅡ期前半、12世紀前半とみられる。

1面溝(215～218) 215は溝63、216・217は溝64、218は溝100出土である。215は東播系須恵器捏鉢で、Ⅱ-2期、12世紀中頃とみられる。216は瓦器火鉢で外面に菊花文スタンプが押印される。217は東播系須恵器捏鉢で、Ⅲ期前半、13世紀前半とみられる。218は土師器甕。奈良時代の甕とみられ、下層からの混入である。

6面建物1(219) 土師器小形鉢A 2である。口縁部はやや湾曲してたちあがる。他は土師器小片が出土するのみである。

6面建物2(220・221) 220は土師器小形丸底鉢Aである。口縁部の屈曲はほとんどなく、内面には稜があるが外面ではみられない。221は土師器小形丸底壺Cである。他は土師器小片が出土するのみである。

6面穴(222～225) 222は須恵器高杯杯部で突線間に櫛描刺突文をめぐらせる。TK10～TK43に位置づけられる。223は土師器広口壺B、224は土師器高杯脚部、225は軟質土器甕で格子タタキがみられる。

6面溝(226～231) 226・227は溝74、228は溝73、229は溝78、230は溝72、231は溝69出土である。226は土師器高杯B、227は土師器高杯脚部である。228は土師器庄内形甕Aで外来系土器である。229は須恵器杯身でMT85に位置づけられる。230は須恵器高杯で脚部に突線がめぐる。焼成は良好ではあるが、堅緻ではなく、灰白色を呈する。初期須恵器の範疇に入るとみられ、TK73に並行する。231は土師器広口壺Bである。

7面建物4(232) 土師器二重口縁壺Aで、口縁端部は内側に肥厚する。

7面建物8(233) 土師器弥生形甕Aで、口縁端部aをもつ。

7面穴(234～242・244～253) 234は土師器小形器台C 1でほぼ完形である。235は須恵器杯身で、外面底部周辺は手持ちヘラケズリで仕上げる。断面はやや赤紫色を呈し焼成は堅緻である。初期須恵器の範疇に入り、TK73に並行する時期と考えられる。237は土師器大形鉢で、口縁部には凹線が2条めぐる。238は手捏土器。236・239～242・245・248・251～253は土師器高杯で、251は高杯A 1、239・241は高杯C、242は高杯B、253は高杯Eである。244は外面タタキであるが、器壁が厚く、外側に大きく開き、煤の付着もみられないことから壺底部とみられる。246は小形器台C 3。247・250は小形丸底壺B 2。249は小形甕A 4。

7面溝120(254～317) 古墳時代前期土師器が非常に多く出土し、須恵器は254のみが出土した。当初混入かと考えられたが、これにつづく2A区溝120上層で古墳時代中期～後期の須恵器が出土し、本遺構出土遺物の年代幅は弥生時代後期～古墳時代後期にわたることが確実となった。古墳時代前期土師器は庄内式期～布留式期全般にわたる。下層の砂層については後述する。

254は須恵器杯身で、MT85～TK209に位置づけられる。

255～268は土師器壺である。短頸壺A(255～258)、二重口縁壺(262)、壺体部(263)、直口壺(264)、小形丸底壺B(266)、小形丸底壺C(267)、小形丸底壺(265)、壺底部(268)、外来系土器の壺(259～261)がある。256は庄内式期前半に位置づけられる。258は口縁部外面に縦方向コ字形のヘラ記号がみ

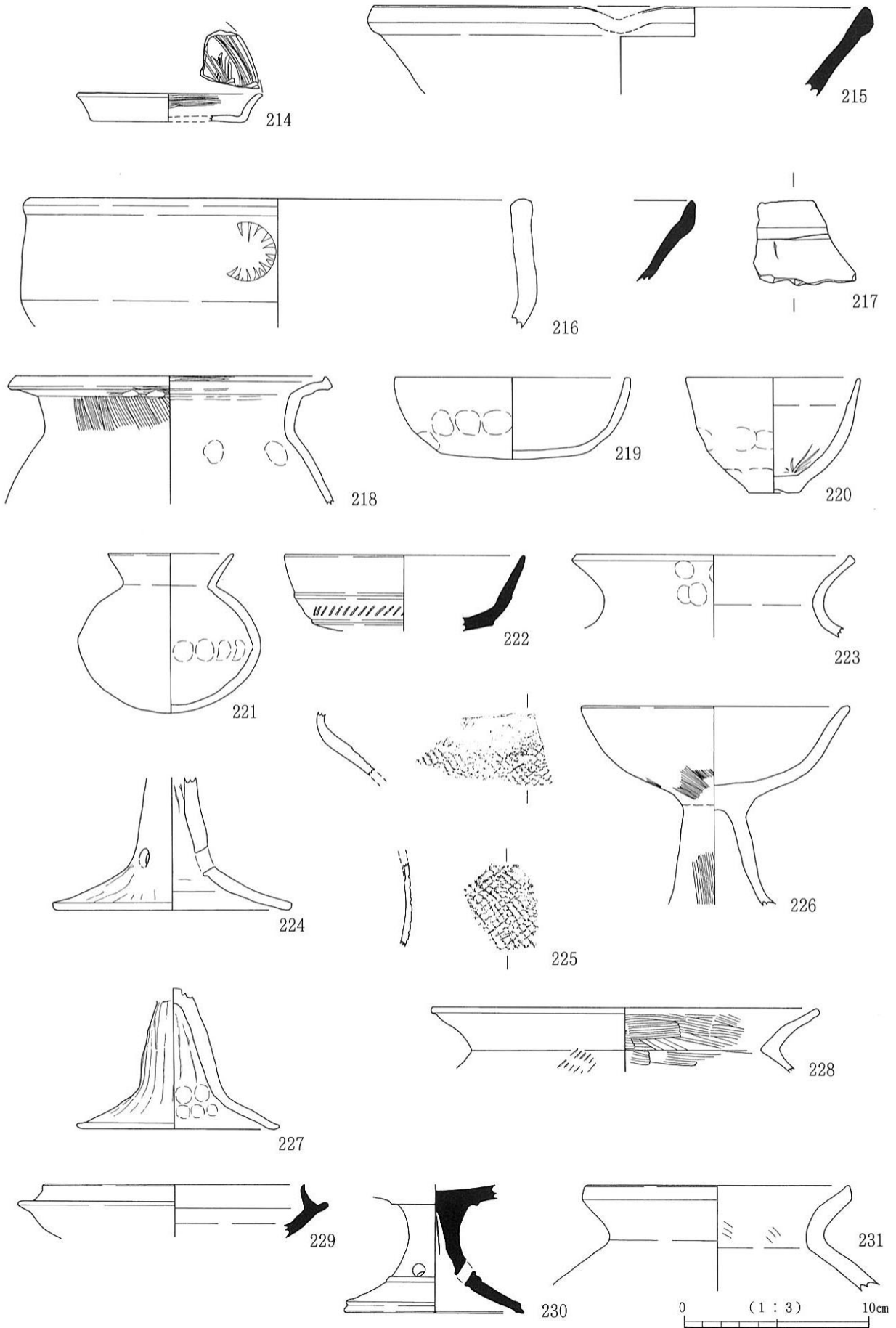


図66 A区1面鋤溝・溝 6面建物1・建物2・穴・溝出土土器

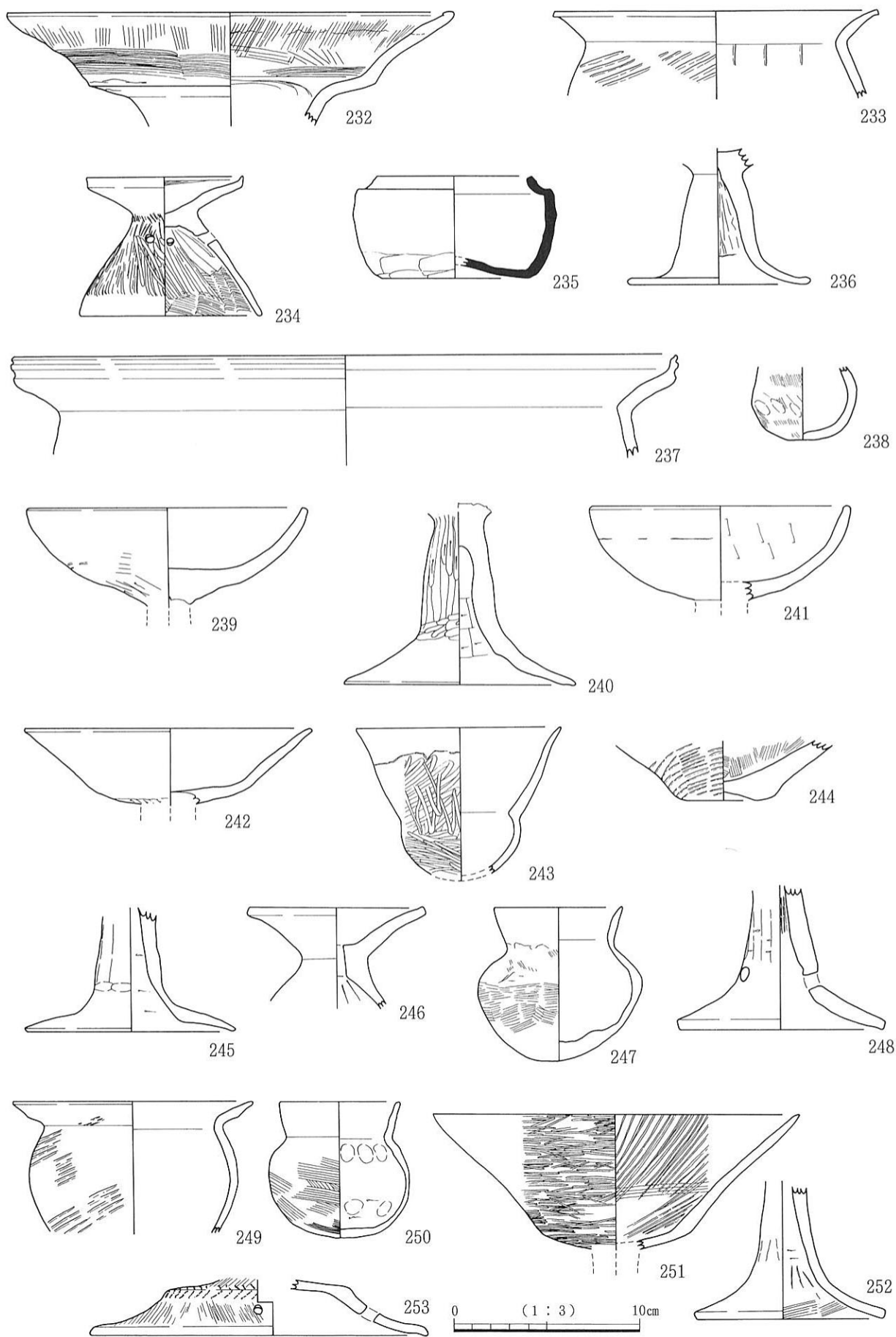


图67 A区7面建物4・建物8・穴出土土器

られ、263は体部外面のハケメ調整後に列点状のヘラ記号が記される。264は口縁部が内湾し、布留式期に位置づけられる。265は口頸部を欠く完形の体部で、破断面からは意図的な口頸部の打ち欠きが想定される。体部外面には煤が付着し、内面には煤の付着が一部みられ斑状の剥離痕があることから穀物粒の痕跡の可能性はある。259・261の内面には黒色顔料が塗布される。

269～275・277～279は土師器高杯である。高杯A(279)、高杯B(269・270・272)、高杯C(271)、高杯D1(277・278)、高杯D2(274)のほか、脚部(273・275)がある。270・273は庄内式期前半に、274は庄内式期後半に位置づけられる。271は細い脚柱部をもち、胎土が橙色を呈するもので、碗形の杯部が付く布留式期後半の高杯と考えられる。277・278は小形器台ともみられるが、器壁が厚くD1に含めた。

276は弥生土器高杯であり、弥生後期に位置づけられる。円盤充填痕が顕著である。

280～291は土師器甕である。弥生形甕A2(280・281)、庄内形甕A(282)、布留形甕A(283・291)、布留形甕B(285・286)、布留形甕C(284・287・288・289・290)がある。弥生形甕A2は口縁端部a(280)、庄内形甕Aは口縁端部a(282)、布留形甕Aは口縁端部b(283・291)、布留形甕Bは口縁端部b(285)、口縁端部c(286)、布留形甕Cは口縁端部a(287・288)、口縁端部d(284・289・290)がある。282は角閃石を含む外来土器である。281は底部がやや丸底化しており、庄内式期後半に位置づけられる。

292～315は土師器鉢である。大形鉢(292)、中形鉢A(294)、中形鉢底部(293)、小形鉢A1(295)、小形鉢(296)、手捏土器(297～299)、小形丸底鉢A(300)、小形丸底鉢B1(301・302)、小形丸底鉢B2(303～306)、小形丸底鉢B3(307～311)、小形丸底鉢C1(312)、小形丸底鉢C2(313・314)、小形丸底鉢C3(315)がある。292は口縁部に浅い凹線がめぐり、残存部は片口部分である。二重口縁をもつ大形鉢となり、外来系土器になる可能性があるが、小片のため判断し難い。296は内面に赤色顔料(鉄+水銀)がみられる。外面全体に煤が付着し、下半は剥落した箇所にも煤が付着していることから、欠損品を二次的に利用している可能性がある。300・306は小さなくぼみ底をもち、庄内式期前半に位置づけられる。308は外面に煤が付着し、体部に幅6cm高さ3cmの打ち欠きがある。布留式期の中頃に位置づけられる。

316・317は蓋、318は韓式系土器の鉢の把手になる可能性がある。

7面溝120砂層(319～402) 古墳時代前期土器が非常に多く出土し、須恵器は出土しない。出土遺物の年代幅は弥生時代後期～古墳時代前期にわたる。古墳時代前期土師器は庄内式期～布留式期全般にわたり、庄内式期後半～布留式期前半のものが多し。

319～347は土師器壺である。広口壺B(319)、短頸壺A(321)、短頸壺B(322)、短頸直口壺(320)、二重口縁壺B1(325・327)、二重口縁壺B2(323・324・326)、二重口縁壺D2(328)、二重口縁壺(333・334)、小形丸底壺(347)、壺底部(337～346)、外来系土器の壺(329～332・335)、口縁部がゆるやかに内湾する広口壺(336)がある。320は庄内式期、324・333は庄内式期後半、326は庄内式期最終末に位置づけられる。334は小形の二重口縁壺で、精良な胎土を用い丁寧に仕上げられる。橙色を呈し外面には赤色顔料(?)が一部残る。344は平底の壺底部とみられるが、内面に稜があり鉢になる可能性もある。内面の稜線より下に赤色顔料(鉄)がみられる。

348～357は土師器高杯である。高杯B(348～351)、高杯D1(353・354)、高杯D2(355)、高杯E(356)のほか、脚部(357)がある。349は庄内式期最終末に位置づけられる。

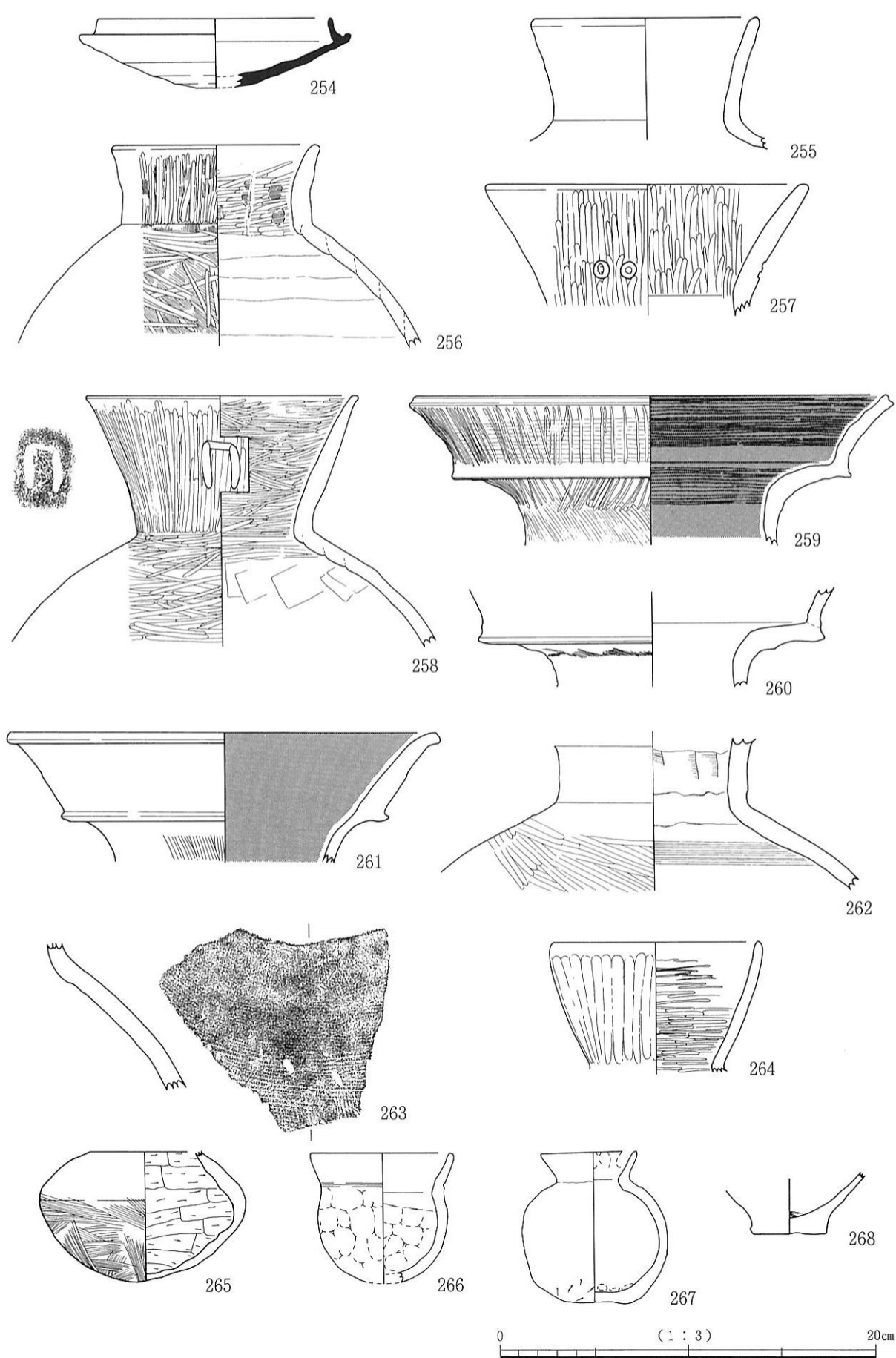


图68 A区7面沟120出土土器

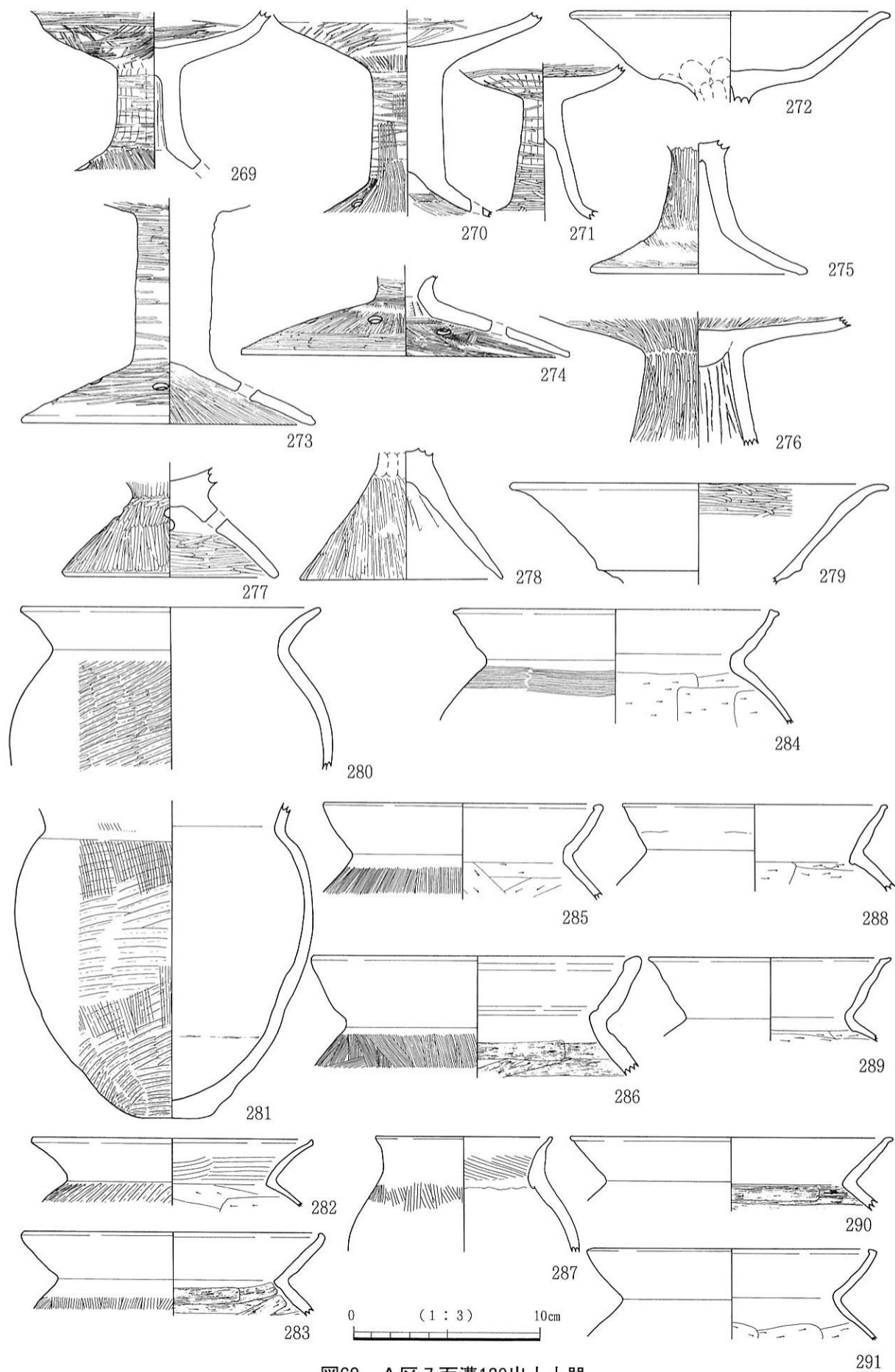


図69 A区7面溝120出土土器

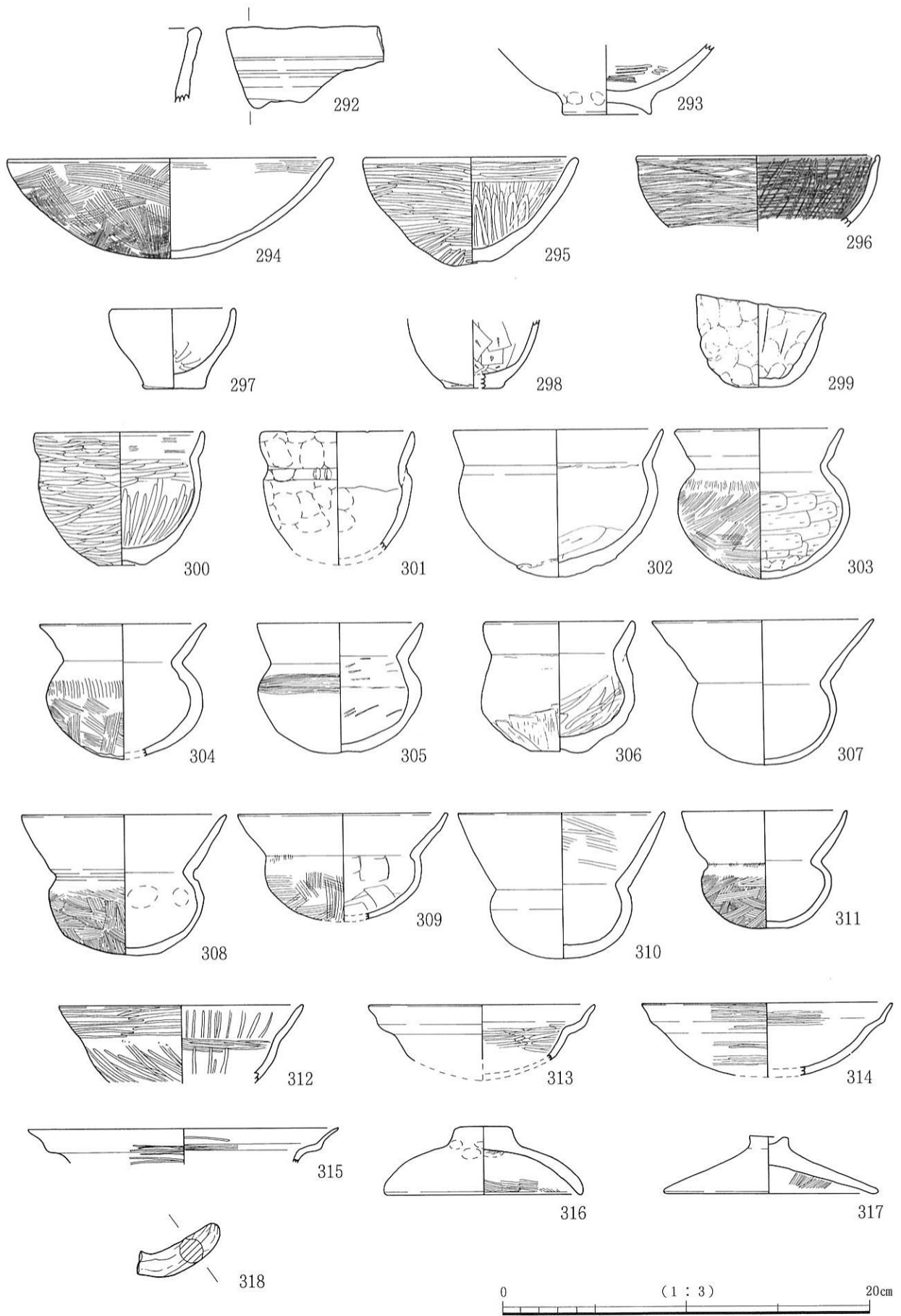


图70 A区7面沟120出土土器

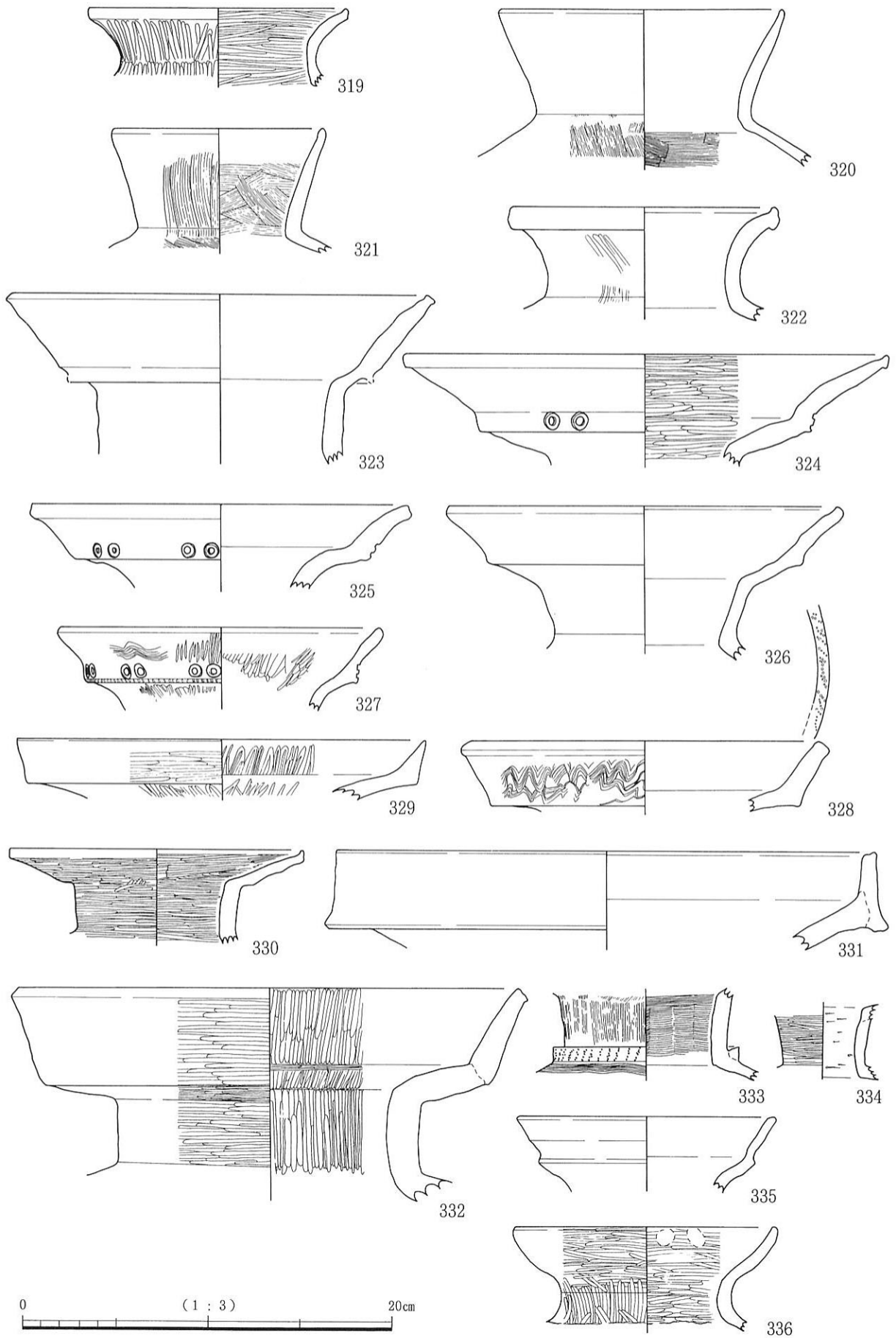


図71 A区7面溝120砂層出土土器

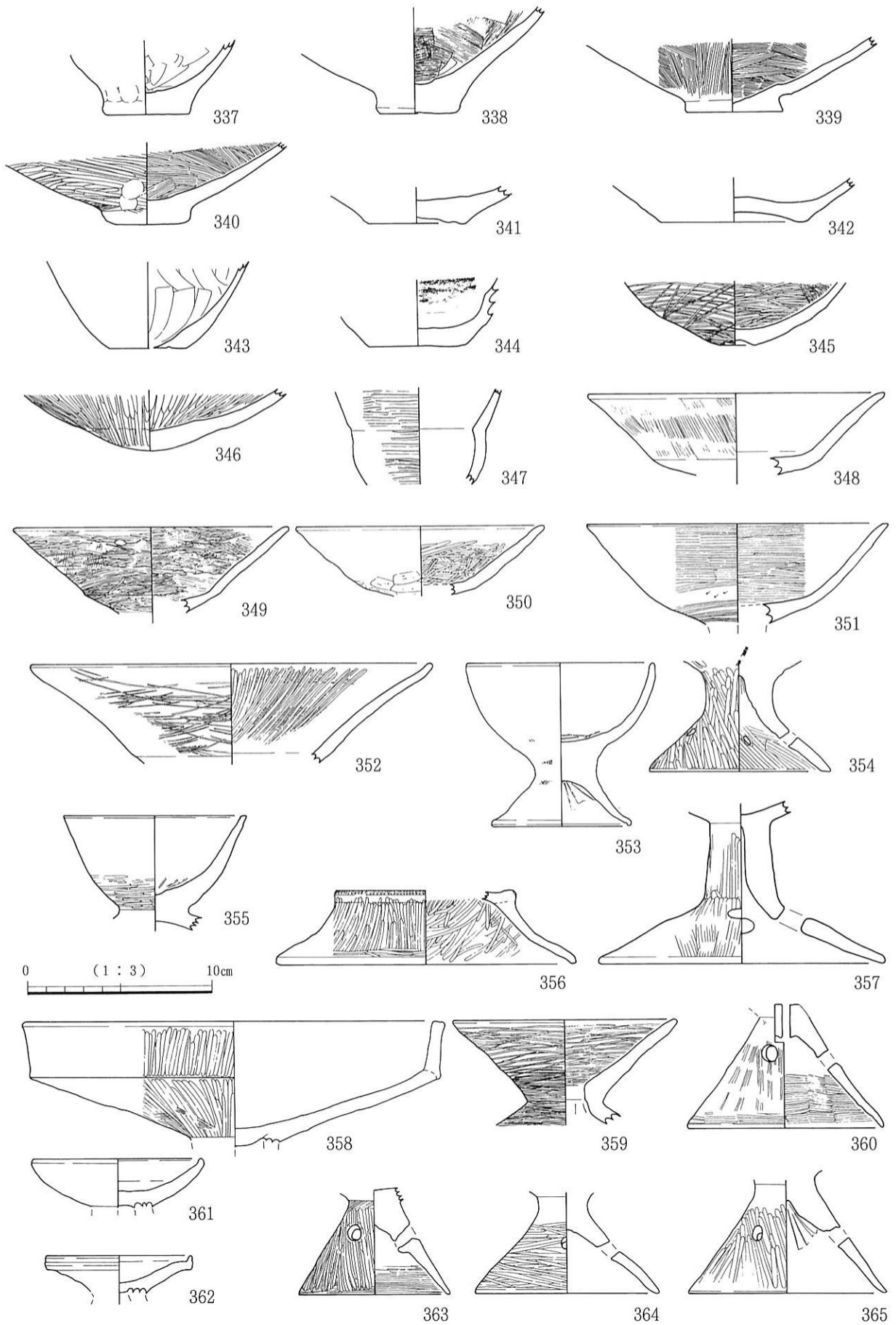


图72 A区7面沟120砂层出土土器

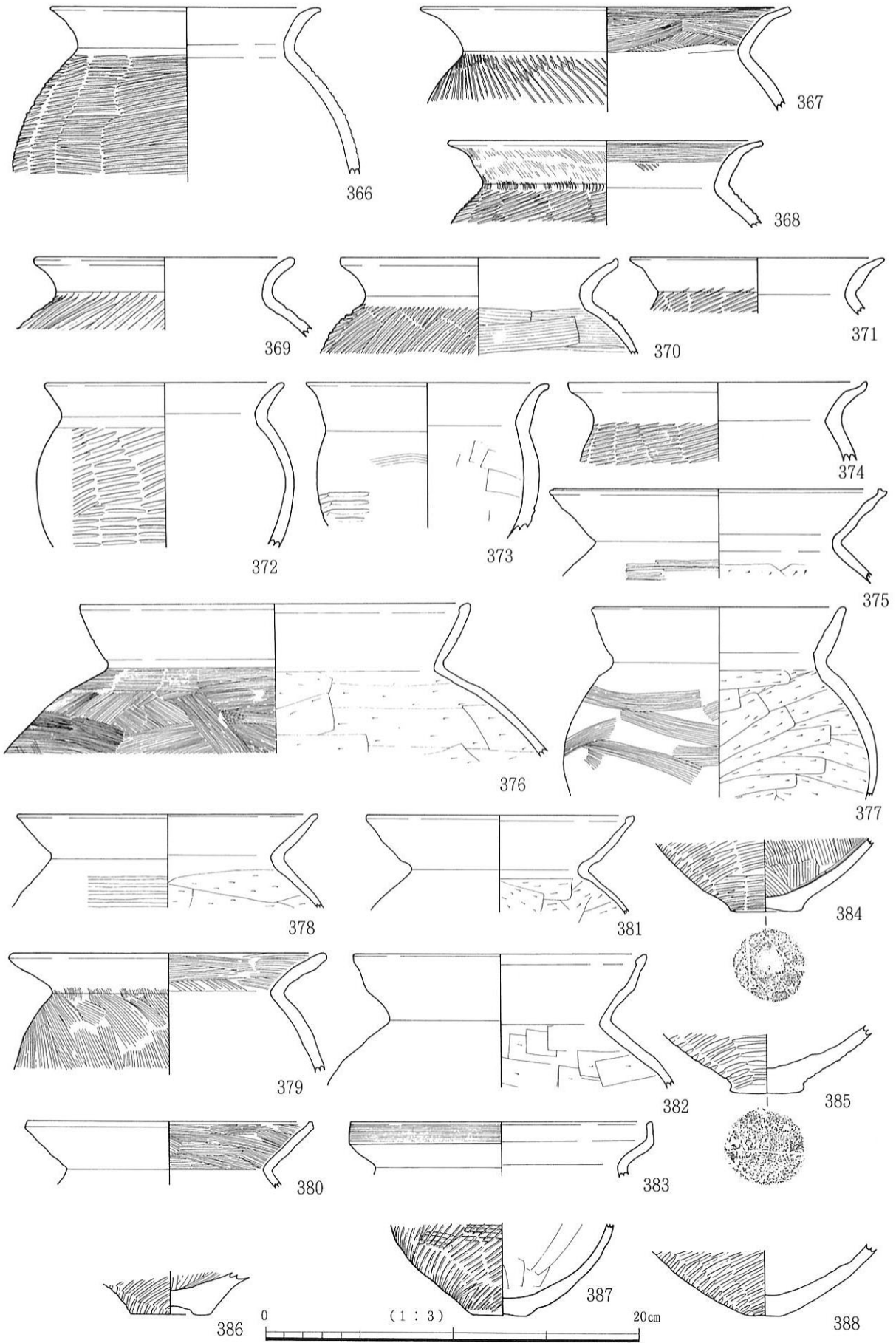


図73 A区7面溝120砂層出土土器

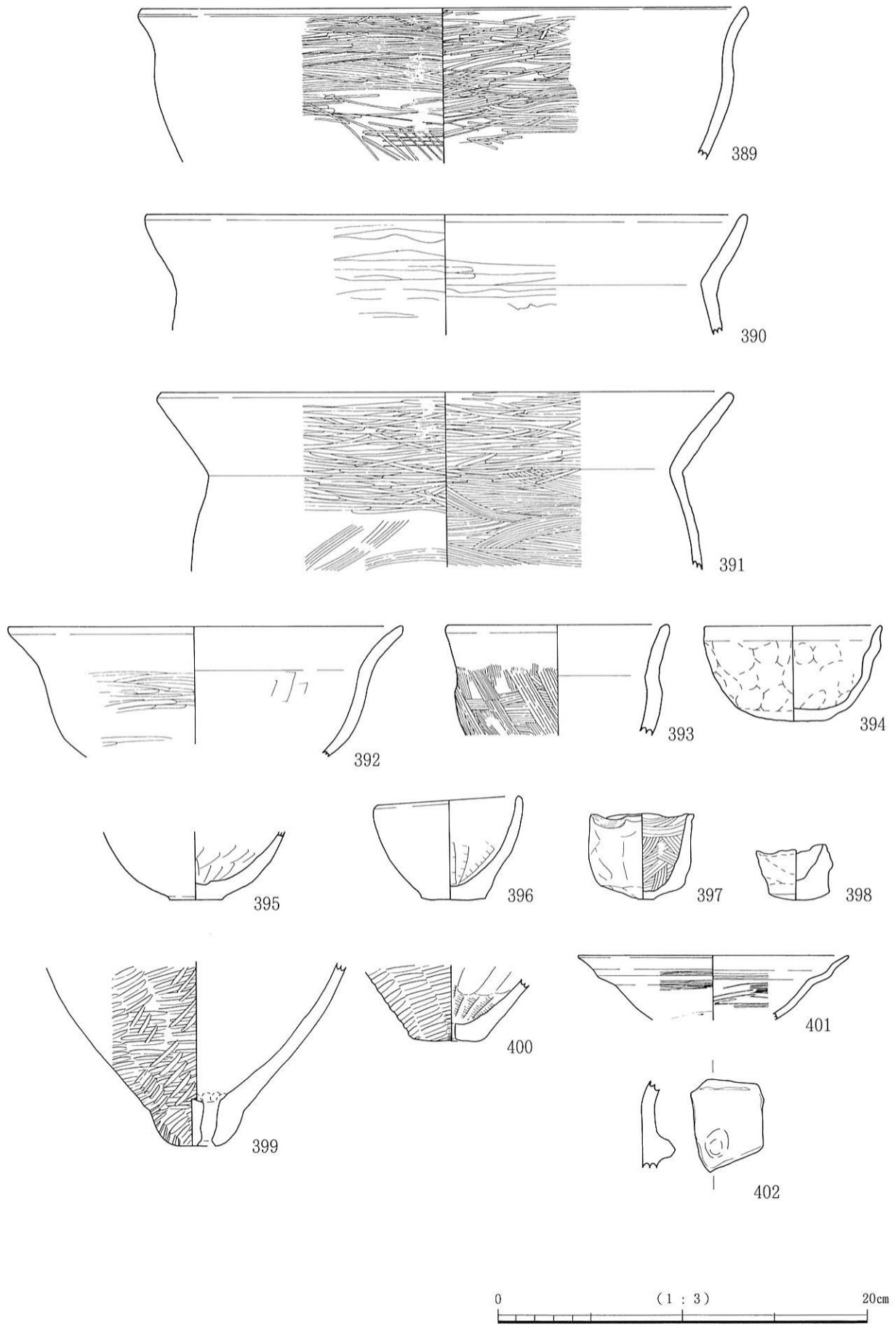


图74 A区7层沟120砂层出土土器

358は弥生土器高杯であり、弥生後期初頭に位置づけられる。チョコレート色の胎土で角閃石を含み、外来系土器の可能性をもつ。内面に一部赤色顔料(?)とみられる箇所がある。

359～365は小形器台である。小形器台C 3 (359)、小形器台Cの口縁部 (361・362)、小形器台Cの脚部 (360・363～365) がある。359は布留式期前半に、他は庄内式期後半～布留式期前半に位置づけられる。360は口縁部と脚部の接合部に直径4mmの円孔が貫通し、内外面に煤が付着する。

366～388は土師器甕である。弥生形甕A 3 (371～374)、弥生形甕B 2 (366～370)、庄内形甕B (380)、布留形甕B (376・381・382)、布留形甕C (375・377～379)、外来系土器の甕 (383)、弥生形甕底部 (384～388) がある。弥生形甕A 3は口縁端部a (371～373)、口縁端部b (374)、弥生形甕B 2は口縁端部a (366～369)、口縁端部b (370)、庄内形甕Bは口縁端部b (380)、布留形甕Bは口縁端部c (376・381・382)、布留形甕Cは口縁端部a (377～379)、口縁端部c (375) がある。380は胎土が白っぽい色を呈し、在地の土器とみられる。

389～401は土師器鉢である。大形鉢 (389)、大形鉢A 3 (390)、大形鉢A 2 (391)、中形鉢C 1 (392)、小形鉢A 1 (394)、小形鉢 (393)、小形鉢底部 (395)、手捏土器 (396～398)、有孔鉢 (399・400)、小形丸底鉢C 3 (401) がある。389は口縁部がゆるやかに外反気味にたちあがる。389は庄内式期前半、391は布留式期に位置づけられる。

402は体部外面に小突起をもつ小片で、口縁部はやや外反するようである。

7面溝 (403～414) 403は溝124、404は溝129、405は溝138、408～412は溝144、413・414は溝147出土である。403は須恵器把手杯碗で、TK208に位置づけられる。404は土師器弥生形甕A 2で、口縁端部aである。405は土師器高杯E。406・407は須恵器杯身で、MT85に位置づけられる。408は土師器二重口縁壺、409は土師器高杯B、410は土師器高杯脚部、411は小形器台、412は土師器布留形甕Cで口縁端部a、413・414は土師器布留形甕Bで413は口縁端部a、414は口縁端部cである。

7面土坑98 (415～436) 古墳時代中期須恵器を下限とする遺物が出土し、古墳時代前期でも布留式期後半の土師器が主体をしめる。

415は須恵器無蓋高杯と考えられる。突線と波状文がめぐり、TK208～TK23に位置づけられようか。

416～420は土師器壺で、広口壺A (416)、二重口縁壺C 2 (417)、二重口縁壺B 1 (418)、小形丸底壺BかC (419・420) がある。421～429は土師器高杯で、高杯A 2 (421・422)、高杯B (423～426)、高杯C (427)、脚部 (428・429) がある。421・422は古墳時代中期の須恵器に伴う。424・425には杯部外面に棒状刺突痕が残る。430～432は土師器甕で、布留形甕A (430)で口縁端部b、布留形甕Cで口縁端部d (431)、口縁端部c (432) がある。433は土師器大形鉢A 1。434は土師器有孔鉢B。435は土師器小形丸底鉢B 3で、口縁部は頸部で打ち欠かれ約1/3が残存するのみであり、体部下半はほぼ円形に打ち欠かれる。436は軟質土器片で外面に格子タタキが施される。

7面土坑99 (437～440) 須恵器は出土しておらず、古墳時代前期の遺構と考えられる。

437は土師器広口壺B、438は土師器広口壺A、439は土師器丸底鉢、440は土師器壺底部である。

7面土坑100 (441～446) 須恵器は出土しておらず、古墳時代前期の遺構と考えられる。

441・442は土師器高杯で、高杯A 1 (441)、高杯A 2 (442) がある。443・444・446は土師器甕で、弥生形甕A (444)、弥生形甕B 1 (443)、弥生形甕底部 (446) がある。445は土師器広口壺Cである。

7面土坑102 (447～449) 古墳時代前期布留式期古相の遺構で、遺物の一括性がみとめられる。土器の出土状況および土器の様相から、祭祀的な性格をもつ遺構の可能性はある。

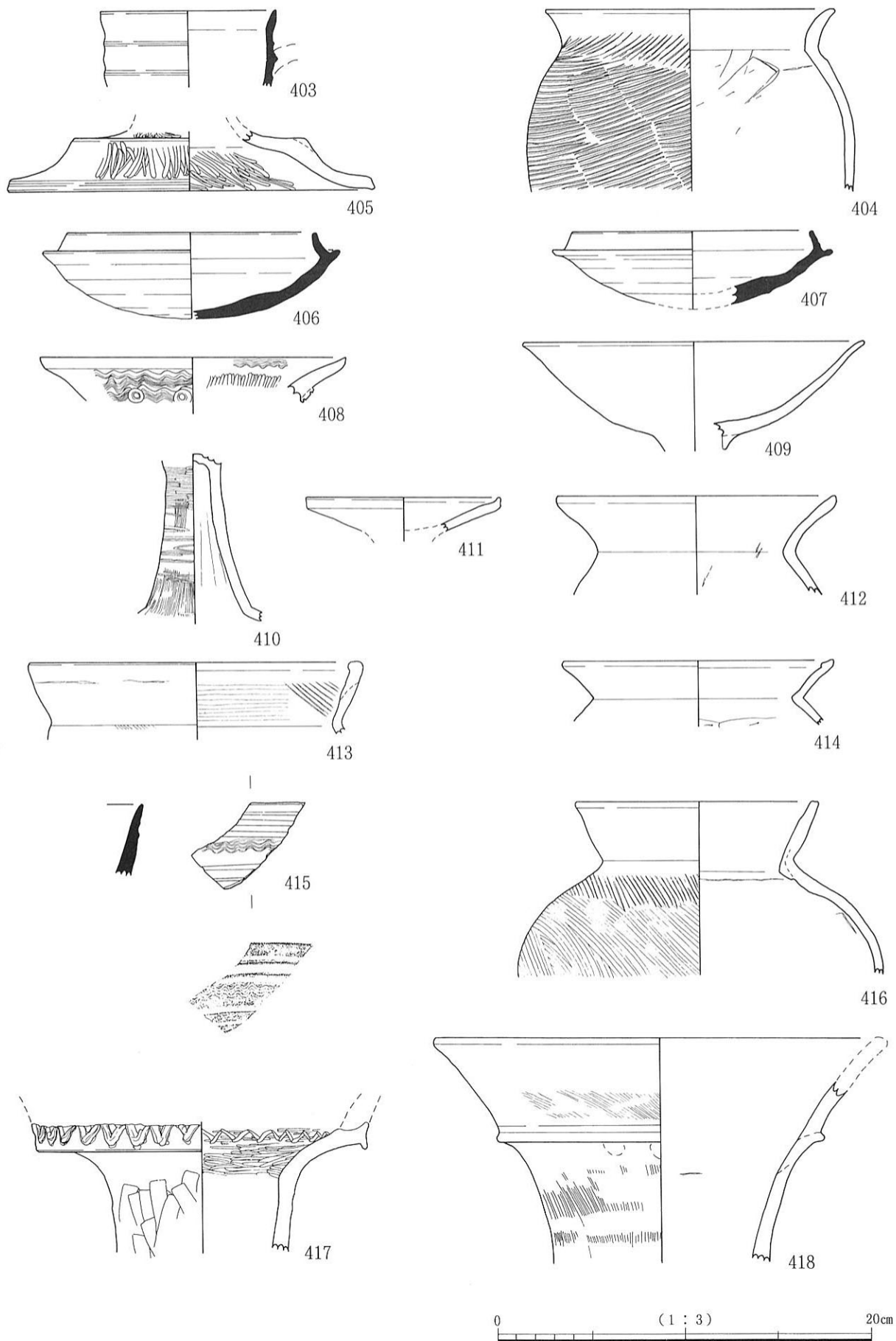


图75 A区7面溝·土坑98出土土器

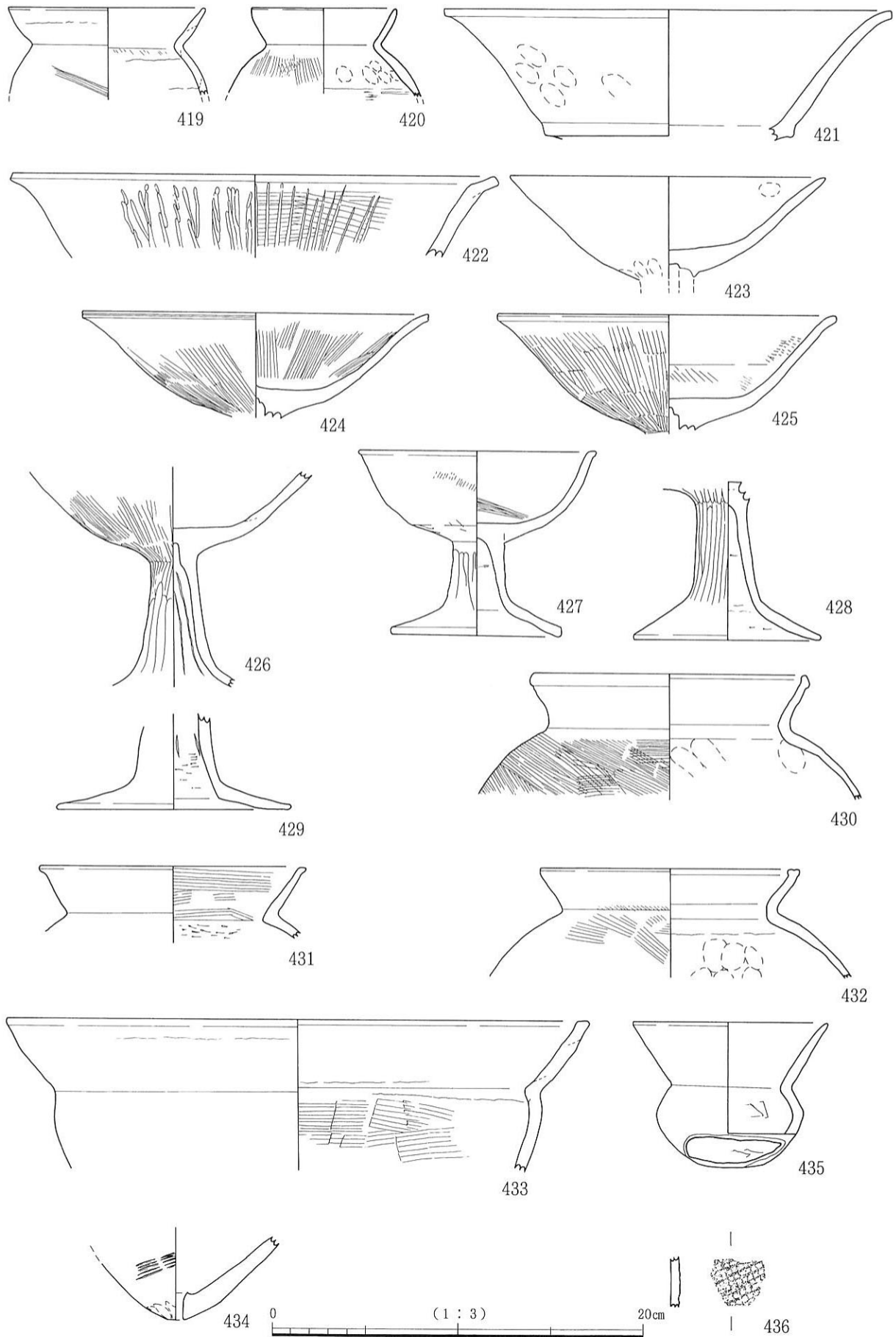


図76 A区7面土坑98出土土器

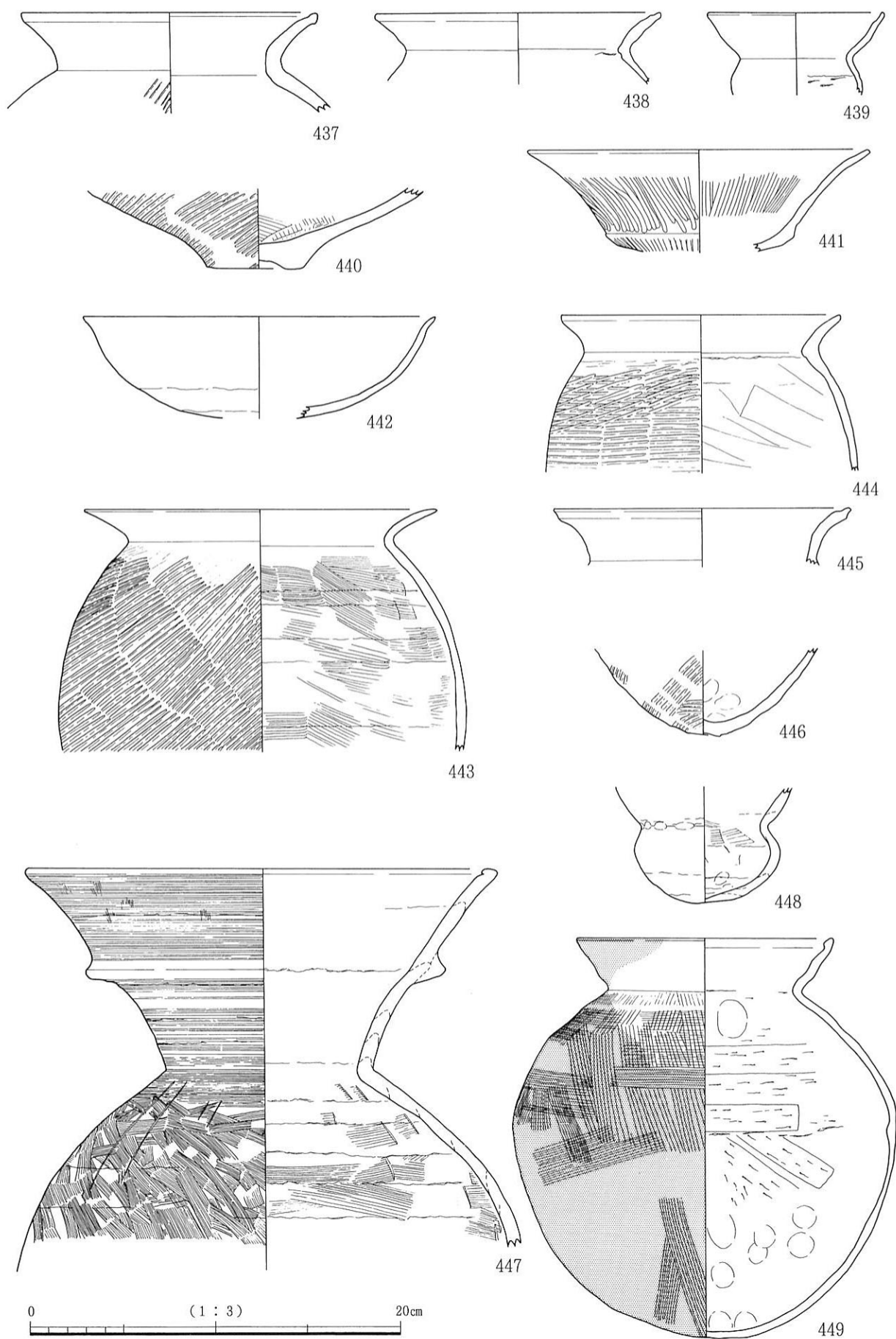


图77 A区7面土坑98·土坑100·土坑102出土土器

447は土師器二重口縁壺B 1。口縁端部は内側に肥厚し、体部外面には緻密なハケメの上に、平行する2条の直線からなるヘラ記号が肩部に2カ所描かれる。体部の破断面は一部をのぞきほぼ水平であり、人為的な打ち欠きによる可能性がある。底部穿孔の有無は不明ではあるが、本土器は壺形埴輪に類似し、類例には美園古墳壺形埴輪A類((財)大阪文化財センター1985)、小石塚古墳出土壺形埴輪(豊中市教育委員会1980)がある。448は小形丸底鉢B 3で、口縁部は頸部で打ち欠かれ約1/3が残存するのみである。449は土師器布留形甕Bで、口縁端部bである。体部最大腹径付近に直径3~4cm前後の孔が外側から穿たれる。最大復径から下半には煤の付着が顕著であり、また、穿孔部分を上面においた場合の下半においても口縁端部から底部まで全面煤が付着することから、穿孔箇所と煤の付着箇所には何らかの関連がある可能性が考えられる。3点とも白っぽい胎土であり、在地の土器と考えられる。

7面土坑109(450~453) 古墳時代前期~中期の遺物が出土した。土器はいずれもほぼ完形で、また人為的な打ち欠きがみとめられることから、祭祀的な性格をもつ可能性がある。

450は須恵器壺で、肩部外面に直線文と波状文がめぐる。口縁部を欠き、体部は完形で、頸部破断面は直線的であることから、口縁部を打ち欠いたと考えられる。TK216~TK208に位置づけられる。451・452は土師器小形丸底壺Cで、口縁部に打ち欠きがあり、外面には煤が付着する。453は土師器高杯Bである。

7面土坑118(454~459) 古墳時代前期布留式期新相の遺物が出土した。

454~456は土師器高杯B、457は土師器高杯脚部である。456は杯部外面に棒状刺突痕が残る。458は土師器布留形甕Bで、口縁端部cである。459は小形の土師器布留形甕Cで口縁端部dである。

7面土坑121(460・461) 古墳時代前期布留式期新相の遺物が出土した。

460は土師器小形鉢A 1の系譜に連なるものとみられる。口縁部が不明瞭な稜をもって外方へ開き、底部はやや平底を呈する。外面には煤が付着する。461は土師器布留形甕Bで口縁端部a~bである。

7面土坑122(462~468) 古墳時代前期庄内式期後半の遺物が出土した。

462・463は土師器高杯で、高杯E(462)、高杯B(463)がある。464・465は土師器小形器台C 1である。466は土師器弥生形甕B 2、467は土師器庄内形甕B、468は土師器小形丸底鉢B 1である。

7面土坑123(469~472) 古墳時代前期布留式期新相の遺物が出土した。

469~472は土師器高杯で、高杯C(469・470)、脚部(471・472)がある。470は杯部外面に棒状刺突痕が残る。

7面土坑125(473~476) 古墳時代前期布留式期の遺物が出土した。

473は土師器二重口縁壺A 1。474・475は土師器高杯で、高杯B(474)、脚部(475)である。476は土師器小形丸底壺Cで、ナデとユビオサエによる雑な調整である。

7面土坑126(477・478) 古墳時代前期の遺物が出土した。土器のほかに軽石が出土した。

477は土師器高杯脚部で、脚部には直径8mmの穿孔があるが、杯部を欠き、杯部との関連は不明である。478は土師器小形器台C 1の脚部である。

7面土坑128・129(479~483) 古墳時代前期庄内式期後半~布留式期前半の遺物が出土した。

479・480・482・483は土師器壺で、二重口縁壺B 2(479)、短頸直口壺(480・483)、外来系土器(482)がある。480は内面に煤が付着する。481は土師器小形丸底鉢B 2である。

7面土坑133(484~506) 古墳時代前期庄内式期後半~布留式期前半の遺物が出土した。土器のほかに石杵、軽石が出土した。

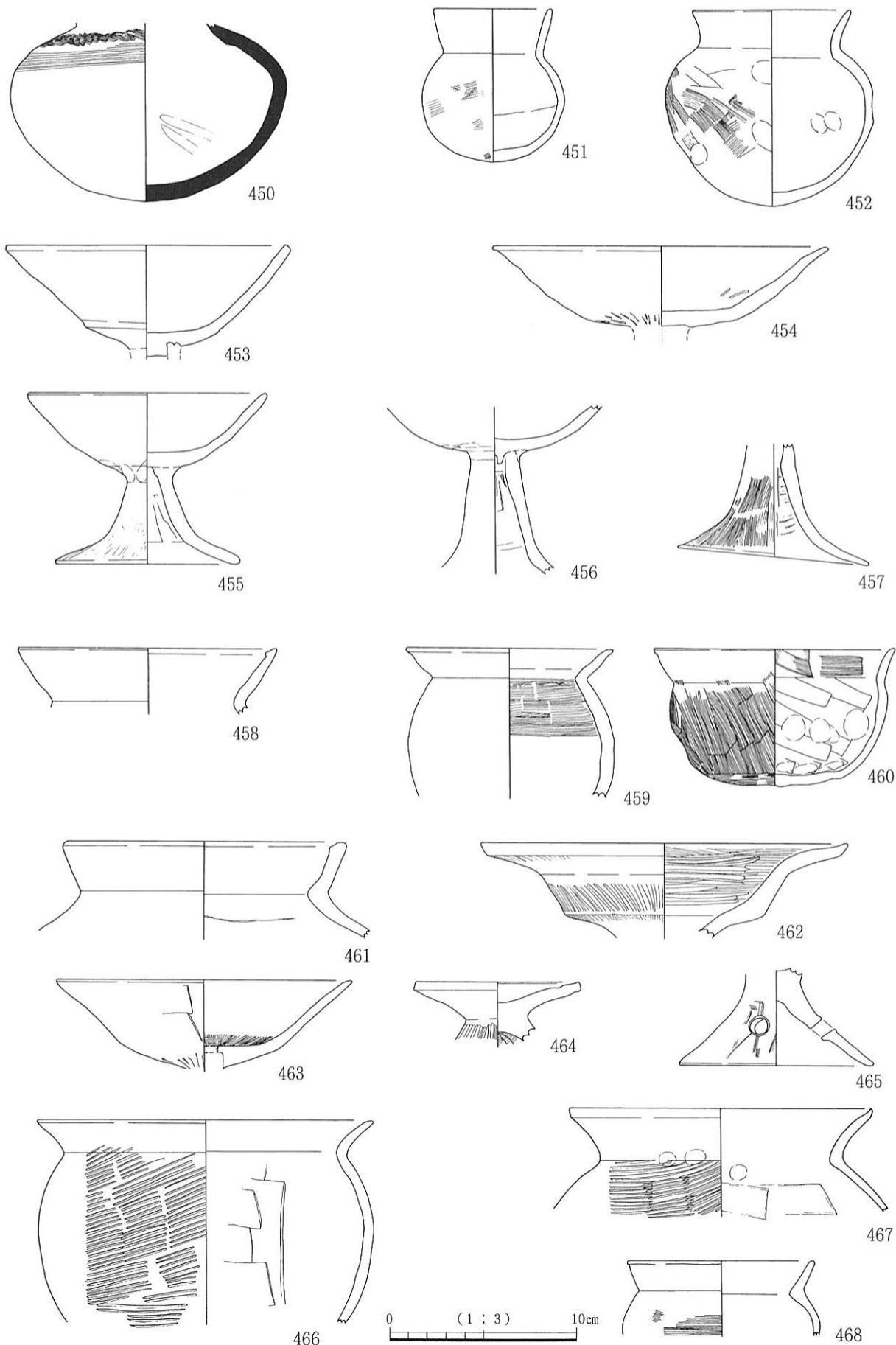


图78 A区7面土坑109·土坑118·土坑121·土坑122出土土器

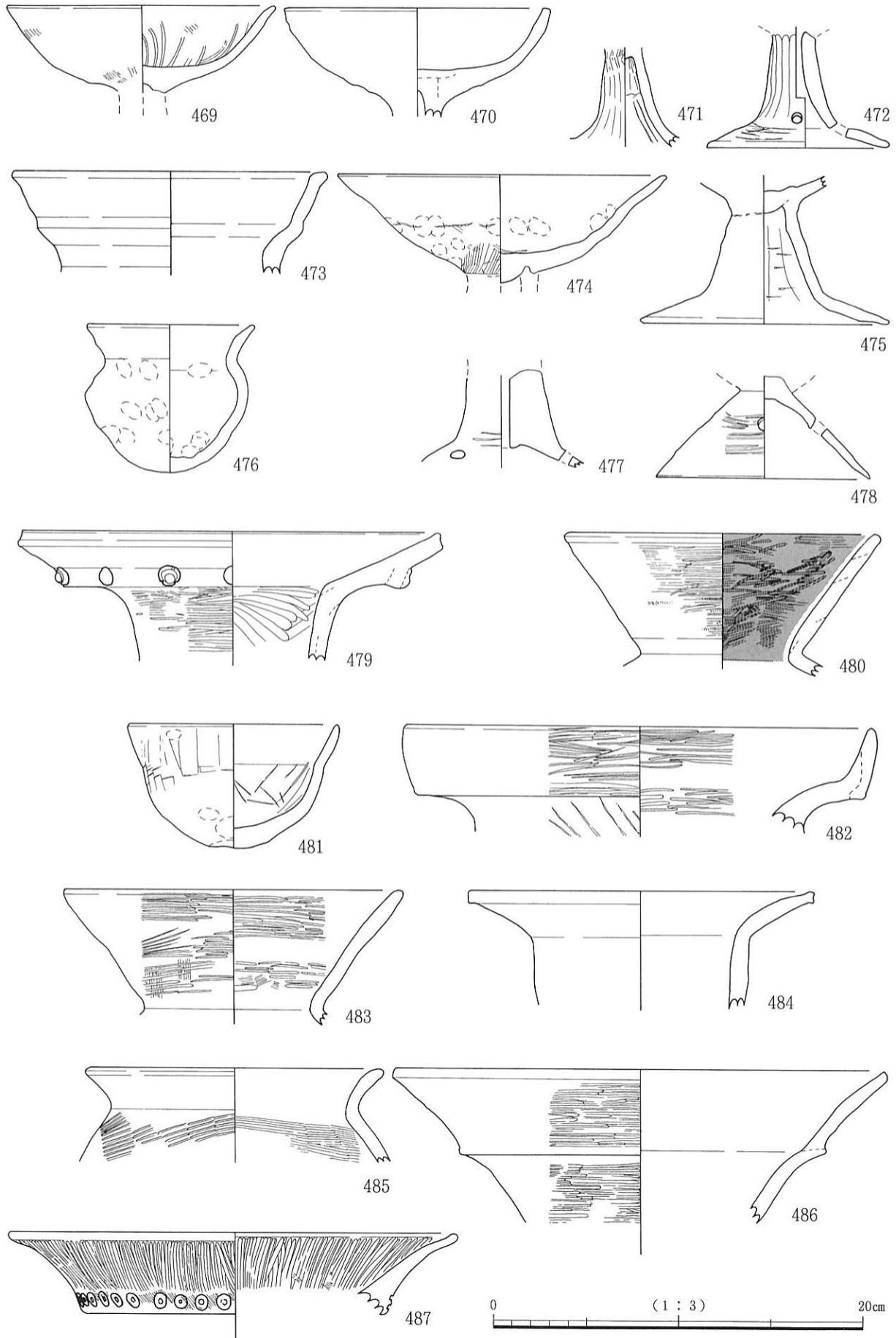


图79 A区7面土坑123・土坑125・土坑126・土坑122・土坑123・129・土坑133出土土器

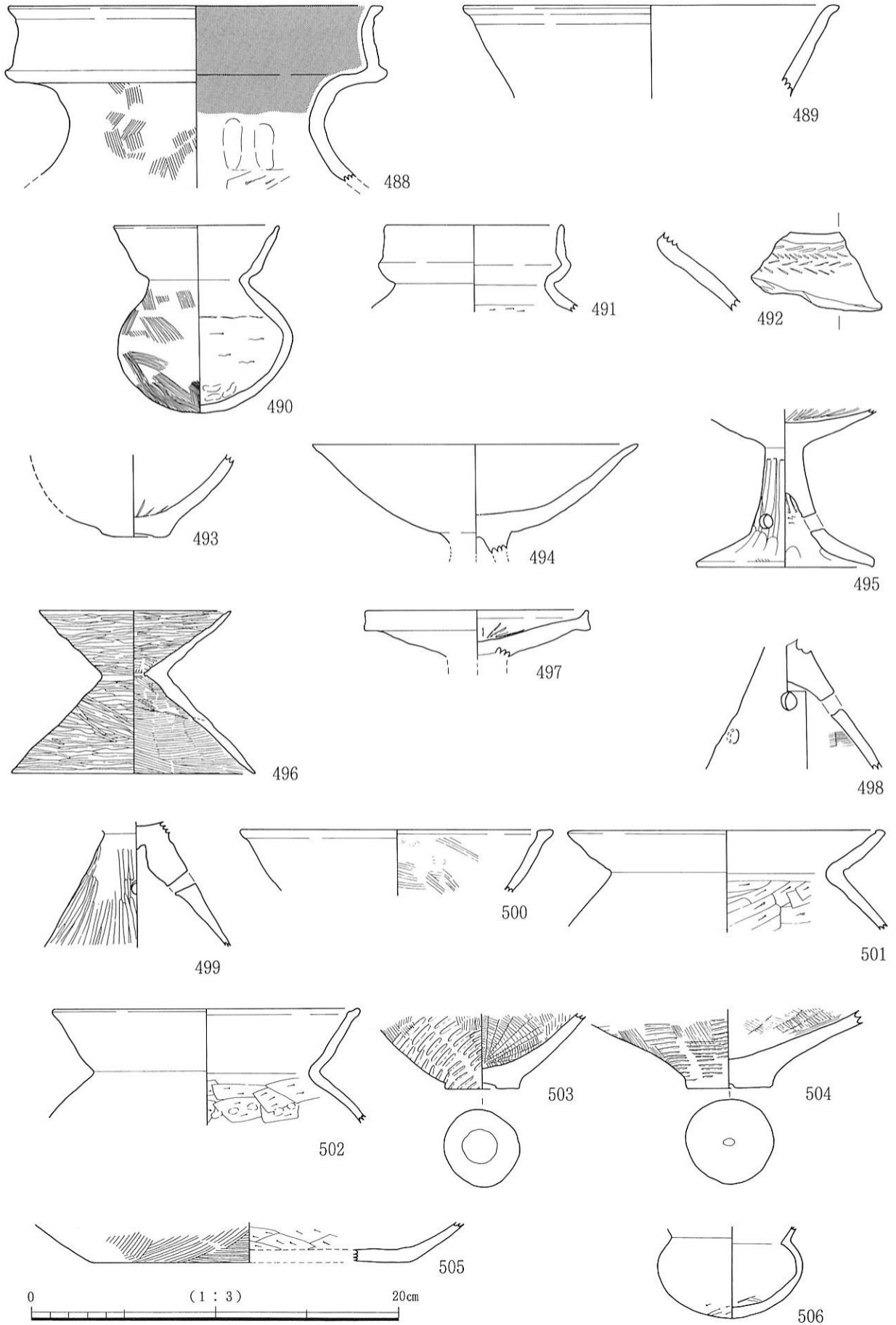


图80 A区7面土坑133出土土器

484～493は土師器壺である。広口壺A (485)、二重口縁壺A 1 (486)、二重口縁壺B (487)、短頸直口壺 (489)、小形丸底壺B (490)、壺肩部 (482)、壺底部 (493)、外来系土器の壺 (484・488・491)がある。487は庄内式期後半に位置づけられる。488は口縁部から頸部内面に黒色顔料が塗布される。490は口縁部から頸部にかけてV字形の打ち欠きが2カ所あり、口縁部は1/3弱が残存するのみである。492は頸部に羽状刺突文が施される。

494・495は土師器高杯で、高杯B (494)、脚部 (495)がある。

496～499は土師器小形器台である。小形器台C 3 (496)、口縁部 (497)、脚部 (498・499)がある。496の脚部はラセン状粘土紐巻き上げにより成形され、布留式期前半に位置づけられる。

500～504は土師器甕である。布留形甕B (501・502)、布留形甕C (500)、弥生形甕Aの底部 (503)、弥生形甕Bの底部 (504)がある。布留形甕Bは口縁端部a (501)、口縁端部c (502)、布留形甕Cは口縁端部d (500)がある。503・504はドーナツ底である。

505は鉢状の器形になろうか。平底の底部のみであり、底部復元径は17.5cmである。器壁は薄く仕上げられ、煤は付着しない。

506は小形丸底鉢で、体部は完形であるが、口縁部を欠く。

7 面土坑134 (507～514) 古墳時代前期布留式期を下限とする遺物が出土した。土器のほかに軽石が出土した。

507は外来系土器の土師器甕。508は土師器小形丸底壺。509・510は土師器高杯で、高杯B (509)、脚部 (510)がある。511～514は土師器甕で、布留形甕B (513)で口縁端部b、布留形甕C (511・512)で口縁端部a (511・512)がある。514は外来系土器の可能性があり、その場合阿波の土器と考えられる。

7 面土坑140 (515～518) 古墳時代前期庄内式期末～布留式期初頭の遺物が出土した。

515～517は土師器高杯である。高杯A 1 (515)、高杯A (516)、脚部 (517)がある。517は脚部がややエンタシス状であり、杯部との接合面はヘラで凹凸がつけられる。518は布留形甕Aで口縁端部bである。

8 面穴 (519～521) 519は穴739出土で、遺物の状態から人為的な埋納の可能性はある。520・521は穴691出土である。

519は須恵器甗で、TK208に位置づけられる。頸部にはV字形の打ち欠きがあり、口縁部はすべて打ち欠かれ、欠損している。

520は土師器布留形甕Bで、口縁端部bである。布留0式に位置づけられる。約3/4個体分の破片がまとまって出土しており、完形に復元できた。521は小形丸底鉢B 1である。

8 面土坑 (522～524) 522・523は土坑142、524は土坑143出土である。

522は土師器高杯脚部、523は土師器布留形甕Aで口縁端部bである。524は土師器小形器台口縁部で、口縁端部のつまみ上げは鈍く、やや丸く仕上げられる。

8 面溝123 (526～623) A区北端で検出した東西方向の河川であり、南肩部のみを検出した。土器は南肩部に沿ってほぼ完形の土器が多数出土しており、河川肩部の斜面堆積のなかで埋没したようである。弥生時代中期～古墳時代前期の土器とともに須恵器が1点 (526) 出土した。526は土器群のなかでも下位で出土しているが、混入の可能性も考えられる。古墳時代前期土師器がほとんどであり、庄内式期の土器が主体をしめる。高杯は庄内式期中頃から後半のものが多く、甕は庄内式期前半のものが多く、

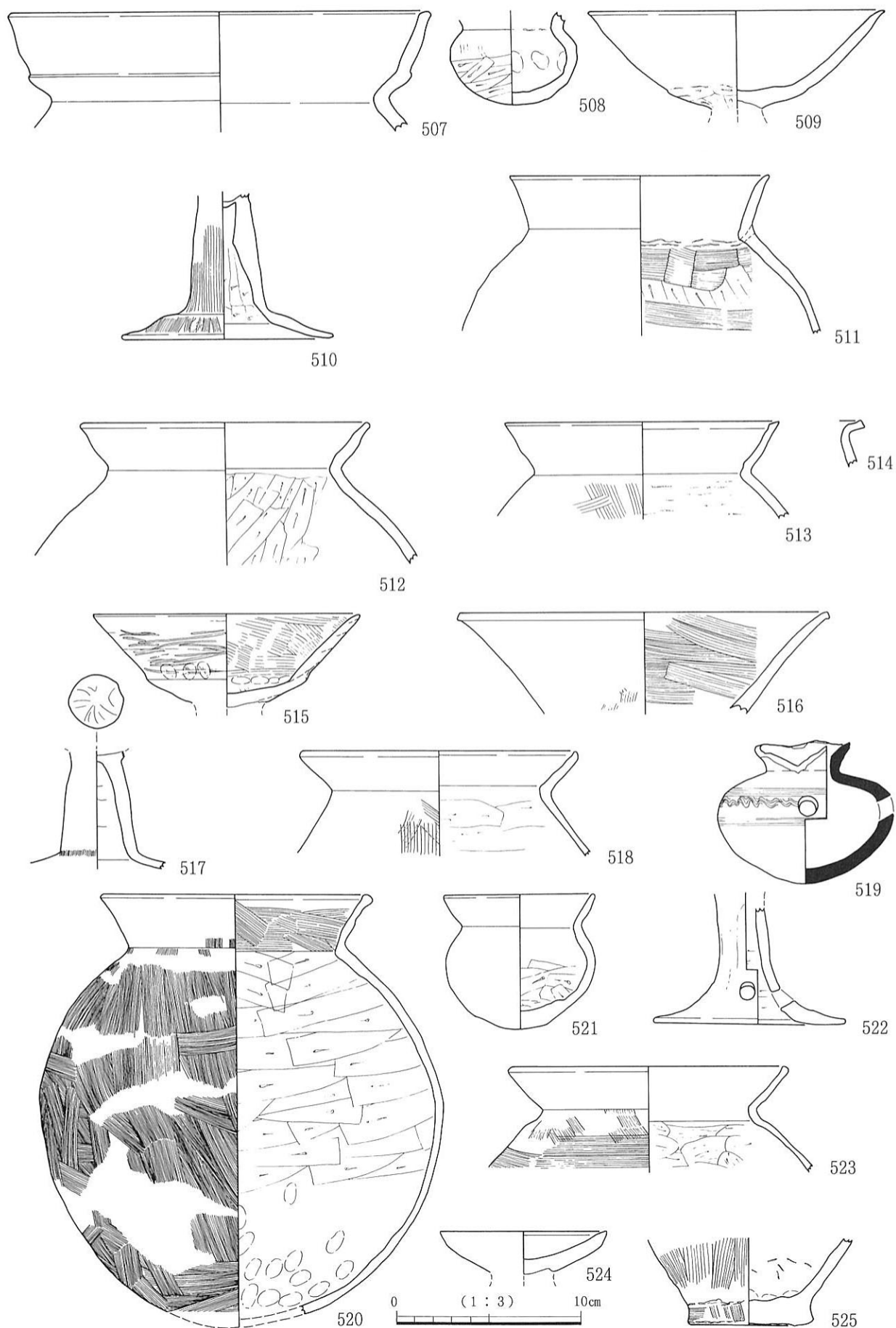


图81 A区7面土坑134·土坑140 8面穴·土坑 11层出土土器

これは古相の甕が庄内式期後半まで存続するという、本遺跡周辺の地域性を示す可能性が大きいと考えられる。

526は須恵器の小片であり、頸部がくびれ、口縁部はやや内湾して、口縁端部はつまみ上げられる。甕、甗の可能性が考えられるが、器形は不明である。

527～534は土師器壺である。広口壺B (527)、二重口縁壺A 2 (528)、二重口縁壺C 1 (529)、壺底部 (530)、細頸壺 (531)、直口壺 (532)、小形壺 (533)、壺底部 (534)がある。529は口縁端部と口頸部内面に黒色顔料が塗布される。530は頸部が直立し、二重口縁壺になる可能性が高い。頸部には突帯がめぐり、外面はタタキをミガキで消している。531は精良な胎土を用い丁寧に仕上げられる。肩部に櫛描直線文と刺突文がめぐり、近江の影響がみられる。533・534には平底が残る。

535・536は弥生土器壺である。535は広口壺で弥生中期後半から後期初頭に位置づけられる。536も広口壺であり、頸部の突帯には櫛描文が施される。弥生中期後半。

537～544は土師器小形器台である。小形器台A 1 (540)、小形器台A 2 (537・543)、小形器台C 1 (542・544)、小形器台C 2 (538)、小形器台C 3 (539)、口縁部 (541)がある。537は口縁部外面に長さ1 cm、幅6 mmの小さな木の葉痕が残る。庄内式期に位置づけられる。542は口縁部内面の器壁が荒れており、敲打痕の可能性はある。

545～558は土師器高杯である。高杯A (545)、高杯B (546)、高杯D 1 (551)、高杯D 2 (552)、高杯E (547～550)のほか、脚部 (555～558)、外来系土器の高杯 (553・554)がある。547～550は庄内式期後半、552は庄内式期に位置づけられる。545は口縁端部が内側に肥厚し、布留式期前半の高杯と考えられる。

559～605は土師器甕である。弥生形甕A 1 (559・565)、弥生形甕A 2 (574・575・579～581・583)、弥生形甕A 3 (582・584・586・587・589～591・594～597・599)、弥生形甕A 4 (588・592・598)、弥生形甕B 1 (560・562～564・570～573・577)、弥生形甕B 2 (566～569・576・578・585)、弥生形甕A 3をやや長胴にしたもの (593)、弥生形甕の底部 (600～603)、弥生形甕の口縁部b (604)、布留形甕A (605)がある。弥生形甕A 1は口縁端部a (565)、口縁端部b (559)、弥生形甕A 2は口縁端部a (574・575・580・583)、口縁端部b (579・581)、弥生形甕A 3は口縁端部a (582・586・587・583・595・599)、口縁端部b (584・589・591・594・596・597)、弥生形甕A 4は口縁端部a (592・598)、口縁端部b (588)、弥生形甕B 1は口縁端部a (562・570・573)、口縁端部b (560・563・564・571・572・577)、弥生形甕B 2は口縁端部a (566・567・569・578・585)、口縁端部b (576)、弥生形甕A 3をやや長胴にしたものは口縁端部a (593)、布留形甕Aは口縁端部b (605)がある。567は分割成形における接合箇所を中心に、内外面に直径7 mmのユビオサエの痕跡が明瞭に残る。584は頸部に粘土が付加され、剥離した箇所では「口縁叩き出し手法」(都出1974)の痕跡が明瞭に残る。587は外面接合箇所のタタキに、鋭利なタタキが直交する。592は精良な胎土を用い、スリップ仕上げである。体部には穿孔が1カ所みとめられる。弥生形甕A 3、A 4の15個体のうち586・588・590・591・592・598の6個体が、弥生形甕B 2の7個体のうち568・585の2個体が煤の付着がみとめられず、煮沸に用いた痕跡がないことから、弥生形甕A 3、A 4といった比較的小形の甕は煮沸以外の用途に用いられた可能性も考える必要がある。小形の甕はまた、外面上半をナデで仕上げるものが多い。

606～623は土師器鉢である。中形鉢B (608)、中形鉢C 1 (609)、小形鉢A 1 (612・613)、小形鉢A 2 (615)、小形鉢C (616)、小形鉢E 3 (611・614)、小形鉢F 1 (610)、有孔鉢A (617～620)、小

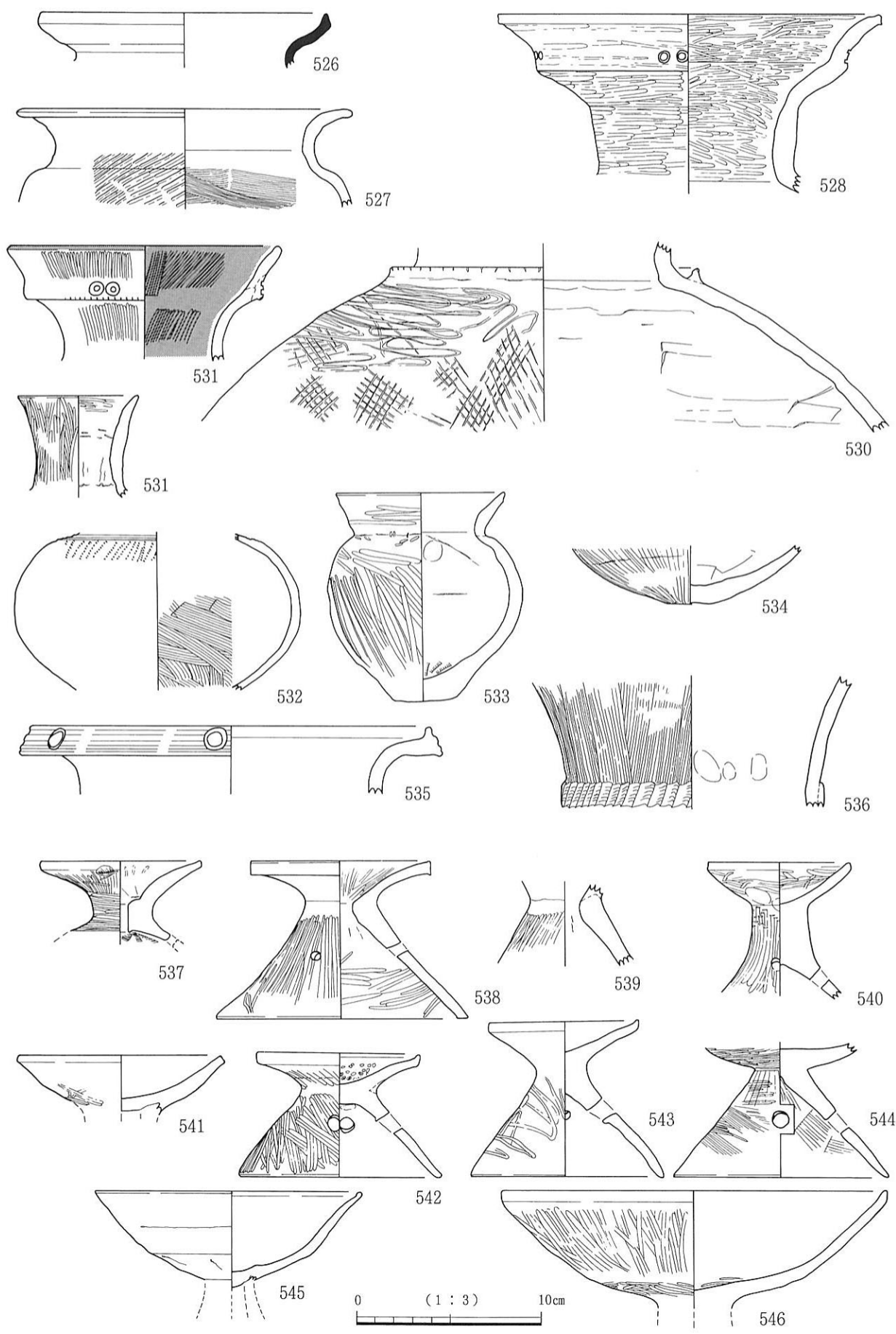


图82 A区8面溝123出土土器

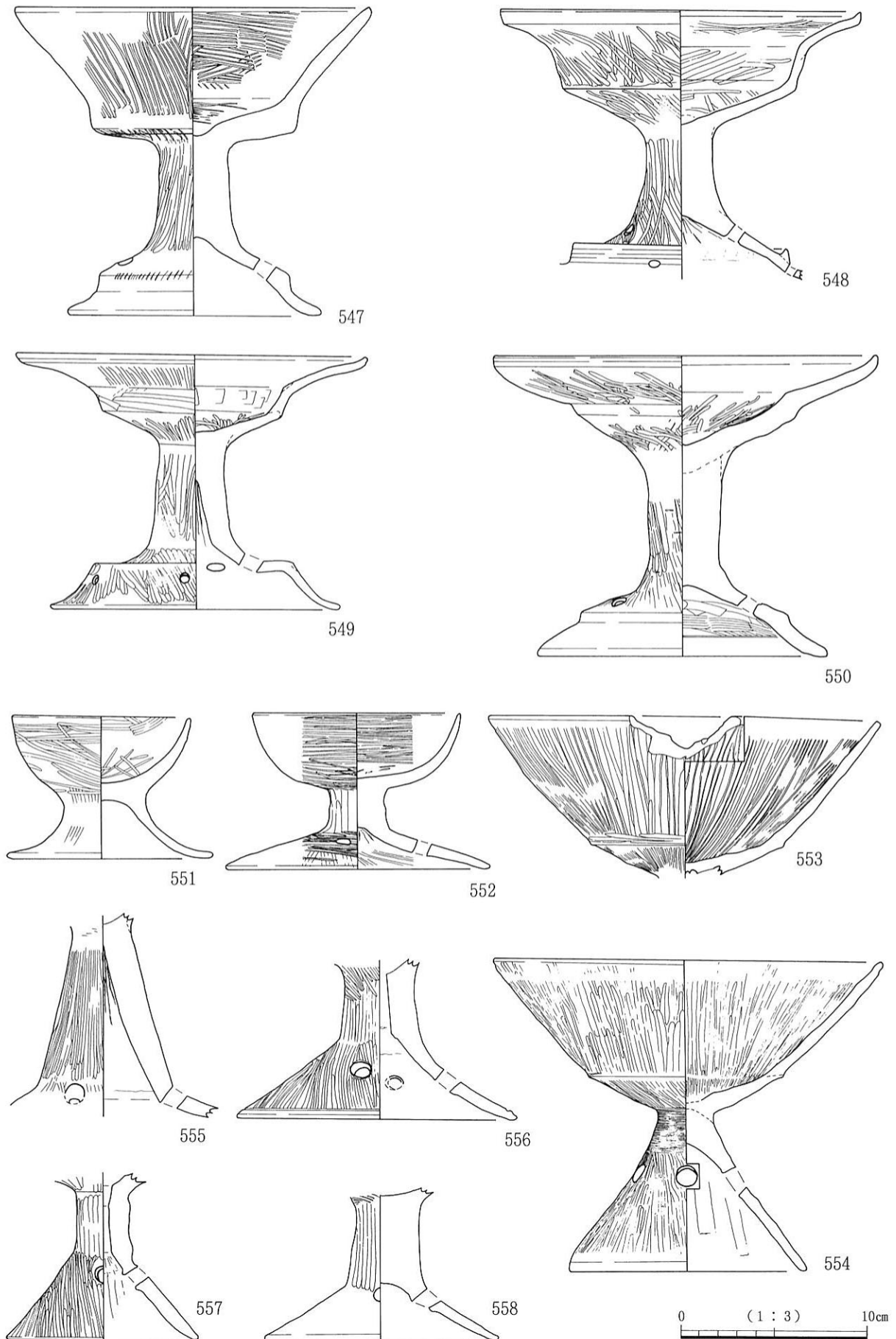


図83 A区8面溝123出土土器

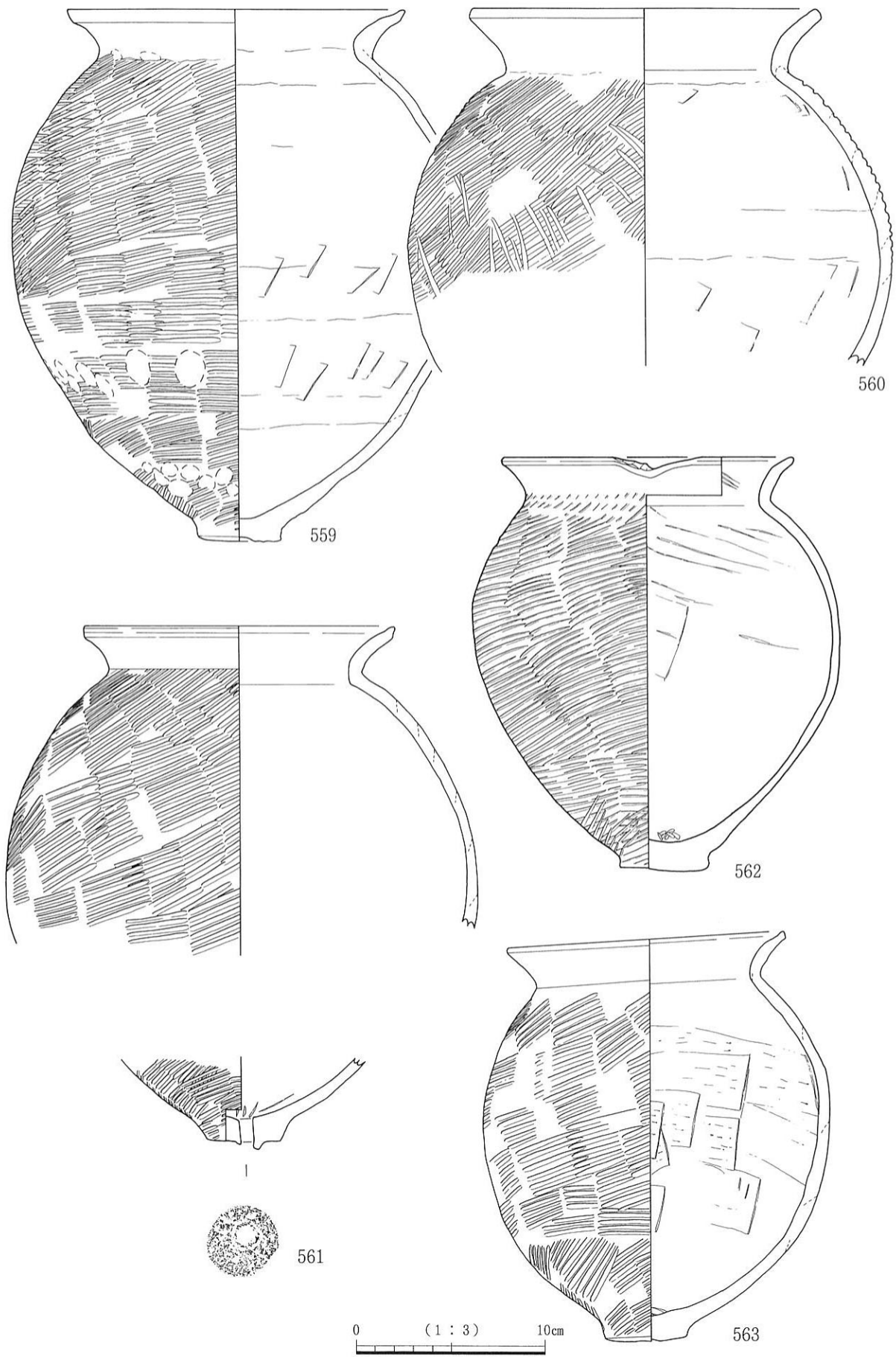


图84 A区8面沟123出土土器

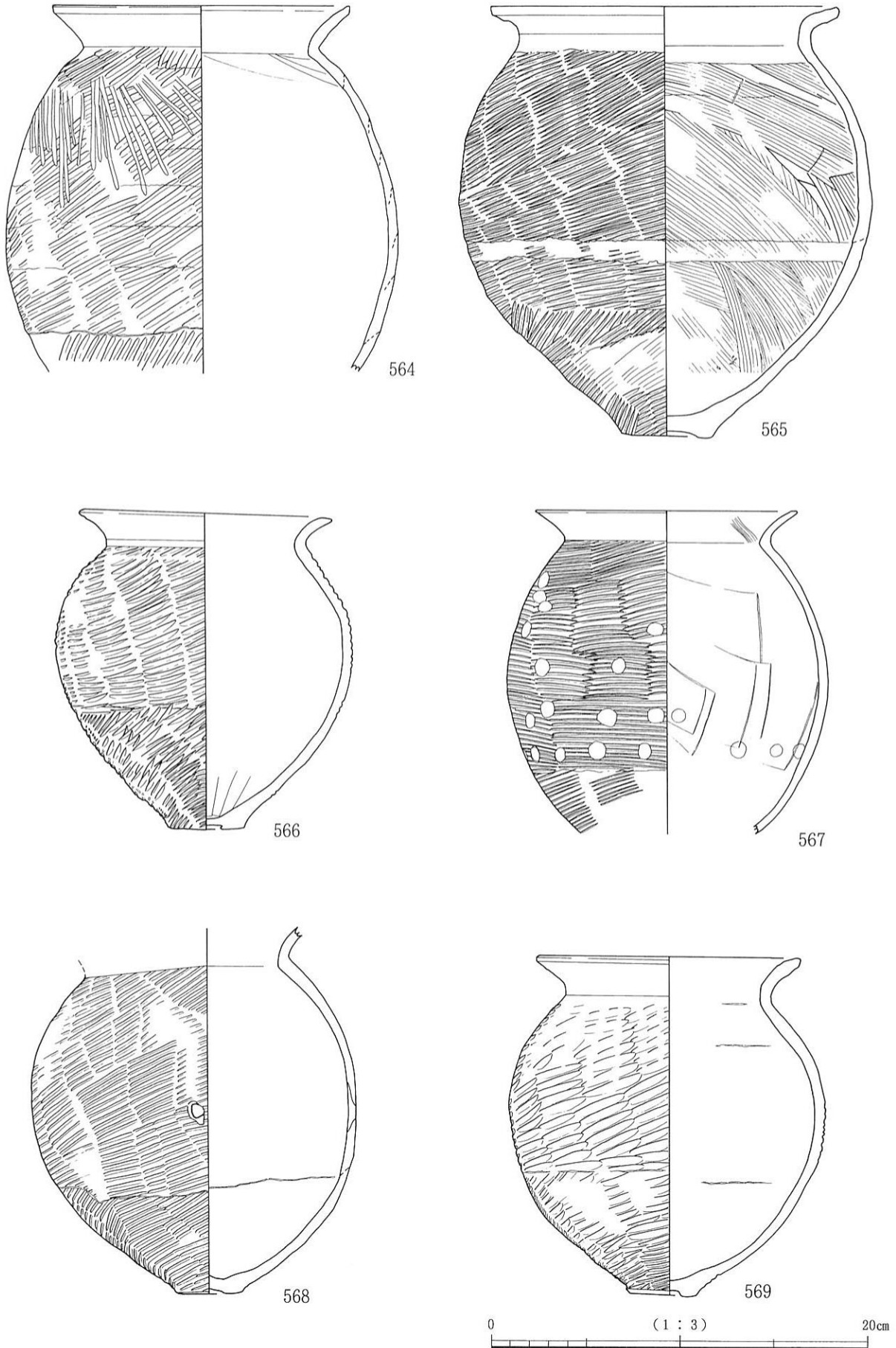


図85 A区8面溝123出土土器

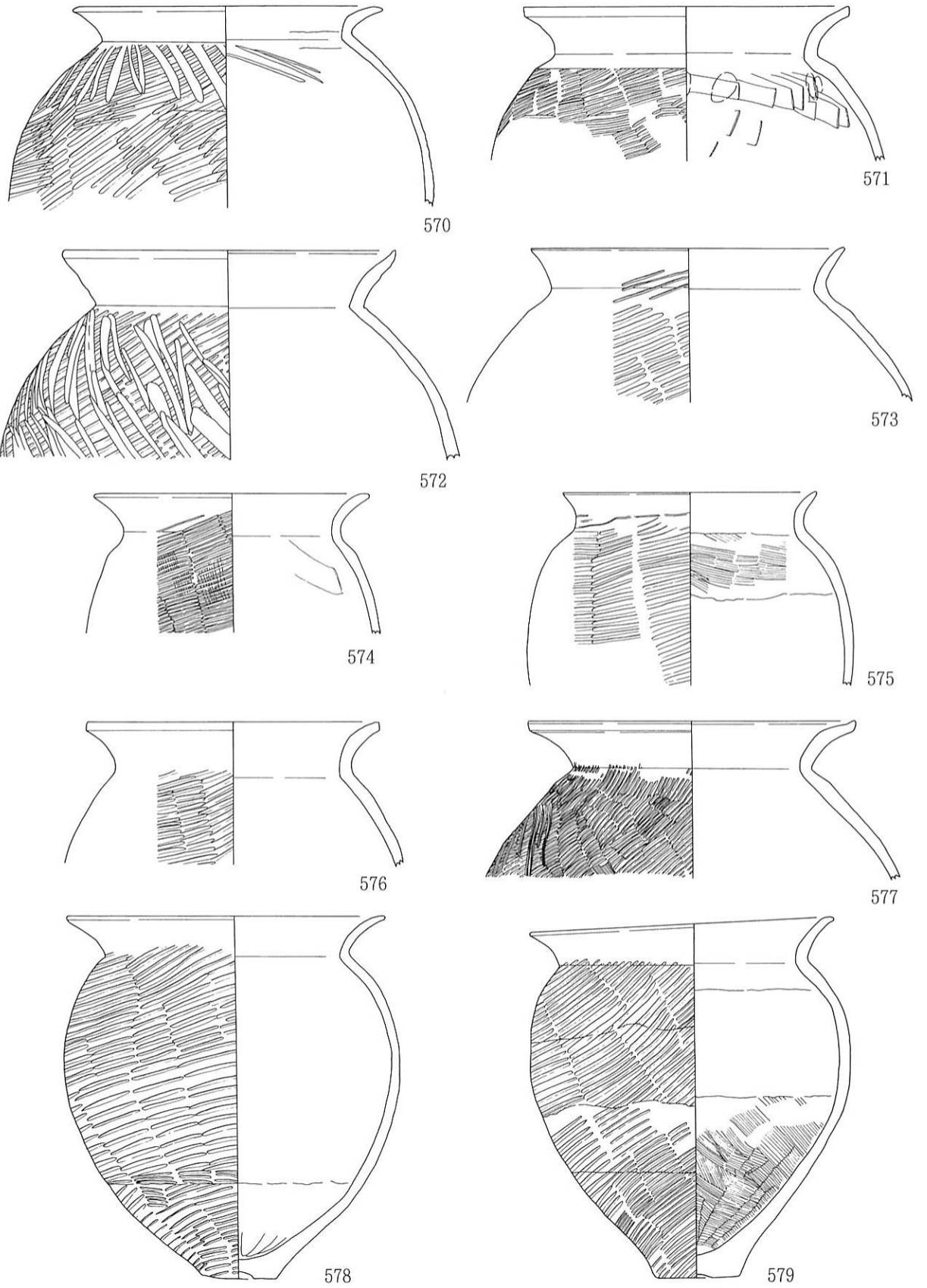


图86 A区8面沟123出土土器

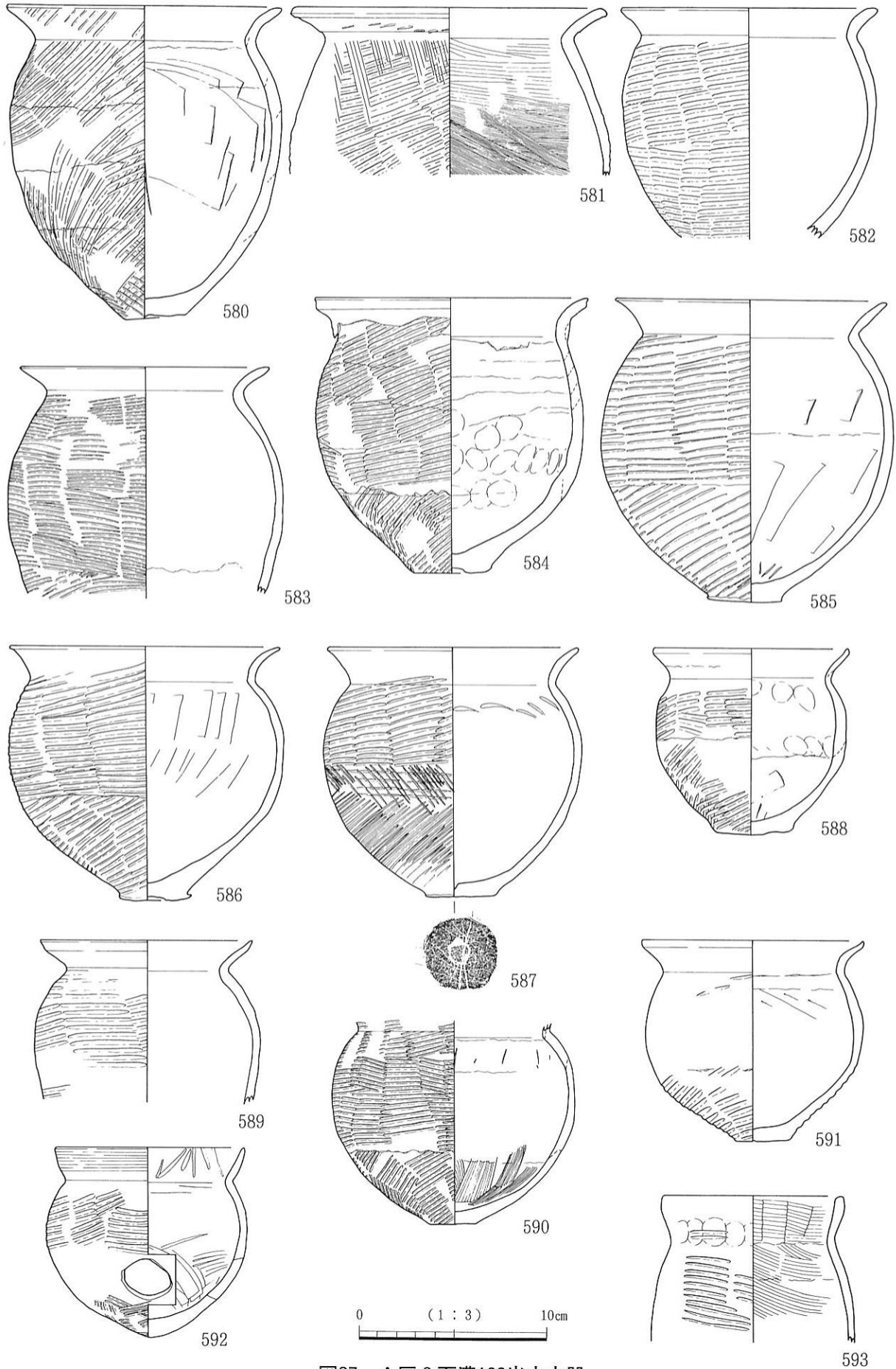


図87 A区8面溝123出土土器

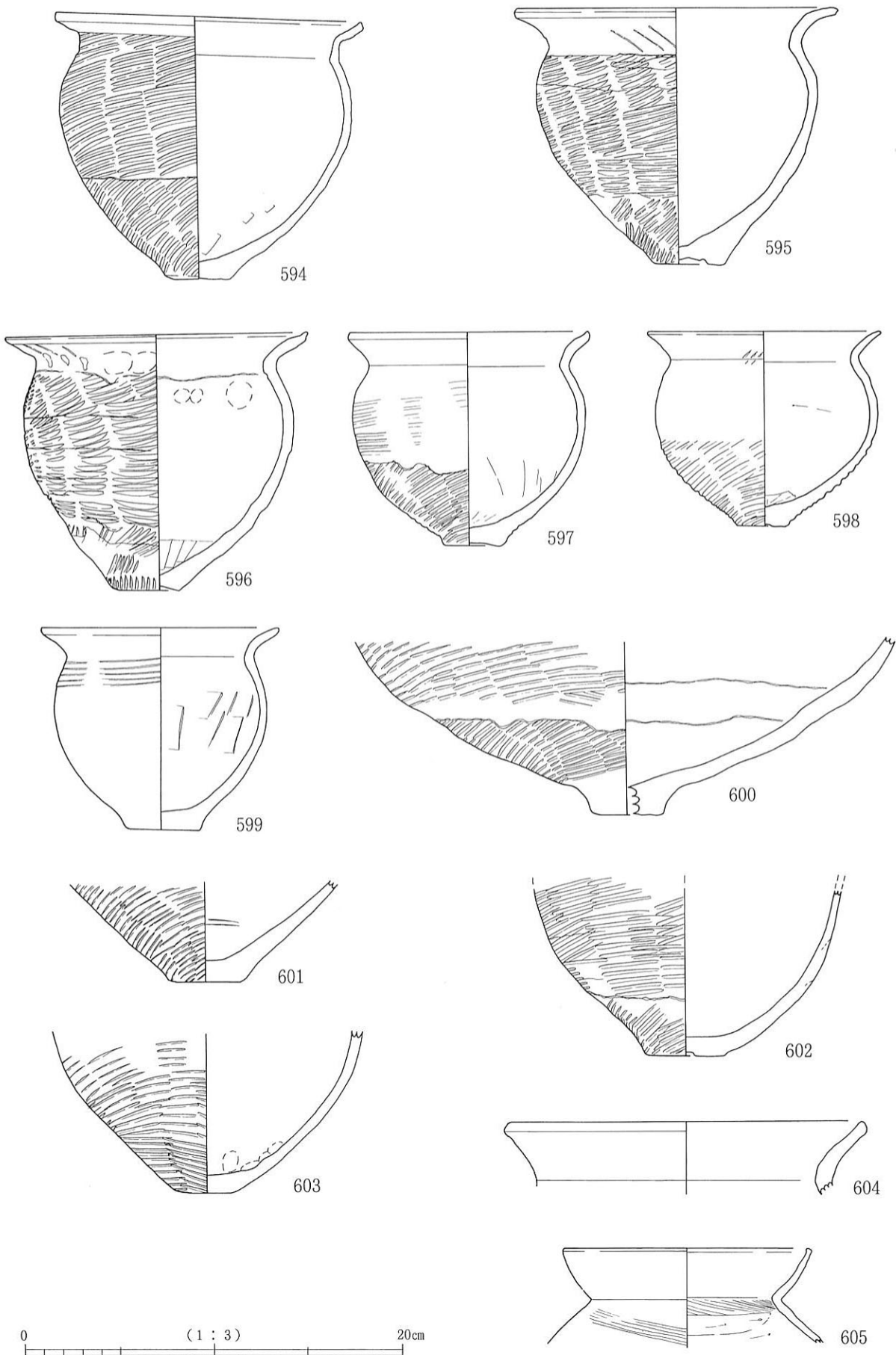


图88 A区8面溝123出土土器

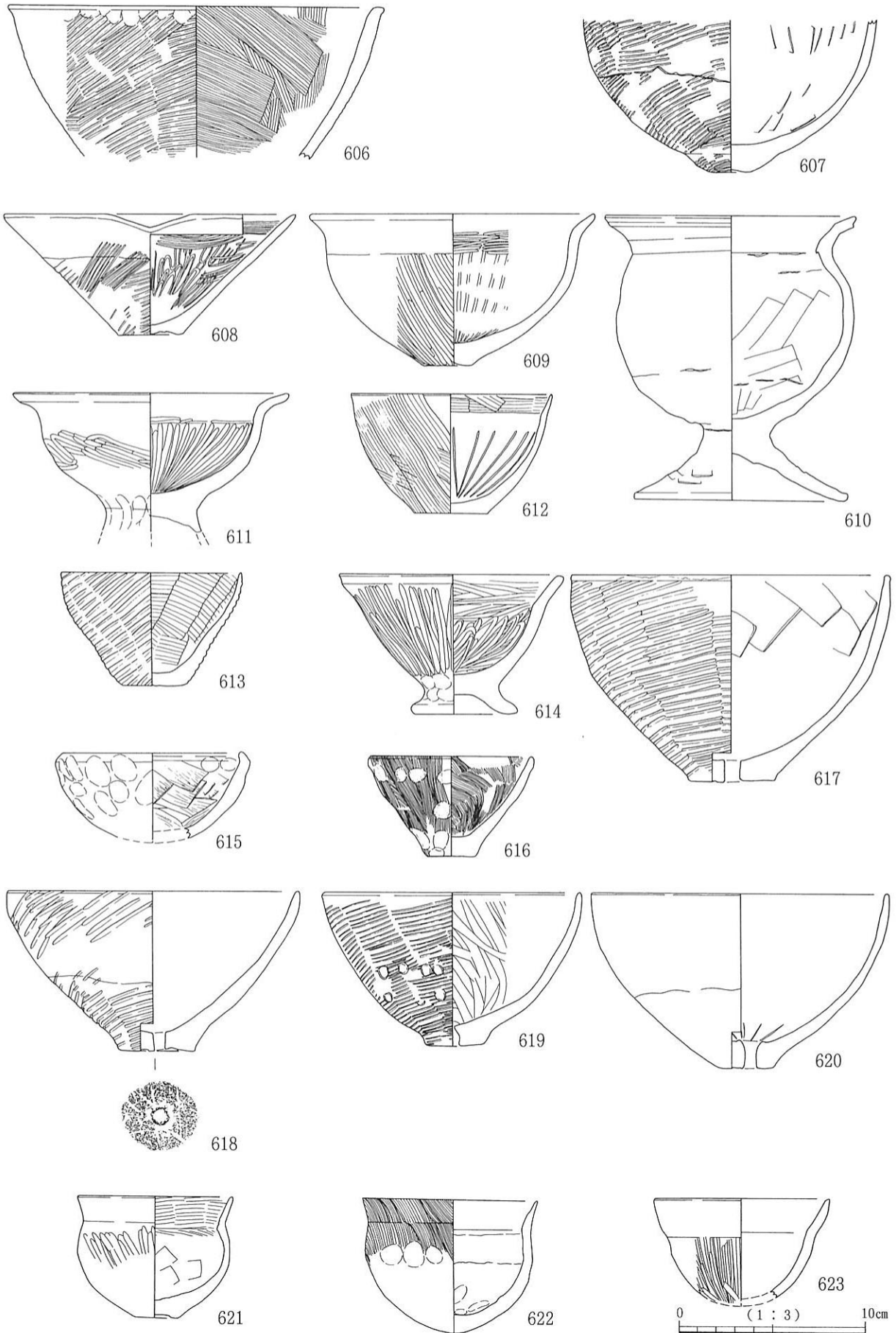


図89 A区8面溝123出土土器

形丸底鉢A (622)、小形丸底鉢B 1 (621)、小形丸底鉢B 2 (623)がある。606は底部を欠くが有孔鉢Aになる可能性が高いと考えられる。607は残存部上端が一部擬口縁状であり、鉢に含めた。608は内面が非常に丁寧にミガキで仕上げられる。611の底面には脚部の剥離痕が明瞭に残る。623は口縁部が外方に開き、厳密には小形丸底鉢B 2に含まれない。

4. B区

1層 (624~630) 耕土であり、土器の出土量は多くない。624~626は磁器染付である。624は高台が露胎であり皿として図示したが、蓋の可能性も高い。松、書物が描かれる。18世紀後半以降に位置づけられる。625・626は肥前焼、皿。625は高台に砂が溶着する。18世紀後半に位置づけられる。626の呉須の発色は濃紺色を呈し、18世紀後半以降とみられる。627は白磁皿で、15世紀に位置づけられる。628は口縁部が内湾してたちあがり復元径は約30cmを測る。火鉢になるかと考えられる。外面は型押し雲文上に緑釉、内面はハケメによる鉄釉が施釉される。629は唐津系施釉陶器碗。外面下半は無釉、外面残部上端と内面には灰色が混じる緑釉が施釉される。18世紀前半。630は土師器皿。

1面 (631) 631は瓦器碗でⅡ-2~3期、12世紀後半とみられる。1層および1面は、近世に位置づけられる。

2層 (632~637) 耕土であり、土器の出土量は多くない。632は玉縁口縁をもつ白磁碗で、Ⅳ類(横田・森田1978)、3期、12世紀のものとみられる。633は肥前系磁器碗で高台周辺以外に施釉され、青色がかった釉調である。見込みには菊花文が描かれる。18世紀後半以降に位置づけられる。634は陶器插鉢口縁。635は瓦器三足釜脚部。636は土師器皿である。口縁部が外方につまみ出され、平安時代のものであろう。637は須恵器杯身。下層からの混入である。2層は近世に位置づけられる。

3層 (638~643) 遺物量は少ない。638は瓦器碗。639は瓦器三足釜脚部。640・641は須恵器甕口縁部。642は土師器蓋。643は土師器甕底部である。640~643は下層からの二次堆積とみられる。少量の遺物からは、3層は14世紀を中心とする中世に位置づけられる。

4層 (644~655) 644~650は和泉型瓦器碗で、644~646はⅢ-3、13世紀末、648~650はⅡ-2~3、12世紀後半に位置づけられる。651は内黒の黒色土器碗高台。652~655は土師器皿で、654・655はやや古相を示す。4層は12~13世紀末を中心とする中世に位置づけられる。

4面溝 (656~658) 656・657は溝13、658は溝17出土である。656は瓦器碗高台。657・658は土師器皿。

5層 (659~671) 659は龍泉窯系青磁碗で、外面には幅の狭い崩れた蓮弁文が彫られる。660は白磁皿で底面は無釉である。661は瓦器釜鏝部。662は口縁端部内面に沈線がめぐる楠葉型瓦器碗で、Ⅲ-2~3、13世紀後半に位置づけられる。663は瓦器皿で底面に部分的に暗文がみられ、662とほぼ同様の時期と考えられる。664~667は土師器皿。668・669は須恵器杯身で、平城宮Ⅲに位置づけられる。669は底面に「奈粘」の墨書があり、下半は欠損のため不明である。670は須恵器甕。671は須恵器提瓶でTK209に並行する時期と考えられる。670・671は下層の洪水砂である6層からの混入とみられ、5層は奈良時代から13世紀後半を中心とする中世に至る耕土層と考えられる。

6層 (672~674) 672は瓦質高杯である。韓式系の爐形土器の可能性も考えられたが、杯部下半の膨らみが小さく、高杯とみた方が適切であろう。ただし杯部外面に明確な稜線はみられない。673は須恵器杯身、MT85に位置づけられる。674は須恵器高杯脚部である。

6面 (675~677) 675は須恵器直口壺。676は須恵器杯蓋。677は土師器有孔鉢Bである。6層および6

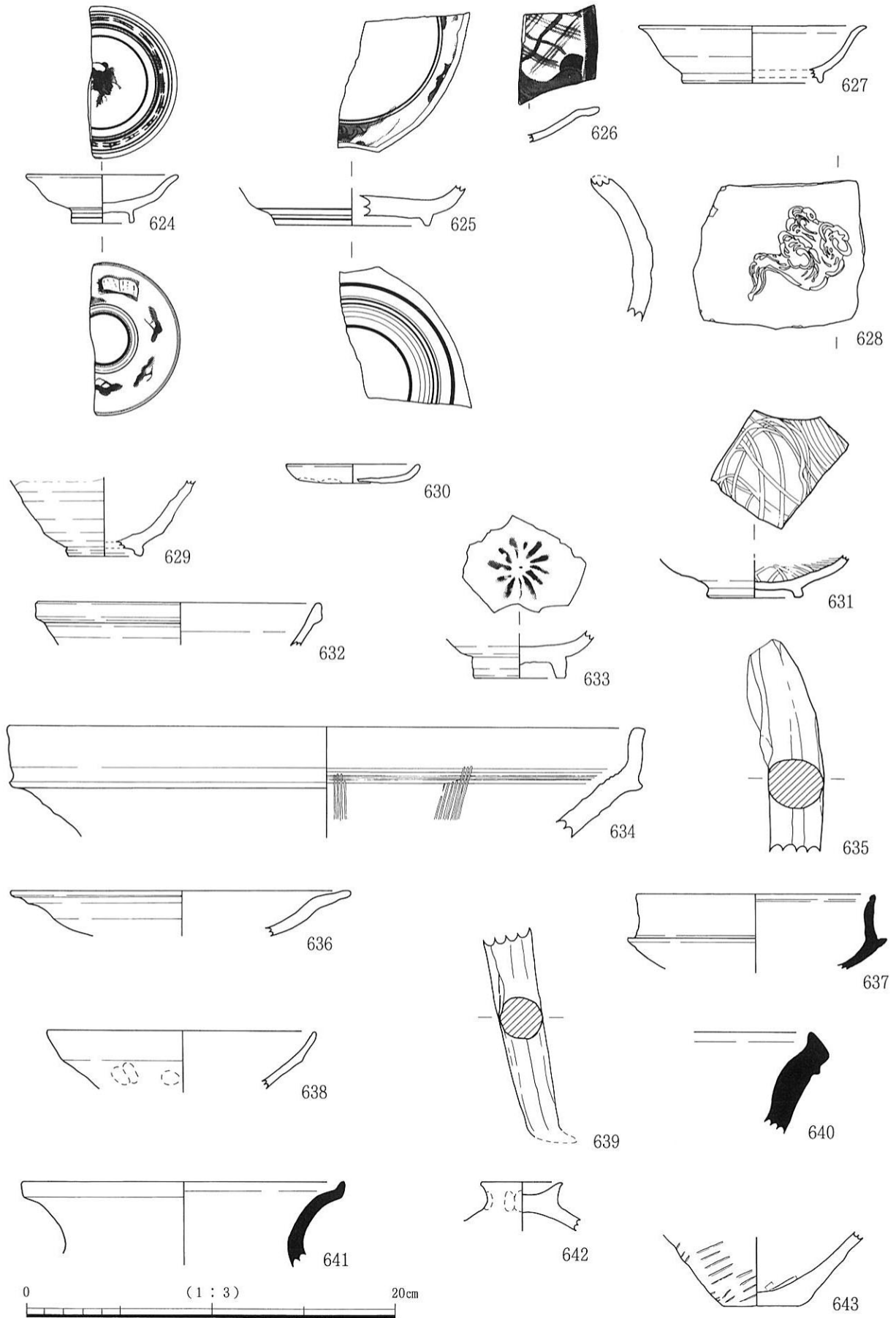


図90 B区1層・1面・2層・3層出土土器

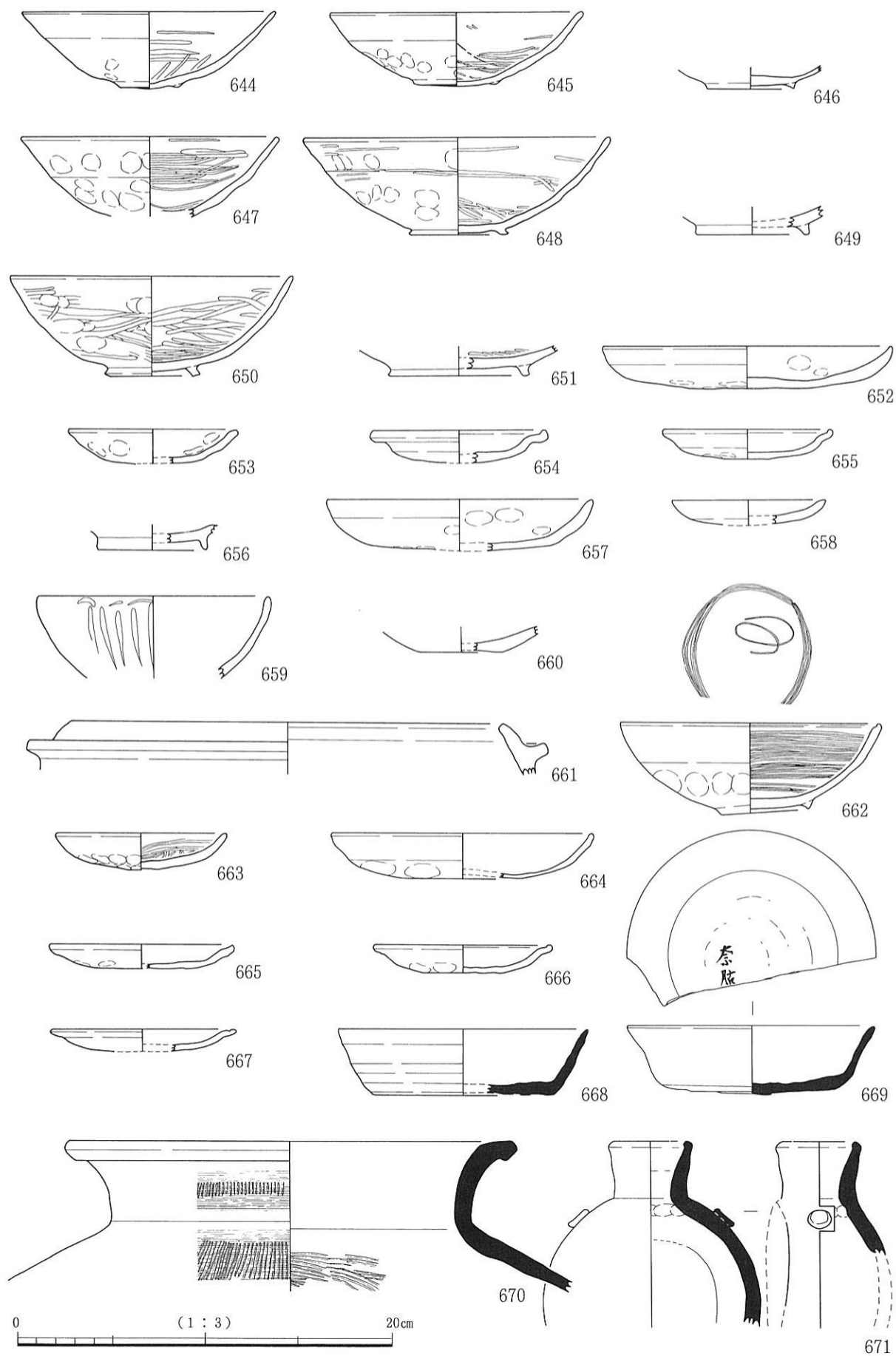


图91 B区4层·4面沟·5层出土土器

面は古墳時代後期後葉に位置づけられる。

7層(678~696) 678は須恵器杯身、MT85に位置づけられる。679は須恵器壺底部。680~695は古墳時代前期土師器。680・681は壺底部。682~687は高杯で、高杯B(682・683)がある。688は口縁部が面をもってたちあがり、頸部はゆるやかに外反する。器壁が薄いため器台と考えたが、壺になる可能性を残す。689~695は甕で、弥生形甕A(689)、弥生形甕B(694)、布留形甕B(690~693)、甕底部がある。弥生形甕Aは口縁端部b(689)、弥生形甕Bは口縁端部a(694)、布留形甕Bは口縁端部b(690)、口縁端部c(691~693)がある。696は土師器鍋の把手。

7面(697~701) 697は須恵器高杯蓋、TK43に位置づけられる。698は土師器小形丸底壺B2~3。699は土師器布留形甕B、700・701は土師器布留形甕Cである。7層および7面は古墳時代前期から古墳時代後期後葉に位置づけられる。

1面溝1(702~727) 近世の遺物が出土し、18世紀後半以降の遺物が多い。B区でコンテナ2~3箱程度の遺物が出土した。

702~711は磁器染付である。702~706は碗である。702は肥前焼で、外面に網目文、見込みに井桁状の記号が描かれる。703は外面に二重網目文が描かれる。702・703は18世紀後半以降に位置づけられる。704は肥前焼で、見込みに唐人が描かれ、高台畳付は露胎で砂が付着する。705・706は外面に草花文、706内面口縁部に四方禪文が描かれる。706は18世紀後半に位置づけられる。707は蓋で、柳葉に似た文様が描かれ、呉須の発色は良好であり、19世紀以降の可能性がある。708・709は皿で、708は口縁端部内面に鉄釉が施釉され、709は口縁部が端反りし、呉須の発色は鮮明で文様は丁寧に描かれる。文様は口縁部内面に波文、内外面に忍冬唐草文が描かれる。710は猪口で、外面に赤色で「ん」「ち」など仮名まじりの文字が描かれる。18~19世紀か。711は肥前磁器で染付御神酒徳利である。瓶子形を呈し、高台は輪高台である。外面に蛸唐草文が描かれ、呉須の発色は悪い。

712は肥前磁器碗高台で、内外面に青味がかかった釉がかかる。畳付は露胎で砂が付着する。713は磁器で、皿になろうか。端反で、内外面に斑のある灰色釉が施釉される。19世紀以降の可能性がある。714は瀬戸美濃焼鉄釉皿で、内外面に鉄釉が施釉され、見込みは蛇の目釉ハギになっている。15世紀後半~16世紀前半に位置づけられる。715は唐津焼刷毛目文碗蓋で、18世紀前半に位置づけられる。716・717は伊賀焼鍋である。716は口縁部をのぞく内外面に鉄釉が施釉され、外面体部にトビカンナにより文様が施される。717の底部外面には煤が付着する。718は伊賀焼行平鍋で、内外面に灰釉が施され、口縁端部の断面形はL字形を呈し露胎である。18世紀後半以降に位置づけられる。719は内外面に赤紫色の釉がかかる小壺で、内面口縁部から外面にかけて丁寧に塗土が施される。小片のため復元径が不明瞭であり、図より径は大きくなる可能性がある。720は瀬戸美濃焼折縁皿である。内面には鉄釉がかかり、見込みには砂目痕が4カ所みられる。口縁端部外面には煤が3カ所付着し、灯明皿として用いられている。底部は回転糸切り痕が明瞭に残る。721は唐津焼刷毛目文鉢で片口になる可能性がある。口縁端部および外面下半は無釉で、口縁部内外面に白泥土で刷毛目が施される。722は御神酒徳利で、瓶子型徳利である。内外面に柿釉がかかり、底部は無釉で回転糸切り痕が一部残る。723は磁器合子蓋。外面には放射状に線が彫られ、その上に緑釉がかかり、三田青磁とみられる。19世紀以降のものである。724は丹波焼小徳利。外面体部に白色釉で文字が書かれるが判読不可。725は小水注の注口で、内外面に灰釉が施される。726は播鉢。赤褐色を呈し、内面の播目は密である。堺焼播鉢の可能性が大きい。堺播鉢とすると、II型式2段階に位置づけられる(白神1992)。727は丹波焼播鉢。内面に6条1単位の播目を施

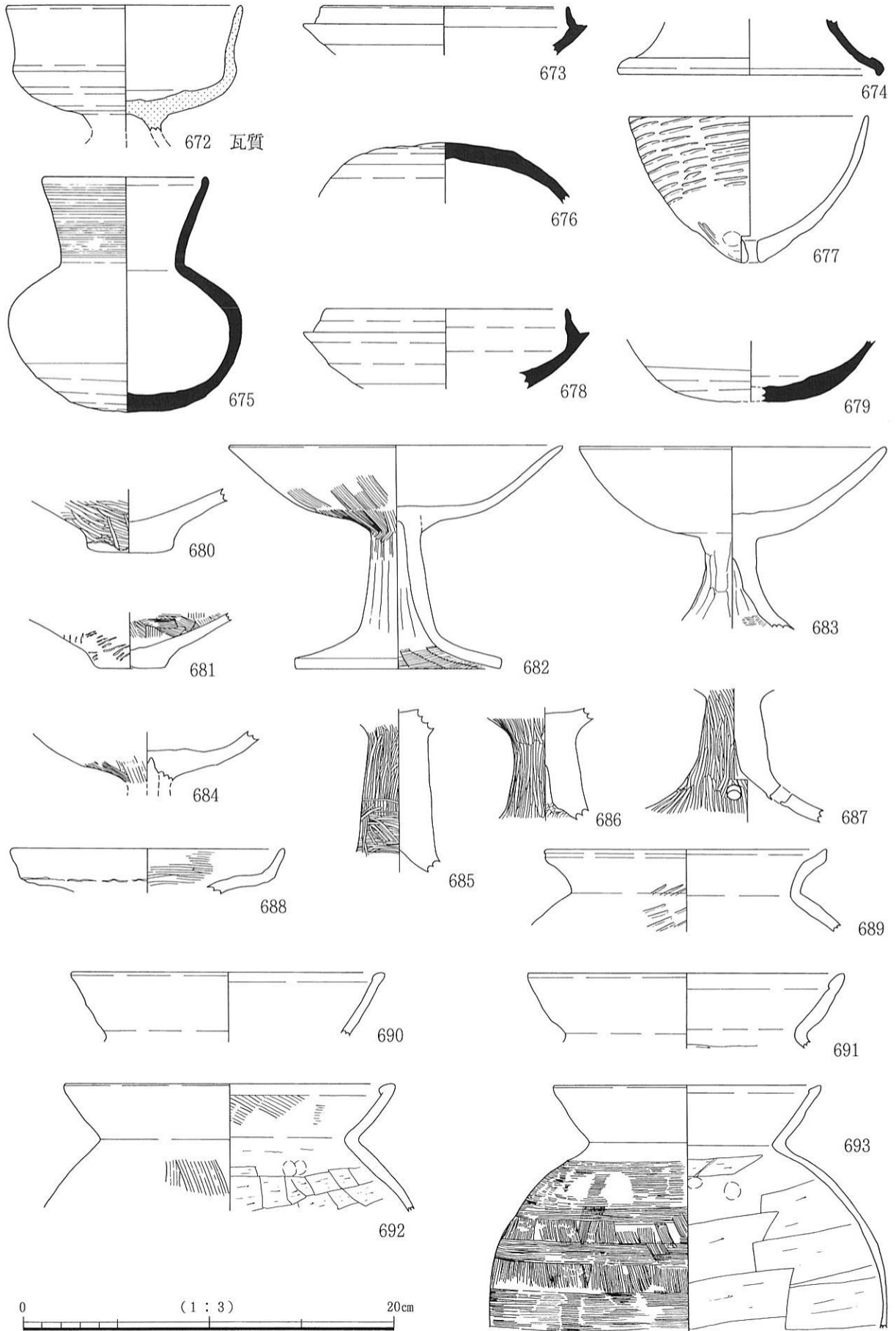


图92 B区6层·6面·7层出土土器

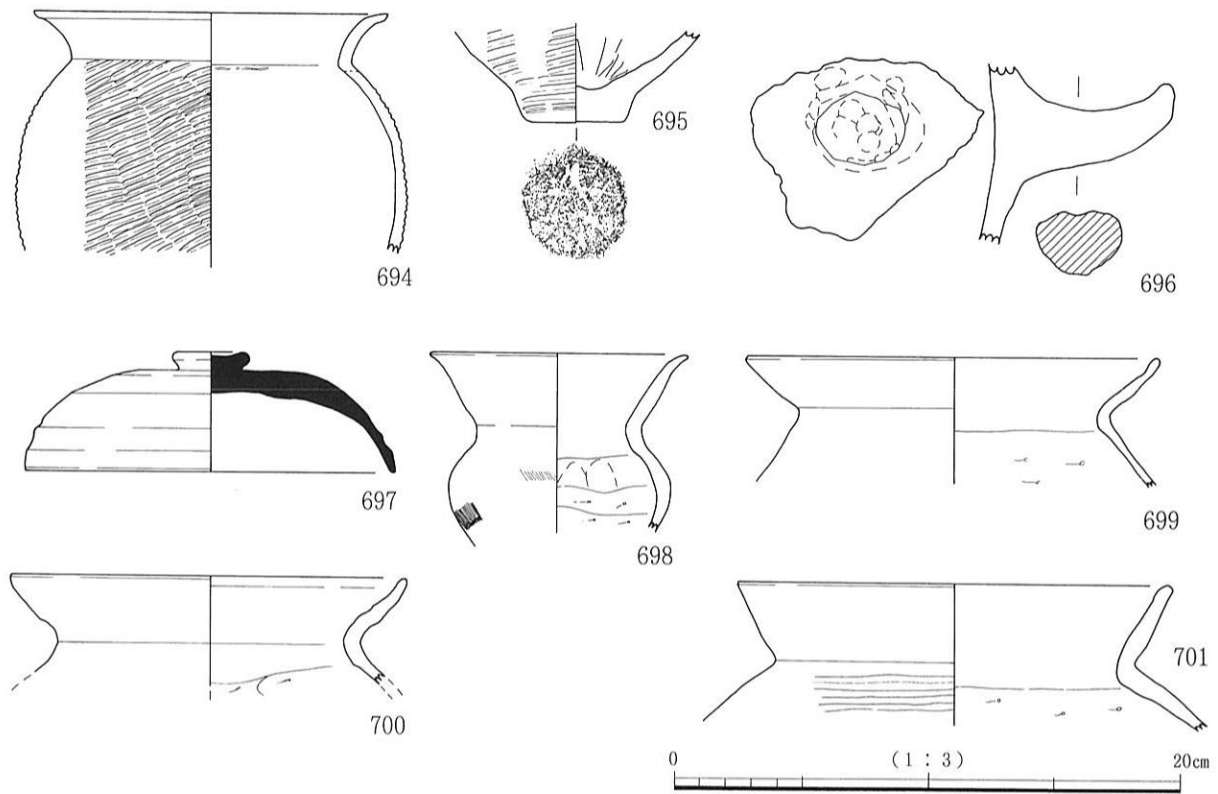


図93 B区7層・7面出土土器

す。

1面溝 (728~734) 728は溝3、729は溝4、730~733は溝5、734は溝6出土である。728は唐津焼碗で、見込みに砂目痕が4カ所みられる。底部外面には、高台の外周に沿って円が墨書された痕跡がある。18世紀前半に位置づけられる。729・734は和泉型瓦器碗で、729はⅢ-2~3、13世紀後半に位置づけられる。730は緑釉陶器碗である。10~11世紀に位置づけられる。731は青磁碗高台で、高台内面および高台畳付は無釉である。見込みには片切彫で文様が描かれる。732は土師器高杯。733は瓦器釜で、Ⅲ-3、13世紀後葉以降のものであろう。

1面土坑 (735~737) 735は土坑1、736は土坑2、737は土坑14出土である。735は唐津焼鉢で、高台部周辺をのぞく外面と内面に灰色釉がかかり、見込み残存部に砂目痕が2カ所みられる。18世紀前半に位置づけられる。736は肥前焼磁器染付碗で、外面に網目文を描く。呉須の発色は悪い。737は土師器皿。

1面河川1 (738~766) 中世~近世河川。738~740は青磁碗。738は外面に幅の狭い崩れた蓮弁文が描かれ、15世紀に位置づけられる。739は高台畳付と底部外面は露胎、740の底部は厚く、高台畳付と底部外面は部分的に釉がかからない。740は見込みに劃花文が彫られる。739・740は、13世紀に位置づけられる。741は白磁碗で、Ⅲ期、13世紀に位置づけられる。742は白磁碗で、高台内外面と底部外面は無釉で、見込みは蛇の目釉ハギである。743・744は瀬戸美濃焼鍋(行平鍋)である。743は外面残存部上端と内面に緑灰色釉がかかり、底部外面には煤が付着する。744は小片で、傾きに不安が残る。口縁部をのぞく体部外面に鉄釉、内面に白色釉が施される。745は唐津焼皿。内外面に緑灰色釉がかかるが、外面下半は部分的に釉がかからない。18世紀後半。746は折縁深皿。無釉で、一足が残存する。瀬戸焼か。747は灰釉陶器碗高台である。748~755は陶器播鉢。748は口縁部外面に浅い凹線がめぐる。748・749は内面赤紫色を呈し色調が似る。750は明るい茶褐色を呈し、備前焼と考えられる。756は陶器甕。

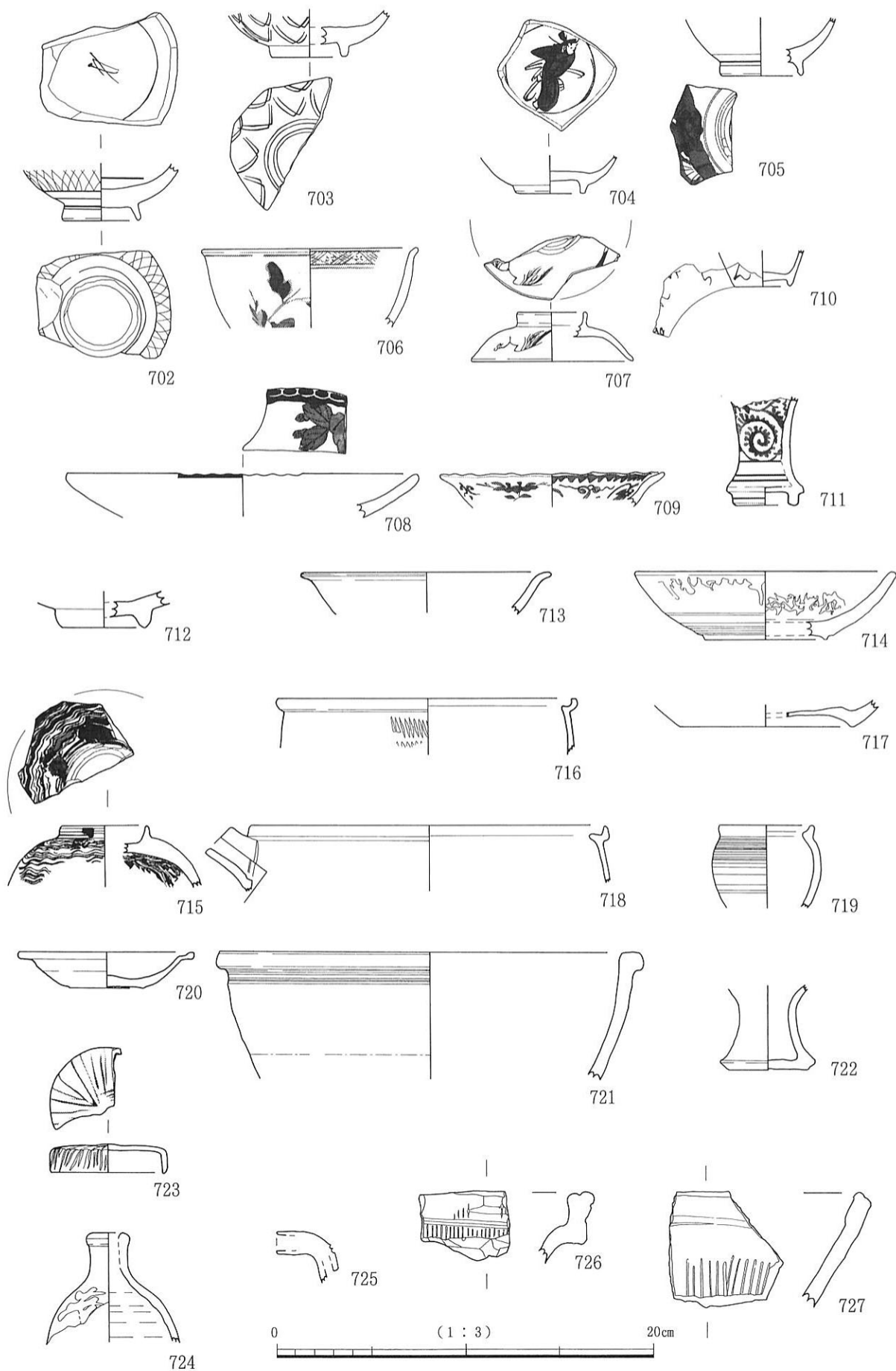


图94 B区1面沟1出土土器

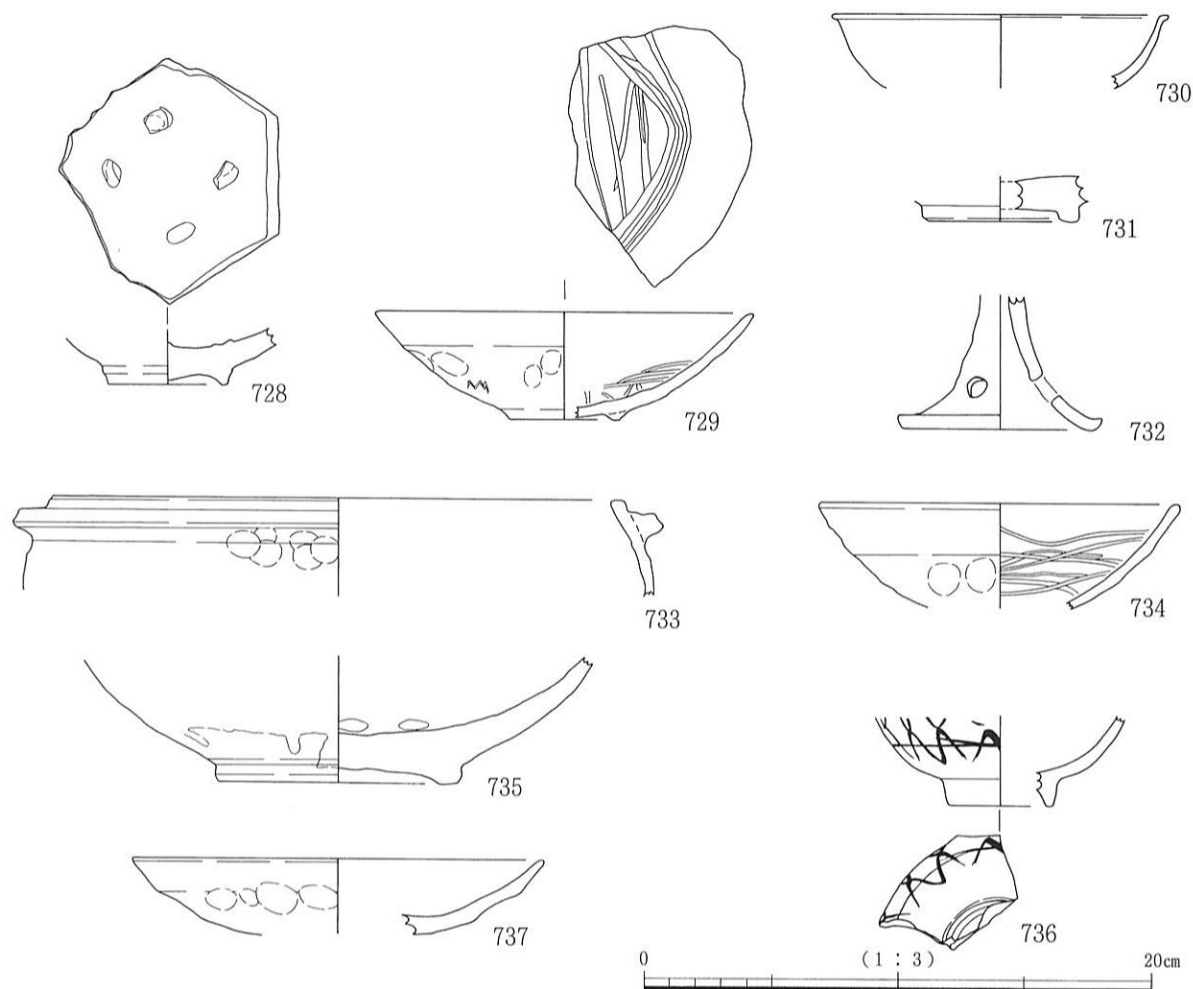


図95 B区1面溝・土坑出土土器

757は備前焼甕口縁部である。小片のため口縁部径は不明であるが、断面形からはV期、17世紀初頭(伊藤1984)に位置づけられる。758は楠葉型瓦器碗で、Ⅲ-2、13世紀中頃に位置づけられる。759は瓦器羽釜で、IV期、14世紀に位置づけられる。760・761は瓦器三足釜の脚部。762も三足釜脚部とみられるが、土師質で先端が丸いことから他の器形になる可能性も考えられる。763は内黒の黒色土器碗高台。764は土師器皿。765は須恵器壺底部で、外面に1条自然釉とみられる緑釉がかかる。766は土師器壺である。

6面河川2(767~800) 粗砂層に埋積して完形に近い土器が多く出土した。古墳時代前期土師器、初期須恵器を含むが、古墳時代後期の土器が主体である。

767~773は須恵器杯蓋である。767は天井部に櫛描刺突文がめぐり、刺突の凹部に緑色釉が残存する。天井部と口縁部の境の稜は上外方に長くのび、天井部にはつまみが付くものと考えられる。初期須恵器であり、TK73に位置づけられる。768・773はかろうじて天井部と口縁部の境の稜がみとめられ、口縁端部は斜めに面をもつ。768~773は大きくMT85に位置づけられる。774~779は須恵器杯身である。774・775は内面底部とたちあがりの境の稜がなく、たちあがりも長いことから776~779に比べてやや古相を示すが、口縁端部は丸くおさめられており、774~779も大きくMT85に位置づけて大過ないと考える。780は須恵器高杯で、底面近くに櫛描刺突文がめぐり。TK43(MT85)に位置づけられる。781は甕の口縁部である。大きく広がり、外面には稜がある。TK43(MT85)に位置づけられる。782~784は須

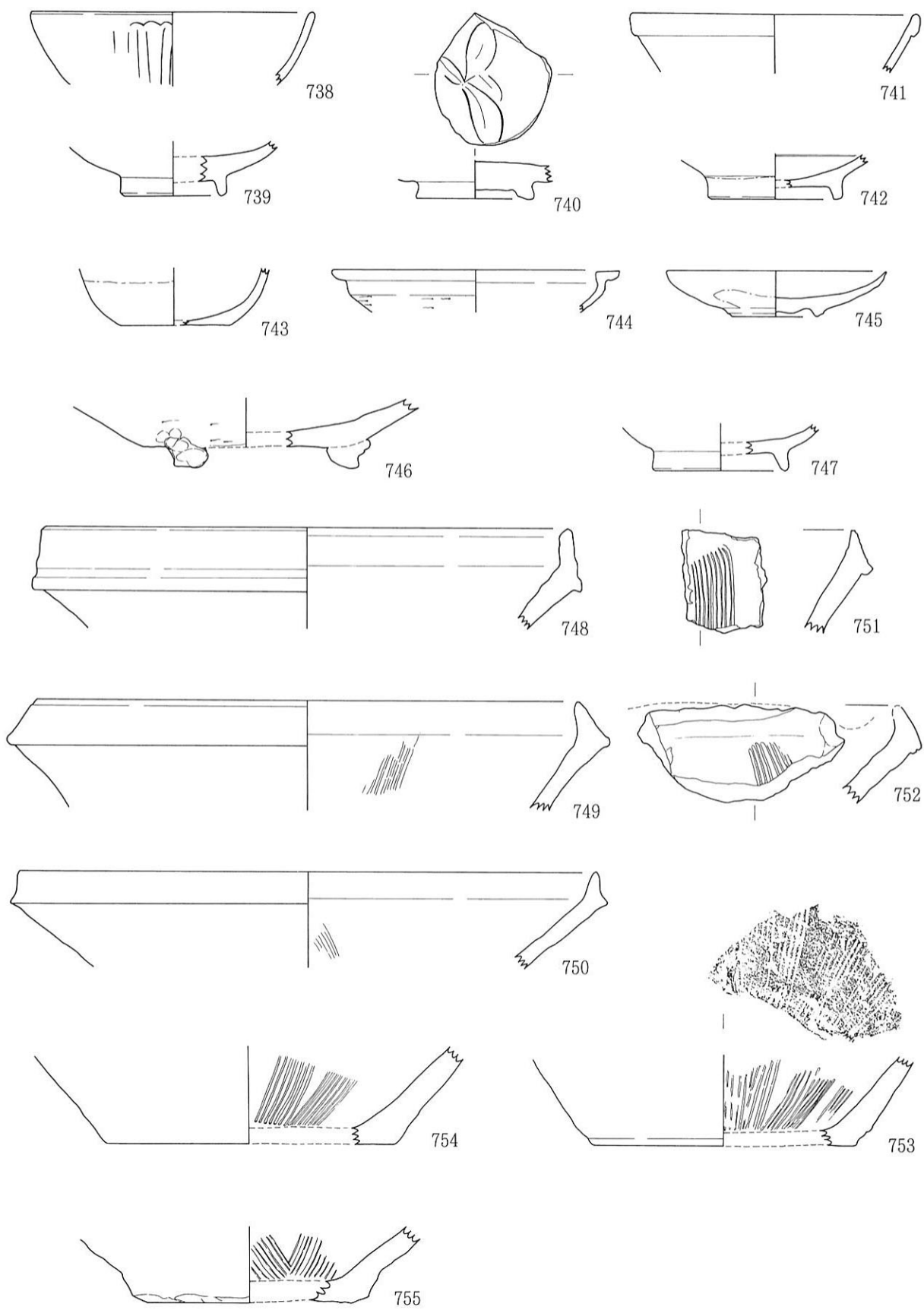


图96 B区1面河川1出土土器

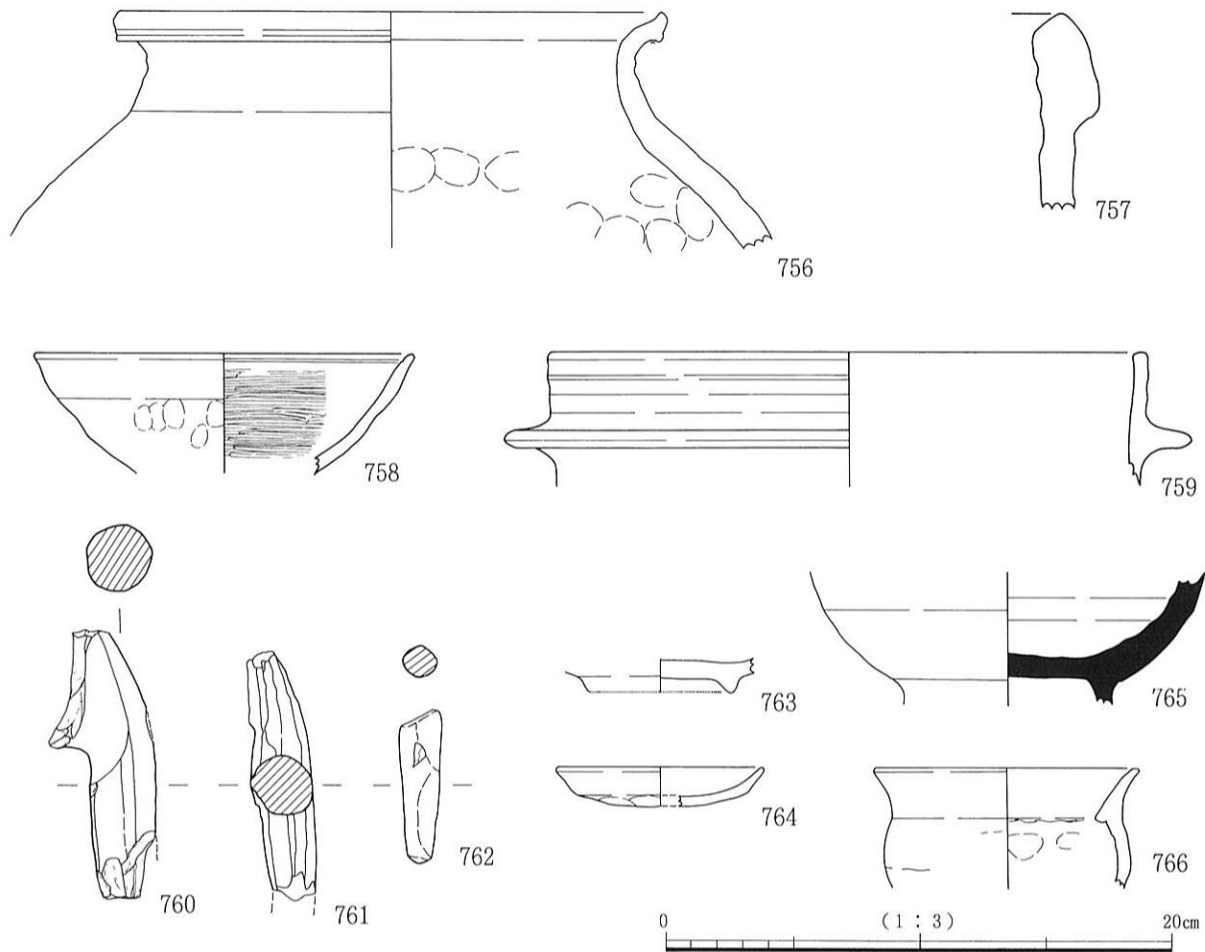


図97 B区1面河川1出土土器

恵器甕である。784は口縁部外面に平行タタキを施した後ナデる。783・784は初期須恵器であり、TK73に位置づけられる。785は提瓶で、肩部にカギ状の把手が付く。TK43 (MT85)に位置づけられる。786は器台脚部である。長方形のスカンが千鳥状に穿孔され、繊細な波状文、山形文が低い突帯間に丁寧に施文される。胎土は灰白色を呈する緻密なもので内面には黒色粒が目立つ。初期須恵器であり、TK73に位置づけられる。

787は土師器二重口縁壺A1で、口縁端部が内側に肥厚する。788～790は土師器高杯。787・788は布留式期に位置づけられる。791～794は土師器甕。791～793は布留形甕Cで口縁端部aである。794は頸部の屈曲がゆるやかであり、やや長胴の甕になると考えられる。795は手捏土器である。796は土師器羽釜鏝部。797は土師器鍋で、口縁部には打ち欠きがみられる。798～800は移動式竈。798の内面および底の下面には煤が付着する。

5. C区

西3層 (801～812) 13世紀を中心とする中世包含層。

801・802は和泉型瓦器椀で、Ⅲ-1、13世紀前半に位置づけられる。803は須恵器高杯蓋である。天井部はカキメを施し、扁平なつまみが付く。804は須恵器杯蓋、805～808は須恵器杯身である。803～808はMT85に位置づけられる。809は土師器高杯A2で布留式期新相以降のものである。810は土師器把手で、穿孔が1カ所ある。811は角状把手で、刻み目はみとめられない。812は移動式竈の底である。

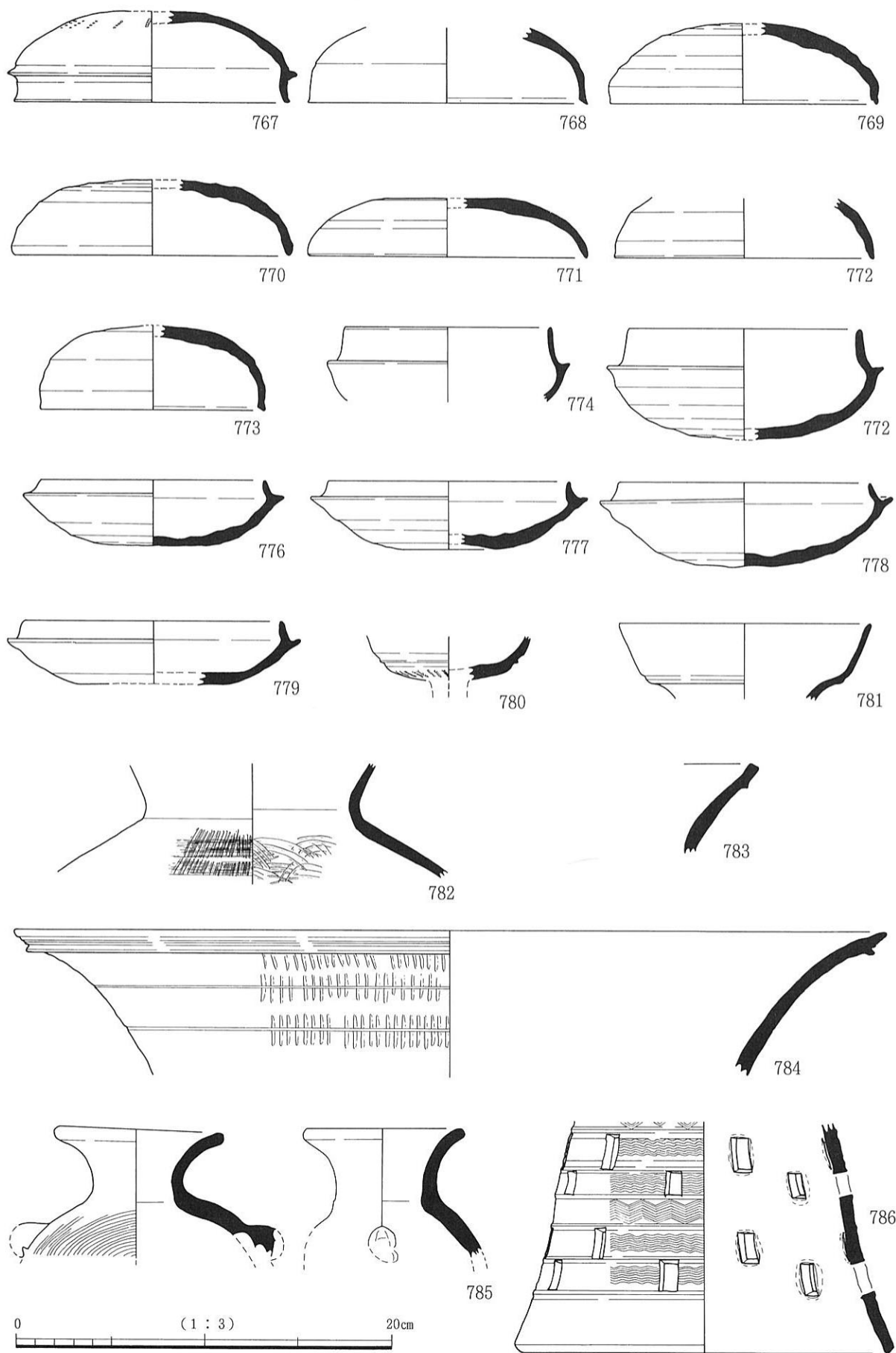


图98 B区6面河川2出土土器

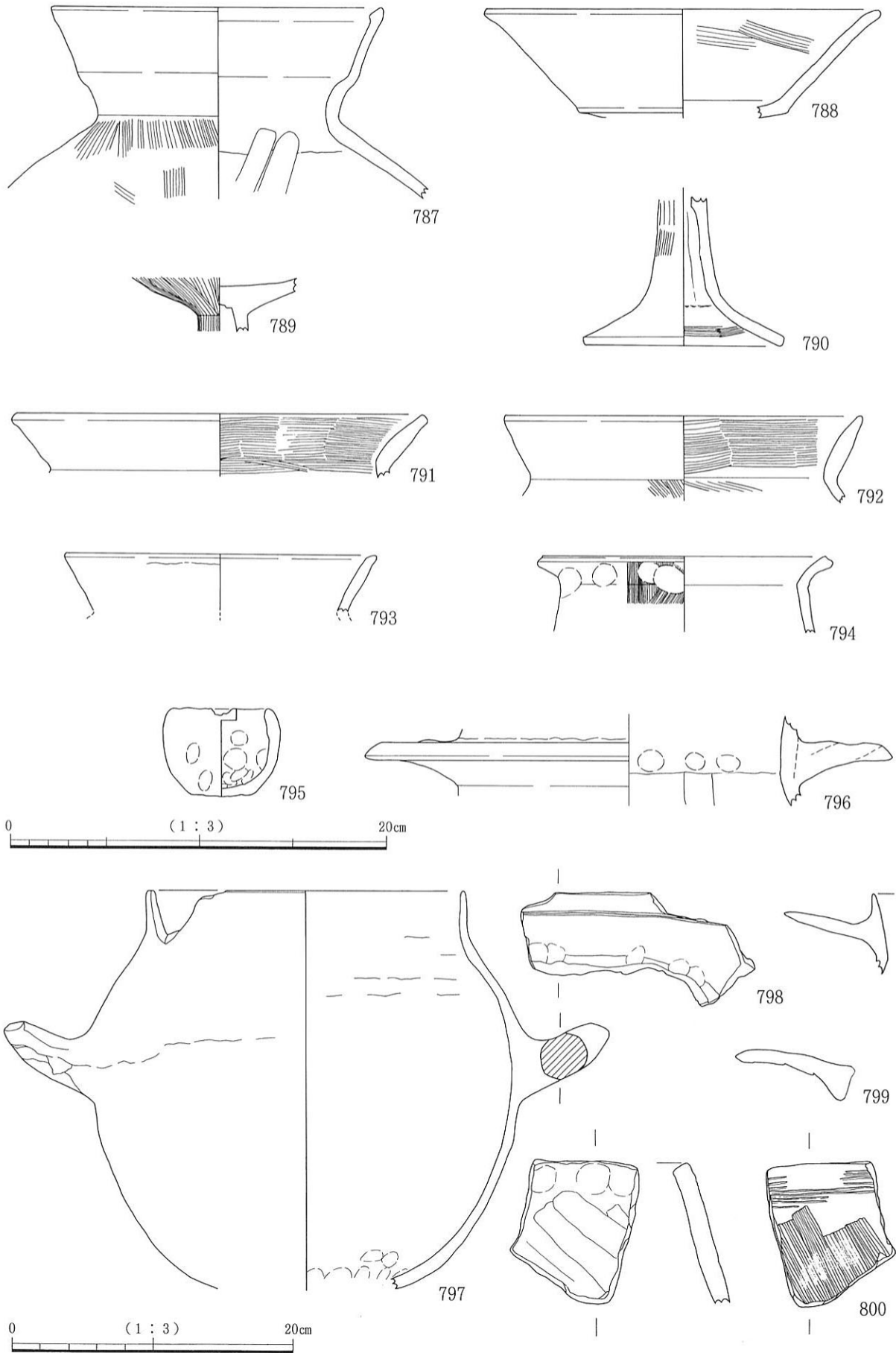


図99 B区6面河川2出土土器

西3面(813~823) 13世紀を中心とする中世遺構面であるが、出土遺物は古墳時代後期の遺物が主体である。後述する西4層の824は本面に含まれる可能性が高い。

813~815は須恵器杯身で、MT85~TK209に位置づけられる。813は底部外面に自然釉および溶着がみとめられる。814は底部外面にヘラ記号がある。816~818は土師器甕で長胴になると考えられる。816は口縁端部に面をもち内外面にハケメを施し、胎土も精良なものである。819は土師器杯で、底部内面に浅いヘラ記号「×」が、底部外面に木の葉痕に似たヘラ記号が記される。820は土師器羽釜、821は長胴甕か羽釜か鍋の底部である。816~821は5世紀後葉~6世紀の土師器と考えられる。822は土師質の樽形甕である。ほぼ完形で、内外面ともナデで仕上げられ、無文であり、体部下半に黒斑がある。樽形甕はTK73~TK208の須恵器にみられる器形であり、これを模倣したと考えられるが年代は明らかではない。類例には熊本県人吉市相良村覚井古墳群出土の土師質樽形甕がある(熊本県立装飾古墳館1994)。823は土師質の中実の脚である。底部径9cmを測る。類例は上町台地上の大阪城跡下層で、古墳時代後期を中心とする奈良時代までの包含層でみられ、台付鉢と呼称される((財)大阪文化財センター1992)。

西4層(824~886) 824は瓦質甕である。頸部は肥厚せずにはちあがり、口縁部は断面三角形である。肩部外面には細いタキが施される。I群、13世紀後葉~14世紀中葉に位置づけられる(鋤柄1999)。4層出土遺物中、中世土器は824のみであり、層境近くで出土していることから、これは西3面に含まれる可能性が高い。これ以外の遺物をみれば、古墳時代中期から飛鳥時代前半の遺物が出土し、古墳時代後期後葉の遺物が主体である。

825~835は須恵器杯蓋である。MT15~TK43に位置づけられる。836・859は須恵器高杯蓋。837~847は須恵器杯身。MT15~TK43に位置づけられ、TK10が主体である。848~856は須恵器高杯。851の無蓋高杯で小さな把手をもつものから長脚二段スカシのもの、低脚のものがあり、TK47~TK43に位置づけられる。857は口縁部に波状文を密に施すもので、甕と考えられる。858は台付長頸壺の蓋とみられ、TK43に位置づけられる。860は短頸壺、861~863は広口壺である。864~871は甕で、868は初期須恵器とみられる。872は器台脚部で、TK43に位置づけられる。

873は土師器中形鉢C1、874は土師器高杯A2である。875~877は土師器甕で、875・876は布留形甕Cで口縁端部a、877は布留形甕Bで口縁端部bである。878は土師器杯Cである。ほぼ完形で、精良な胎土を用い丁寧に仕上げられる。内面には放射状に暗文が施される。飛鳥Ⅱに位置づけられる(古代の土器研究会1992)。879・880は手捏土器。881・882は土師器鍋の把手、883は土師器甕底部、884・885は土師器移動式竈で、884は掛口から庇、885は裾の部分である。886は土師器で器形・用途は不明である。厚さ1.5cmの盤状で、一方は幅が狭くなりやや湾曲し、一方は幅が広がる形状で、縁がやや外方に低くたちあがる。縁の高さは、幅が狭い方で2cm、高い方で3.8cmであり、幅が広がるにつれて高さを増す。全ての面はナデで仕上げられ、煤の付着や黒斑はみられない。胎土は在地のものと考えられる。類例は淀川を挟んで対岸にあたる寝屋川市讚良郡条里遺跡(大阪府教育委員会1991)、寝屋川市長保寺遺跡(寝屋川市教育委員会1993)でみられ、後者では移動式竈の焚口の枠である可能性が示唆されている。また、三重県多気郡明和町コドノA・コドノB遺跡にも類例がみられ、これは断面三角形の筒状になるものである(三重県埋蔵文化財センター1998)。

西4面(887~891) 古墳時代後期後葉を主体とし、西4層出土遺物を考慮すると、飛鳥時代前半を下限とする遺構面である。

887は須恵器杯蓋で、MT15に位置づけられる。888は須恵器杯身でMT85に位置づけられる。889は有

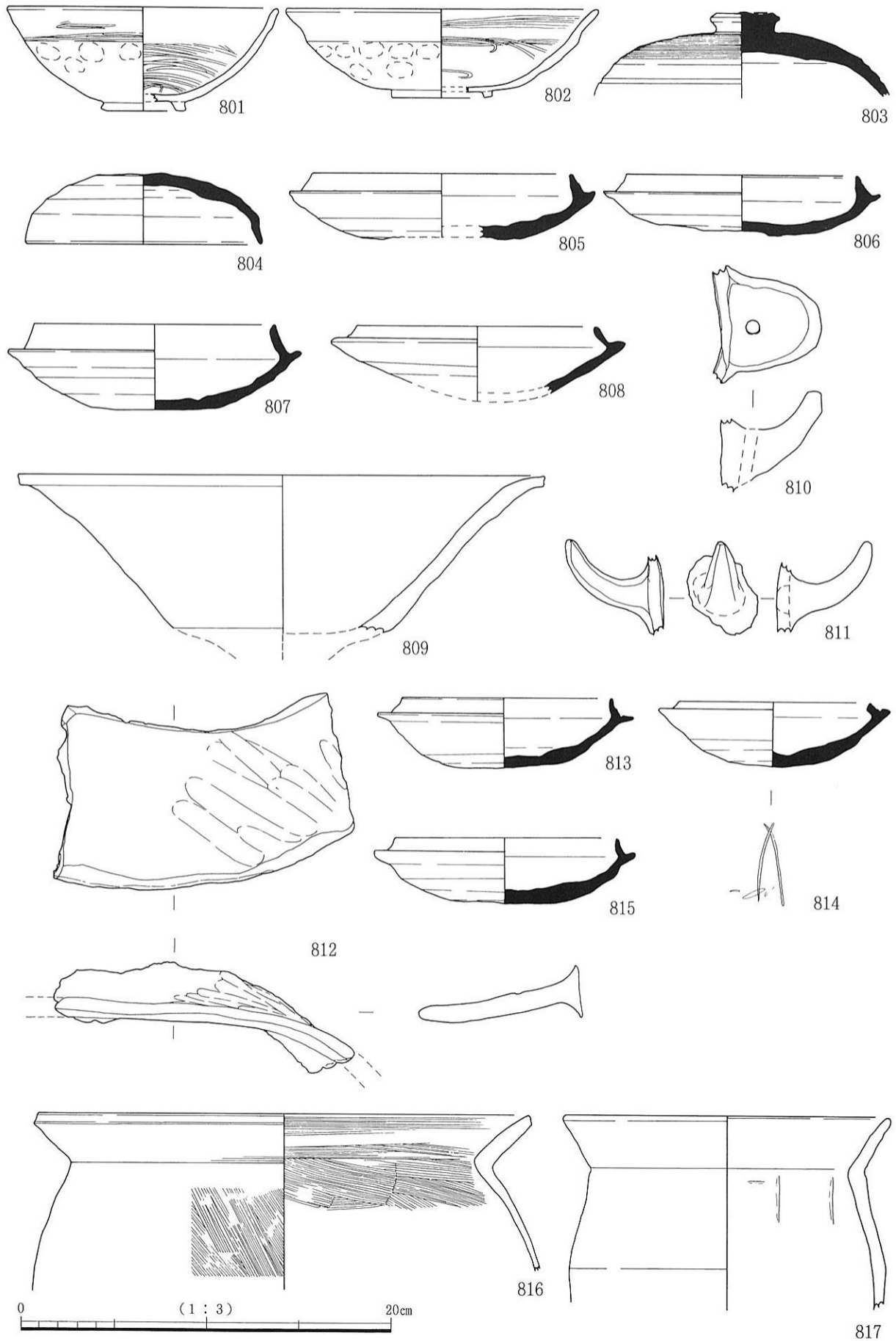


图100 C区西3層・西3面出土土器

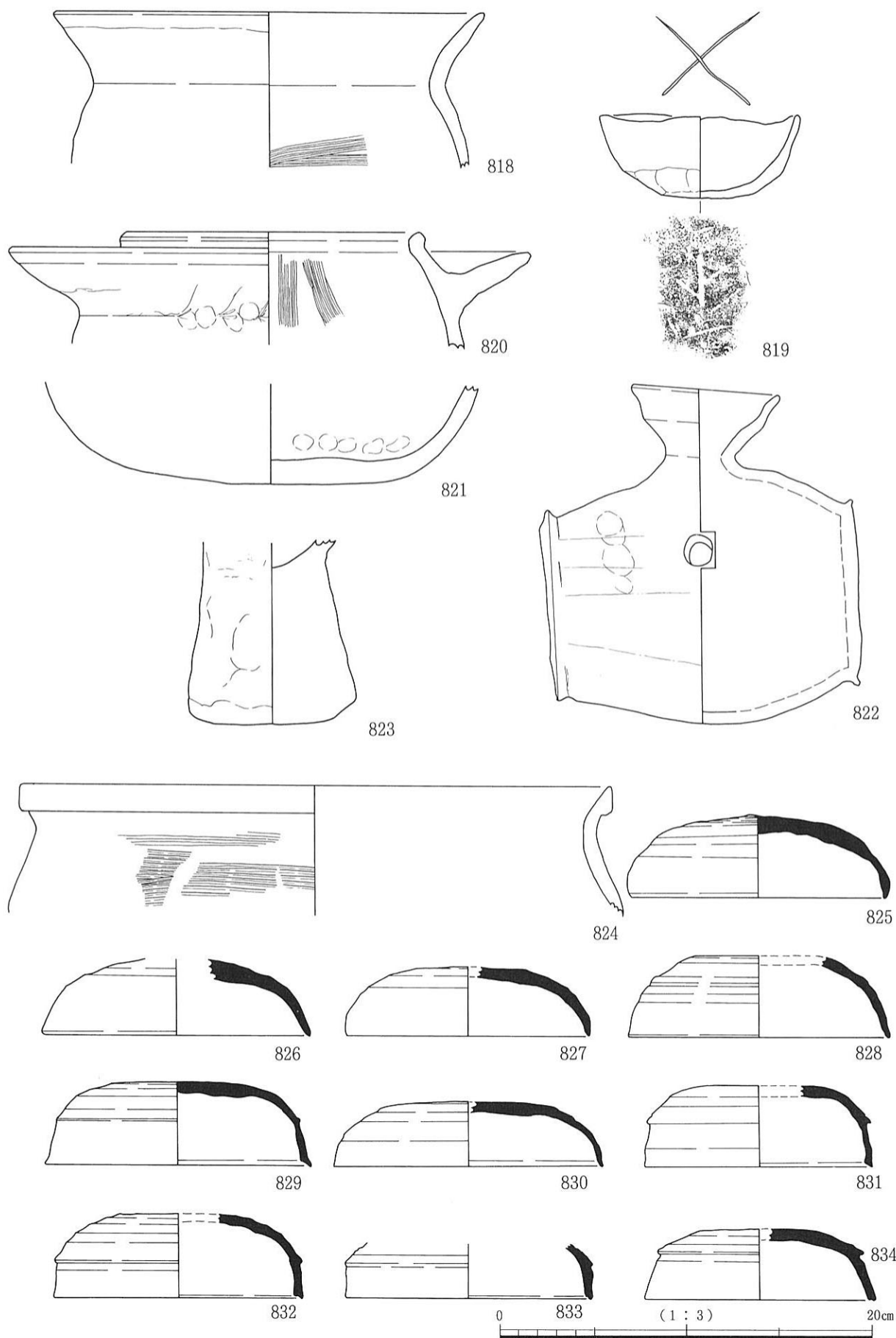


图101 C区西3面·西4层出土土器

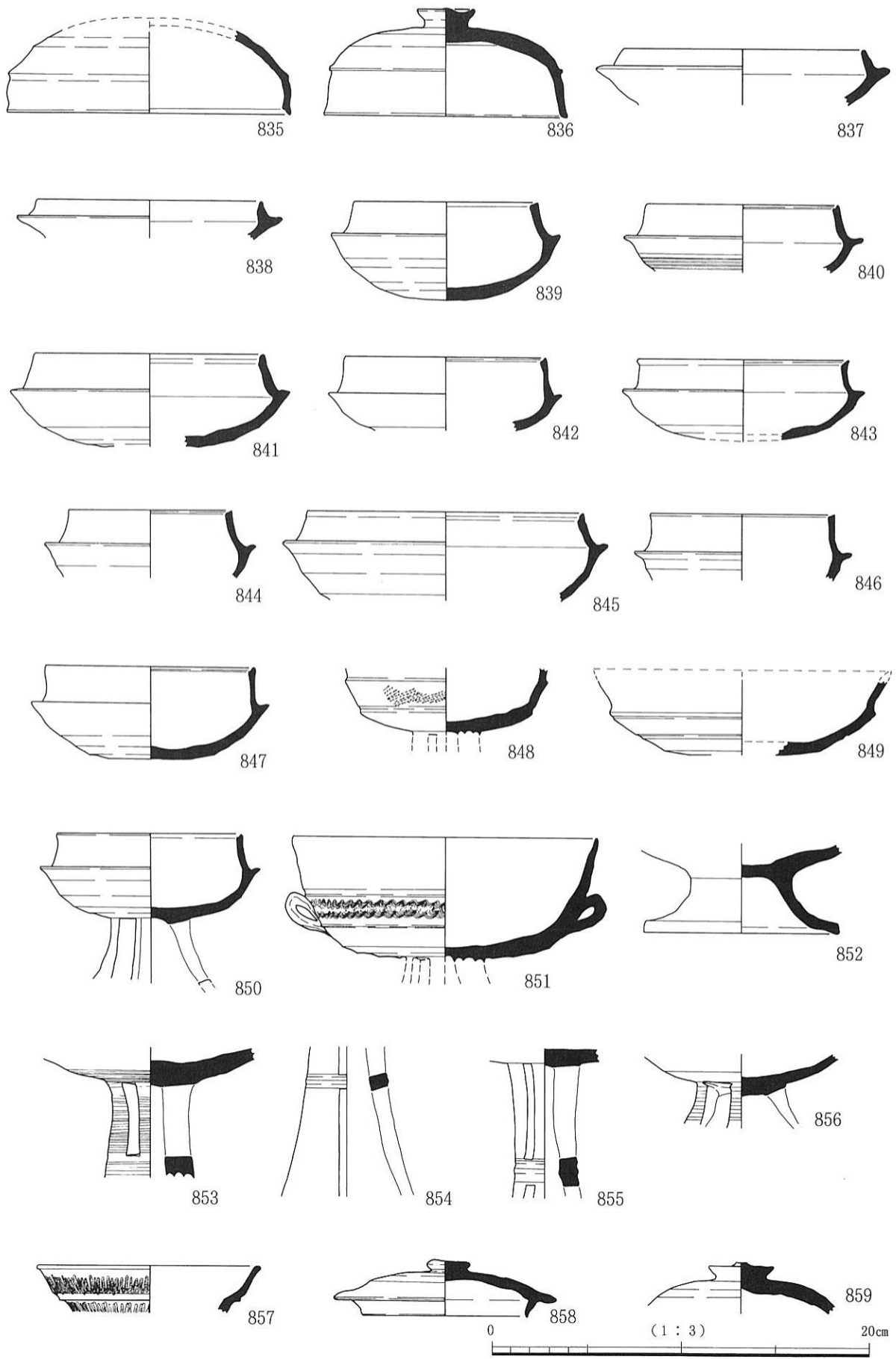


図102 C区西4層出土土器

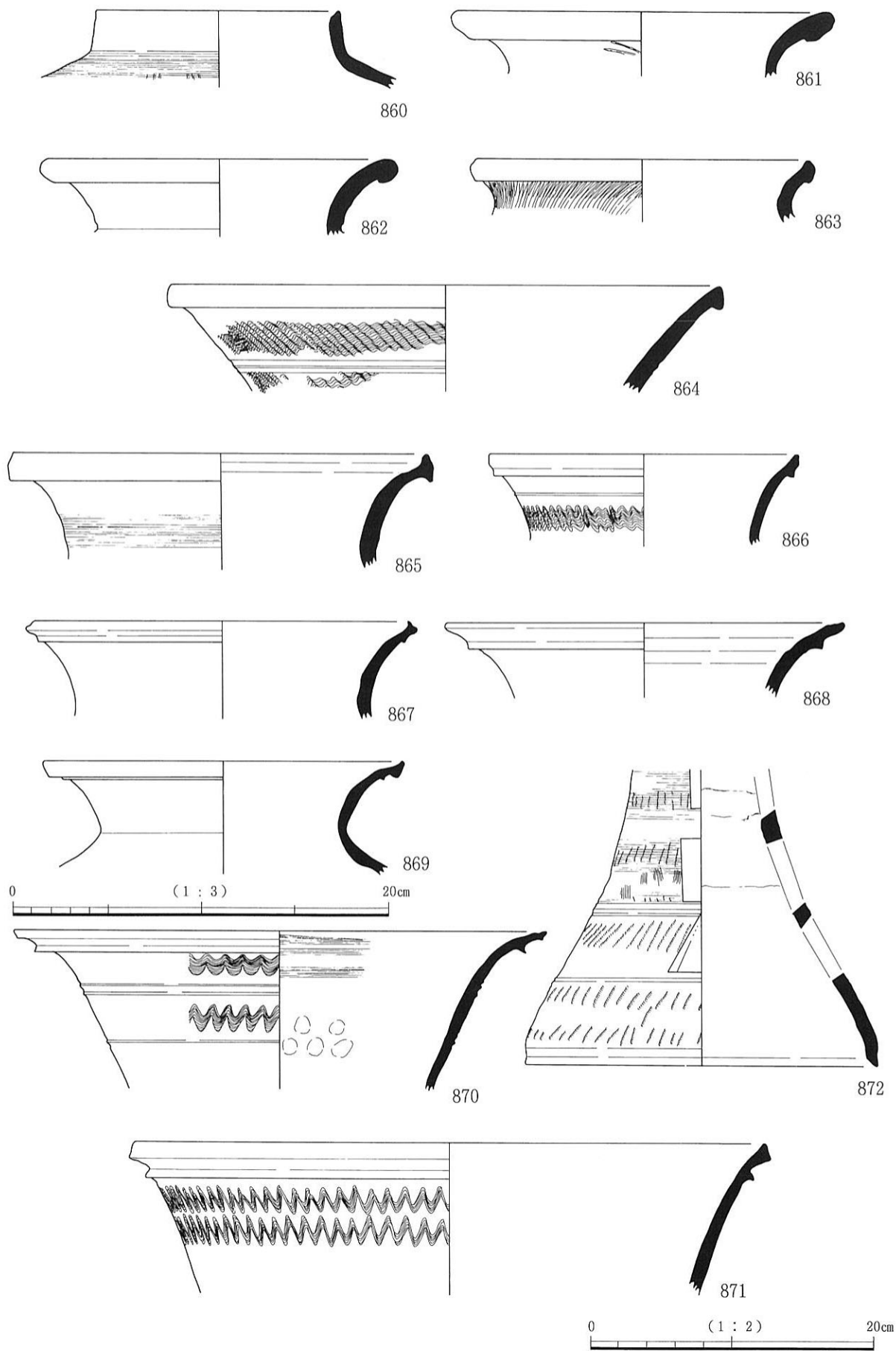


图103 C区西4层出土土器

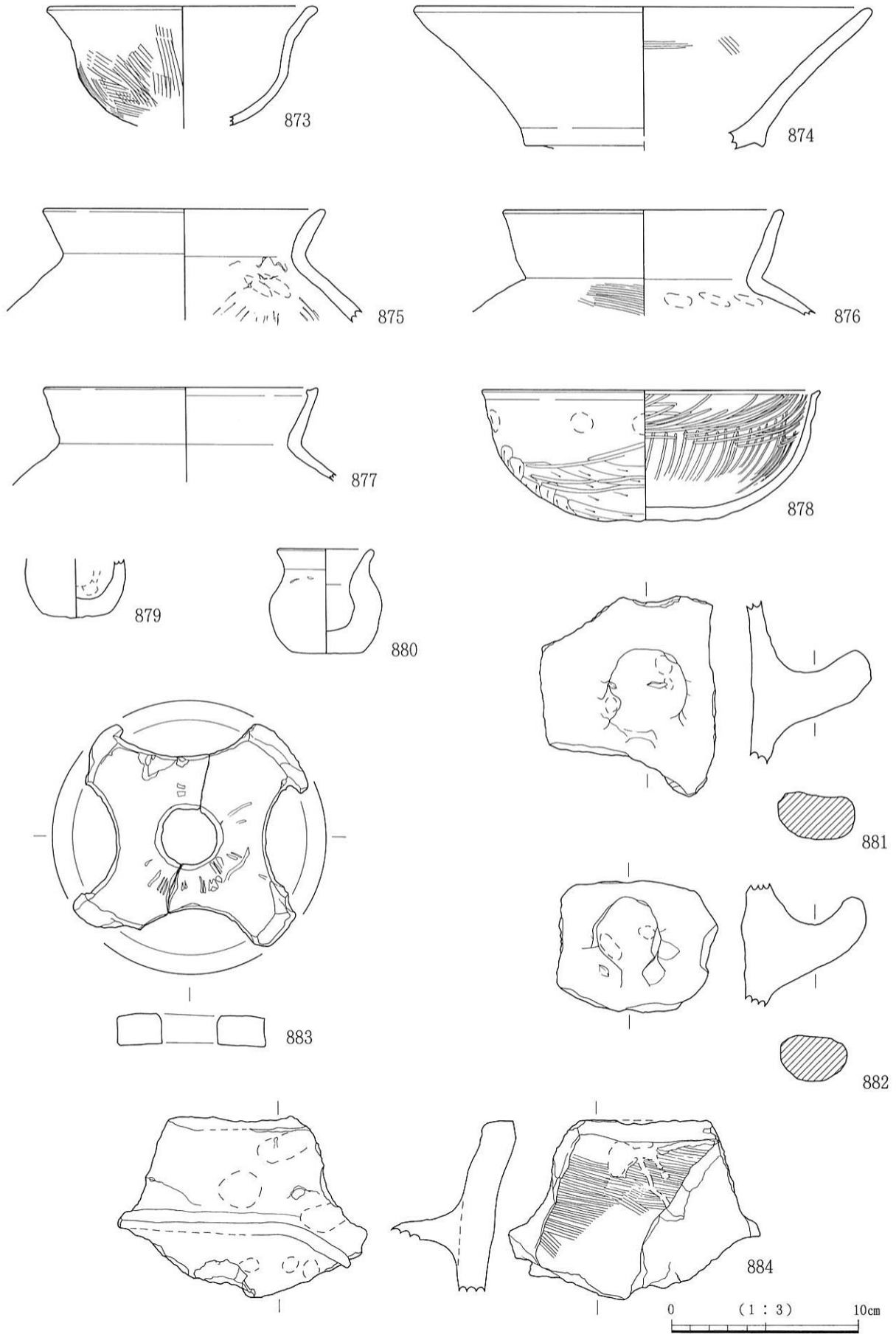


図104 C区西4層出土土器

蓋短脚高杯で、MT85に並行する時期と考えられる。890は須恵器甕で、口縁部の稜は明瞭であり、孔の周辺は面取り状に削られる。焼成は堅緻で灰黒色を呈する。TK208に位置づけられる。891は土師器甕である。

西5層 (892～904) 古墳時代後期後葉を下限とする遺物包含層である。

892は須恵器杯蓋で、MT15に位置づけられる。893は須恵器有蓋長脚高杯で、TK43に位置づけられる。894は須恵器甕。895は二重口縁をもつ須恵器壺で、外面は細く浅い平行タタキ、内面は丁寧なスリケンで仕上げられる。初期須恵器で、TK73に位置づけられる。

896～898は土師器小形丸底壺。土師器小形丸底壺A (896)、土師器小形丸底壺C (897・898)があり、896・897は口縁部に打ち欠きがみられる。899～902は土師器高杯。高杯A 1 (901)、高杯B (900)、高杯C (899)、脚部 (902) があり、901は杯部外面に棒状刺突痕がみられ、口縁部には打ち欠きがみとめられる。903・904は土師器布留形甕Bで、口縁端部aである。

西6層 (905～926) 古墳時代後期後葉を下限とする遺物包含層である。土師器の多くは須恵器出現以降のものと考えられる。

905は須恵器杯蓋、906・907は須恵器杯身で、TK43に位置づけられる。906は焼成不良のため、瓦質～土師質に近い。

908～910は土師器壺で、広口壺A (908)、直口壺 (909)、壺底部 (910)がある。911～919は土師器高杯で、高杯A (913)、高杯B (914・915)、高杯C (911)、脚部 (916～919) がある。911は杯部内面に浅く、不明瞭な暗文がみられ、須恵器出現以降のものである。917はラセン状粘土紐巻き上げにより脚部を成形する。920～923は土師器甕である。すべて布留形甕Bであり、口縁端部a (920・923)、口縁端部c (921・922) がある。924・925は土師器鉢で、小形鉢A 2である。926は土師器甕底部である。

西6面 (927～931) 古墳時代後期後葉の遺構面である。

927は須恵器杯蓋で、TK43に位置づけられる。928は土師器小形丸底壺B、929は土師器高杯B、930は土師器布留形甕Bで口縁端部a、931は土師器甕口縁部である。

西7層 (932～967) 古墳時代後期後葉を下限とする遺物包含層である。土師器の多くは須恵器出現以降のものと考えられる。

932～935は須恵器杯蓋、936～939は須恵器杯身で、MT85に位置づけられる。940・941は須恵器高杯で、TK23～TK47に位置づけられる。942～948は須恵器甕である。942は肩部片で平行タタキに沈線が2条めぐり。焼成は堅緻であるが還元状態が不十分であったためか茶褐色を呈し、胎土に石英粒を多く含む。946・948は初期須恵器で、TK73並行とみられる。949は甕の体部とみられるが、焼成不良のためか土師質である。

950は土師器小形丸底壺Cである。951～961は土師器高杯で、高杯A 2 (951～953)、高杯B・C (954)、脚部 (955～961) がある。956・957はラセン状粘土紐巻き上げにより脚部を成形する。962～964は土師器甕で、布留形甕B (962・963) で口縁端部b、外来系土器の甕 (964) がある。965・966は土師器大形鉢A 2で、965は口縁部に打ち欠きがある。967は土師器甕である。

西9層 (968～970) 古墳時代前期の遺構面である。遺物は少ない。

968は土師器直口壺、969は土師器布留形甕Bで口縁端部a、970は土師器高杯脚部である。

西10層 (971～974) 古墳時代前期の遺構面である。遺物は少なく、弥生土器が混じる。

971は土師器布留形甕Cで口縁端部a、972・973は弥生土器甕底部、974は土師器小形器台脚部である。

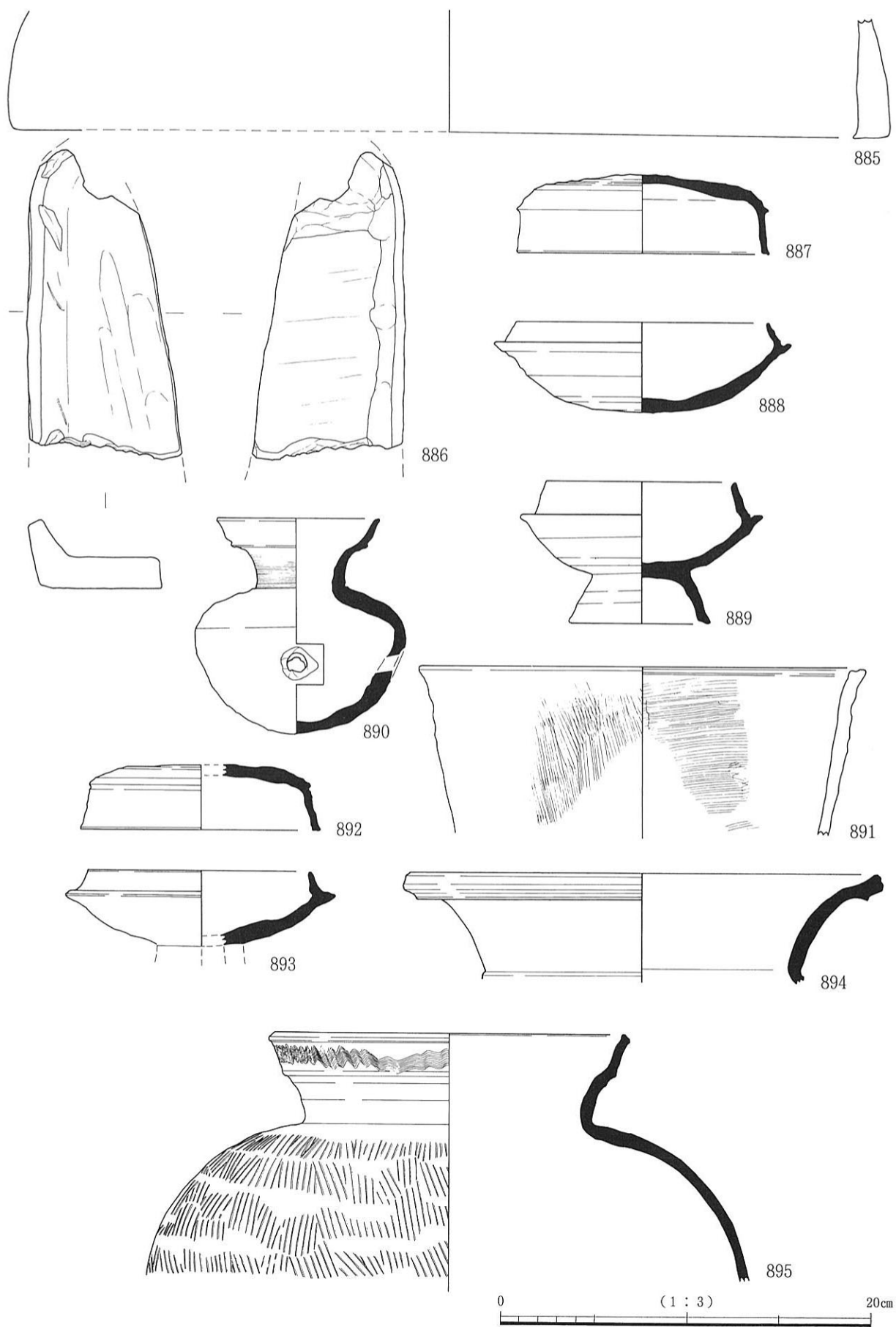


图105 C区西4層・西4面・西5層出土土器

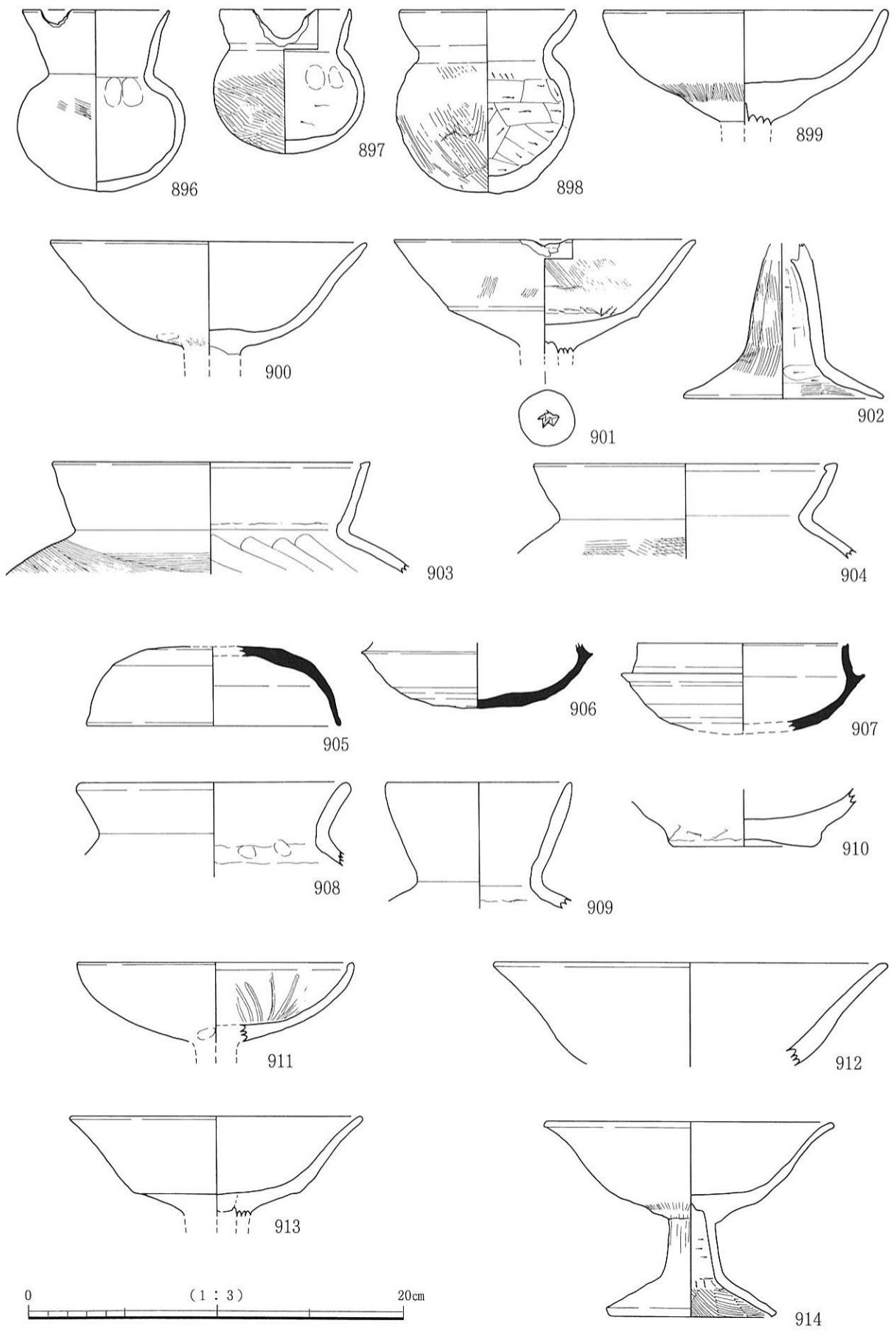


图106 C区西5层·西6层出土土器

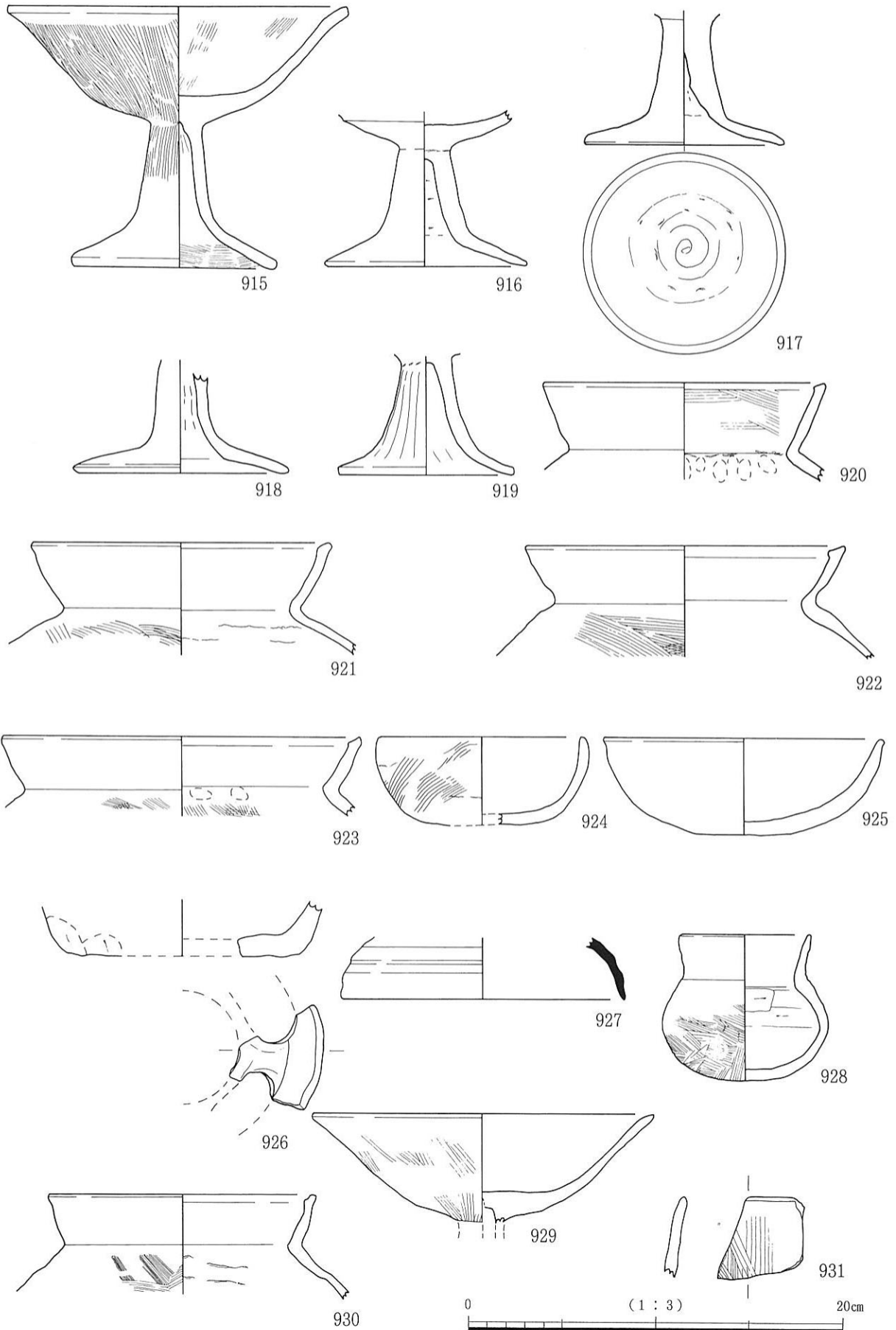


図107 C区西6層・西6面出土土器

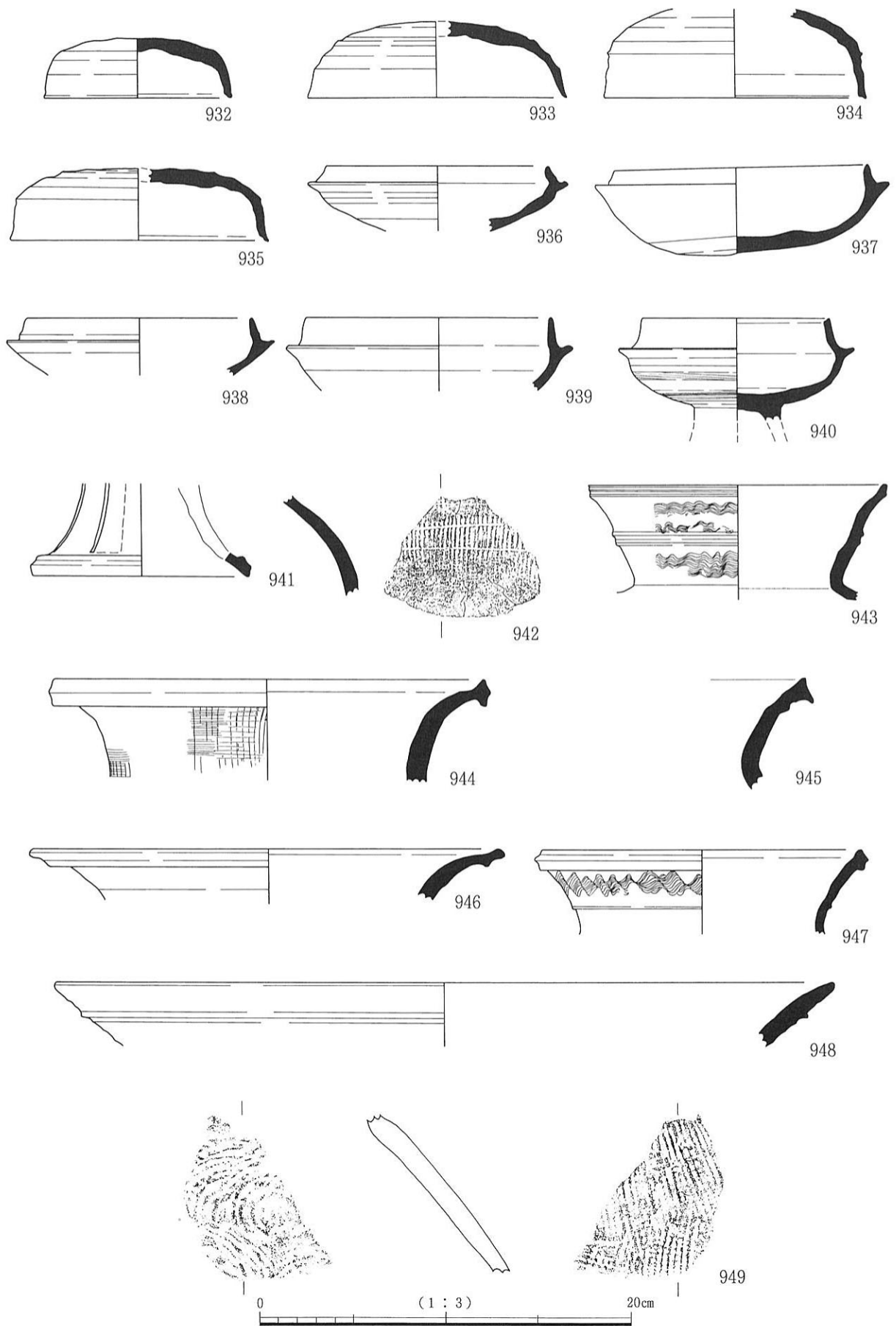


图108 C区西7层出土土器

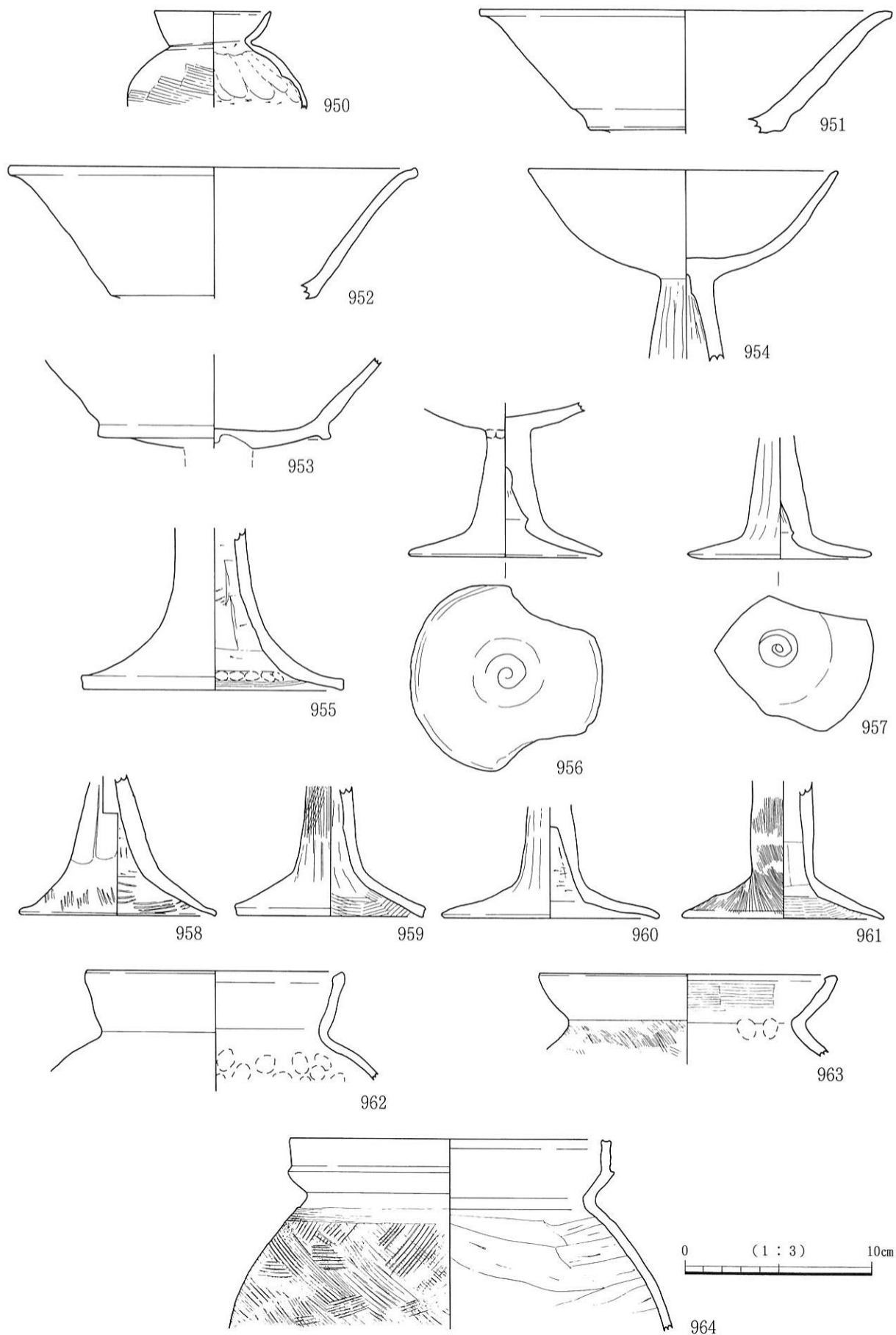


図109 C区西7層出土土器

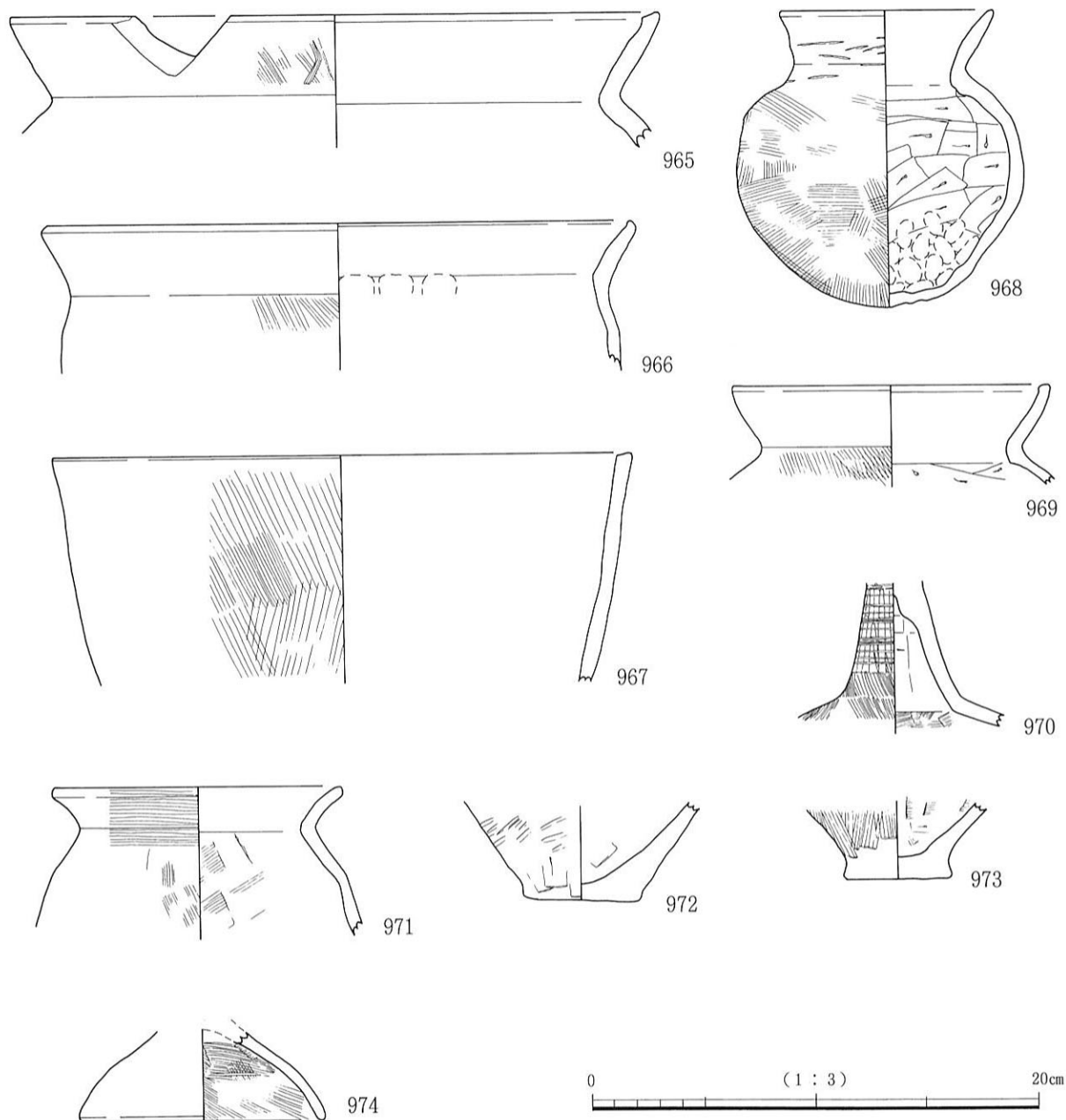


図110 C区西7層・西9層・西10層出土土器

西1面溝 (975~982) 975~977は溝20、978~982は溝21出土であるが、すべて下層からの混入であり、溝は近世~近代に位置づけられる。975は須恵器高杯、976は須恵器碗で底部外面にヘラ記号がある。両者ともTK43に位置づけられる。977は土師器布留形甕Bで、口縁端部aである。978は内黒の黒色土器碗とみられるが、焼成が瓦質に近く、楠葉型瓦器碗となる可能性がある。979は須恵器杯身、980は口縁部径20cmであり、須恵器碗となろうか。981は土師器高杯C、982は移動式竈の底である。

西1面土坑 (983~987) 983は土坑38、984~987は土坑39出土であるが、すべて下層からの混入であり、土坑は近世~近代に位置づけられる。983は須恵器甕、984は須恵器杯蓋。985は土師器小形壺で、体部に円形の平面をもつ。986は土師器羽釜、987は土師器移動式竈の焚口裾部である。

西1面河川3 (988~991) 近世~近代まで存続する河川である。988は備前焼壺口縁部、IV期、室町期(伊藤1984)に位置づけられる。989は和泉型瓦器碗で、IV期、14世紀に位置づけられる。990は土師器皿。991は須恵器杯身で、TK43に位置づけられる。

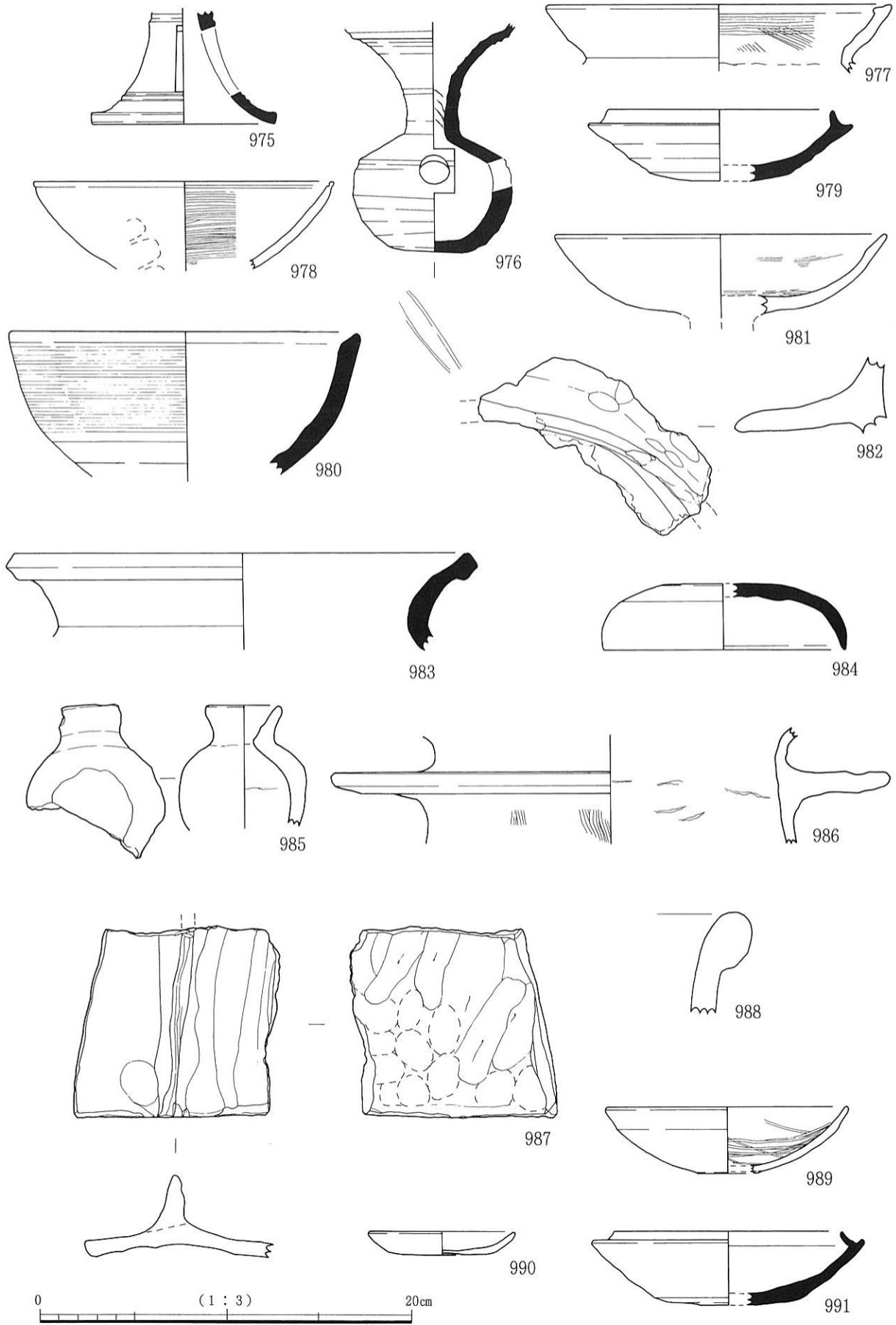


图111 C区西1面溝・土坑・河川3出土土器

西3面建物12(992~998) 992・993・995~997は穴15、994は穴9、998は穴8から出土し、穴15では瓦器碗5枚が重なって出土した。992~998は和泉型瓦器碗で、Ⅱ-3~Ⅲ期、12世紀末~13世紀に位置づけられる。

西3面穴(999~1006) 中世遺構であり、999~1006は下層からの混入である。999は須恵器壺、1000・1003は須恵器杯身、1001は須恵器杯蓋、1004は須恵器高杯。1005は須恵器碗か蓋とみられ、内面に自然釉が付着するため碗として図示した。須恵器杯蓋はTK43に位置づけられる。1002は軟質土器片で、外面に格子タタキが施される。1006は製塩土器で、丸底1式、TK47~MT15を中心とする時期(広瀬1988)に位置づけられる。

西3面溝(1019・1020・1036) 中世遺構であり、1019は溝28、1020は溝35、1036は溝57出土である。1019は瓦器碗、Ⅲ期後半、13世紀後半に位置づけられる。1020は土師器皿。1036は土師器高杯で、下層からの混入である。

西3面土坑(1037~1044) 中世遺構であり、1038以外は下層からの混入である。1037は土坑50、1038~1042は土坑51、1043・1044は土坑53出土である。1037・1039・1040は須恵器杯、1041は須恵器甕、1043は須恵器壺、1042・1044は須恵器甕で、1040のTK209を下限とする。1038は東播系捏鉢で、Ⅳ-2期、14世紀後半とみられる。

西4面穴(1045~1051) 古墳時代後期~終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下限とする遺構である。1045・1046は土師器高杯A2、1047は土師器鍋の把手、1048は土師器羽釜、1049は手捏土器。1050は須恵器甕、1051は須恵器杯身でMT15に位置づけられる。

西4面溝(1007~1018・1021~1035) 古墳時代後期~終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下限とする。1007~1018は溝22、1021~1035は溝56出土である。1007~1010、1021~1026は須恵器杯、1011は須恵器高杯、1027は須恵器器台、1012~1015、1028・1029は須恵器壺、1030・1031は須恵器甕で、須恵器では1009のTK209を下限とする。1016・1017・1033・1034は土師器高杯、1018・1035は土師器移動式竈である。1032は飛鳥時代の土師器杯で、内面には放射状に暗文が施される。

西4面土坑(1052~1064) 古墳時代後期~終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下限とする遺構である。1052・1053は土坑62、1054は土坑63、1055~1057は土坑64、1058~1064は土坑66出土である。1052・1053・1055は須恵器杯、1054は須恵器高杯、1056は須恵器甕で、1052・1053はTK43~TK209に位置づけられる。1057~1061は土師器高杯で、1061は高杯、飛鳥Ⅰに位置づけられる。1062は土師器杯、1063は土師器布留形甕Cで口縁端部d、1064は土師器甕である。

西5面穴(1065~1072) 古墳時代後期の遺構である。1065・1067・1069・1070・1071は土師器甕で、1068は土師器小形丸底壺、1066は土師器移動式竈の体部をめぐるタガである。1072は製塩土器で、外面にタタキが施される。丸底1式(広瀬1988)とみられる。

西7面河川4(1073~1150) 粗砂中より多くの遺物が出土した。弥生時代前期古段階から古墳時代後期の遺物が出土し、古墳時代前期土師器が主体である。古墳時代前期土師器は布留式期のものが多い。

1073は須恵器杯身。1074は須恵器壺で、外面に突線を挟んで波状文を密に施す。1073・1074は、TK10に位置づけられる。1075は須恵器甕で、外面肩部に縄蓆文を施し、内面はスリケシである。1076は須恵器器台で、外面に鋭い線刻で5~6条単位の鋸歯文が施される。断面は赤紫色を呈する。1075・1076は初期須恵器であり、TK73に位置づけられる。

1077~1098は土師器壺である。短頸壺B(1077)、短頸直口壺(1078・1079)、二重口縁壺A1(1080・

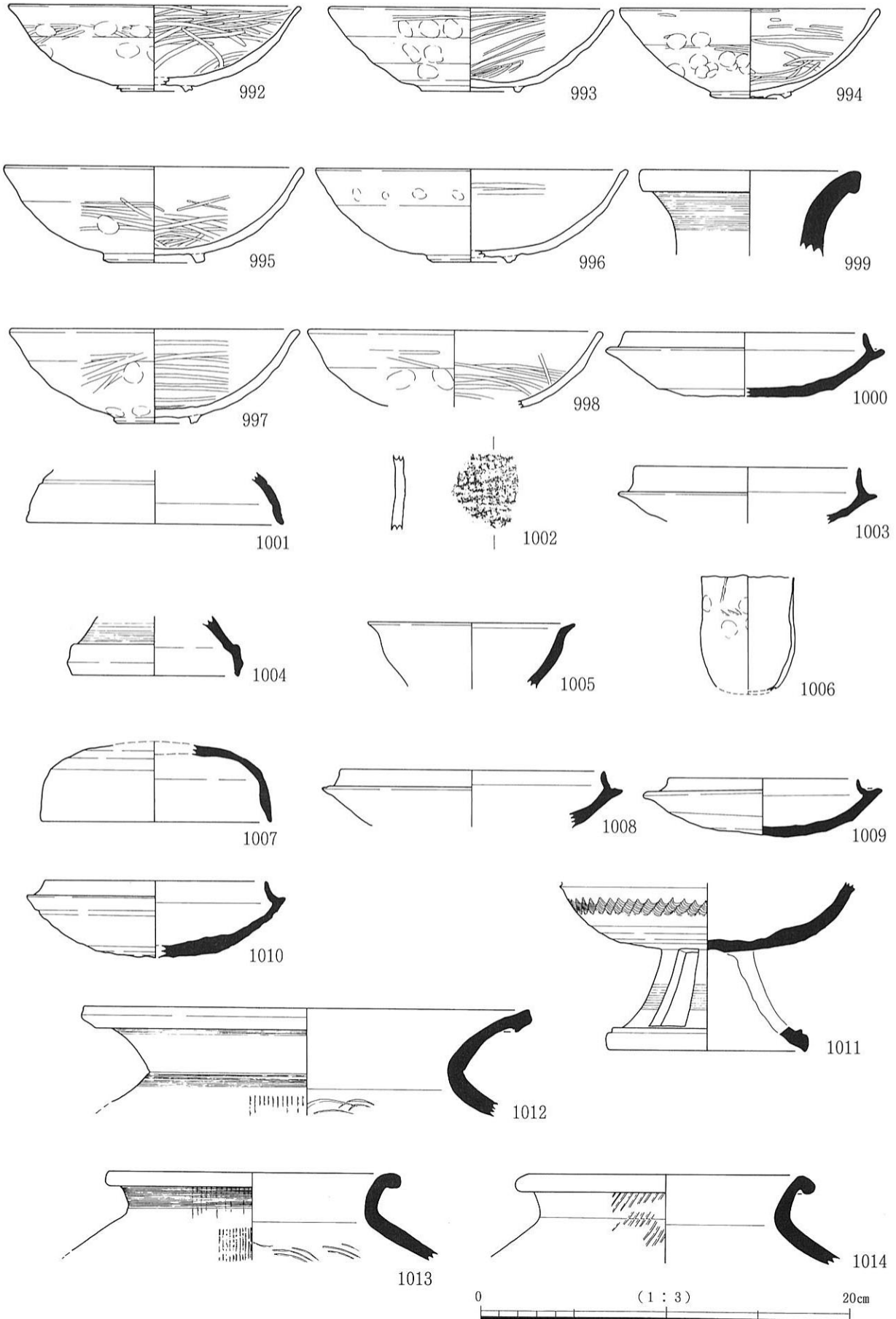


図112 C区西3面建物12・穴 西4面溝出土土器

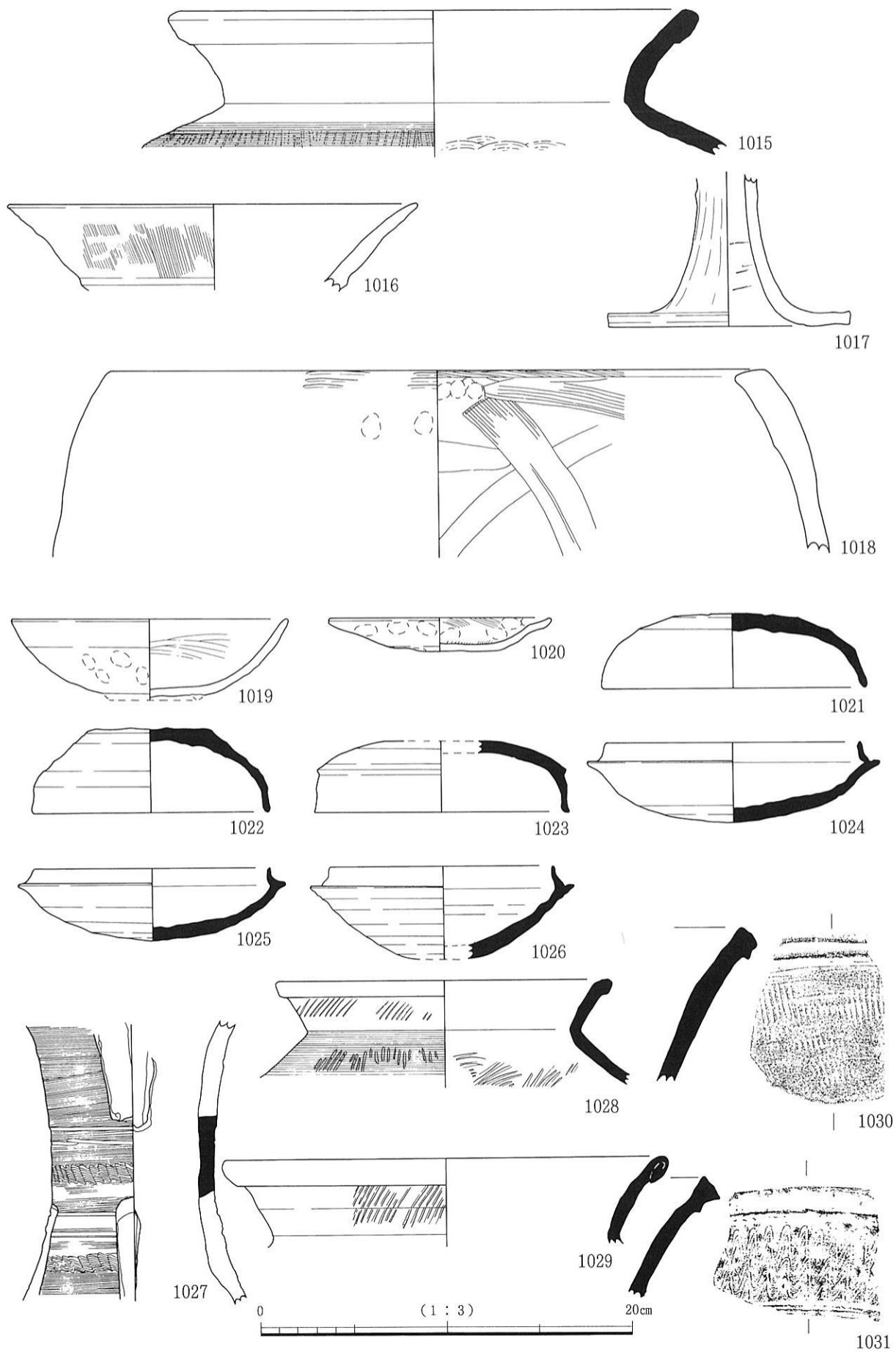


图113 C区西3面沟·西4面沟出土土器

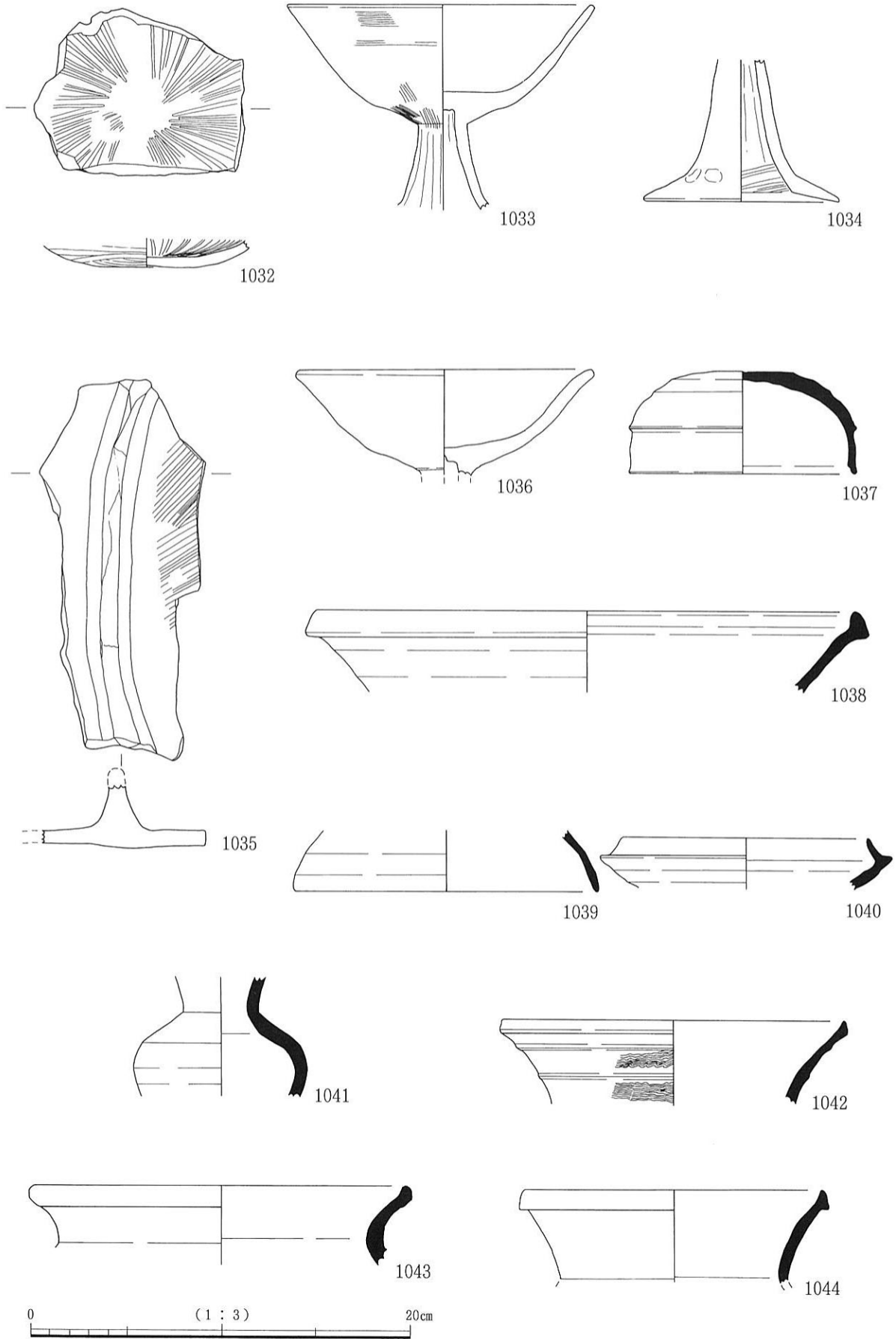


図114 C区西3面溝・土坑 西4面溝出土土器

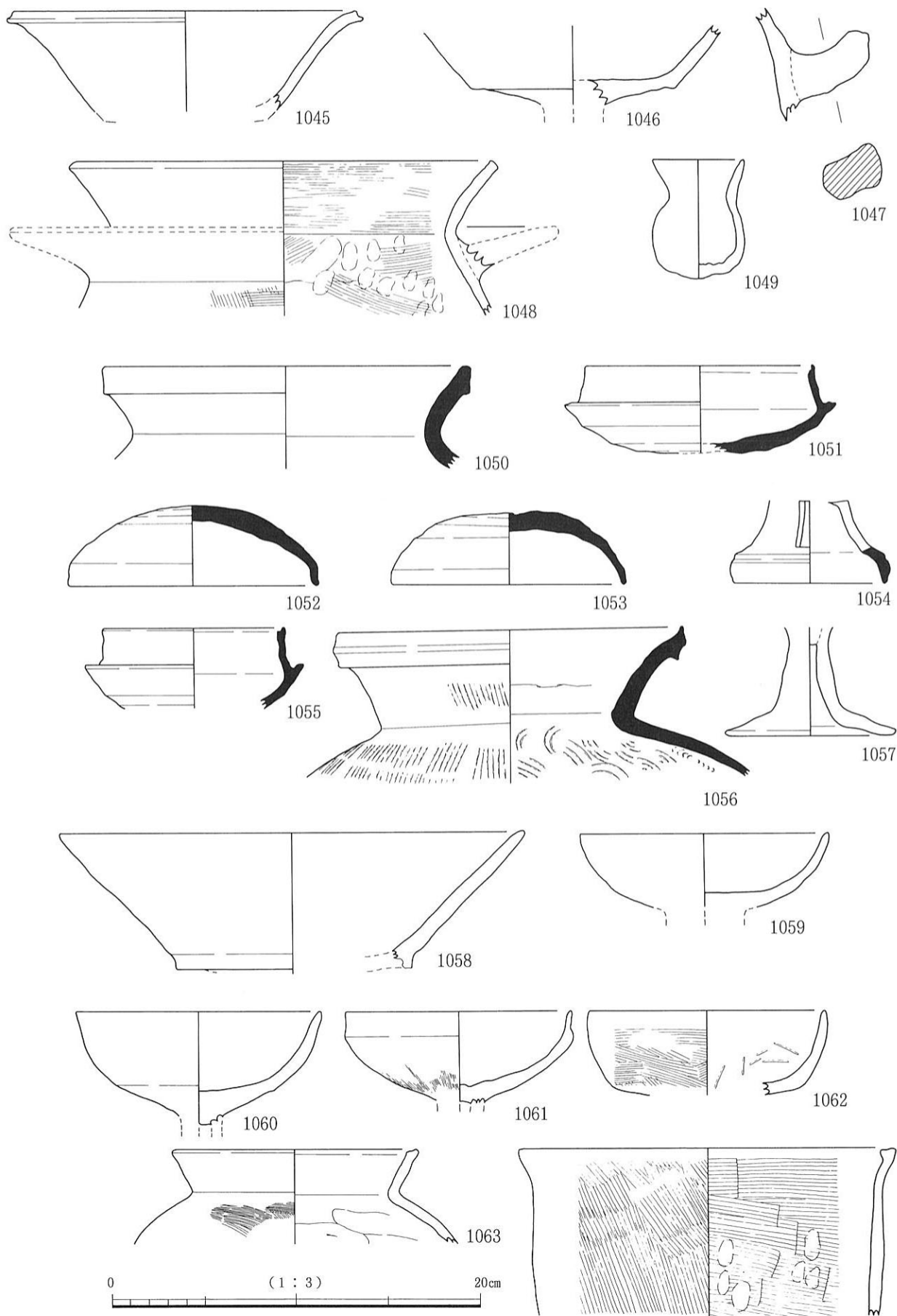


图115 C区西4面穴·土坑出土土器

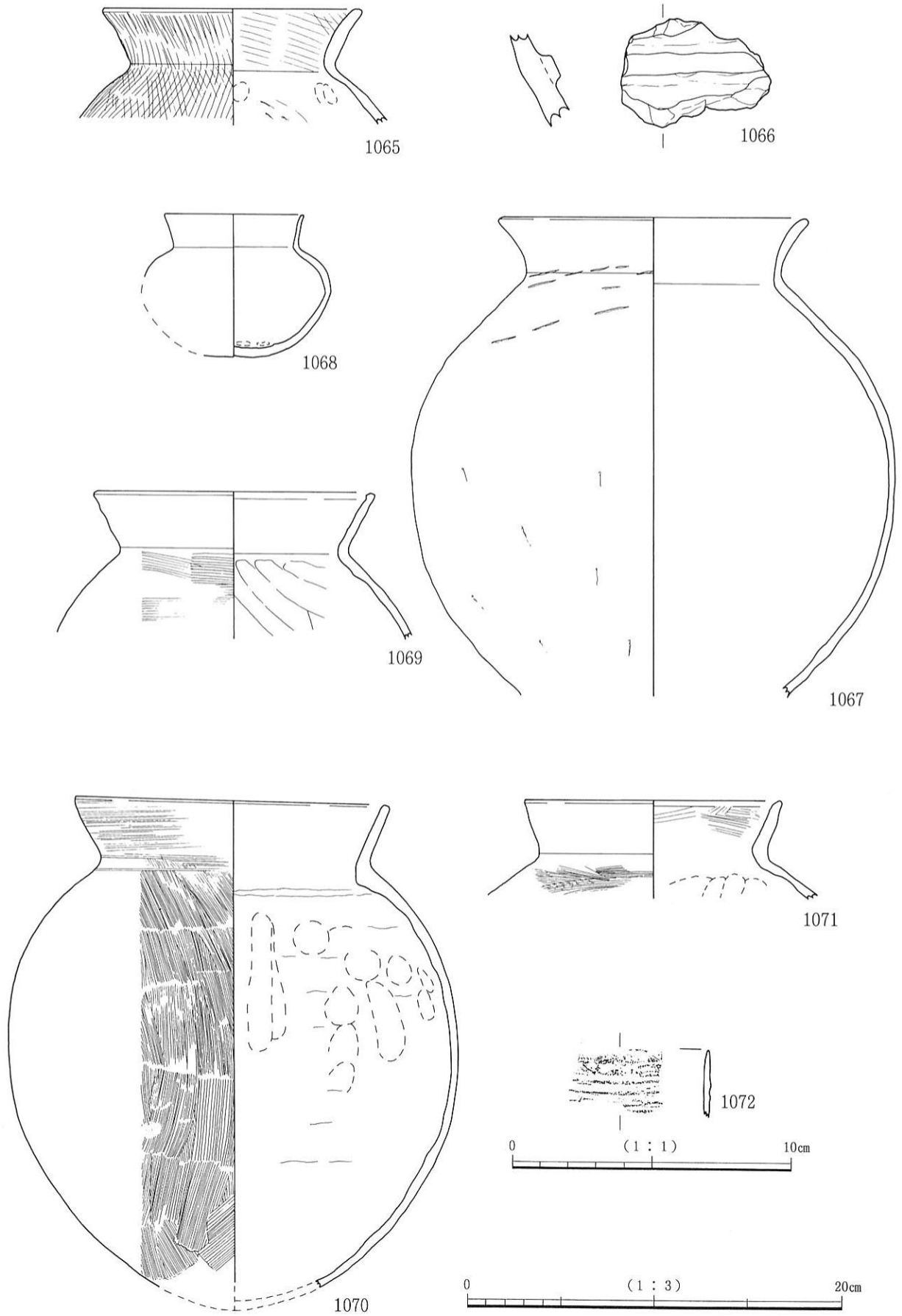


図116 C区西5面穴出土土器

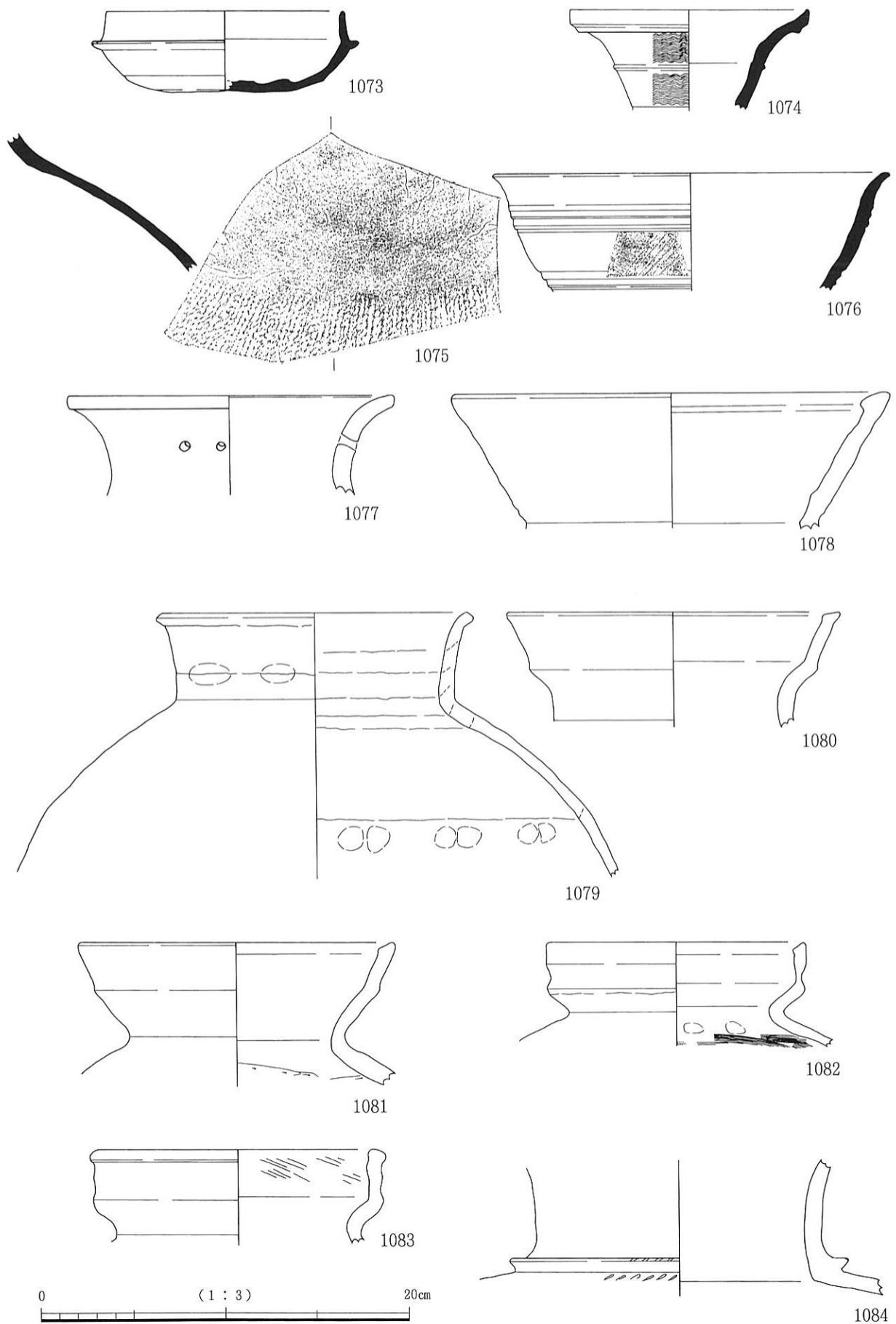


图117 C区西7面河川4出土土器

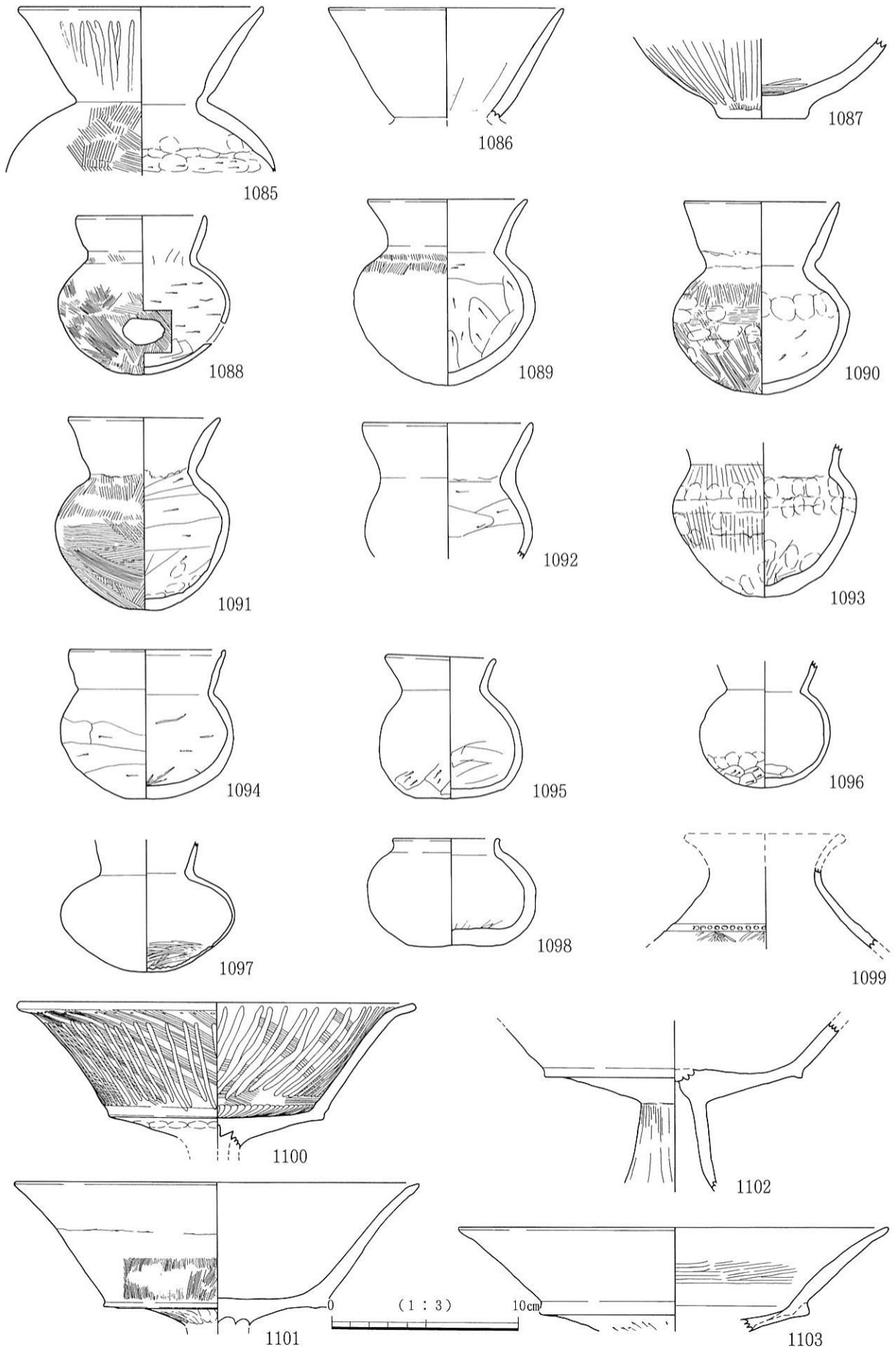


図118 C区西7面河川4出土土器

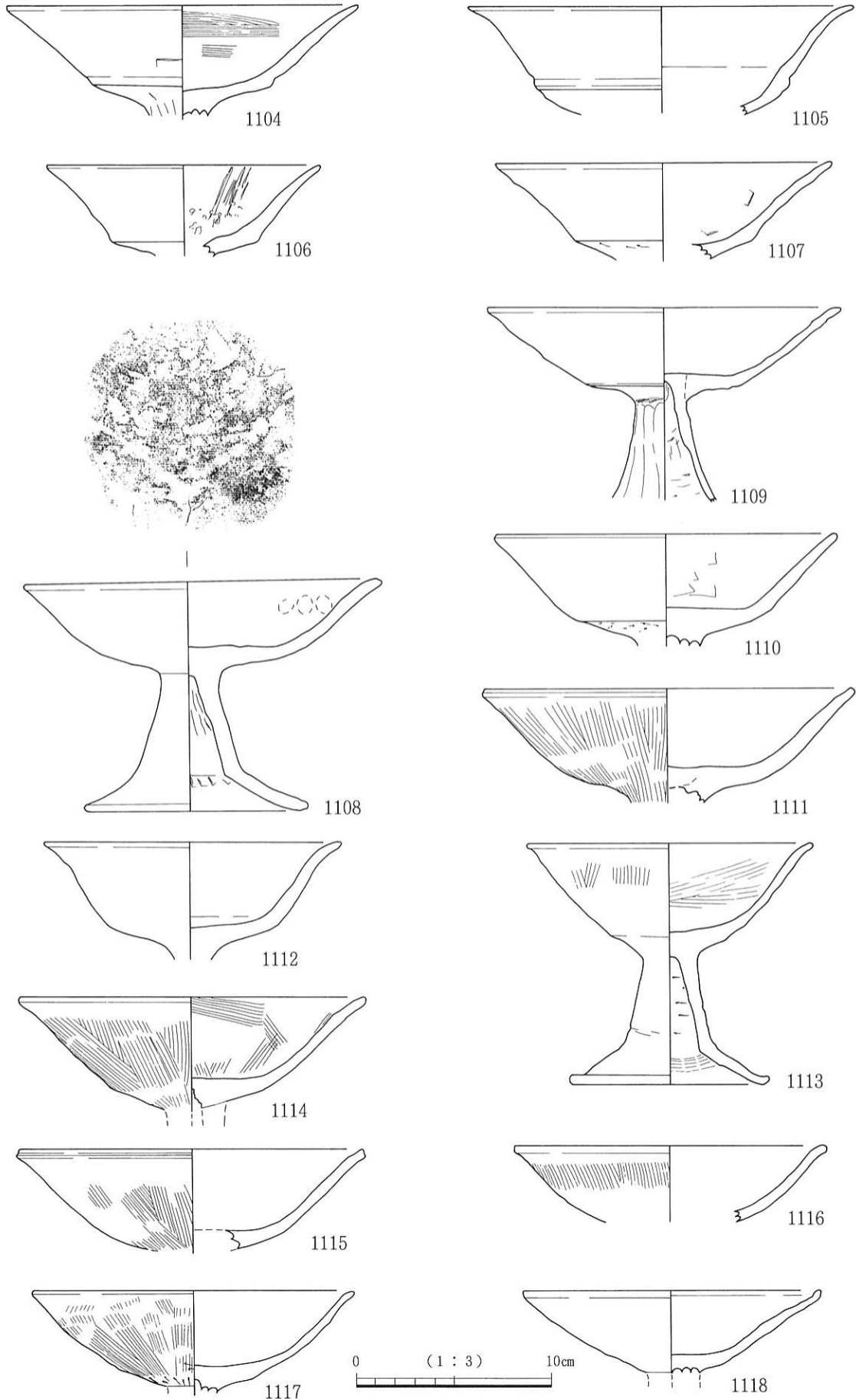


图119 C区西7面河川4出土土器

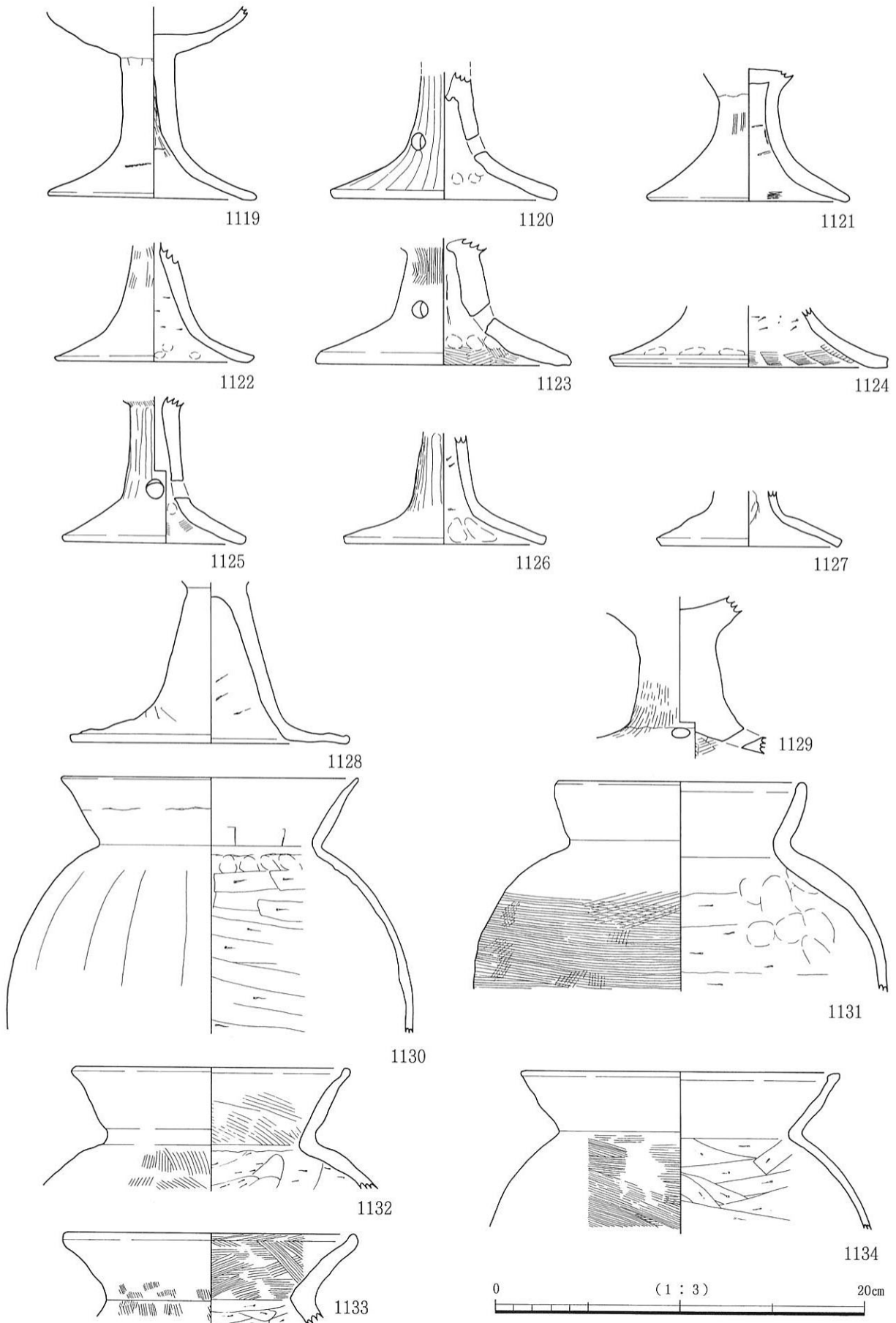


图120 C区西7面河川4出土土器

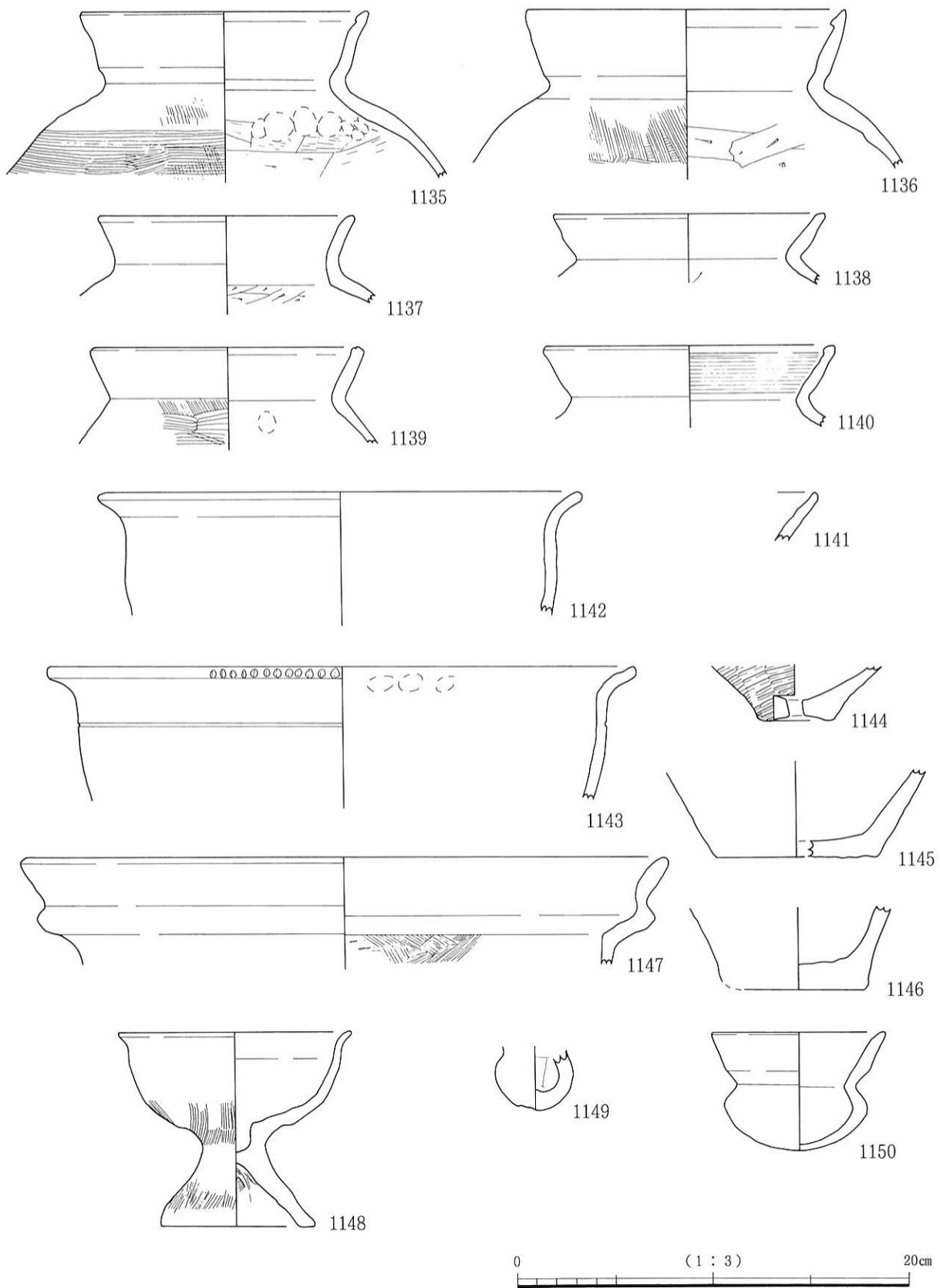


图121 C区西7面河川4出土土器

1081)、直口壺(1085・1086)、小形丸底壺B(1089~1091)、小形丸底壺C(1094・1095)、小形丸底壺D(1098)、小形丸底壺(1092・1093・1096・1097)、壺頸部(1084)、壺底部(1087)、外来系土器の壺(1082・1083)がある。1077は頸部に2カ所穿孔がある。庄内式期に位置づけられる。1078は口縁端部が内側に肥厚し、布留式期に位置づけられる。1080・1081は外面に煤が付着する。1084は突帯の下に刺突文がめぐり、弥生土器になる可能性がある。1088は体部に直径1.5cmと5mmの意図的な穿孔があり、口縁部にはU字形の打ち欠きがある。1089も口縁部に打ち欠きがあり、体部外面に煤が付着する。1094は庄内式期に位置づけられる。1095・1097はV字形に口頸部を欠き、破断面からは意図的な口頸部の打ち欠きが想定される。

1099は木の葉文が施される弥生時代前期古段階の小形の壺である。

1100~1129は土師器高杯である。高杯A1(1103~1107)、高杯A2(1100~1102)、高杯B(1108~1115)、高杯C(1116~1118)、脚部(1119~1129)がある。1100は内面の一部がピンク色を呈し、スリップの発色とみられる。底部外面には棒状工具による刺突痕が明瞭に残る。1100~1102は初期須恵器出現以降の時期に位置づけられる。1108は杯部底面に敲打痕がみとめられる。1108~1118は布留式期の新相に位置づけられる。

1130~1141は土師器甕である。布留形甕A(1141)、布留形甕B(1132・1134~1136・1140)、布留形甕C(1130・1131・1133・1137~1139)がある。布留形甕Aは口縁端部b(1141)、布留形甕Bは口縁端部b(1132・1134・1140)、口縁端部c(1135・1136)、布留形甕Cは口縁端部a(1130・1133・1137~1139)がある。1131・1133は器壁が1cmと厚く、1131は外面の器壁を直径4cmの円形に削り取ったような痕跡がある。1141は角閃石を含み外来系土器の可能性はある。

1142~1146は弥生土器甕である。1142・1143は前期古~中段階に位置づけられる。1144は後期甕底部で穿孔がある。1145・1146は中期甕底部。

1147は土師器大形鉢で、二重口縁をもつ。1148は土師器小形鉢F2。1149は手捏土器。1150は土師器小形丸底鉢B3。

東1層(1151~1155) 近世~近代の包含層である。1151は磁器染付碗で高台畳付は無釉である。外面に草花文が描かれ裏銘をもつ。呉須の発色は悪い。1152は白磁紅皿。型押し成形で、外面は露胎である。1153は施釉陶器片口鉢。底部周辺をのぞく内外面に透明釉がかかる。1154は灰釉土瓶で、注口はハリツケである。1155は土師質土器茶釜である。耳部はハリツケで穿孔は棒を刺している。

東1面(1156) 近世~近代の遺構面である。1156は鉄釉天目茶碗である。

東2層(1157・1158) 近世包含層。1157は白磁碗で、Ⅲ期、13世紀に位置づけられる。1158は瓦質羽釜である。

東3層(1159) 中世~近世包含層。1159は和泉型瓦器碗で、Ⅲ期、13世紀に位置づけられる。

東4層(1160~1165) 中世~近世包含層。1160は磁器碗で、口縁端部内面は無釉である。1161は磁器青白磁合子で、口縁部内外面と底面は露胎である。1162は瓦器碗高台、1163は瓦器皿である。1164・1165は土師器皿。

東5層(1166~1171) 12~13世紀を中心とする中世包含層。1166は白磁碗高台で、低い高台を削り出し、外面は露胎である。1167は和泉型瓦器碗高台。1168は黒色土器B類碗。1169~1171は下層からの混入とみられる。1169・1170は須恵器杯。1171は須恵器甗で、外面には細い平行タタキを施す。

東6層(1172~1175) 古墳時代後期洪水層である。1172は須恵器杯身で、TK43に位置づけられる。

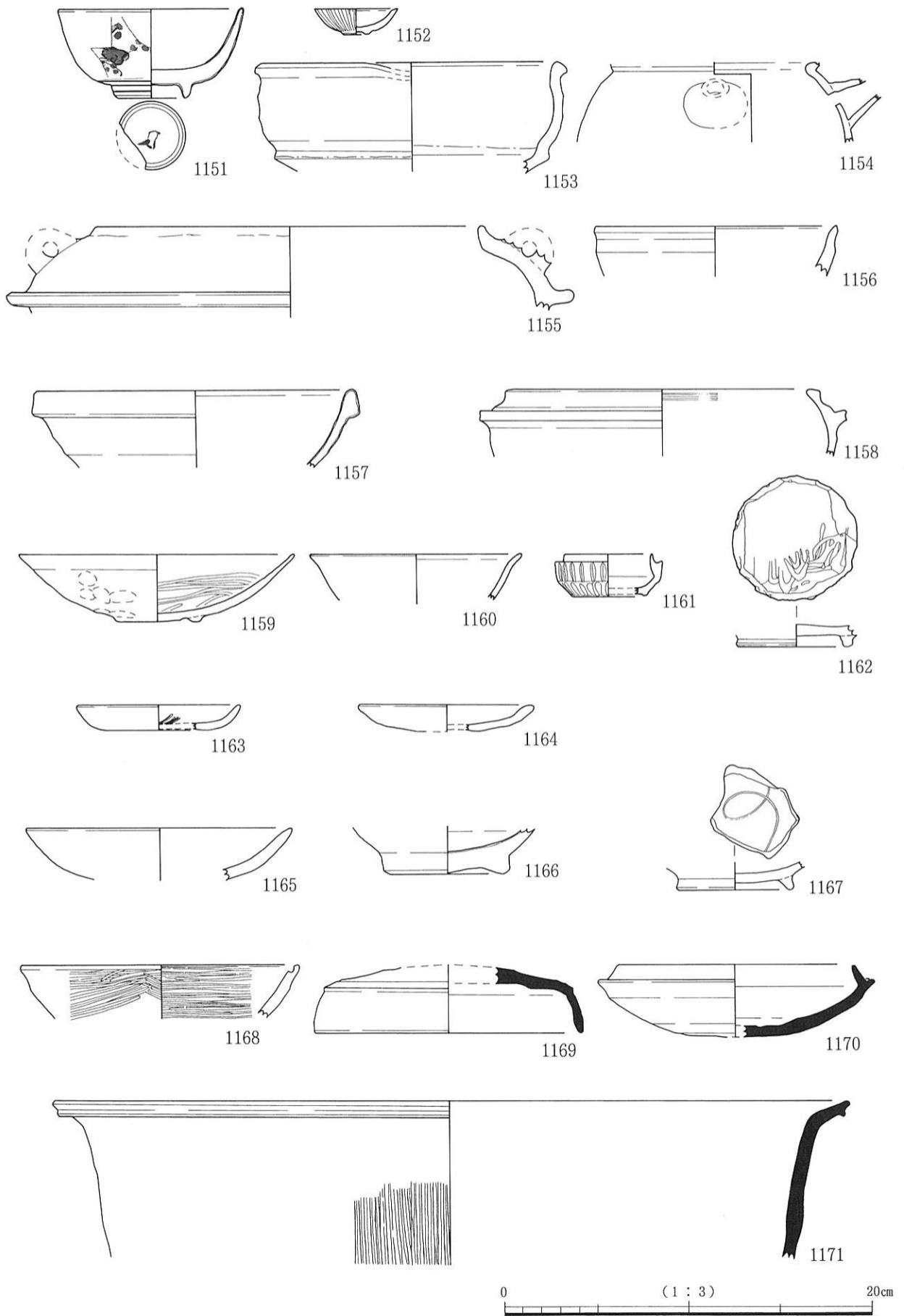


图122 C区东1层·1面·2层·3层·4层·5层出土土器

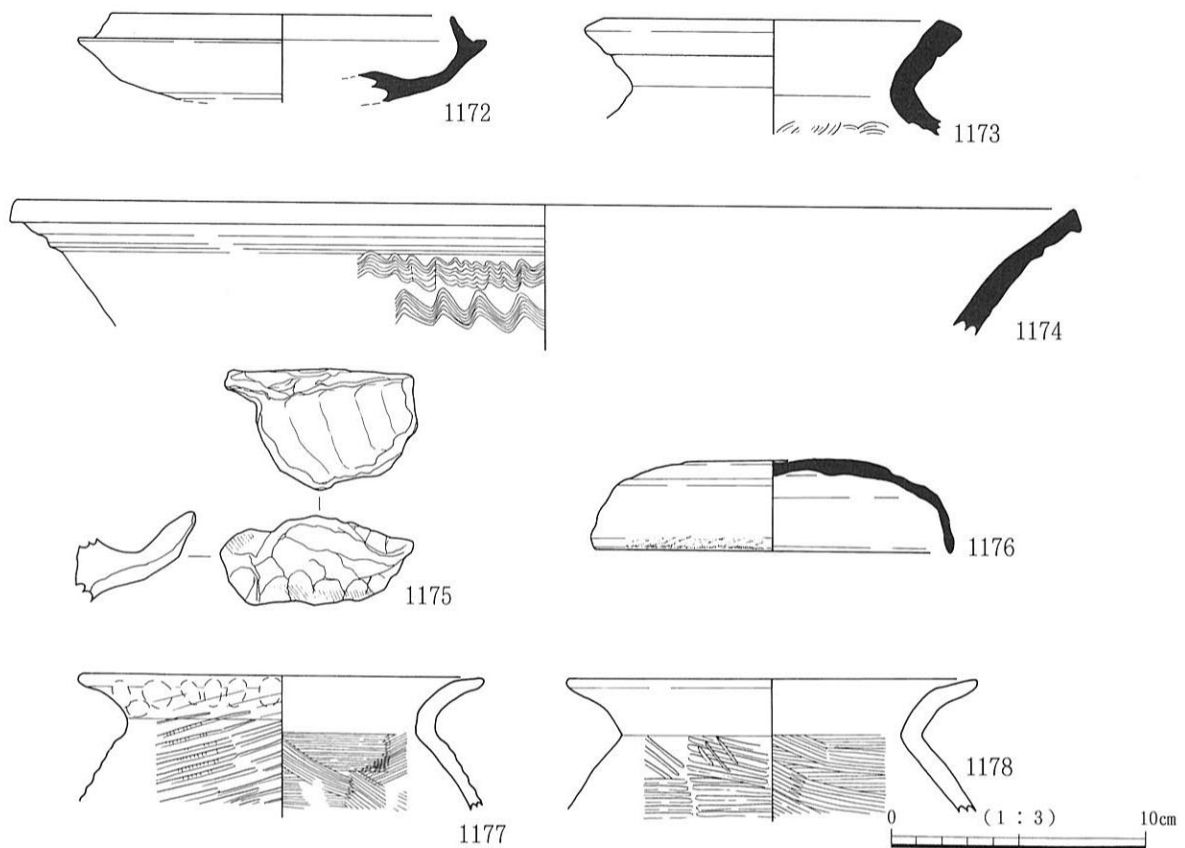


図123 C区東6層・7層・9層出土土器

1173は須恵器壺で、口縁端部を折り返す。1174は須恵器甕。1175は舌状の土師器把手で、鍋の把手と考えられる。

東7層(1176) 古墳時代後期耕土。1176は須恵器杯蓋で、口縁端部外面に連続する同心円当て具痕がみられる。TK43に位置づけられる。

東9層(1177・1178) 古墳時代後期以前の耕土層である。出土遺物が少なく、年代の決定が困難であるが、古墳時代前期の可能性はある。1177・1178は古墳時代前期土師器の弥生形甕である。

東1面井戸4(1179~1183) 近世の井戸で、18世紀後半~19世紀後半に位置づけられる。

1179は磁器染付碗で、外面には仙芝祝寿文、内面口縁部には四方禳文が描かれ、見込みには草花文がみられる。18世紀後半以降に位置づけられる。1180は磁器染付碗で、外面には呉須で福寿文が描かれ、見込みには変形した文様がみられる。口縁端部には口錆が施される。19世紀後半に位置づけられる。

1181は磁器染付筒型碗で、外面に竹と草花文が描かれ、見込みに五弁花文がみられる。18世紀後半以降に位置づけられる。1182は肥前焼磁器染付碗で、外面に露と草花文が描かれる。くらわんか手であり、18世紀後半に位置づけられる。1183は土師質土器羽釜である。

東1面河川1(1184~1195) 中世~近世河川。1184は青磁碗高台。高台畳付と高台内面上半は露胎である。1185は白磁碗で、見込みに花文が彫られる。外面下半は高台を含め無釉である。1186は陶器挿鉢。1187・1188は和泉型瓦器碗高台で、Ⅲ期、13世紀に位置づけられる。1189~1192は土師器皿。1193は東播系須恵器捏鉢で、Ⅳ期、14世紀に位置づけられる。1194は須恵器壺で、高台剥離痕が底面にみとめられる。1195は須恵器甕で、TK43に位置づけられる。

東4面穴51(1196) 1196は唐津焼刷毛目文皿で、内面には白泥土で刷毛目が、見込みには蛇の目釉ハ

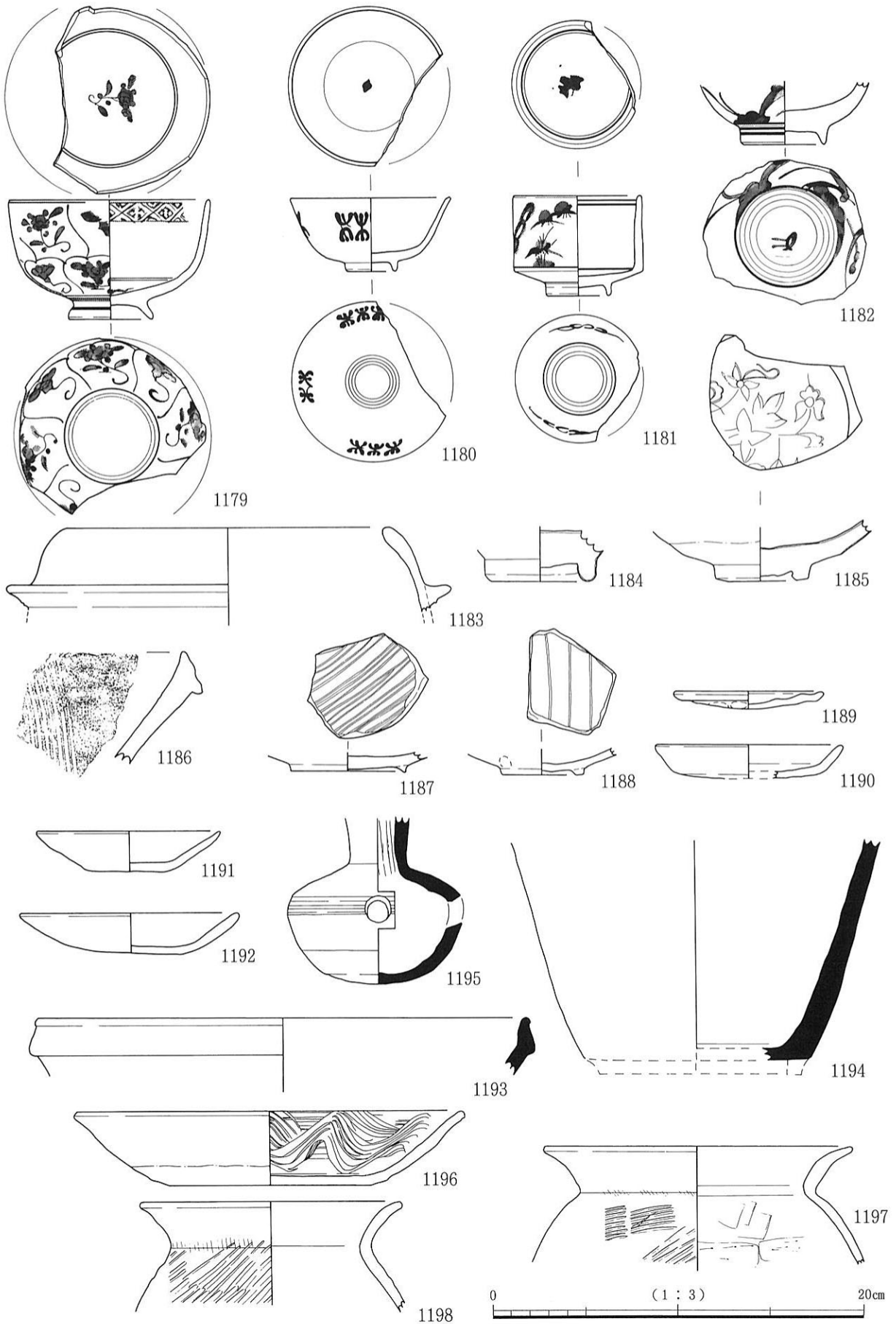


图124 C区東1面井戸4・河川1 東4面穴51 東9面溝61出土土器

ギが施される。18世紀前半に位置づけられる。

東9面溝61 (1197・1198) 古墳時代後期以前の耕土層で、古墳時代前期の可能性がある。

1197・1198は古墳時代前期土師器の弥生形甕である。

註

- 伊藤 晃 1984 「備前焼の流れ」『木村コレクション古備前図録』
 大阪府教育委員会 1991 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』
 (財)大阪府文化財調査研究センター 1996 『下田遺跡』
 (財)大阪文化財センター 1985 『美園』
 (財)大阪文化財センター 1992 『大阪城跡の発掘調査2』
 熊本県立装飾古墳館 1994 『第4回企画展図録 器は語る 須恵器の手と技と』
 古代の土器研究会 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
 古代の土器研究会 1993 『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
 古代の土器研究会 1994 『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
 白神典之 1992 「堺播鉢考」『東洋陶磁』19
 鋤柄俊夫 1999 『中世村落と地域性の考古学的研究』
 田辺昭三 1981 『須恵器大成』
 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20-4
 寺沢 薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年 — 近畿編Ⅱ —』
 豊中市教育委員会 1980 『史跡大石塚・小石塚古墳保存事業に伴う調査報告』
 奈良県教育委員会 1986 『矢部遺跡』
 寝屋川市教育委員会 1993 『寝屋川市文化財資料19 長保寺遺跡』
 橋本久和 1992 『中世土器研究序論』
 広瀬和雄 1988 「近畿地方における土器製塩」『考古学ジャーナル』298
 三重県埋蔵文化財センター 1998 『コドノA遺跡・コドノB遺跡(第1次)発掘調査報告』
 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について — 型式と編年を中心として —」『九州歴史資料館研究論集』4

第2項 木器

溝柾遺跡では地下水位の関係上、残存状況が良好な木製品が多数出土した。その中から、希少価値の高いものや特に加工痕が顕著なものを抜粋して以下に報告する。尚、各製品の計測値および樹種・出土地点などはP. 167に一覧表として掲載した。

卒塔婆 W1は、表裏面ともに梵字・偈文・真言・戒名を墨書でしたためた小型の木製卒塔婆である。長さとの比率から「笹塔婆」とも称される。石造の五輪塔と同様に密教の「五大」を側面からの切り込みによって表現する「五輪塔形」で、上から順に空輪の宝珠形・風輪の下半球形・火輪の三角形・水輪の球形・地輪の方形を象っている。下半部は長方形で欠損と調整によってやや薄くなるものの端末部まで完存する。最下部中央には穿孔があり、設置する際に柱状のものに打ちつけて固定した痕跡と考えられる。表面には五大種字である梵字「𑖀=佉(キャ)」「𑖂=訶(カ)」「𑖄=羅(ラ)」「𑖆=縛(バ)」「𑖈=阿(ア)」を記し、末尾に阿弥陀如来の種字「𑖦(キリーク)」を付加する。その下に続けて真言「南無三曼多没駄南(一切の餓鬼に飯食を施す真言・現在でも大施餓鬼中で唱えられる)」、末尾には不明瞭であるが「𑖀=鑿(バン)」の梵字を記す。本来ならばその下に年月日が記入されていたはずだが、表面の剥離により不明である。裏面は五輪部分に胎藏界真言を書き、宝生如来を示す種字「𑖦(タラーク)」を加える。その下に2行にわたって古徳之偈文「一佛成道 觀見法界 草木國土 悉皆成佛(一仏が悟りを開き慈眼を以て法界を觀見すれば草木一切の有情、非情に至るまで悉く成佛することができる)」と「為道春禪定□」の文字を記す。これにより供養された人物が「道春」という戒名をうけたことがわかる。その左端にも墨痕が認められるが、書式に拠るならば「施主敬白」の文字の内「施」か「敬」のいずれかであろう。墨書内容と笹塔婆の出土傾向などから室町時代のもと考えられる。

楽器 W2は、部分的に漆を塗布した弦楽器である。一端は良好に残存しているが、半分以上を欠損しており「琴」と断定はできない。断面は蒲鋒形を呈し、その平面を張弦面とする。先端部は肥厚して銀杏形に

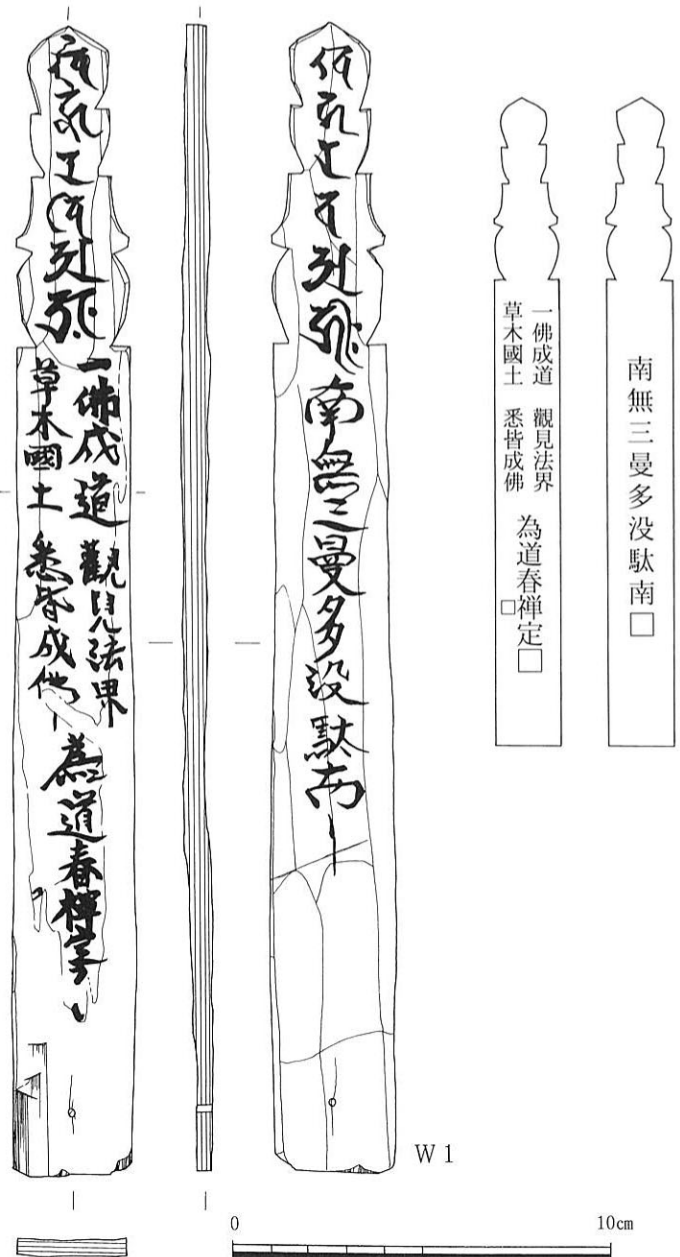


図125 卒塔婆

開き、切り込みを入れて一部に漆を塗っている。集弦孔は半月形で、弦は左右の小孔を通して固定されたと推測される。W2が弦楽器として特徴的であるのは別個体の「集弦板」をもつ点である。先端中央部に、5本の溝を上辺に刻んだ台形の部品「集弦板」が装着されて、はじめてこの製品は楽器としての体裁を為す。同様の集弦板が装着されている例として、槽作りではあるが大阪府下田遺跡出土の琴が挙げられる(図126 B)。また全体のフォルムとしては、千葉県菅生遺跡や滋賀県市三宅東遺跡出土の琴状木製品(図126 A)に類例を見いだすことができる。図127では、後者を参考にして全体復原想定図を示したが、集弦板上端の溝と下端の突起とに直接弦を張ることは、溝の角度から観察してやや困難である。したがって、本体と弦の間に何か弦の角度を調節する部材(例えば琴柱のような形状の別部品)があったのではないと思われる。



A 滋賀県野洲郡野洲町市三宅東遺跡出土の琴状木製品
B 大阪府堺市下田遺跡出土の槽作りの琴
(A・Bともに再トレース一部加筆)

図126 琴状弦楽器の類例

は、溝の角度から観察してやや困難である。したがって、本体と弦の間に何か弦の角度を調節する部材(例えば琴柱のような形状の別部品)があったのではないと思われる。

紡織機 一般に糸を紡ぐ紡具と布を織る織機に大別されるが、古墳時代の織機は具体的な復原がなされておらず、構造や詳細は不明である。

W3は、紡錘車の軸と思われる細い棒状品である。中央部分がやや太く、一方の先端を鋭く尖らせている。尖鋭部を上にして紡錘車(木製もしくは石製?)を通して使用した。最太部は頭端から3分の2程のところまで、ここに車を固定して上半部に糸を捲いたと思われる。

W4は、木製錘である。円柱の両端を粗く切断して中央部に紐結溝を設けている。筵や織り目の粗い布を作成するのに使われたと考えられている⁹⁾。

W5は杷形の小型板状製品で縦長の六角形に復原できる。単独で使用する物だと推測され、織物の緯糸を通す杷に大きさ・形状が似ているため紡織機の類とした。

柄 柄は用途によって農具・工具・武具等に分類されるが、W6はそのいずれに属する物かは特定できない。したがって敢えて柄と分類した。表面全体を丁寧に調整し、円柱状に作っている。

形代 形代とは主に祭祀に使用されたと考えられている文物の形状を模倣した製品を指す。個々には用途が解明されていないため、「形代物」と称してここに掲載した。

W7は頭部と体部からなるこけし形の柱状製品である。頭部に対して体部は加工痕が簡素である。体部の中央部分は磨滅して細く括れており一部に切傷がある。類似品が2A区からも出土している。

W8は断面杏仁形のへら状の木製品で、先端部を薄く削り剣の刃先を象っている。一般に剣形とよばれるものだが、欠損のため柄部分の形状は不明である。

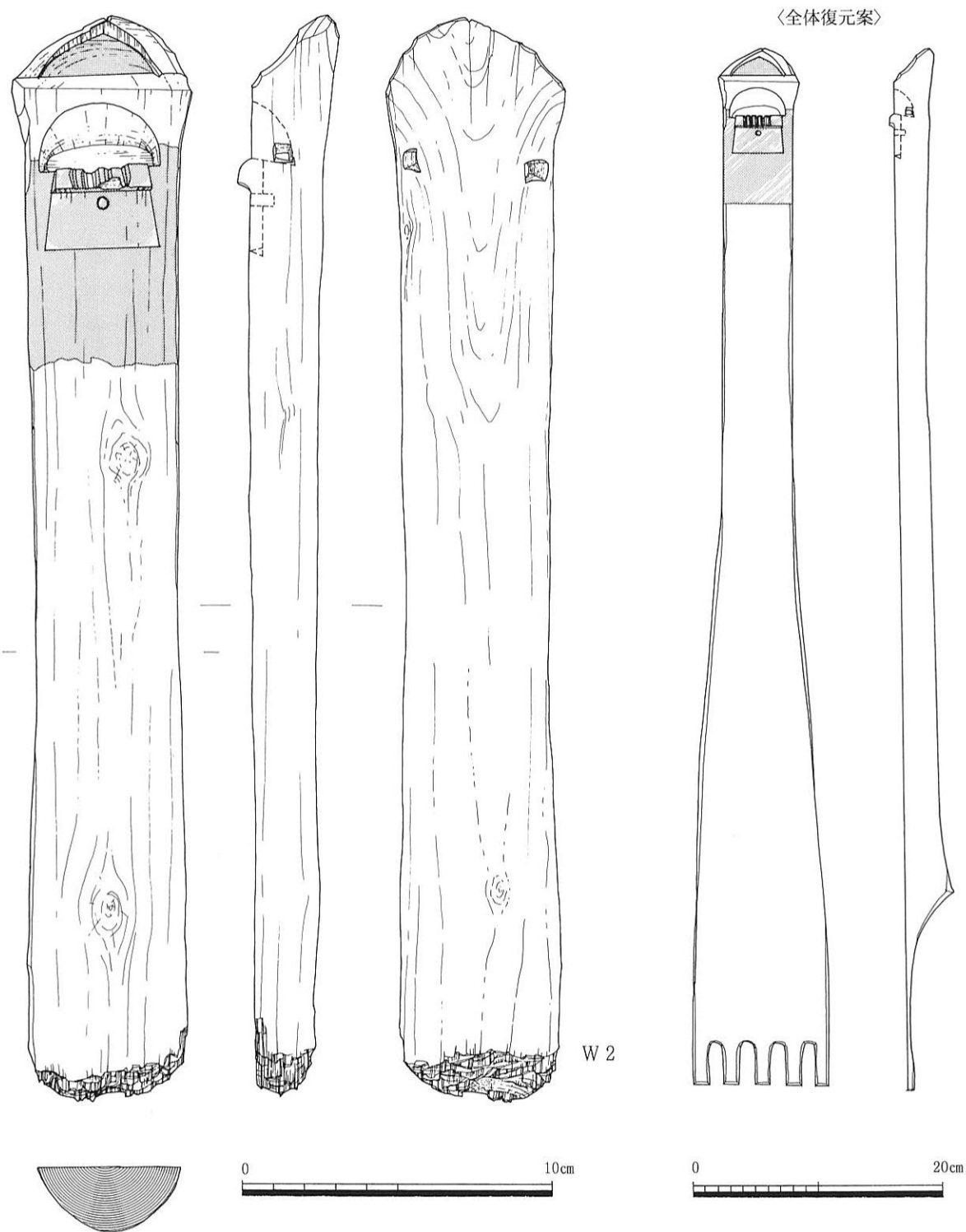


図127 琴状弦楽器と復元案

容器 容器は曲物と呼ばれる桶状の湾曲側板をもつ底面円形のもの、指物と呼ばれる板状の側板を組み合わせる底面方形のものが出土した。

W9は楕円形の曲物底板で、一部に杵が残存する。底板縁辺に2点一対の取付紐孔が10ヵ所確認できるが、本来は12ヵ所に穿たれていたようである。杵材の接着部には底板取付のための小さな抉りがあり、桜の樹皮を三重に巻いて固定している。

W10も同じく曲物の底板であるが小形品である。杵を取り付けるための穿孔が5箇所にあるが、均等

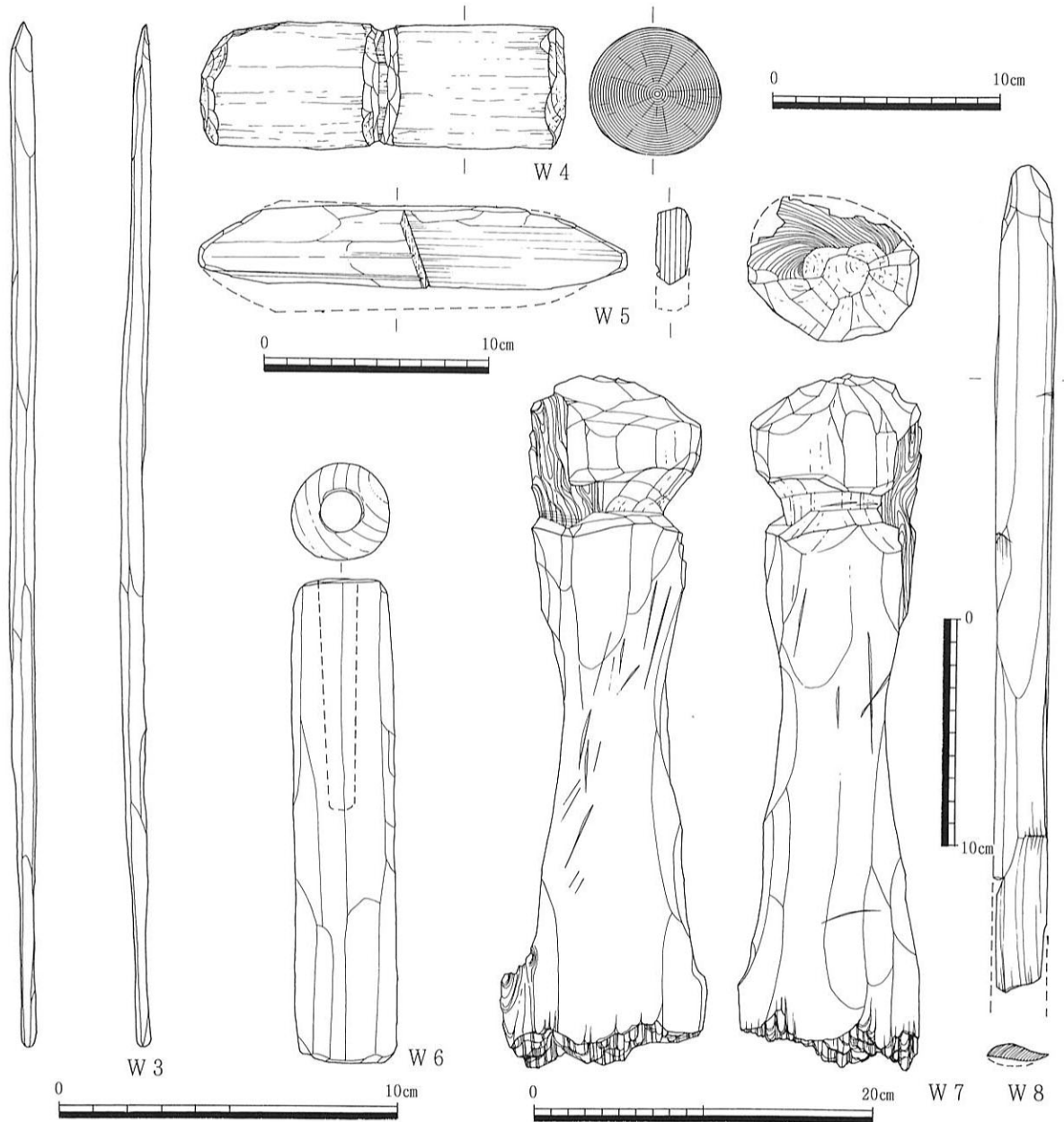


図128 紡錘車の軸・木錘・杷形部材・工具の柄・人形代・剣形

幅ではない。表面および側面は丁寧に加工されている。

W11は用途不明の板状品であるが、箱形製品の一部である可能性を提示したい。平面・側面ともに木釘痕と解される小孔が穿たれていることから、いくつかの部材を接着させて使用した道具であったことが窺える。一案に断面が「コ」字形になる琴の共鳴槽の一部が残存したものではないかと推測する（図130参照⁶⁾）。幅1.3cmの溝に同等厚の板を差し込んで仕切板とし、木釘で固定する。この場合、側面の孔は蓋を打ちつける形となり、容器として使用するには不自然である。また欠損部にかかる木釘が意味を為さない。端部の孔（直径0.8cm）に紐ずれ等の痕跡はみられない。類例の出土を期待したい。

W12は表裏とも丁寧に調整された板状の部材で、短辺縁2カ所にほぞ孔をもつ。突起をもつ別材と組み合わせてつくる箱形の指物容器である¹⁰⁾。長側辺の一端が薄くなっており、この部分に底板が接着していたと思われる。

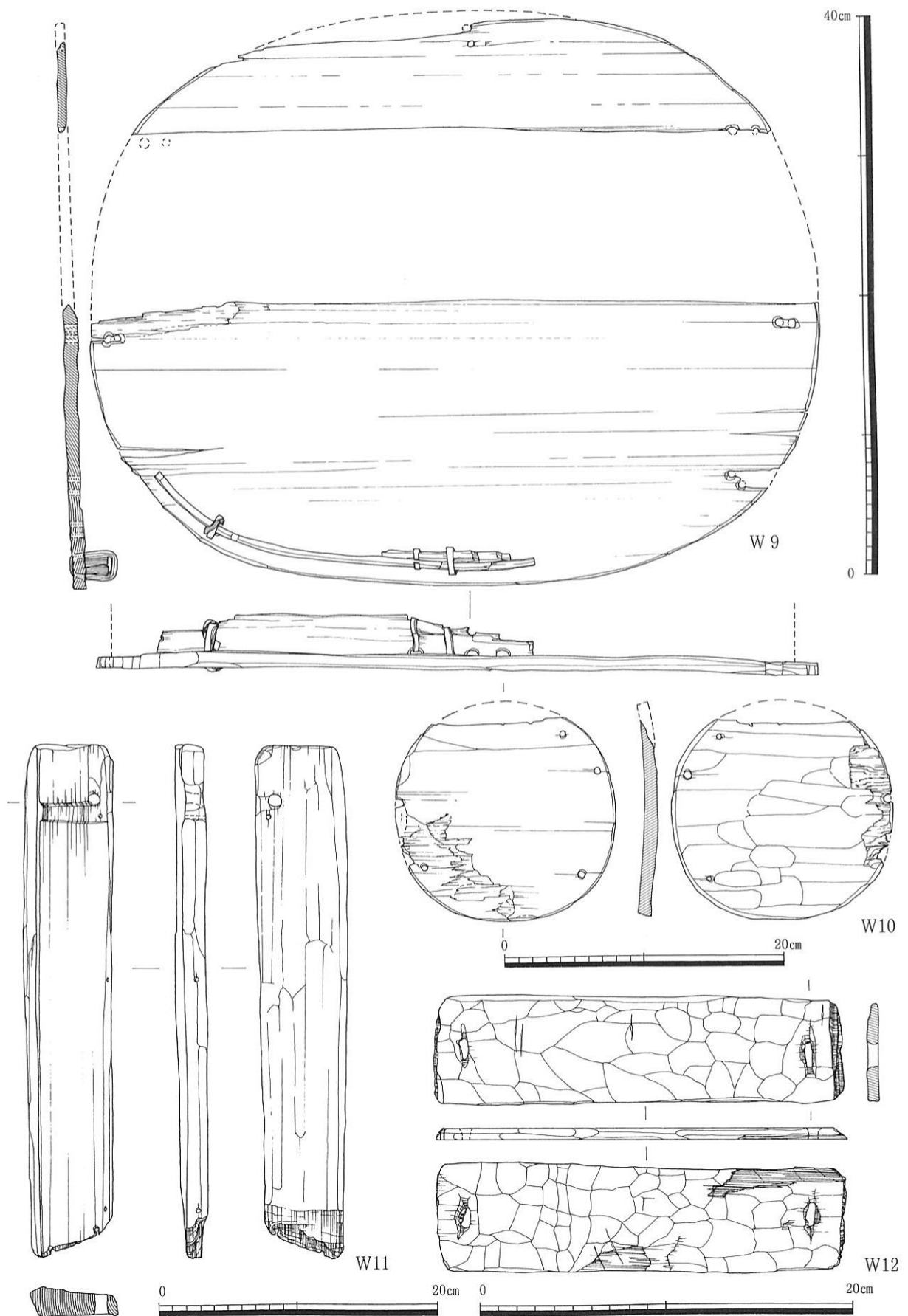


图129 曲物·容器

農具 農具は木製品の中では用途が判別しやすく、類例報告も多い。溝作遺跡からは、鋏・鋤・えぶり・田下駄・大脚が出土した。

W13は一般にナスビ形木製品と呼称される類で、又鋏または又鋤（ナスビ形木製品は鋤としての利用も可能）として使用されたものである。残存状態も良好で輪郭・表面ともに丁寧に調整されている。

平均よりもやや大型品であるが、鋏先部は磨滅が激しく、相当の使用に耐えたのちに廃棄されたようである。

W14は着柄式の鋤である。柄との装着部がやや厚く、留具を打ち込んだと思われる未完通の孔痕が残る。乾燥のため残存状態は不良である。

W15は半月形に残存する薄型の板状木製品で、中央部に直径4 cm程度の孔があり、えぶりや代掻き具の可能性がある。

W16～W24は大脚あるいは田下駄として活用された類の部材である。W16は右足跡の圧痕が顕著に残る田下駄で、ほぼ完形である。表面・側面ともに丁寧な調整が施されている。前後の側面ともに磨滅痕が認められる。中央に節穴があるため表面に凹凸が生じているが、土踏まずにフィットして問題は無かったようである。中央部に足を乗せ、三点の孔に紐を通して足指と踝を下駄鼻緒の要領で固定する。

大脚や田下駄はこれまでも復原案が提示され、形態ごとに分類されているが、それに拠るとW16はたわめた枝を円形に縛って作った枠の上に横棧を固定し、さらに足板を乗せて固定させた「枠型」の田下駄だと考えられる¹²⁾ (図131D参照)。四隅4点の小孔で枠に装着されていたものが、角隅部分を欠損したために廃棄されたのだとの推測も可能である。

W17は台形の板状で、組合式大脚の横棧に類似するためここに分類した。中央縦方向に紐ズレと思われる圧痕がある。これに類似した台形板状の部材で紐ズレ痕を2条残すものも本遺跡から出土した。

W18は断面菱形の棒状木製品で、両端に突起をとまなうことから大脚の横木（棧）と解釈した。一方の突起が欠損したために廃棄されたものであろう。

同じくW19・W20も大脚の横木である。W19は断面杏仁形で圧痕が認められる。W20は断面楕円形で側面に調整痕および圧

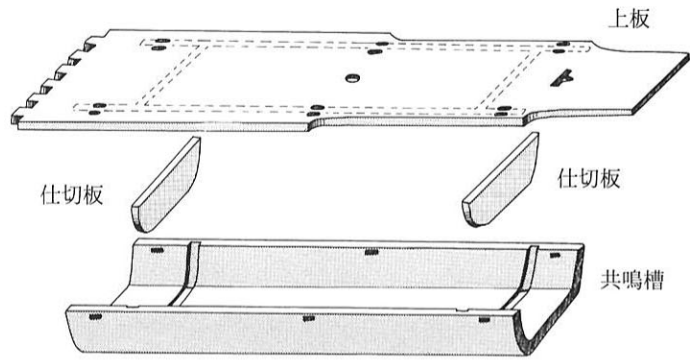


図130 琴の共鳴槽模式図⁶⁾

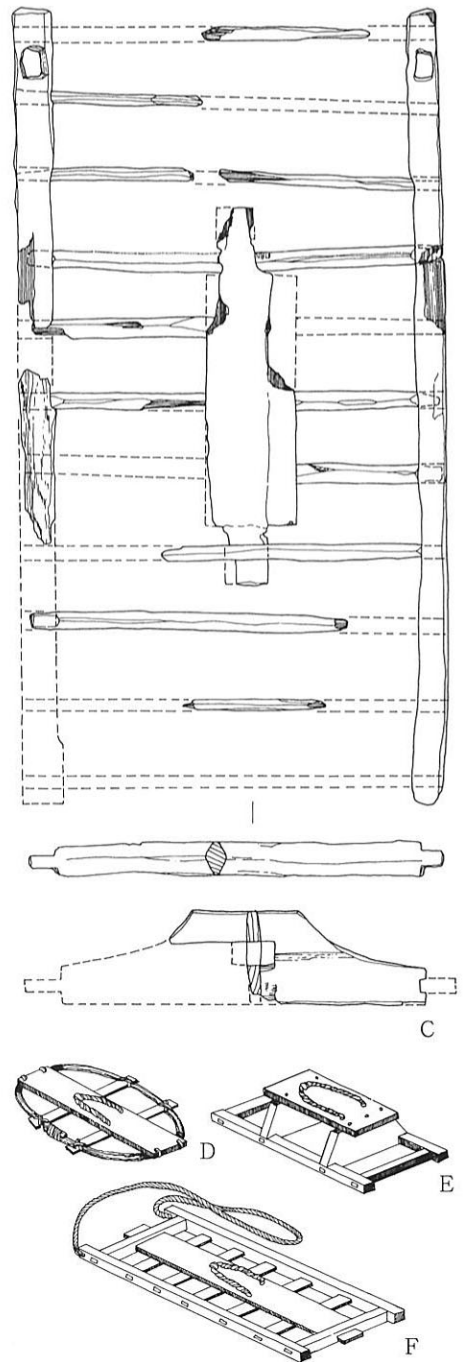


図131 大脚・田下駄模式図¹³⁾

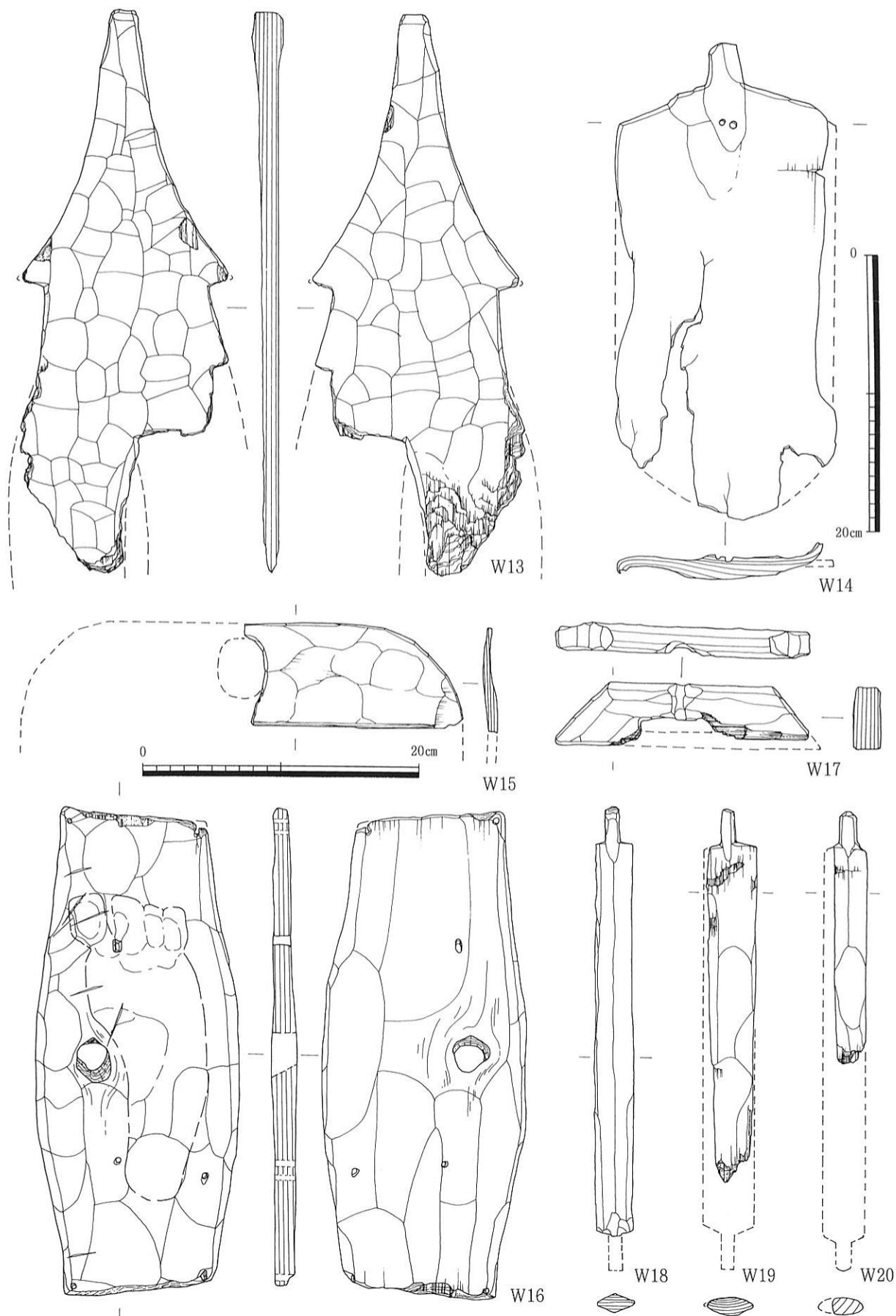


図132 ナスビ形又鍬・鋤・えぶり？・田下駄・大脚部材

痕が残る。

W21～24は大脚の足板である。縦枠に横枠と横木を組んだ梯子状の台の上に取り付けて足を乗せて使用する。W21は爪先部二又の突起を横枠材に差し込んで固定し、足を載せて中央左右の切り込み部に紐を巻いて装着するものと考えられる。大阪府友井東遺跡¹³⁾の大脚一括出土例(図131C)を見ると、踵側の差込突起は必ずしも又状である必要はないようである。

W22は差込部が四又と二又に分かれる。中央に固定紐を通す孔が2個一対あり、ズレ痕も残る。

W23は前後の差込部が又状にはならない。残存状態が悪く調整は不明瞭だが、裏面に残っている等間隔の押圧痕が横木との接着によるものと解釈して足板と判断した。差込部は中央部に比べてやや厚く、その先端は丸く磨滅している。

W24は全体のフォルムから足板と判断したが、中央に大きな孔をもつ点など、他の足板とは形状が異なる。

棒状木製品 一般に有頭棒状木製品と呼ばれるものをまず分類した¹⁴⁾。織機の布巻具もしくは経巻具とされる場合が多いようであるが、つり棚の材であったり建築材であったりと用途は多彩であり、断定するには至っていない。

W25は断面長方形に成形した有頭棒である。一端は二角方向から切り込んで頭を作り出すが、もう一端は磨滅のためかその痕跡がみられない。部材もしくは調度品の一部かとも思われるが全体的に加工は粗雑である。このタイプは大阪府西岩田遺跡¹⁵⁾をはじめ全国的に出土例がある。

W26は双方有頭の板状品。ほぼ完形で堅穴密集地内のピットより出土した。円く加工した両端から9ないし10cmのところに括れを削り込んでいる。裏面はほとんど加工が見られない。

W27は粗削りした角材の一端に抉りを入れて有頭を作り出す。四角方向から切り込み、先端部は丸く調整している。表面には切傷や斜め方向に走る圧痕が認められる。

W28も輪郭を粗くとり両面ともに切傷を残す。側面からの切り込みのみで頭を作り出している。

W29は加工痕・圧痕のある棒状の製品であるが、圧痕の様子から手に握って使用した柄部分ではないかと推測している。先端部は欠損しているが、調整痕や圧痕があり、別材を差し込んで工具として使用した道具の柄であった可能性がある。

W30・31は杭の先端部である。W30はミカン割りした材をさらに断ち割って粗く削りだす。先端部分に明瞭な調整痕が残る。W31は頭部・尖底部ともに欠損するが、全面ともに鑿痕が確認できる。周辺遺構および杭列から出土した杭は主にこの2タイプで、一定のサイズ基準のもとに作られたものであったことが窺える。

W32・33は両端を円く成形した棒で表面にも一部加工がみられる。枝は丁寧に除去されている。

用途不明木製品 以下、明確な加工痕跡が捉えられるものの類例を探し得ず、用途未確認の製品として類別したものである。

W34は小型の部材で一面に溝(もしくは四角形のほぞ孔?)をもつ。表面は木目にそって滑らかに加工されている。

W35もやはり小型の部材で、W34と同遺構から出土した。中央に四角形の孔をもつ。三角形に尖った先端部はやや磨滅し、反端は欠損して全体形は不明である。孔の両側および側面に紐ズレ痕かと思われる溝が数条残る。

W36は組合せ容器の側板かと思われたが、孔の位置が左右不均衡であるため、不明品とした。3ヵ所

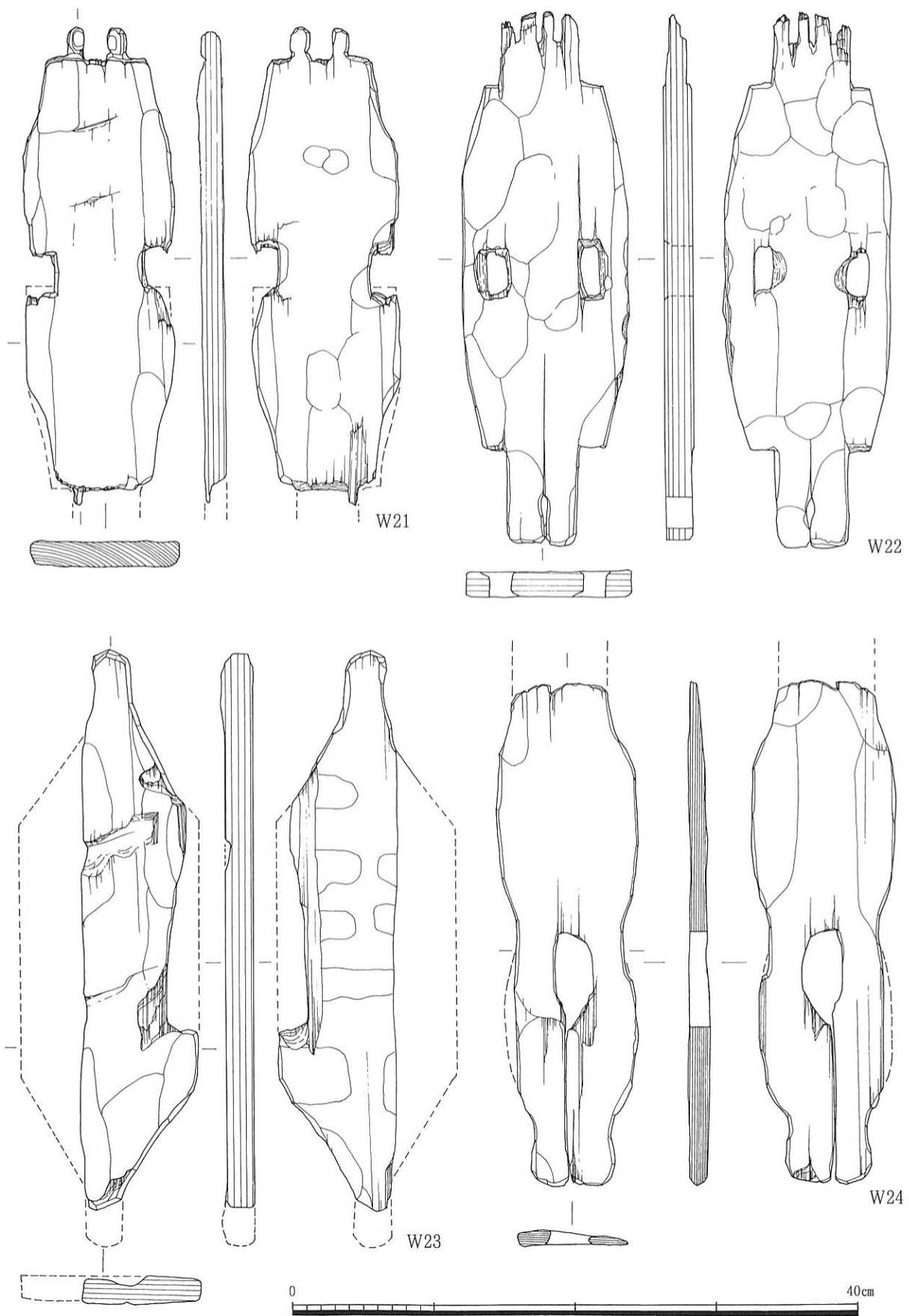


図133 大脚の足板

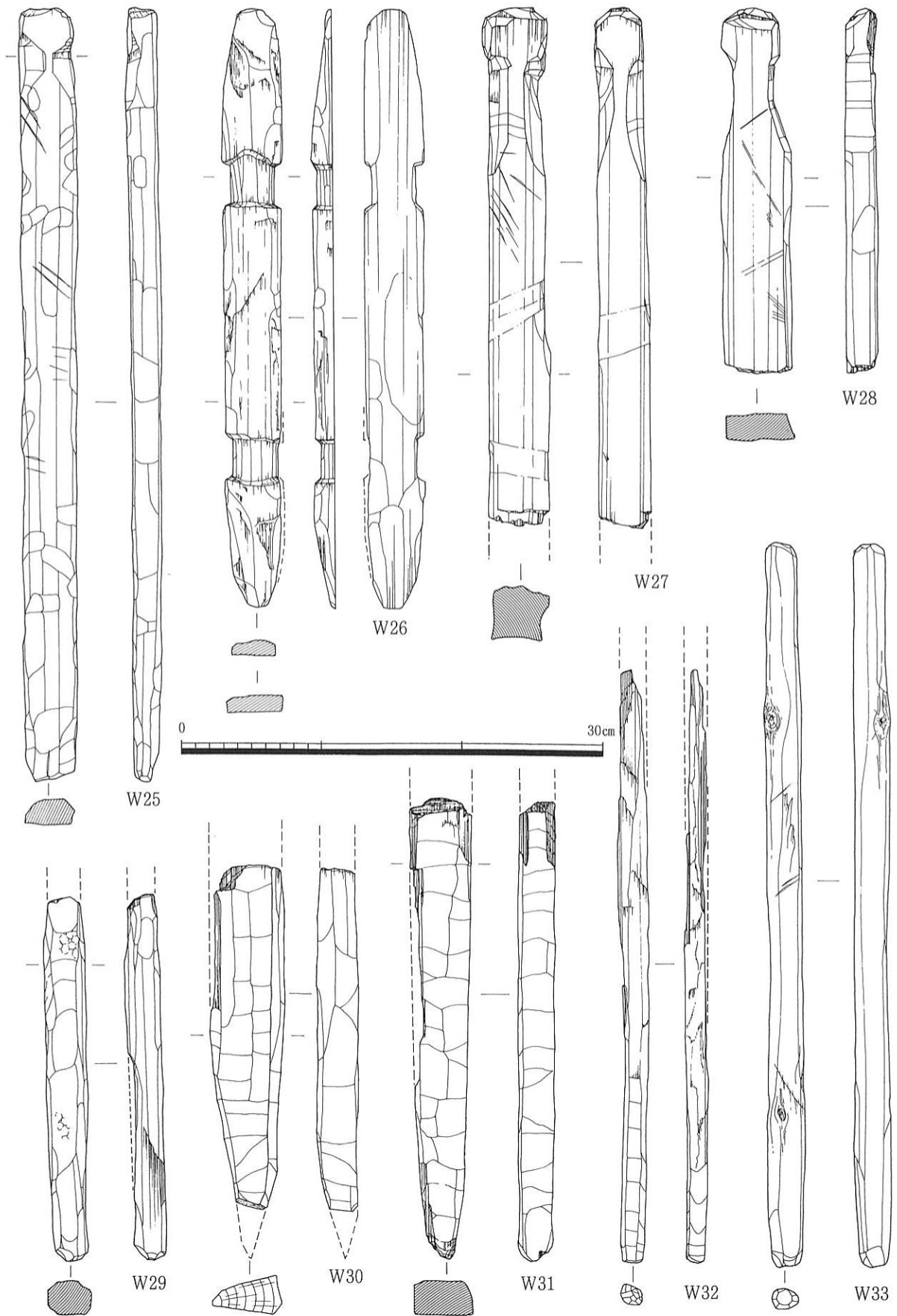


図134 有頭棒・握柄?・杭・棒

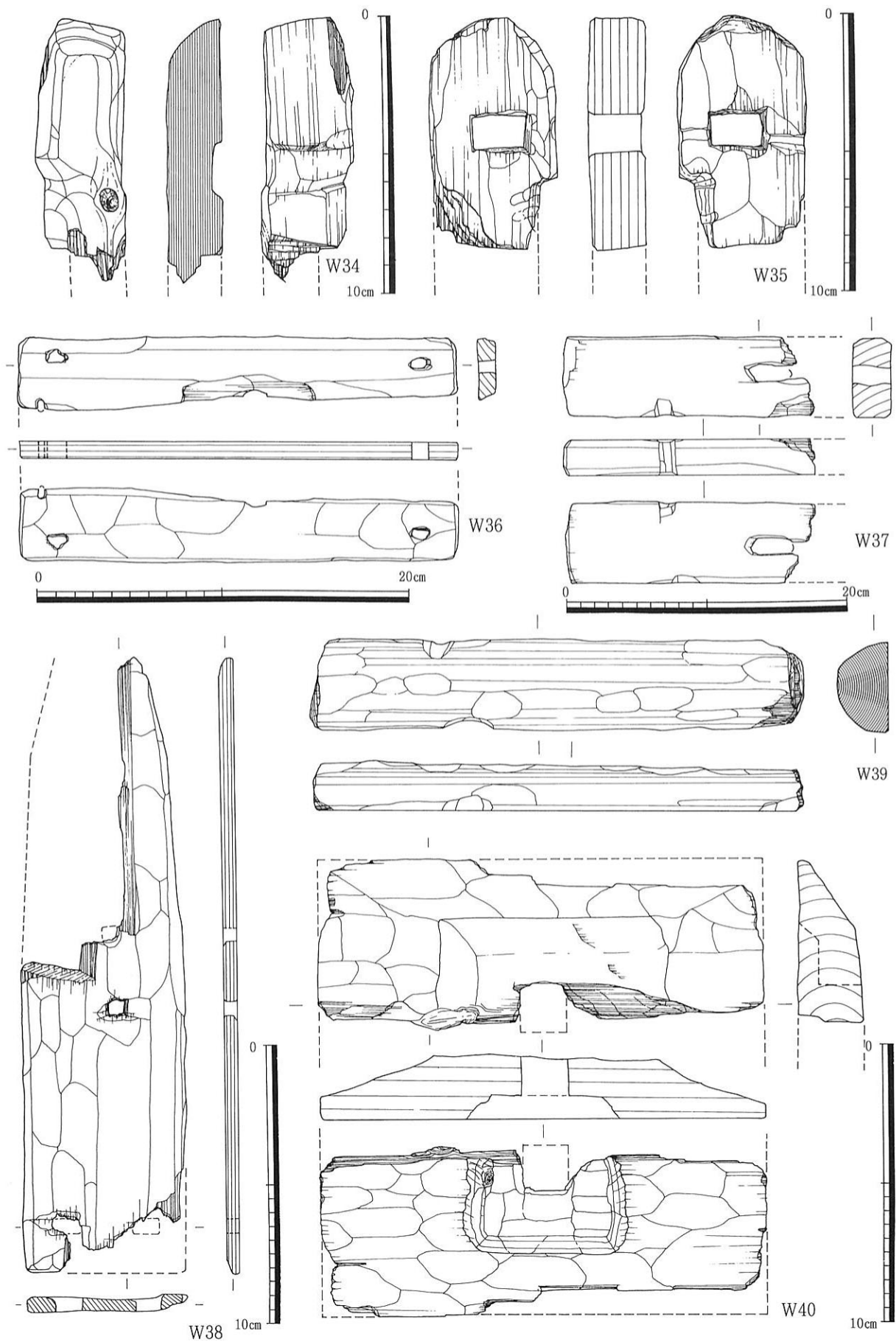


図135 小型部材・容器の側板?・各種部材

に孔が認められる。あまり精巧な作りではない。

W37は、ほぞ孔をもつ角材状の部材。側辺にかすかな抉りが表裏あわせて3カ所認められる。

W38は薄い板材でロケット形に復原できる。孔が4点確認できるが用途は不明。尖端の鋭角部分はやや厚く、側面にも調整痕が残る。

W39は両端を切断した半円柱形の部材である。側面に計3カ所の抉りがあるが紐ズレの痕跡は見られない。

W40は中央部にほぞ孔のある槽形の部材で、櫛の台部である可能性がある(図136参照)¹⁶⁾。W39・40ともに礎盤として転用されピット底より出土した。W41は木目に沿って

くり貫き湾曲させた大型の板状木製品。持手か取手を連想させる長楕円形の孔(6×1.5cm)を中央端部にもつ。一部欠損しているため、この孔が左右対称のものであったかどうかは不明である。前後両端は切断された痕跡がある。建築材もしくは棺材であろうか。

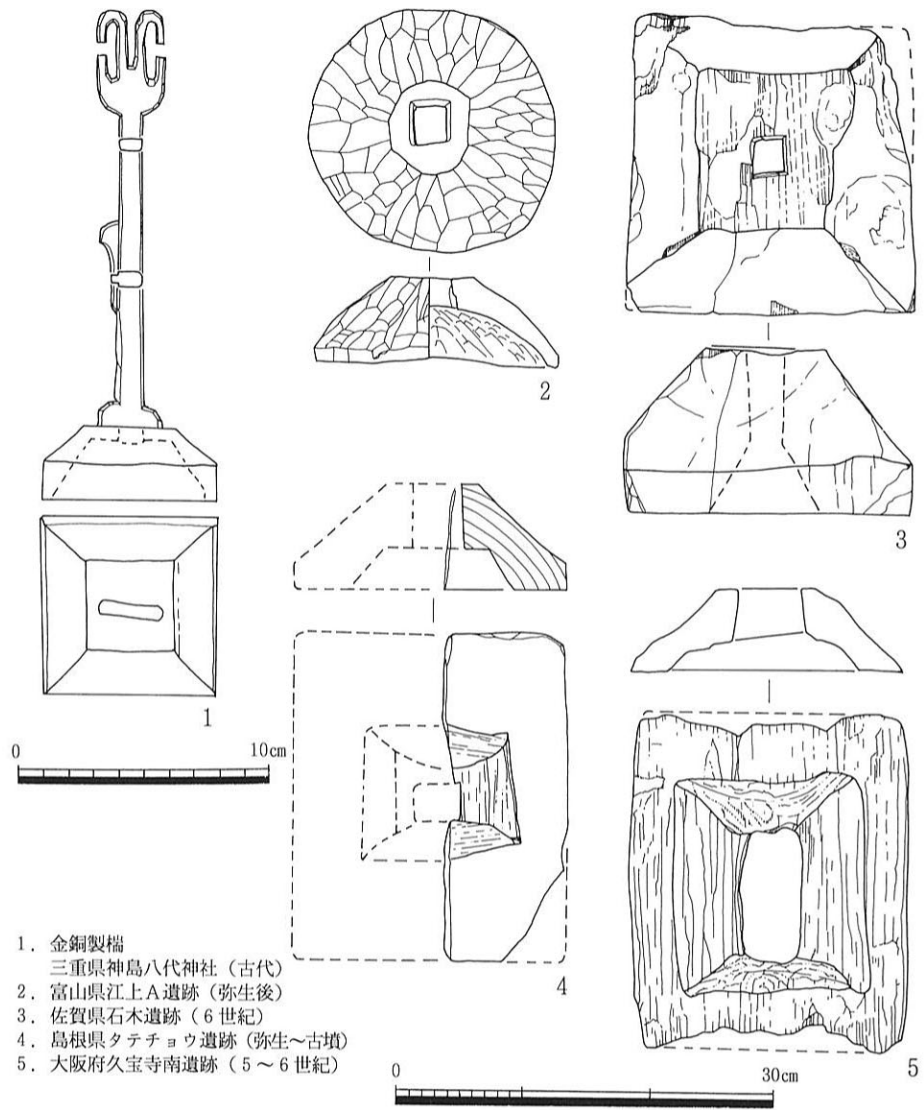
W42は板状品で一短側辺が弧を描くように成形されている。他短側辺は欠損しているが、表裏ともに段をもち、その直上に貫通する小孔2点がある。

W43は板材で端部中央にほぞ孔をもつ。節があるため一端は捻れている。孔はいびつな形で残存するが、当初からこの形状であったのか、使用によるものなのかは判断が難しい。

建築材 柱やこれを支える礎盤は多く出土したが、特徴的なもののみ掲載した。

W44・45は東西に並ぶピットから出土した柱根である。同値の径、全面を隈無く面取りした加工手法、ほぞ孔の縦辺に酷似する突起がある点など、二体は一对のセットとして建てられたものであろう(P. 33図29参照)。

W46は河川の北肩でW9とともに出土した棒状品である。木の一枝を伐採し、枝根部分に頭部を設けたもので、精巧に作り出された頭部とは対称的に、そのほかは小枝を払っただけという粗雑なものである。類似品が2C区水田内から出土した(P. 33参照)。



1. 金銅製櫛
三重県神島八代神社(古代)
2. 富山県江上A遺跡(弥生後)
3. 佐賀県石木遺跡(6世紀)
4. 島根県タテチョウ遺跡(弥生~古墳)
5. 大阪府久宝寺南遺跡(5~6世紀)

図136 礎の類例⁶⁾

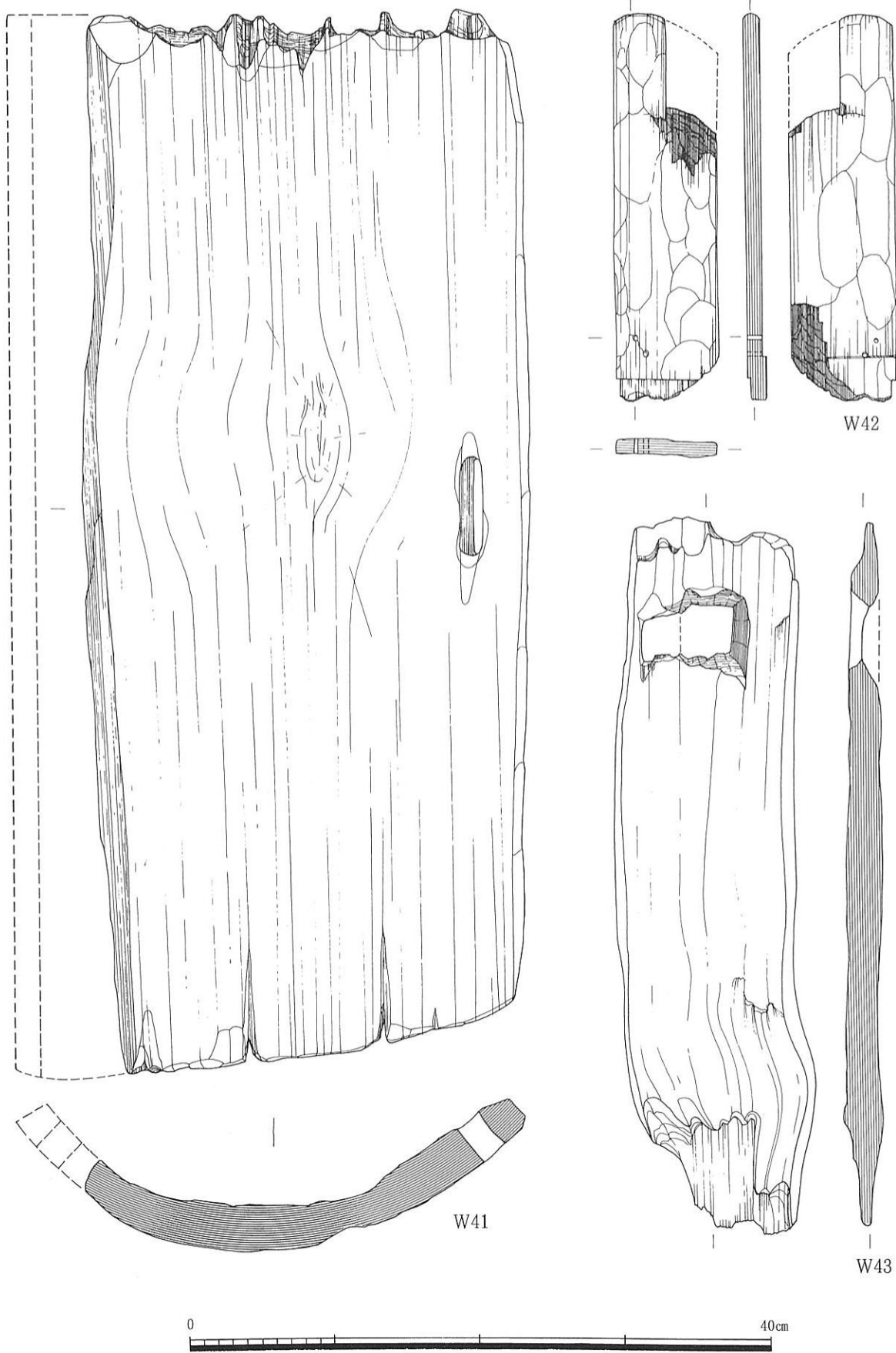


图137 各種部材

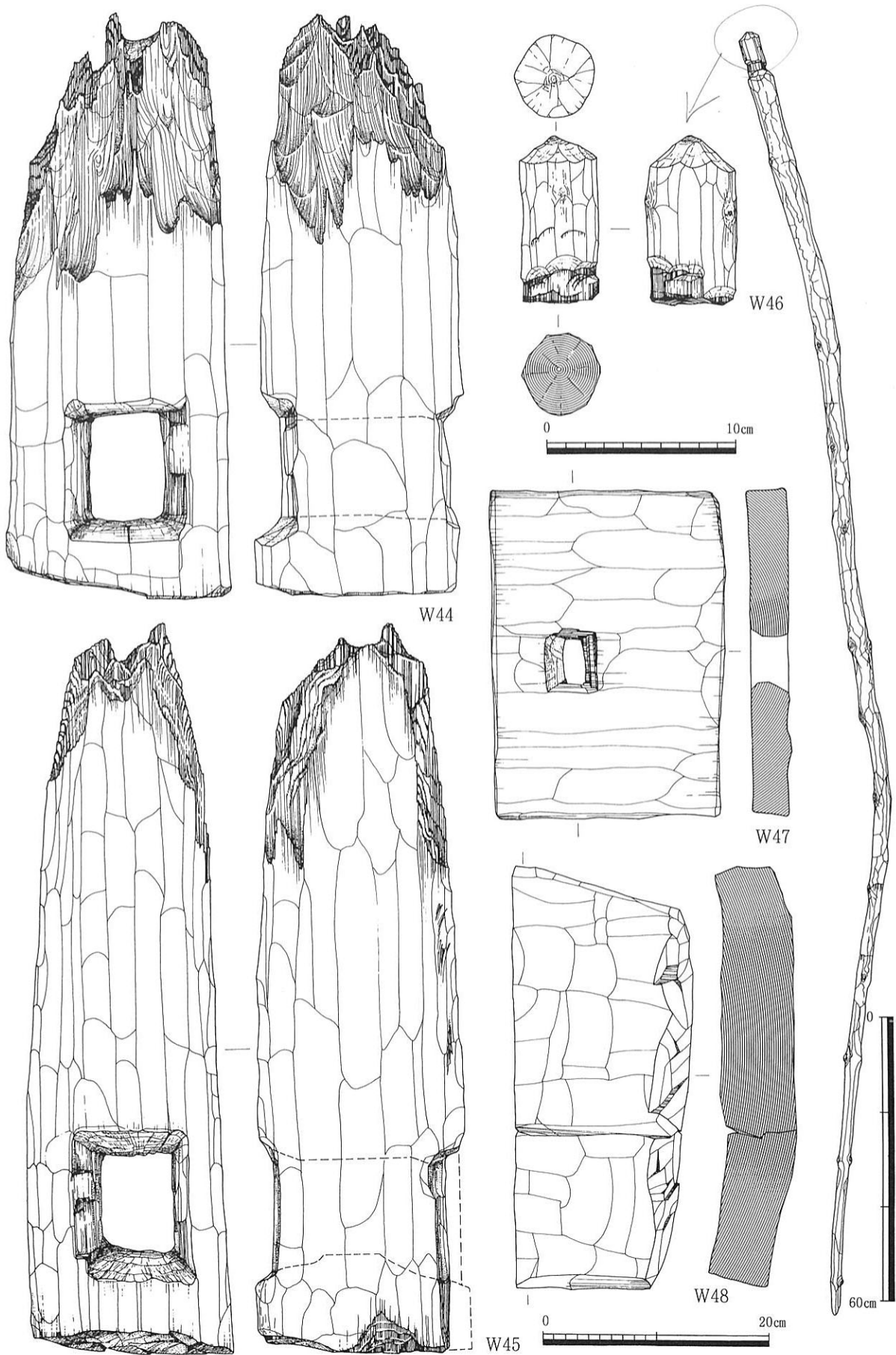


図138 柱根・有頭棒・礎盤

W47・48は柱の礎盤として使用されていた板状品である。両者とも丁寧に加工されている点、特にW47は乱雑ながらもほぞ孔が穿たれている点から推して、他部材からの転用品であったと思われる。

以上、簡略ながらA・B・C区出土の木製品の特徴を述べた。A区では希少価値の高い弦楽器を筆頭に集落域の生活を窺わせる紡織具などが出土し、B・C区では水稻生産に関連する農具が多く出土するなど、調査区ごとの特徴が出土状況として端的にあらわれた。またB区の河川2からは大量の製品が出土したが、この中には建築材などの大型品も含まれており、集落の廃絶が大規模な洪水によるものであることを傍証する結果となった。

註

- 1) 卒塔婆に関する分類用語は西本安秀氏に、梵字の読解・解釈は木下密運氏にご教示を受けた。
西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古稀記念考古学論集』1998. 3
- 2) 偈文の現代語訳は『梵字大鑑』種智院大学密教学会 1983. 5. 31 名著普及会 に拠った。
- 3) 藤澤典彦「墓上祭祀の諸問題」『月刊歴史手帳』1991.11 名著出版
- 4) 琴および弦楽器の構造や類例については笠原潔氏に御教示をうけた。琴の名称を避けた点に関しては、第6章第1節を御一読されたい。
- 5) 『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996. 3. 31
- 6) 『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所 1993. 3. 30
- 7) 滋賀県市三宅東遺跡出土の琴状木製品の実測図については、野洲町教育委員会の鈴木桃代氏に御協力をいただいた。
- 8) 以下木製品の種別分類・各部呼称・加工の表現などは、註6『木器集成図録 近畿原始編』を参考とした。
- 9) 竹内晶子「弥生の布を織る」1989. 5. 25 東京大学出版会
- 10) 類例としては、註5の下田遺跡や京都府向日市鴨田遺跡出土のものがある。
山中章他「長岡京跡左京第75次(7ANFHD-2地区)～左京四条二坊六町・鴨田遺跡第5次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第8集』1982
- 11) 『友井東(その1)』(財)大阪文化財センター 1984. 9. 10
- 12) 秋山浩三「田下駄の予察的復原～沼状遺構SX21400出土例の評価にあたって～」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第34集』1992
- 13) 潮田鉄雄「田下駄の変遷」『物質文化No.10』1967
- 14) 橋本亜希子「溝咋遺跡出土の木製品について」『大阪文化財研究13号』1997. 6
- 15) 『西岩田』(財)大阪文化財センター 1983.10.29
- 16) 櫛の可能性については(財)三重県埋蔵文化財センターの穂積裕昌氏に御教示を得た。

表2 A区～C区出土木器一覧

頁	No	地区	登録番号	木製品		出土地点	層・面	遺構	最大長	最大幅	最大厚	最大径	高さ	樹種
152	W 1	C	739	卒塔婆	祭祀	K13a 3		河川1 杭列	30.3	3.2	0.7			
154	W 2	A	2198	① 琴状弦楽器	楽器	I 1315- 2		土坑98	32.8	5	2			ヒノキ
155	W 3	A	1979	紡錘車の軸	紡錘	I 13e 3- 3	7層	包含層	30.2			0.7		
155	W 4	A	2615	水錘	紡錘	I 13g 4		土坑140	16.4		5.8			
155	W 5	B	426	② 杷形部材	不明	J 13 f 2- 2	7層	包含層	19.1	3.7	1.5			
155	W 6	B	262	③ 工具の柄	工具	J 13 f 2		河川2	14			3.0		
155	W 7	B	464	人形代	祭祀	J 13 f 3- 3	7面	木器集中部	43.0			13.0		ヒノキ
155	W 8	B	426	① 剣形	形代	J 13 f 2- 2	7層	包含層	36.4	2.5	0.7			
156	W 9	B	354	曲物の底板・杵	容器	J 13 f 2		河川2 北肩	51.8	38.2	1	3.8		
156	W10	B	157	曲物の底板	容器	J 13 f 2	茶灰粘土層	河川2				0.5	11.0	
156	W11	B	463	③ 箱形容器	容器	J 13 f 3- 3	7面	木器集中部	36.5	6.2	2.1			
156	W12	B	29	容器の側板	容器	J 13 c 3	1面	木器集中部	29.0	7.3	0.7			
158	W13	C	809	ナスビ形又鍬	農具	J 13 j 3	2層	包含層	40.7	14.8	2.0			不明
158	W14	C	1237	① 鋤	農具	K13 a 3		溝61	34.5	15.0	2.0			ヒノキ
158	W15	A	2595	えぶり?	農具	I 13 c 3		溝123	15.7	7.5	0.6			
158	W16	B	463	① 田下駄	農具	J 13 f 3	7面	木器集中部	35.2	14.4	2.0			
158	W17	B	443	大脚の横杵	農具	J 13 b 3- 2	7面	包含層	18.3	3.8	2.0			
158	W18	B	375	大脚の横木	農具	J 13 b 1- 4	茶灰粘土層	包含層	41.0	14.0	1.8			
158	W19	C	767	大脚の横木	農具	K13 a 3	茶灰粘土層	包含層	27.0	3.5	1.3			
158	W20	B	411	大脚の横木	農具	J 1313	7層下	包含層	18.1	2.3	1.2			
160	W21	B	385	大脚の足板	農具	J 13 h 3- 3	茶灰粘土下層	包含層	33.0	10.0	1.7			
160	W22	C	1713	大脚の足板	農具	K13 b 3	8層	包含層	35.8	11.5	1.8			
160	W23	A	2198	③ 大脚の足板	農具	I 1315- 2		土坑98	39.6	8.4	1.9			不明
160	W24	C	2594	大脚の足板	農具	I 13 c 3- 4	8面	大畦下	36.0	10.0	1.3			ヒノキ
161	W25	C	1655	有頭棒	-	K13 f 9- 2	西7層	包含層	54.7	4.0	2.3			
161	W26	A	2569	有頭棒	-	I 13 d 3		P 380	42.6	4.0	1.2			ヒノキ
161	W27	C	1809	有頭棒	-	K13 f 9- 2	7面	河川4-I	37.1	4.6	3.6			ヒノキ
161	W28	A	1935	有頭棒	-	I 143 i 5		土坑98	25.8	4.8	2.4			
161	W29	A	1981	握柄?	-	I 13 f 2- 2	茶黒土2層	包含層	25.0	2.5	2.0			
161	W30	B	353	① 杭	建築	J 13 d 2	7層	包含層	24.2	5.1	2.7			ヒノキ
161	W31	C	1810	杭	建築	K13 f 9- 2	7面	河川4-II	32.5	4.0	2.5			ヒノキ
161	W32	C	1690	棒	-	K13 e 10- 2	西7層	包含層	42.1	2.0		1.5		
161	W33	B	455	② 棒	-	J 1314	7面	木器集中部	51.2	2.3	1.8			
163	W34	B	19	① 小型部材	-	J 13 h 3	1面	木器集中部	9.3	3.3	2.0			
163	W35	B	19	② 小型部材	-	J 13 h 3	1面	木器集中部	8.0	4.0	1.5			
163	W36	C	1226	② 容器の側板?	-	K13 a 5	9層	包含層	23.8	3.9	1.0			不明
163	W37	C	1224	① 角材状部材	-	J 13 c 4	9層	包含層	17.5	5.7	2.7			不明
163	W38	B	25	板状部材	-	J 13 c 3	1面	木器集中部	43.0	12.0	0.5			ヒノキ
163	W39	C	1215	半円柱形部材	-	K13 b 3	9層	包含層	34.5	6.5	3.5			不明
163	W40	C	1617	① 槽形部材	-	J 13 j 2	8面	P I T 207	31.8	11.5	4.5			
164	W41	B	455	① 湾曲形部材	-	J 13 i 4	7面	木器集中部	71.8	29.8	3.1			ヒノキ
164	W42	C	1226	③ 板状部材	-	K13 a 5	9層	包含層	26.5	7.0	1.2			不明
164	W43	C	1224	② 板状部材	-	J 13 c 4	9層	包含層	47.0	12.7	2.4			ヒノキ
165	W44	B	386	柱根(柱1)	建築	J 13 h 3- 1	4面	P I T	51.3			19.2		
165	W45	B	387	柱根(柱2)	建築	J 13 h 3- 1	4面	P I T	63.7			19.0		
165	W46	B	354	② 有頭棒	建築	I 13 f 2	6面	河川2 北肩	283.0			5.8		
165	W47	A	1993	③ 礎盤	建築	I 13 d 3- 3	6面	穴315	29.0	19.4	3.7			ヒノキ
165	W48	A	1994	礎盤	建築	I 13 d 3- 3	6面	穴315	20.5	29.0	3.5			

P(62)
1 =
6TE

第3項 その他の遺物

土器、木器以外の遺物をその他遺物として本項であつかう。その他遺物は、すべてを抽出し、加工痕が不明瞭な石材をのぞきすべて図化した。

自然礫は、直径10cm前後のものが、古墳時代包含層であるA区7層を中心にコンテナ1箱出土しており、基盤層がシルト～粘土からなる本遺跡においては、人為的にもたらされた可能性が高いと考えられる。石材は安威川で現在もみられる砂岩、チャートが主体であるが、縦10cm、横5cm、厚さ1～2.5cmの結晶片岩が2個体出土している点が注意される。

なお、石材は、京都教育大学 井本伸廣氏に鑑定いただいた。

1. A区

○1は鳥形土製品である。7面溝120砂層から出土し、共伴遺物から弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられる。最大長11.2cm、最大腹径3.4cmである。頭部、胴部、尾部をつくり出し、ナデで仕上げる。頭部頂部には幅4mm、長さ2cmの縦方向の剥離痕があり、鶏冠があった可能性が考えられる。頸部前面にはヘラによる刻みが縦方向に施され、皺のようにみえる。胴部右側面(図示した面)にはヘラによる浅い刺突が上半部にみられる。左側面はナデのみである。胴部下面中央には直径7mm、深さ3cmの円筒状の孔がやや頭部に向けて斜めに穿たれる。尾部は胴部から徐々に厚さを減じ、先端は不整形に薄くつまんで仕上げられる。尾部の先端の厚さは3mmである。

○2は土錘である。7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。最大長5.5cm、最

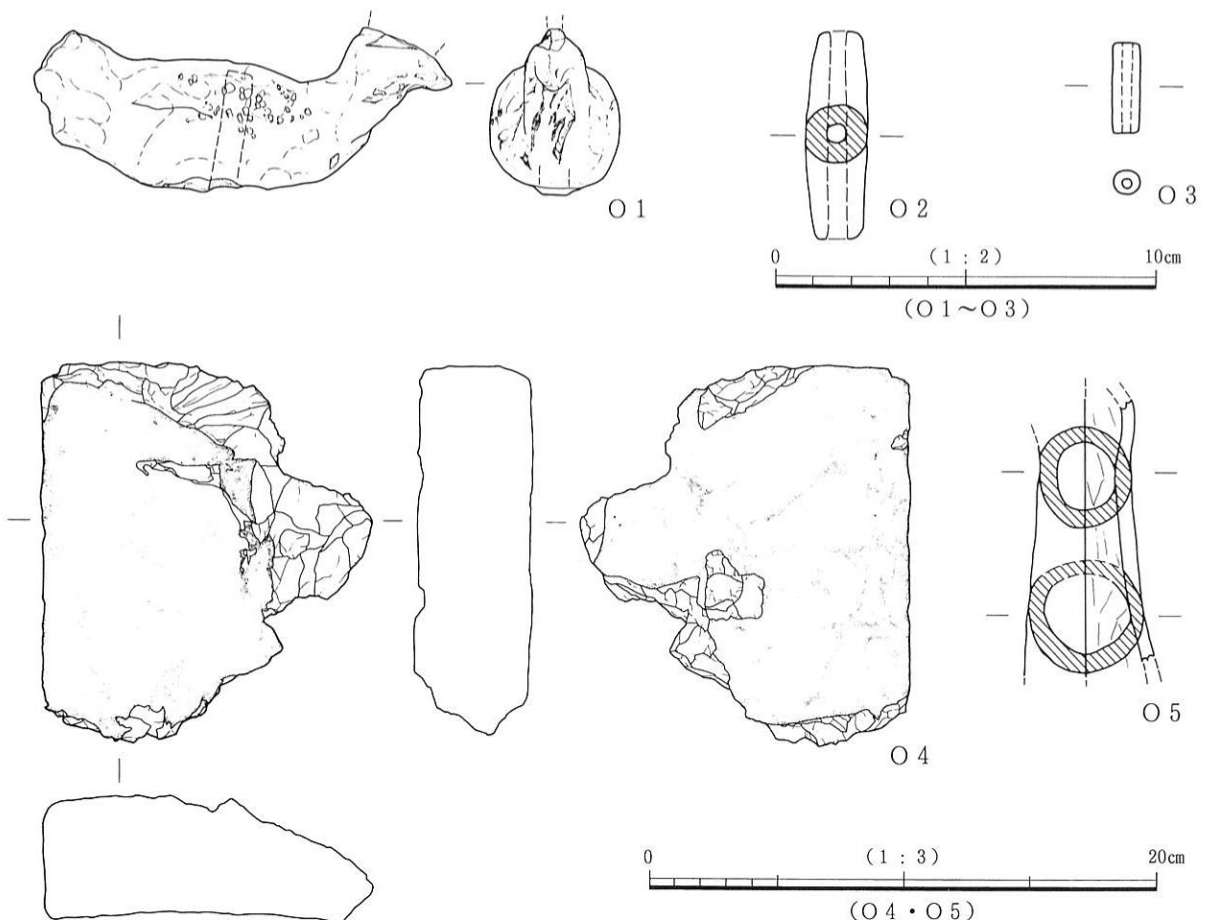


図139 A区出土その他の遺物

大径1.6cm、孔径5mmである。一部黒斑がみられる。

○3は碧玉製管玉で、緑色を呈する。7面穴375から出土し、共伴遺物は土師器片のみである。7面は古墳時代前期から古墳時代後期後葉に位置づけられる。最大長2.3cm、最大径6mm、孔径2mmである。擦痕はみとめられない。

○4は瓦質磚である。1面河川1から出土し、共伴遺物は中世～近世の幅をもつ。方形または長方形の隅部であり、残存する最大長は15cm、厚さ4.3cmである。断面をみると灰黒色と灰白色の粘土が混じり、粘土の練り込みがみられる。

○5は土製不明品である。7面建物4穴453から出土した。共伴遺物は土師器壺(232)、土師器片があり、古墳時代前期に位置づけられる。断面形がやや扁平な楕円形であり、図で上にした部分がややふくらむ。最大長10.6cm、直径3.8～5cm、器壁の厚さ5～7mmである。外面縦方向ナデ、内面ユビオサエとナデであり、被熱の痕跡はない。類例には千葉県、茨城県など関東地方東部で弥生時代終末から古墳時代前期にかけてみられる異形器台形土器がある(千田1983・鶴見1993・藤田・板橋1996)。異形器台形土器には被熱の痕跡がみられるものもあり、炉における支脚の用途が想定されている。異形器台形土器の分布は限られた地域であり、本例が異形器台形土器であれば外来系の遺物になる可能性がある。しかし、胎土は在地の土器に似たものであり、また調査地周辺における類例をしらないことから、今後の資料の蓄積をまって検討したい。

○6は磨製石庖丁である。7面溝120砂層から出土し、共伴遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられるが、全体的に磨耗しており、共伴遺物の年代以前に位置づけられると考える。石材は細粒安山岩である。直線刃であり、紐孔は両面から穿孔される。磨耗のため擦痕、敲打痕はみられない。

○7は砥石である。7面出土であり、7面は古墳時代前期から古墳時代後期後葉に位置づけられる。石材は凝灰岩である。大きく直方体であり、穿孔のある上部で薄く、下部にいくにつれ厚みを増し、下端では厚さ2.6cmである。上下端面は破断面、側面は4面とも研磨面である。穿孔は両面からなされ、穿孔のある片面には断面半円形の研磨面が穿孔の上下をとおしてみられ、玉砥石の可能性はある。擦痕はすべて縦方向である。

○8、○9は砥石である。7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。石材は2点とも凝灰岩である。3面のみ残存し、研磨面に擦痕はみられない。

○10、○11は扁平な礫の両面に研磨面がみとめられ、砥石としての利用が考えられる。7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。石材は○10が安山岩、○11が細粒砂岩である。2点とも破断面が直線的である点が注意される。周縁にはとくに使用痕はみとめられない。○11は研磨面の隅部に直径1mmの浅い窪みが集中してみとめられ、敲打痕の可能性が考えられる。

○12は先端が丸い棒状の石材の側面4面に研磨面がみとめられ、砥石としての利用が考えられる。溝120砂層から出土し、共伴遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられる。石材はチャートである。研磨のため石材の断面形は隅丸方形を呈する。図示した面とその裏面の研磨が顕著であり、他の2面に比べ面が平滑である。研磨面に擦痕はみられない。

○13は太型蛤刃石斧を磨石・叩き石に転用したものである。10層出土である。10層は弥生時代中期～古墳時代前期の土器が少量出土し、弥生時代中期～後期土器が多い。石材は角閃石ヒン岩である。大きさから上面、側面は太型蛤刃石斧をいかし、下半を切断し下面を磨面・叩き面としたと考えられる。最大長11.2cmであり、握りやすい長さとなっている。下面全体に磨面がみとめられるが、残存長の短い部

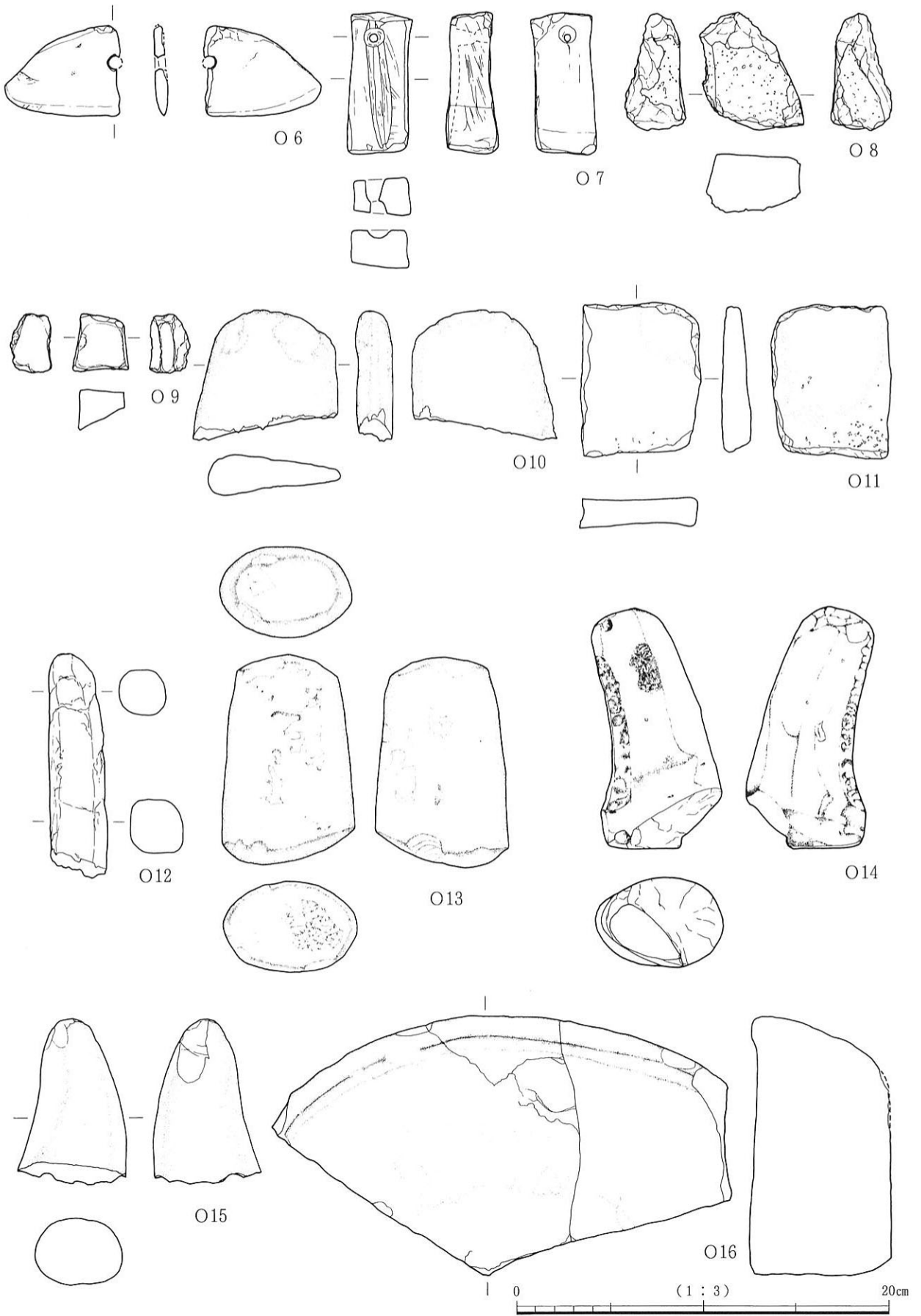


図140 A区出土その他の遺物

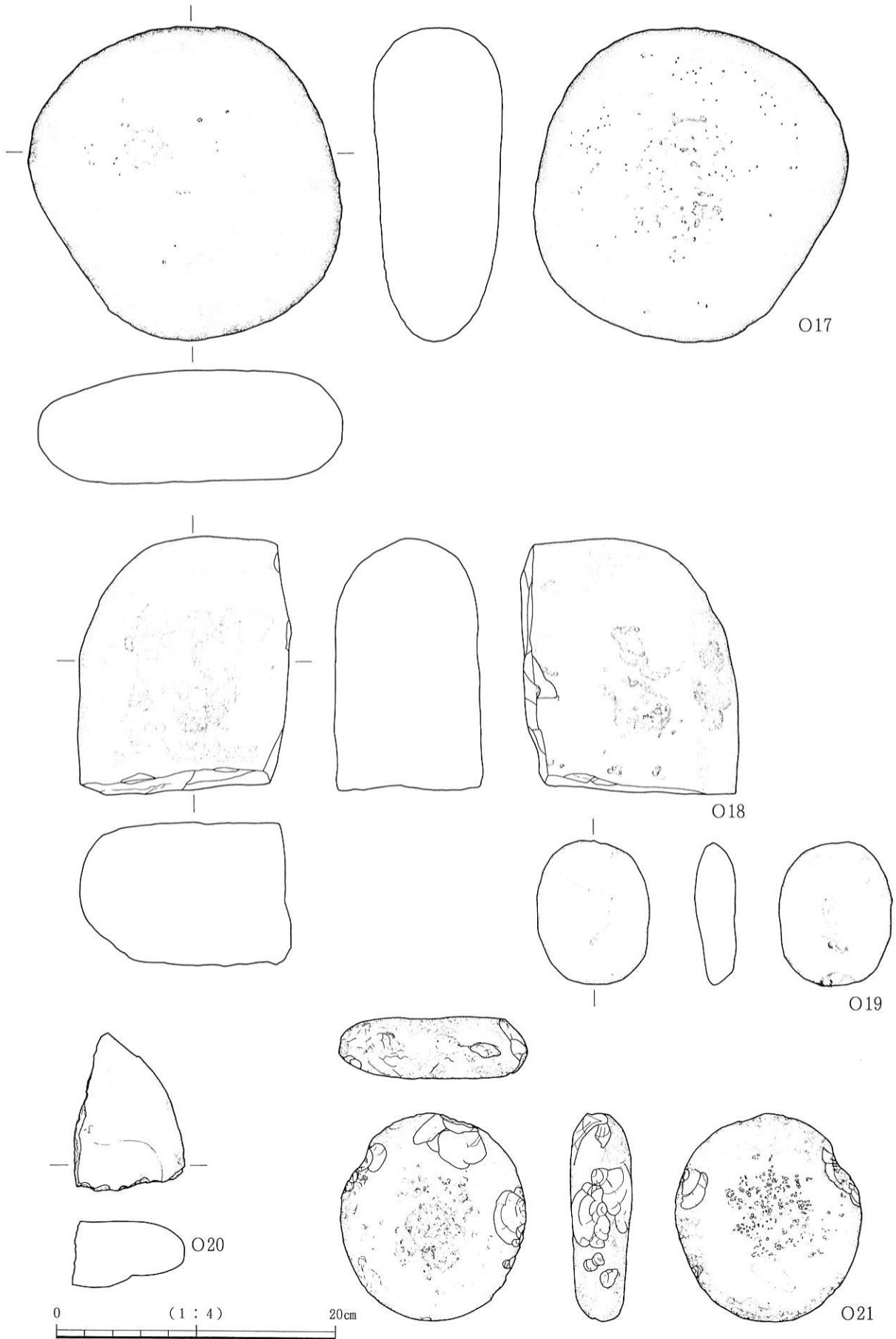


図141 A区出土その他の遺物

分の下面では敲打痕がみられ、磨石・叩き石の両用が考えられる。磨面に赤色顔料はみとめられない。

○14、○15は石杵である。形態から、辰砂を磨り潰すために用いられた可能性が高い。

○14は7面土坑133出土であり、共伴遺物は古墳時代前期庄内式期後半～布留式期前半に位置づけられる。石材はワッケ質砂岩である。やや湾曲し下部が広がる円柱形である。握り部は、稜線が不明瞭であるが前面にやや平坦な面をもち、他の部分が平滑であるのにたいし、この面のみ敲打痕に似た小さな窪みがみられる。磨面は前面のみの残存であり、平滑でやや黒色を呈する。握り部の小さな窪みに微量の赤色顔料がみられるが、微量のため分析できなかった。

○15は7面土坑98出土である。共伴遺物は古墳時代中期須恵器を下限とし、古墳時代前期でも布留式期後半の土師器が主体をしめる。石材はヒン岩である。○14に似た形態のものと考えられるが下半部を欠く。本例も握り部前面に、稜線が不明瞭なやや平坦な面があり、この面と背面の一部がやや黒色を呈する。頂部には3面の剥離面がある。背面上部に微量の赤色顔料がみられるが、分析できなかった。

○16は石臼である。わずかに高い周縁をもち、周縁内側がほぼ水平な磨面である。形態から、辰砂を磨り潰すために用いられた可能性が高い。7面土坑122出土であり、共伴遺物は古墳時代前期庄内式期後半に位置づけられる。石材は角閃石ヒン岩である。上面の復元直径37cm、使用面での厚さ7.6cmである。磨面の周辺から周縁、側面にかけてやや黒色を呈する部分がある。赤色顔料はみとめられなかった。

○17、○18は台石である。2点とも7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。

○17の石材はヒン岩である。両面の高い水平部に研磨面が、その中央部に敲打痕がみられ、磨石と叩き石の台石として両用されたと考えられる。水平部が広い面（図面右側）が、より多く用いられたためか敲打痕が多く、面的にひろがる。敲打痕は円形に窪むものもあるが、底面に長さ5mmの直線がみられる断面V字形のものが多く、叩く道具が注意される。

○18の石材はアーコース質砂岩である。両面に敲打痕がみられ、研磨面はみられないことから、叩き石の台石として用いられたと考えられる。硬度の異なる粒径1～5mmの鉱物を多く含むことから、研磨には適しなかったのであろう。粒径が大きな鉱物が多い面（図面右側）では敲打痕が少なく、対面の粒径が小さな鉱物が多い面では敲打痕が多いことから主にこの面を用いたようである。側面と使用面の一部に、敲打痕以前の被熱の痕跡がみられる。

○19は叩き石である。7面溝120出土であり、共伴遺物は弥生時代後期～古墳時代後期の幅をもつ。石材はアーコース質砂岩である。長径10cm、短径8cm、厚さ3cmの楕円形で、握りやすい大きさである。両面の一方の頂部に各々剥離痕がみられ、片面（図面右側）の中央部は直径2cmの円形に浅く窪む。

○20は磨石である。7面溝120砂層出土であり、共伴遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられる。石材はアーコース質粗粒砂岩である。片面に磨面がみとめられる以外は自然面が残る。

○21は凹み石である。7面溝120砂層出土であり、共伴遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられる。石材は砂岩である。両面に研磨面、敲打痕がみられ、敲打痕が浅く広がる面（図面右側）では研磨面が顕著であり、その対面では敲打痕が直径2.5cmの円形に播鉢状に窪み研磨面は部分的にみられるのみである。側縁には剥離痕、敲打痕がみられる。

2. B区

○22は瓦当の剥離痕がみられる軒丸瓦である。4層出土であり、共伴遺物は中世に位置づけられる。凸面はナデ、凹面は瓦当接合痕から5cm離れた箇所から布目痕がみられる。

○23は軒平瓦である。中世～近世の遺物が出土する1面河川1出土である。蓮華唐草文になるとみられ、中心飾りは3葉が残存し、唐草文が3反転する。凸面は縦・横方向のナデ、凹面は布目痕をナデ消す。胎土は白色と灰色の粘土が混じっており、粘土の練り込みがみられる。15～16世紀、室町時代に位置づけられる。

○24は平瓦である。4層出土であり、共伴遺物は中世に位置づけられる。凸面は縄目タタキ痕、凹面は布目痕がみられる。鎌倉時代初頭までのものであろう(元興寺文化財研究所1983)。

○25は土人形である。1層出土であり、共伴遺物は近世に位置づけられる。騎馬武者像であり、武者は甲冑をつける。一部赤色顔料がみられる。厚みの半分の箇所到低い突線がはしり、合わせ型を用いて製作されたと考えられる。

○26は土錘である。7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。最大長6.6cm、最大径1.2cm、孔径3mmである。一部黒斑がみられる。両端は不整形である。

○27は銅鈴である。5面出土であり、奈良時代から中世の間に位置づけられる。方形の紐に円孔をもち、体部下半は押圧のため歪む。体部上半に1×2mmの金色を呈する箇所があり、金銅鈴であった可能性が高い。最大径2.1cm、高さ2.4cmである。

○28は鉄製手鎌である。7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。縦2.1cm、残存する横幅4.0cm、脊の厚さ1.5mmである。帯状の鉄板の端を折り返して台形状の袋部をつくる。袋部より上には横方向の材の痕跡がみられ、金蔵山古墳出土手鎌(西谷・鎌木1989)同様、木柄は横材を用いたようである。

○29は歯ブラシの柄である。1面溝1出土であり、共伴遺物は18世紀後半以降のものが多い。ブラシは残存せずブラシの材質は不明。柄は動物質とみられるが未同定である。柄の下部には穿孔があり、両端に頭をもつ長さ6mmの釘状のものが貫通している。

○30は砥石である。5層から出土し、奈良時代から13世紀後半を中心とする中世の遺物が共伴する。石材は凝灰岩である。直方体であり、上面(図面上側)以外、5面とも研磨面である。石材は白色であり、上面のみ黒色である。擦痕はみられないが、下面に長さ2cmの浅い線がはしる。

○31は滑石製鍋である。中世～近世の遺物が出土する1面河川1出土である。工具痕はみられず、全面研磨されている。鏝の上下端に炭化物が線状に付着する。13～14世紀に位置づけられる(鋤柄1996)。

○32は石製丸玉である。7層から出土し、共伴遺物は古墳時代前期～後期の幅をもつ。石材は砂岩である。自然礫の可能性もあるが、他にこのような丸石は出土していない。

○33は人間の頭蓋骨の前頭部である。中世～近世の遺物が出土する1面河川1出土である。前面は眼窩上隆起まで残存し、後半部は鋭い刃物で切断された痕跡がある(第5章第9節参照)。

3. C区

○34は軒平瓦である。東1面井戸4出土である。共伴遺物には陶磁器、硯(○43)があり、18世紀後半～19世紀後半に位置づけられる。燻瓦である。蓮華唐草文で、花冠+萼を中心飾りとし、外縁が広い。

○35は平瓦である。中世～近世の遺物が出土する東1面河川1出土である。全面ナデであり、凹面狭端部に弧状の面取りがある。燻瓦であるが、凸面頂部周辺と凹面狭端部は灰白色である。

○36は平瓦である。中世～近世の遺物が出土する東1面河川1出土である。凸面は縄目タタキ痕、凹面は布目痕がみられる。鎌倉時代初頭までのものであろう(元興寺文化財研究所1983)。

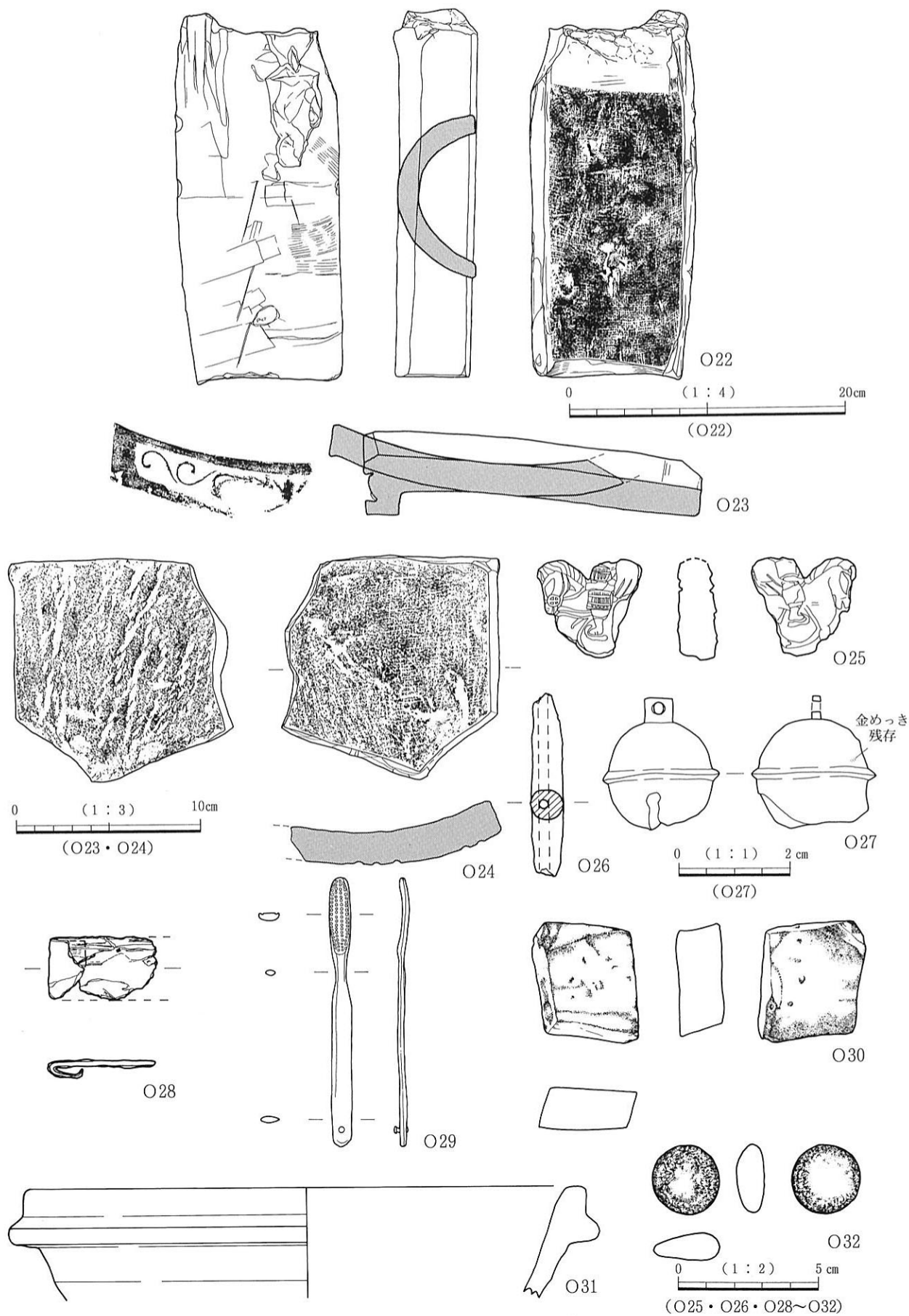


図142 B区出土その他の遺物

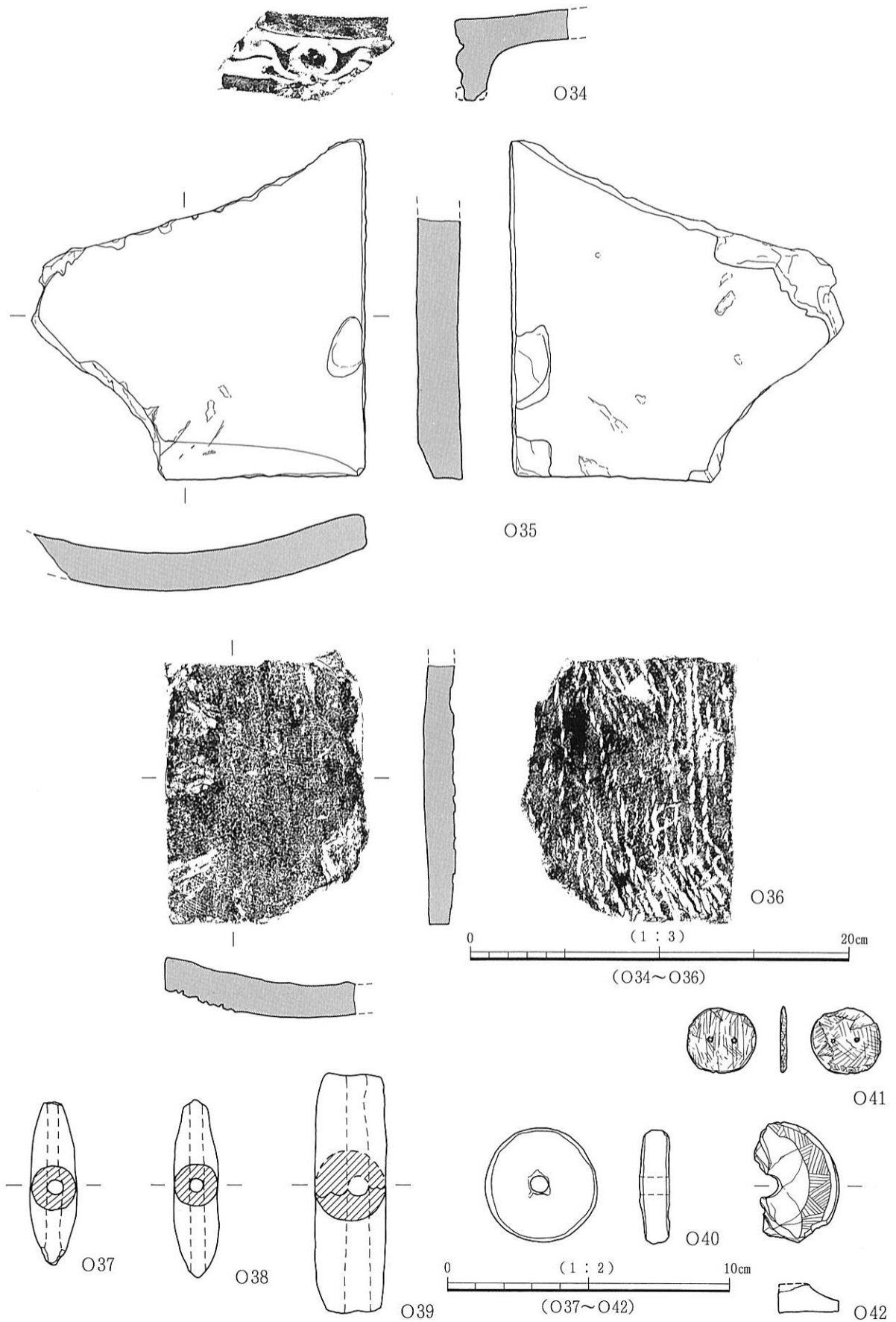


図143 C区出土その他の遺物

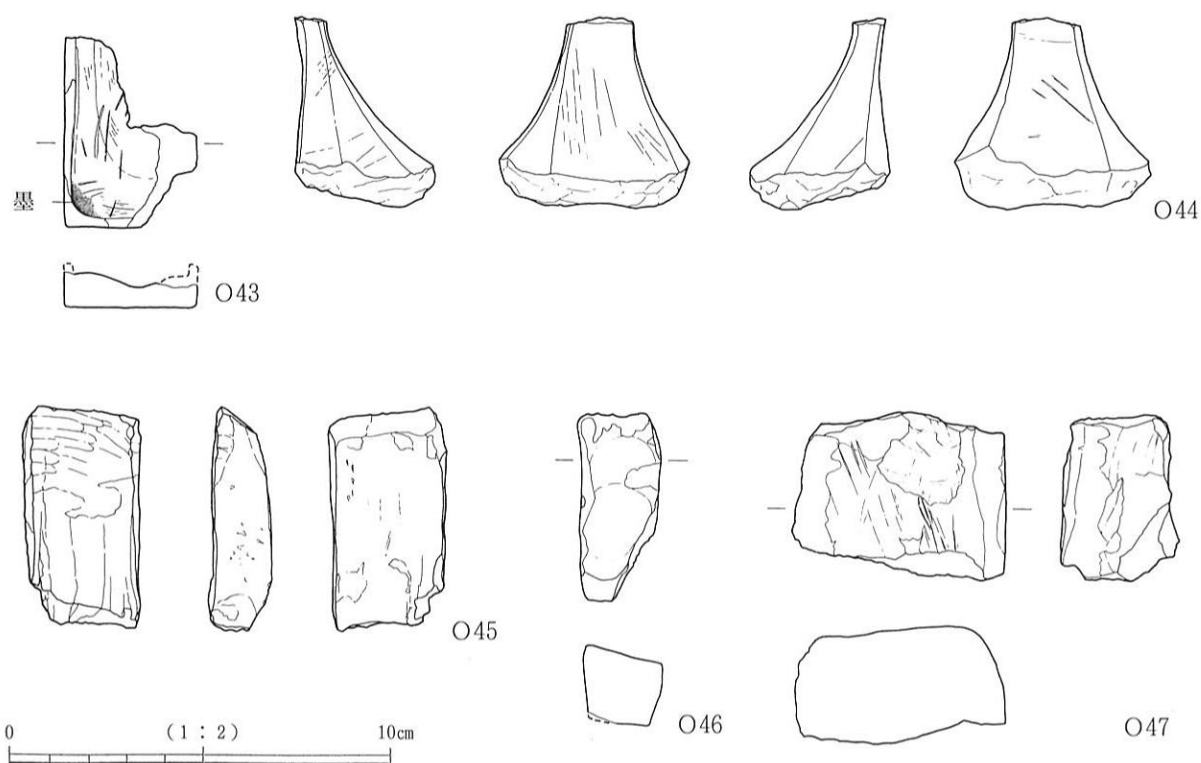


図144 C区出土その他の遺物

O37～O39は土錘である。O37は西4面穴134、O38は西3層、O39は西3面溝58出土である。O37の共伴遺物は古墳時代後期～終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下限とし、O38・O39の共伴遺物は中世を下限とする。O37・O38は紡錘形で両端が不整形であり、O39は円筒形である。

O40は土製紡錘車である。弥生時代前期新段階から古墳時代後期の遺物が出土する西7面河川4出土である。全面ナデであり、とくに使用痕はみとめられない。胎土には粒径1～2mmの長石、石英を多く含む。

O41は滑石製双孔円板である。近世～近代の遺構である西1面土坑38出土であり、下層の古墳時代包含層から混入した可能性が高い。両面および側縁に擦痕がみられる。

O42は滑石製紡錘車である。西4面穴134出土であり、共伴遺物は古墳時代後期～終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下限とする。頂部を欠き、周縁にめぐる圏線内側のやや内湾する面には鋸歯文が線刻される。鋸歯文は斜線で充填され、線刻の底面には赤色顔料がわずかに残る。側縁および穿孔部内面には横方向の擦痕がみられ、底面は平滑である。

O43は長方形石硯が砥石に転用されたものである。東1面井戸4出土である。共伴遺物には陶磁器、軒平瓦(O34)があり、18世紀後半～19世紀後半に位置づけられる。長方硯は残存長7.6cm、両側面が残存し幅5.2cm、高さ1.6cmである。研磨を免れた上面隅部と側縁部内面には墨が残存する。上面は周縁が平坦面で、中央は楕円形に窪み、窪みは底面に達する。平坦面には幅7mmの鑿状工具痕が、窪み部には横方向の擦痕がみられる。側縁部外面は平滑で一部擦痕があることから、砥石に用いられた可能性がある。底面に研磨痕はみられない。石材は凝灰質泥岩である。

O44・O45は砥石である。2点とも西4層出土であり、共伴遺物は古墳時代後期～終末の遺物が主体で、飛鳥時代前半を下限とする。

○44の石材は細粒砂岩である。裾広がりの形態であり、頂部は破断面である。側面は研磨面が5面あり、擦痕がみられる。底面は自然面に敲打痕と擦痕がみられ、底面も使用されたようである。

○45の石材は凝灰岩であり、白色を呈し、縦方向に幾条もの細かい亀裂が入る。下面(図面下側)が破断面である以外、5面とも研磨面であり、扁平片刃石斧状の形態である。片面(図面左側)上部には、幅4～5mmの、鑿で削ったような痕跡がある。

○46・○47は砥石である。2点とも西6層出土であり、共伴遺物は古墳時代後期に位置づけられる。

○46の石材は凝灰岩である。直方体であり、上下面が破断面で、側面4面が研磨面である。擦痕はみられない。

○47の石材はアーコース砂岩である。研磨面はなだらかな稜をもって屈曲する2面であり、他は破断面である。研磨面は黒色を呈し、擦痕、鋭い条線がみられる。破断面は赤色を呈し、被熱した可能性がある。

註

元興寺文化財研究所 1983 『中・近世瓦の研究 — 元興寺編 —』

鋤柄俊夫 1996 「土器と陶磁器にみる中世京都文化」『京都・激動の中世 — 帝と将軍と町衆と —』

千田利明 1983 「異形器台形土器小考」『日本考古学研究所集報』V 日本考古学研究所

鶴見貞雄 1993 「粗製器台の用途を考える — 高崎貝塚出土の器台形土器を例にして —」『研究ノート』3号
財団法人茨城県教育財団

西谷真治・鎌木義昌 1989 『倉敷考古館研究報告第1冊 金蔵山古墳』

藤田直也・板橋正幸 1996 「関東地方における異形器台形土器の展開」『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』
坂詰秀一先生還暦記念会